

---

# 世紀末善い人伝説

風雅 鳶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世紀末善い人伝説

### 【NZコード】

N1194K

### 【作者名】

風雅 鳶

### 【あらすじ】

改正版はじめました

<http://ncode.syosetu.com/n4587u/>

この小説を題材にしたゲームを公開しています。

<http://gasutoragenta.web.fc2.co>  
m/top.htmlです。

ガストラゲタ氏の意向により、新しい小説を書くことになりました。

こちらのページは、とつておきますが、これで終了とします。

読んで下さった皆様方、ありがとうございました。

新しいほうは、可能な限り判り易く丁寧にとつて、指導を受けたので、

そのように心がけるつもりです。

私自身も、次の作品は向上心を持つて取り組むつもりです。

新しい善人伝説もよろしくお願ひします。

## 第一幕 伝説の幕開け

249X年 某惑星にて

行き過ぎた文明は、自らを傷つける刃となり、やがては自分の身をも切り裂いてしまつ・・・。

世界は突然光に包まれ、多くの生命が死に絶えた。

ある人は、核だといい、ある人は、神の裁きだという。真相は分からぬ。

それはこの物語を追っていくうちに、もしかしたらわかることがあるのかもしれない。

人が居る限りは、善と悪は絶えず存在する。

自らの善を絶対視することが、狂人と言われるのなら、善人とは狂人なのか？

自らの狂を受け入れた時、人はどんな苦難をも乗り越え、神をも超えることが出来るのかもしれない。

英雄か受難者か。

・・・しかし、その狂人こそ、もしかしたらこの世を救う救世主となじうる可能性がある。

例え、傍から見てどんなに馬鹿らしく不恰好であるとしても、貫けばそれは真実となる。

### 善人伝説

「イリヤが魔王城か・・。」

少女がつぶやく。

年の頃15位だろう。白いコットンハットに、上下白い服を着ている。何かを表しているのだろうか？

髪はセミロングで、瞳孔は青い。存在感が無く今にも消え去りそうだ。

まるでお化けが死人だ。考えてみれば彼女の格好はあるで、お化けの変装のようにも見える。

少女が魔王城と呼んだビルは、ガタがきている八階建てのビルで、がたがきてる八階建てのビルだ。

長年整備されていないのだがそんなビルはこの時代これだけではな

く数多ぐある。

少女には「このビルが魔王城に思えるよ」つだ。

この日がちょうど雨が激しく降つており、ビルにバックには雷が浮かび確かに魔王城という感じではあつた。

実は、このビルには、いわゆる悪人と呼ばれる人間が、籠つてあり、大変危険なビルなのだが、そんなこと少女は意にも返わず、まるで自分の家に入るが如く、しげしげと近づいていつた。

「なんだてめえは。」

野太い声が少女を呼び止める。

如何にも悪人という面のおっさんが、少女を警戒気味に見ていたが、少女はそっちの方を見もせずに、中に入ろうとするので、おっさんは大慌てで、門の前に立ちふさがる。

「お、おいー待て！待つんだあーぐわあ！」

善い人の尋常ではない気配におびえたおっさんであったが、おっさんが待つんだあといつた瞬間には、もう横に吹き飛び、声を発しなくなつていた。

「うるさいーこの善人の邪魔をするかー！」

善人？と称した少女は、伸びて動けなくなつている、

おっさんの方をよつやく注視した。

「なんだなんだ！？」

表が騒がしいので、がやがやとビルの中から、外へ出てくる悪人達。

「うお！悪人Aがやられてやがる…どこの仕業だ！」

悪人達は、当たりを警戒気味に見渡している。

ビルが空いたので、少女はどかどか出てきた悪人達を避けて、中に入っていく。

少女がビルの中に入ると、人はほとんどいなく、真ん中に上に上がる螺旋階段が設置されていた。

「どうやらこの上に悪人達のボスが居るみたいだね。

その思い上がりにこの善人たる善い人が罰を与えないといけない。

別に、ひそひそ声でつぶやいたわけではない、

少女にとって、自分の成することは、公明正大であるのだから、何故こそそそとやらなければならないのだろう？

そんなことは断じてないので、

その声は表に出て、がやがや、やつていた悪人達にも丸聞こえになり、ぎょっとした様子で、まだどこかと入り込んできた。

「ん？なんだあいつは？おい！あいつは誰だ？」

悪人の中でリーダー格と思われる男が、周りの悪人達に問うが、悪人達の誰も知らないらしく、首を横に振っている。

そんなこといつてる間に、  
善い人は階段をドンドンと登つてしまつていてる。

「ちつーまあいい。とにかくあいつを捕まえろ。」

リーダー格の男は、

そういうていらいらしたようにタバコを取り出し、火をつける。

周りの悪人達は肩をすくめ、

階段を登つていた善い人においつき、声をかけた。

「おいおい、お譲ちゃん。ここは危ないんだぜ？お家に帰んな。」

そういうて、手を触れようとした刹那、

悪人は少女の回し蹴りを食らい、階段の下に叩きつけられた。

一瞬あたりは何か起こったかわからず、静寂が支配した。

ようやく悪人達が事態を把握し、罵声を発しようとしたその前に、少女が悪人達に向かい、大喝した。

「この善人たる善い人に、そんな策謀が通用しないということだが、まだ分からぬのか！」

わけが分からない。

しかし、尋常じやない雰囲気を感じ取り、悪人の一人が、少女を指差し叫んだ。

「おい！こいつは、狂人だ！いつもへたくそな漫画を描いていて、

魔人に媚を売つて暮らしている、悪党だ！」

「そういうえば、俺も噂には聞いた。  
白服、白帽子、まさしくあいつだ。  
確かに、自分は善人だとか言つて、自分を正当化して、  
悪逆の限りを尽くしてるとかいう……。」

そう聞いても、リーダー格の悪人は慌てず、にやりとした。  
悪人なら、自分達と同じわけなのだから、うまく交渉すれば、こちらの仲間になるかもしれない。

ちなみに魔人というのは、この自治区の実質上の領主のことで、昔そういわれていた通り名が、そのまま使われているといった感じだ。

しかしながら、この悪人達の罵詈莊厳は、自分は善人だと自称する少女を激怒させるに充分すぎる言葉だった。

「この悪い人を馬鹿にするのか！おのれ！もつ許さん！」

少女は、階段に立てかけてあつた、  
槍を取つて、頭の上でくるくると回した後、後ろに構えポーズをとつた。

「唸れ！旋槍！」

そういうつて、槍を回転させつつ、階段を下りてくる、  
それに巻き込まれた、悪人達は次々に吹き飛ばされていく。

リーダー格の悪人はぎょっとし、慌てふためき、地下へと逃げてい

つた。

しかし、なぜか自称善人は、リーダー格の悪人めがけて、一直線に向かつてくる。

「うわあ！やめてくれー！」

「食らえ！善の鉄槌！」

そういうて、槍を一閃し、槍の腹に当たった、リーダー格の悪人は、地下へと転がつていった。

残つた悪人達は、おびえた表情で逃げていった。

「この善人から逃げられるとでも思つたのかー悪は逃さん！」

自称善人はそういうて、悪人達を一人残らず駆逐した後、ゆっくりと階段を登つていった。

転がり落ちていつたリーダー格の男は、しかし闘志はまだ失つていなかつた。いやそれどころか、自称善人に逆襲を誓つた。

「白服め！俺たちをなめやがつて。今に見ていろ・・・。」

階段を登つていき、最上階に登つた自称善人は、空を眺めた。

どうやら雨はまだ降つてゐる。近くに雷も落ちてゐるようだ。

なにやら不穏な気配を感じる。

自称善人は、その正体が何か、見極めようとしていた。

自称善人の後をこつそりとつけていった、リーダー格の悪人とその他大勢の悪人は、

自称善人が、空を眺めている間にゆっくりと展開した。

リーダー格の男は気取ったポーズをとつて、左手を額にあて、右手を、伸ばし、手のひらを上にして、自称善人のほうを指しかつ叫んだ。

「はつはーーきさまー・・・ぶあ！」

リーダー格の男は、セリフの途中で異様な力で、吹き飛ばされ、ビルの外へと落ちていった。

その後破裂音と共に、謎のエネルギー体が、自称善人を悪人達を襲う。

悪人達はみな、奇声を発し、ビルの外へと落ちていったが、自称善人はその攻撃を全て避け、再び空を見上げた。

「けつ。」

漆黒の闇からうつすらとシルエットが浮かび上がる。

男は、禍々しいオーラを纏っている。善人は直感した。

この男が、先ほどの攻撃を放ったに違ないと。

善人は、背から大剣を取り出し、ゆっくりと、横に歩きつつ、男との間合いを取り、慎重に対峙する。

男は、寝そべっていたが、善人が、先ほどの攻撃に当たらなかつたのだと、ようやく分かり、むくりと起き上がって、善人に尋ねた。

「おいてめえ、ここは俺の寝床だぜ。」

雨に打たれてずぶ濡れになつている男が、ここを寝床だという。ならば男は、ここ のボスなのだろうか。

善人にはそつは思えなかつた。ただ思うのは、男は自分の「敵」だということ。  
それだけは強く感じた。

男も同様だつたのかもしれない。

善人は答えた。

「私は、善い人だよ。悪人をやつつけるのが私の使命だ。」

男は、頭を指でくるくるさして、呆れた表情で善い人を見る。

「何だその顔は?」この善人たる善い人を馬鹿にしているのか?」

男は答えた。

「どうやら、てめえは俺にぶつ瀆されてえみたいだな。」

「なんだと！もう我慢ならん！」

なんだかよく分からないタイミングでぶち切れた善い人は、姿を消し、穀潰しに向かつて剣を振り落とす。

いや姿を消したのではなく、あまりの速さにいつも見えただけだ。

当然男は哀れにも真っ二つになっているはずなのだが、そうはならなかつた。

善い人の背後で声が聞こえる。

「なんだそりや？ 素振りの練習か？」

男はそういうて、ナイフを抜いて、善い人に向かつてきらりと光らせた。

その後ナイフをしまつているところを、善い人に再襲撃されたが、またもや、善い人の背後に現れる。

「ひやつはー潰れちまえー！」

そういうて、手を構えた先から、目に見えない何かが、発せられ、善い人に襲い掛かつた。

それらの攻撃をことごとく善い人は避け、男を驚かせる。

「な、なに？」

一方善い人は、心なしか笑いながら、攻撃を加える。

善い人ほどの力を持つと、それを振るう対象が限られる。

全力を持つて、力を受け止める相手は、彼女にとつても、快い存在だった。例えそれが直感的に「敵」だと認識したとしても。

男はそれどころではない。

攻撃が避けられたということが信じられず、やたら滅多ら不可思議な攻撃を繰り出し、それら全てを善い人に避けられる。

ということを繰り返した。

「なんで当たらねえ！当たれ！」

心理的なあせりは隙を生み出す、男とて戦闘の素人ではないが、心情的な余裕が、力の差を生んだ。

「見えた！突き刺さる脚！」

針の穴ほどしかない、男の心の隙をつき、善い人は必勝の攻撃を繰り出す。

男は、片手で蹴りを受け止めるが、吹き飛び、ビルの外に転落しそうになるが、かろうじて、それを阻止する。

ぶら下がっているところがもろく今にも崩れそのため、

長くは持たない。

すぐに、這い上がるゝと思つたが、そこへ善い人がやつてきた。

「へへつ。なんだてめえか。おいつ！てめえ善人なら俺を助けやがれ！」

善い人は腕を組み考え、男に尋ねた。

「わういえば、君の名前は？」

「ああ・・・。穀潰しつていうんだ。なあ助けてくれよ。」

善い人は、哀れな穀潰しの命乞いに、助けようかと思つたが、なぜか穀潰しがにやにやしているのが、癪に障つた。

「残念だよ。穀潰し君。私は善い事をする使命に忙しい。」

「おい、てめえ。俺を今ここで助けねえと後でどえらい目にあつても、

知らねえぞ！」

善い人は、その言葉を無視し、去つていき、それをほぼ同時に、瓦礫が崩れ、穀潰しは下に落ちていった。

落ちた先には、先ほど穀潰しが落とした先客達がうずくまつていた。

「ちくしょう！えらい目にあつたぜ！ん？なんだこの偉そつな野郎はー！」

穀潰しが落とした悪人達をせつせと運んでいる、ハエのよつたな生き物。

ハエのよつたな生き物だが、大きさは牛ほどのあるハエが、穀潰しに対する、あてつけのように、悪人達を介護していたので、穀潰しは腹が立った。

「ひやつはー潰れろー！」

「アーチー..」

そうじつて、ハエを蹴つ飛ばすと、上に載っていた悪人がごろりと落ち、穀潰しも少し悪いことをしたかなと思つたが、いや痛い思いをしたのは自分も同じだ。

「こつらだけじゃねえんだ。と思いつて、氣を取り直し、

「善い人とかいったな。暇つぶしくらいにはなりそつだな。」

と呴き、穀潰しは、またビルの中へと入つていった。

善い人は、屋上にはボスがないなかつたと判断し、そういえば地下があつたことを思い出したので、下へと降りていった。

この際、ボスがいるかどうかは、問題ではない。

このような建物にボスがないなどといふことはないのだから、いないのなら無理やりでも見つけるべきだ。

あるいは、あのリーダー格の男がボスだったのかも分からず、  
善い人もその可能性もあると思ったが、風格が足りないから現場の  
指揮官レベルだと判断したのだ。

まあ善い人の場合、なんとなくで全て片付けられる。

直感のみで動いている人間だ。

ビルの中は誰も居らず静かだ。

地下への入り口は開いている。

「おそらくここに、ボスがいるはず・・・この善人の目は欺けない  
ということを思い知らせてやらないといけない。」

そういうて、善い人は地下へ下りていった。

洞窟のような地下をある程度進むと、鉄の扉があり、それ以上進め  
ない。

「突き刺さる脚！」

ドカーン。

突き抜け、体を回転させ、部屋の真ん中に着地する。

着地した瞬間、何者かにぶつかり、よろける善い人。

「おう！善い人か！どうやらこの奥にボスがいるみたいだぜ！」

ぶつかつた人物は穀潰しらしい。穀潰しは巨大なハエと交戦していた。

「ひやつはーあいつもなかなか手ごわいみたいだぜー善い人さんよおーさあ行ーうぜー気にいらねえやつをぶつ潰してやるうぜー」

この男は何か勘違いをしているらしい。

この善人たる善い人と自分が同格だとでも？ 善い人は不満を感じた。

「この善人たる善い人が、君ごときと同格とでも？」

その言葉を聞き、にやりとした穀潰しだつたが、腕がハエの真空波によって切り裂かれ、顔色が青くなる。

すぐに、腕を回収した後、くつつけなおす。

「気合で腕もくつつくのか。」

善い人のトンチンカンのような台詞に、いちいち受け答えしている状況ではない。

たかがハエと馬鹿にしていたが、どうやらシビアな展開になってしまった。

穀潰しは、腕から衝撃波を発し、ハエに応戦するが、殺傷能力、速度、共に、ハエの真空波のが上を行く。

穀漬しは、焦り善い人の後ろに逃げる。

善い人は向かつてきました真空波を、大剣でなぎ払う。

「やるじゃねえか。」

穀漬しは、善い人に話しかけた。

「まあね。こんなのは簡単だよ。」

その言葉を聞き、穀漬しは、お気楽な頭だ。騙すのは簡単だと思った。

「おい。さつき俺はボスは奥にいるといったよな。あいつはそれをこばんでいる。つまりあいつは、悪人ということだ。俺に協力しろ。それとも善人というのは口だけか？」

善い人は憮然として答えた。

「この私は、善い事をしなければならない。」

「分かった。時間を稼げ。けりはつけるぜ。」

善い人はしかし、腑に落ちなかつた。目の前にいるハエは悪人ではない。

善い人の善人魂はそう告げていた。

しかし今は、先に進むしかない。

善い人は、穀潰しに降り注ぐ、真空波を全て切り裂き、接近する。まるで小枝を振り回すように大剣を振るい、ハエに攻撃するが、その攻撃をことごとく避けられる。

「私より早い？」

ハエは善い人を振り払い、穀潰しに向かつて突撃した。

「ちつ！」

穀潰しは、横つ飛びし、ハエは突撃が外れるが、目からビームを繰り出し、穀潰しを攻撃する。

穀潰しが、展開していたバリアーをつきぬけ、床に穴を開ける。

「なに？ バリアー」と？切り裂け！ サイコカッター！

カッター状の衝撃波をハエに放つ。ハエはそれを旋廻してかわす。

「おいおい善い人さんよお！ これじゃ大技が使えねえぜ！  
ひやつは！」

そういうつ穀潰しは、内心肝が縮む思いで、冷や汗をたらしていた。

「当てる！ ダブルボーガン！」

どこからかボーガンを取り出し、雨あられのように矢をハエに降り

注がせる。

時間差で、槍に持ち替え、ハエに向かって突進する。

「捻じ込む！トルネードチャージ！」

自分の放った矢の嵐をつきぬけはじき、ハエの羽を捕りえる。

「決める！突貫脚！」

空中で、方向転換し、速度の速いとび蹴りを放つがそれも外れる。

その時……。

「潰れる！ランダムスファイア！」

穀潰しは、球状の爆裂する衝撃波の玉をいくつも、善い人とハエに向かつて放つ。

ちょうど体制を崩していたハエはその攻撃に巻き込まれ、

善い人も余波を受け吹き飛ばされる。

幸いダメージは軽症だ。しかしハ工はもろに当たってしまった。

「ひやっはっはっは。ぎまあみるー。」

穀潰しは勝ち誇り、ハ工に近づいていく。

「アアアアアアア。

「ん?」

洞窟全体が揺れている。

「おー。善い人さん。どうやら洞窟が崩れるらしい。」

善い人は、腕をかばいつつ穀潰しのほうに歩いてきた。

「そうみたいだね。」

穀潰しは善い人の怪我に気づき、声をかけた。

「てめえは間抜けだな。俺の攻撃に当たつちまつたか。」

「なんだと? どいつもこの善い人を馬鹿にしたいなら、

私にも考えがある。」

「ああいいぜ。ひやつは!」

穀潰しが、右手を善い人に向け、左手でナイフを構える。

善い人も、大剣を片手で構える。

ガーハーハーハーハ。

しかし、さりに洞窟が崩れ始め、それどころではなくなってきた。

穀潰しは、心配になつた。穀潰しは狂人の善い人と違つて、こんなところで

埋まつて死ぬ気は毛頭ない。

「おいおい。こりゃやべえぜ。こんなことじつる場合じゃ……げ  
ほつ」

穀潰しは善い人の回し蹴りを食らい、吹き飛び壁に叩きつけられる。

「ん？ 間抜けな穀潰し君は私の攻撃に当たってしまったようだね。」

「て、てめえ・・・。だがそれどじりがじやねえ。そこをどけ。」

穀潰しがハエに近づいていく。

「なにするの？」

善い人が尋ねた。

「ここをでる前に止めをささねえと、  
こんな化け物に命を狙われちゃたまらねえからな。」

それを善い人が制止する。

「いや、善人は動物には優しいものだよ。君も善人になりたいなら、  
知つておいたほうが善いね。」

善い人が得意げに穀潰しを諭す。

穀潰しとしては、どっちにしろ、

洞窟が崩れている状況の方が気が気でなかつた。

「はっ！勝手にしぃ。」

ドカーン。彼らが話しあっている間に、出入り口が穴でふさがつてしまつた。

「やべえぞ。ドンドン崩れてやがる・・・。  
俺はまだ死にたくねえ・・・。」

早く脱出しておけばよかつたと穀潰しは後悔した。

こんなハエ野郎や、善人だとか抜かす狂人と関わったばかりに、自分の人生はめちゃくちゃになつたと穀潰しは思つた。

しかしわめいても仕方ないので、何とかする策を考える。

「どうするか・・・。おー、善い人さん。てめえは・・・？」

見ると、善い人は悠長にハエの手当をしてゐる。

「とんだ物好きだな。」

とはいへ、直接攻撃をしたのは自分だし、少し気兼ねもしたので、手当を手伝おうと善い人達によつていつた。

「どうやら、乗せてくれるらしい。これでここから出れるよ。」

そう善い人がいい。それを聞いた穀潰しの表情は明るくなつた。

「おー! ジヤあせつやと! みんなといろからおさらばしようぜ!  
ひやつは! いや善い」とはしておくものだぜ!」

善い事をしたのは善い人で、穀潰しは何の役にも立たぬ、  
考え方をしていただけであった。

とはいえ善い人にとって、穀潰しなどどうでもよかつた。

そのため、穀潰しの勘違い発言に対しても、寛大な心でスルーした。  
「そうだね。さすがにそろそろここは限界だよ。さあ行こうか。頼  
むよ。  
ハエ。」

「ひやつはー! あつ?」

穀潰しは、ハエに飛び乗つたが、ハエに避けられる。

「おいおい、そりやぢうじうことだ? 命の恩人だぜ? この俺は。」

善人たる善い人は、ハエに賛同した。確かに穀潰しは悪人であるの  
だから、  
ここで反省して貢うのは悪い案ではなかつた。

善い人は哀れみの表情で穀潰しを見た。

「残念だけどここでお別れだね。君のことは忘れないよ。3時間ほ

どね。」「

穀潰しは慌てた。

さすがの穀潰しでもこんなところにおいていかれたらただではすまない。

穀潰しは必死になつて弁解した。

「そりやあねえんじやないのか？俺は善人だぜ？  
善人が善人を見捨てていいいのかよ！？」

善い人は、穀潰しの戯言を無視した。  
というより、ハエにすでに、飛んでいたので、これ以上穀潰しに付き合ひつ  
時間は無かつたのだ。

善い人にとつても、ここに長居するのは、善い状況とはいえない。

穀潰しは呆然とした。  
自分は善人だと黙つてゐるのに、なんであのバカ野郎は聞き耳を持た  
ないのだろう。

穀潰しは、こんなところで生き埋めになりたくなかつたので、必死  
になつて、テレポートしながら、  
善い人達に追いついた。

「助けてくれー！俺は死にたくない！俺は役に立つ男だぜ！  
ここで俺に恩を売つておけばお前は、一生俺に感謝することになる  
だろうよーどうだ？」「

善い人もハエも無言だ。善い人は何事か考え方をしているし、ハエは、穀潰しには恨みがある。

穀潰しは、なおも食いついた。

「くそつ！恨んでやる…」この偽善者めー頼むよ！助けてくれ！」

穀潰しの声は徐々に遠ざかってく。善い人達は洞窟を抜け、地下を抜け出し、ビルの外へと脱出する。

そして、ビルは、ガラガラと音を立てて崩壊していった。

善い人はつぶやいた。

「なるほど。世界は広い。ああいう人もいるならこの私も考え方直さないといけないね。

とにかく進もう。私の善行をみんなが待っている。」

善い人はまっすぐ前を見る。その澄んだ目は、とても狂人には見えなかつた。

## 第一幕 悪人救出作戦！

「善い人さん。いい天氣ですねえ。」

ものすゞぐどうでもいい。善い人は心底そう思った。  
ものすゞぐどうでもいい話題を善い人に吹つかけてくる人物。彼女の名は書児。

書児は善い人の世話をしている人物で、義足と義手をつけ車椅子で生活している。

「そういうえばこの前善い人さんに話した例のビルに民間の人々が乗り込んで暴れまわったそうです。」

そのせいでビルが崩壊したとかで全く物騒な話です。  
善い人さんはそういう人には近づいちやダメですよ。」

「そりなんだ。物騒な人もいるもんだなあ。」

最近はますます治安も悪くなってきたからいろいろな人がでてきてるんだろうな。

別に澄ましているわけではなく、これが善い人の地であった。

「ところで何かよろずやさんが困っていることがあるようで善い人さんが相談に乗ってあげたらどうでしょう。」

善い人はそれを聞き喜んだ。なんだましなこともいえるじゃないか。と思った。

「おおー。今日も早速善いことができそうだ。教えてくれてありがとう。」

「いえいえ。私も一緒に行きたいんですが今日は車椅子の調子が悪くて残念です。」

「また今度一緒に散歩に行こう。」

そういう残すと善い人は意氣揚々とよろずやに向かっていった。

その後姿を見ながら害児は独り言を言った。

「やれやれ。。。善い人さんはあの調子だと命がいくつあっても足りませんね。」

害児には善い人や穀漬しと違つて名前があるのだが善い人には害児さんと呼ばれている。

害児は何でどう呼ぶのか善い人に聞いてみたら腕と足がないからと答えた。

害児はそういう問題じゃないと思いつつも変わった子だなと思いそのときの境にいろいろ善い人の世話を焼いてくる。

善い人がよろずやに来ると店主は留守だった。

だがちょつと向ひの道から店主が歩いてきた。

「やあ。善い人君か。」

「書児さんから聞いたのだけ困つてゐ」とがあるんだって?」

「ああ・・我輩の友達が行方不明になつちまつてな。我輩も忙しいが仕方ないから探してやつてるところなんだ。」

「わたしも手伝つよ。善い人だからね。」

「おお助かるよ。これがそいつの写真だ。」

善い人が写真を見てみると、それはまさに穀潰しだった。

「どうかでみたよくな・・。そつだ。この人ならビルの下に埋まつてると思つよ。」

これももちろんとぼけているわけではない。4時間たつたのを忘れてしまつているだけだ。

「なんだつて? ジヤあとにかく助けに行かないとやばいな。いくらあいつが丈夫だからといつたつて限界があるぞ・・。」

店主が愛車のフレオに乗り込む。善い人もそれに続く。

店主は重装備主義者で常に重装備。店も重装備の商品が多い。

やがてビルの前についた。

「ここつはひどいな。これじゃあこくらあいつでも・・。」

店主は、諦めて帰りたそうな顔をした。

「とにかくくつ起しあしてみよ!」

「アマニーハナサクハシキタカヒ。」

こんなのは十台無理だ。  
呂讐のよつた奴がしゃしゃり出の場じや  
ない。

店主はそう思つた。

「モーリスなどもせよ。」

善い人がそういうどこからともなくハエが飛んできた。

そして、

「ひざやー（穴掘りモードに変身）。」

そういうと羽をはずしていかにも穴がほれそうな無視に変身した！（といつても羽が外れただけだが）

「うわ。何だこの化け物は。」

店主が飛び上がるほど驚く。あわや逃げ出そうとする背中に

「大丈夫。ペットだから。」

と善い人が声をかける。

「本当に大丈夫なのかい？」

店主は恐る恐る振り返る。

「うん。 それに埋まつてゐる人を助けないと。」

「ああそだつた。よーし善い人君のペットのハエみたいな化け物。がんばれよー。」

そういうと店主はハエに力を送るような変なポーズというかダンスみたいなのを始めた。

はつきりいつて馬鹿だが善い人も眞面目にそれのまねをしていた。

「ハエー。頑張れー。」

「ひきゃーー！」

すぐに大きな穴ができた。

「ん? どうやら地下に続いてるようだな。この中に穀潰しがいるのか。よーし善い人君早く入るんだ!」

店主はこの場所が悪人の罠だったことを思い出し、内心びびりまくつてこともあろうに善い人を先に行かせようとしていた。

「じゃあいつてみようか。これなら探してゐる人も生きてそうだね。」

善い人はまたいいことができると思いつきもつせした。

「ああ・・でもここは元々悪人のアジトだつたからな。もう警察とか救助隊に任せてやつぱり我輩たちは帰つたほうがいいかもしない。」

ここにきて店主は変えることに決めた。自分が出る幕ではないのだ。

「ダメだよ。善いことしないと。ガスさんは帰つてもいいけどわたしはいくよ。」

「仕方ないなあ。さすがに善い人君だけを行かせるわけにはいかない。」

ようやく判明したが、この店主の名前はガスという。

よく間違われるが氣体ではない。

渋い顔でガスが善い人がついてくる。

少し進むと一人は見慣れた顔を見つけた。

「てめえ・・よくもこの俺様をこんな目にあわせてくれたな。」

いきなり怒鳴られてガスは慌てた。

「おい。なにいつてるんだ。我輩はお前を助けに来たんだぞ。」

「じゃあ何で白服と一緒にいやがるんだ。てめえもぐるになつて俺をたこ殴りに来たんだろうが。」

「はあ？意味が分からぬのだが。まあ落ち着けよ。」

なぞな話だがガスは穀潰しの衝撃波を受けて吹き飛んでしまった。

重装備だから助かった。しかし力じゃあいつにはかなわないしどうしようか。

逃げるしかなさそうだ。

そこまで考え一目散。しかしガスは善い人のこともちゃんと忘れないかつた。

「善い人君逃げるぞ！」

「なんで？」

「いいからくるんだ！」

善い人を無理やり引つ張つて元来た道を戻つて外にでた。

「ひやつはつはは。俺から逃げると思つたのか？」

だが穀潰しが先回りしていた。

「うなれば絶体絶命だ。

「む。。誰が逃げたって？」

善い人は全く納得がいかなかつた。

「お前だよ。しょせんお前も俺が怖くて逃げ出したんだろうが。」

「わたしに一回負けた癖にまたボコボコにされたいか！」

「善い人君。なにしてるんだ。早く逃げるんだ。」

そういうてガスはまた逃げてプレオに乗り込もうとした。

善い人はガスのあまりのチキンに舌を巻き、そのまま黙らせようかと考え始めた。

「やうはせん。」

ガスがプレオに乗ろうとした瞬間プレオが宙に浮いた。

「ああ・・プレオは飛んでる。」

どんどん上に浮いていく空中で爆発した。

「なんて」とするんだ。我輩のプレオが・・。

「恐れ入ったか！」

穀潰しはじてやつたりという顔だ。

「もう我慢ならん!」

ガスはライターを取り出した。

ライターにガス（氣体のほう）を当てて巨大な炎を作る。

ちなみに彼は様々なガスを使うのでガスと自称している。

非常に紛らわしいことなのだが。

「これで黒焦げになっちゃえ！」

「そんなもんは攻撃のつまらないねえよ。」

穀潰しは動きもせず炎をかき消す。

「で？ 終わりか。白服の前に裏切り者のお前からぶつ潰してやる。」

「望むところだ。決着をつけてやるー。」

ガスは常はない勇気を發揮する。

「・・・いい度胸だ。」

穀潰しはガスの勇気に驚きつつ、手加減無用の衝撃派を放つ。

衝撃に当たつてガスは吹き飛ぶ。

たつた一発で意氣消沈。ああもう駄目だと思った。

次の衝撃波がくると思つたらガスの前に壁みたいのがでて攻撃を防いでいた。

「これは一体？」

「後はわたしに任せといて！」

それはどうやら善い人の仕業らしい。

善い人は穀潰しにすごいスピードで接近して格闘戦を展開させていた。

「あいつをまともに戦える人間がいるなんて・・。人は見かけによらないものだ。」

なんて感心してる場合ではない。これは我輩とあいつの問題だ。

ガスは勇気を取り戻し、善い人を制する。

「善い人君下がってくれ。あいつは我輩が倒す。」

何を言つているのだろう? 善い人はいい加減にしてくれという半ば切れた声で反論した。

「そんなこといつても無理なんじゃ!?」

「そうでもない。」

しかしガスは動じない。作戦があるのだ。

穀潰しがひやつはつはと笑っている。

「懲りないやつだぜ。そんなに早く潰されたいのか。」

「お前ちよつと卑怯なんじゃないか。」

「なに？」「とだ？」

つまり穀潰しは馬鹿なので、挑発して隙を作ろうとこう作戦だった。

「一般人に対しても念動力ばかり使って恥ずかしくないのかといつてるんだ。」

お前は念動力に頼らなきや我輩一人倒せないのか。」

「いいやがるぜ・・・。そんなものなくともお前に勝てるって事はお前が知らないはずはないが？」

「いつも手加減してやつてるからな。ために殴つてみたらどうだ。」

「

「よく言つた！じゃあ殴つてやるぜ！」

穀潰しはまんまと怒りす」とスピードでガスに近づき殴りかかった。

「単純なやつだな・・・。」

ガスは鎧で受け流しつつ毒ガスをまいてやつた。

いくら穀潰しでも避けれない。

「うほーほ・・。お前何をした？」

「それは毒ガスだ・・。今だ！善い人さんあいつをたこ殴りにしろ。」

ようやく悪人を退治することができたよ。

善い人はたまつていたフラストレーショーンを一気に吐き出した。

一人で穀潰しをたこ殴りにする。

「卑怯だぞ！やめねえか・・・。つわー。」

「我輩のげんこつつもくらえ。」

そしてある程度殴り終わった後。

「世話になつたな。善い人さん。」

「善いことするのがわたしの使命だからね。」

「そりゃか。今度は何かあつたら手伝ひよ。穀潰しにも手伝いをさせよう。」

「ありがとう。わたしは他に埋つてる人助けるから先に帰つてていいよ。」

「やうやくまじめよ。おい穀潰し動けるか？」

肩を貸してやつた。

「ち・・。ガスめ。よくも俺をこんなにしてくれたな。覚えてるよ。」

「

「やうやくまじめよ。家に帰つたらまじめの食わせてやるや。」

「お？本当か。お前いいやつだな。早く帰らうぜ。」

「穀潰しがプレオ壊したから早く帰るのは無理だな・・・。」

そんなことを言いあいながら一人は帰つていった。

善い人は、その後地下探索を続けたが、悪人が善い人にすっかりおびえてしまい、面倒なので全員のして地上に送り返してやつた。

## 補足

### ・自動車

この地方では珍しいが、一部の地域で生産は行われている。  
現代に比べ希少になつていてるが入手不可能ではない。

## 第三幕 大震災

「善い人は売れない漫画家・・といつより漫画を描くのが趣味の暇人だ。」

この日も善い人は漫画を描いていた。善い人が熱中していると、突然大地が揺れだす。

地震かな?どうやら規模は大きい。

善い人は危険を察知して家の外に飛び出た。

振り返ると善い人の家はぺしゃんこになっていた。

「潰れてしましましたね。」

いつの間にきたのだろうか。善い人の隣には害児がいた。

「すごい地震だつたけど・・・。害児さんの家は?」

害児の家というのは、西洋風の城で害児はその最上階に住んでいる。害児は高いところが大好きなので、その城は一ヨキ二ヨキを上に伸びており、ものすごくバランス悪い。

「潰れましたよ。でも震源地はもっとひどいことになつてるようですね。」

善い人はそれを聞いてふと回りと見渡すと、あちこち火が出ていたり瓦解していたりして散々な有様だった。

「おーい。善い人。大変だー。」

遠くから何がすごいスピードで走ってくる。穀潰しだった。

なぜかずいぶんと慌てている様子。

「なんだ穀潰しか。」

「大変だぞ。すごい地震が起って町中大変なんだ。」

「見れば分かるよ。」

「何を言つか。善いことをするチャンスじゃないか。」

「言われてみれば確かに・・・。こうしちゃいられないぞ。」

善い人は町の人を助けるべく火が出ている家に飛び込んだりして町の人を救つた。

があちこち道が潰れていたり火が出てたりしてしかも時々また地震が起こつて負傷者が散々でた。

「おい。善い人こっちだ。」

穀潰しがこつちにここと合図している。

「 善い人は町の人を10人くらいもつてひいひい言つてるハエに早くこつちに来いと命令した。」

「 ひぎ・・ひぎい・・。」

とにかく穀潰しのほうに行くとそこはなぜか全然壊れても火が出てもいない

ガスの家についた。

しかしガスのお氣に入りのプレオは完全に壊れていた。

プレオの前にガスさんがいて我輩のプレオがーと叫んでいた。

穀潰しは、その横を通りつつ善い人たちに説明する。

「 ガスの家にはでかい地下があるんだ。ガスと同じでガスの家は重装備だから滅多なことじや壊れない。」

けが人はここに運んでくれ。今は雪兎さんが治療してくれてるが医者の方も足りてないんだ・・。何とかしてくれ。」

今まで黙つて聞いていた善い人であつたが、あまりに不審なので穀潰しに問う。

「 もちろんだけど一つ聞きたい。」

「なんだよ。こんなときによ。」「

「穀潰しつてこんな善い人だつたつけ？」

それを聞くと穀潰しは驚いているようだつた。

「ふつ・・ふんつ。確かに俺の柄じゃなかつたな。おい善い人俺はここに座つてるからお前一人でせいぜい頑張るんだな。」

その台詞は善い人を激怒させるに十分すぎる一言であつた。

「なんだつて？穀潰しめ。本当に穀しか潰さないただの役立たず！」

「それがどうかしたのか？ほれほれ、ほつとくどんどん町の人気が困つていいくぞ。」

穀潰しはそういうと愉快そうにひやひやひやとわらい始めた。

「外道め。許せん。」

善い人はどこからか大剣を持ち出した。善い人の機動性があればリーチと

攻撃力が高い武器のほうが有利であり善い人の得意武器の一つだと  
いえた。

「ふんつ。馬鹿め。」

その言葉に善い人は寒気を感じた。

なにやら周囲に力を感じる。善い人の野生の勘は勝負が詰んでいる  
ということを悟っていた。

「全方位サイコカッター。いくら善い人でもかわせないだろうな。  
降参  
するか？」

卑劣なる悪人、穀潰しの恫喝！

・・・がしかし、善い人は善人。ここで負けるわけにはいかない！

善い人ははんぱやけくそのように吠える。

「く・・正義は勝つ！」

「では潰れる。」

穀潰しは技が放つ。

普通なら回避不可能な攻撃だが、善い人は超人的な敏捷を發揮して  
それら  
の攻撃を何とかぎりぎりかわすが避けきれない。

一撃でも当たれば致命的。

ただ、このとき双方に誤算があったとしたら、このときは前に戦つ  
た時  
とは違い、この場に一人しかいない状況ではなかつたということだ。

善い人が気付くと、鉄の塊のようなものが穀潰しに向かって突進していた。

「我輩の家を壊すな！」

ガスは重装備なので、サイコカッターも防げたようだ。

しかし、鎧はボロボロになりガスは突撃を止められ、壁にたたきつけられる。

「じゅ、重装備で助かつた！」

ガスは自分の生命がある事に安堵し、ガスの活躍のおかげで善い人は技を回避できた。

「やるな・・・だが！」

穀潰しはすでに攻撃の態勢に入っている。

「いや。ここまでにしてもらいましょうか。」

いつのまにか穀潰しの後ろに害児がいた。

「俺に気配を察知させないとはお前人間なのか？」

「どうでしょうね。ただこれ以上負傷者を増やしてもいいつと困りますのでおとなしくしてもらいます。」

その言葉を聞き穀潰しは、笑いだす。

「できるのか？たかが後ろを取ったくらいで車椅子に乗った障害者が俺を止めるとでも？」

が・・甘い。害児はこの手の輩には慣れている。

「時間稼ぎですか？あなたの超能力は仕込みに時間がかかるようですか  
らね。」

「ばれたか。だが・・。」

穀潰しはテレビポートで逃げよつとしたが害児さんが穀潰しに孫悟空のわ  
つかみみたいな物を頭につけた。

「げつ！なんだこれは？」

穀潰しははずそつとするが外れない。

「それは滅多には外れません。私が持っているこのスイッチを押す  
と。」

「うなります。」

穀潰しはその場にうずくまる。その様子を見てにんまりと笑う害児。  
「と」のように電気が走ります。あなたも救助活動に参加してもらえ  
ますね♪」

「ちつ。3対1じゃ分が悪いぜ。今回お前らに花を持たせてやる

よ。」

ガスが這いながら足元にやつてきてつぶやいた。

「善い人君。早く町の人を助けないと。こんなことやつてる場合じゃない。」

善い人は、呻いている町の人たちを見つめていた。

「そうだね。急がなくては。」

ガスは穀潰しを引っ張りつつ車に乗り込む。

「さあ。早く。善い人君も乗るんだ！」

善い人は意外そうな顔をした。

「その車壊れてるから動かないよ。」

至極<sup>ご</sup>もつともな話だったが、何やらガスは沈黙する。

「わたしは歩いて行くからいいよ。それじゃあね。」

「ちょっと待て貴様。」

「ん? なにかな?」

ガスは尋常ではない様子だ。目が血走っている。

「貴様・・貴様・・。我輩のプレオが壊れてるだつて? 我輩のプレ

オの

どこが壊れてるのか言つてみろ!」

なぜか知らないがガスが切れてめんどくさい気配だ。穀潰しはひいといいながら私のほうに逃げてきてあわわわとかいつて小さくなつてる。

「え? どう見ても壊れてるよ。」

「フレオを侮辱したな!」

「受けろ! 我輩の命の炎! 必殺特攻! ガス・フェニックス!」

ガスは自分の体に火をつけて火だるまになつて善い人に突撃している。

正氣の沙汰ではない。

善い人はその姿を見てこんなことを思つていた。

技の名前かっこイイな。スケッチして漫画の題材にしよう。

ただ漫画にするときはもつとかっこいい感じにしなくてはならないな。

襲い掛かるガスを善い人は右に避けた。

ガスは地面にめり込んだ。

「さてと。こんなことしてる場合じゃない。早く善いことをせねば。

「

後ろで一生懸命ゲタを掘り起こそうとしてる穀潰しを尻田にその場を後にした。

穀潰しが後ろのほうで手伝えとかいつてたような気がしたがそんな時間はなかつた。

とはいえ善い人は医者の場所が分からぬし、善い人は瞬発力はあるが持久力がない。

すぐにはたれた。ハ工を使えばいいのだがハ工は救助活動に忙しい。その横を車が通つた。

「よう。だいぶへばつてるみたいだな。ざまあねえぜ。」

「その車壊れてるんじゃないの？」

「フレオは永遠に不滅なのだ！壊れるわけないじゃないか！」

善い人は、無言でフレオに乗り込む。

ガスはブオンブオンと口づさむと車を動かした。

横で穀潰しが踏ん張つて頑張つてるのがこれは、超能力で車を動かしている

といふことだつた。

「医者なら一人名医がいる。」——から離れた場所だが、死んでるかもしれないな。」

「ああ。 いけすかない野郎だが。」

そこまでいつて穀潰しは、沈黙し善い人に向かつて話しかけた。

「おい。 善い人。 一つ聞きたいんだが。」

「ん?」

「どうせくだらないことだらうなと善い人は思つた。

「何でいつも善いことしてるんだ?」

やつぱりくだらなかつた。それくらい自分で考へると言つたが、

善い人なので答えることにした。

「善い」とすると氣分が善いからだよ。」

「いや。 それは見てれば分かるんだが。そういうことじやなくてな。」

穀潰しは、半端もので何か一心に打ち込む人間といつのが羨ましかつた。

「じやあ質問を変えるか。善いことを始めよつとしたきつかけとかな  
いのか？」

「きつかけか。。。きつかけは雷。。。」

「雷？」

「セツノ雷。え？」

善い人は急に頭痛が起つてそれ以上思考がまとまらない。

雷がなんだつて？

善い人がぼーっとしてしまったので穀潰しは困惑したが、質問を続  
けることとした。

「雷と善いことどう関係するんだ？」

「え？ 雷がどうしたつて？ そんなことこつたかな。といひでガスさ  
んが  
眠つてるみたいだけビ。」

「いつただろう。ん？」

穀潰しはガスのほうを見る。

ガスは確かに眠っていた。

「おー。ガスふざかるんじゃねえぞ。」

そうこうで穀潰しはガスの頭を思いつき殴った。

「こひて。なんていつ石頭。」

「頭ついて壊つかそれってヘルメットじゃないの?」

「ちつ。どつちでもかわらねえだろ。」

「でも起いとなくとも別に善いのです?」

「こや。这儿に行へか正確にはわからねえから起いとれなことをやくな。」

「じゅあこれで。」

善い人は棍棒を取り出してガスの頭をぶつたたいた。

「ふう」と。

「おー。全然起きなこぞ。もつちよつと強く殴つてみるよ。」

「変だな。ヘルメットくじんでるナビ。」

「うふつと待て。今ので氣絶したりじー。」

「根性がなさあれぬ。」

「まあ別にガスの頭だからかまわねえけど俺にそれやつたらすり潰すからな。」

穀潰しは善い人のあまりの所業に恐怖を感じ、思わずそれを口にした。

とはいえ自分もそれにのつっていた一人ではあったのだが。

「でかい口をたたくんじゃない。」

善い人はそういうとわつかの電流スイッチを取り出してオンにした。

「あべべべ。」

穀潰しがのびた。そして車も止まった。

「役に立たない人ばかり。こんなことなら車になんか乗るんじゃないかった。」

善い人は役に立たない二人は見捨てて独りで医者を探すこととした。

わたしは勘が善いので医者もすぐ見つかるだろう。とそう思つことにした。

善い人はしばらく走る。

そして休憩を繰り返す。

「あのとき何か思いだしそうだったような・・。そう雷。」

が、少なくとも今の悪い人には関係のないこと。

悪い人はそのことを頭の隅に追いやり、今悪いことをする」とのみに集中した。

あそこだな。そして悪い人は名医がいそうな場所を曰ぞとく見つけた。

そばに潰れた車がおいてあつた。どうやら穀潰し達が先に到着したらしい。

部屋に入ると案の定穀潰しがいた。ガスはいならしい。

穀潰しは悪い人を見ると、困った顔で話しかけてきた。

「善い人。ガスの知人の医者が今ガスと話してるんだがどうも雲行きが怪しい。」

「話してる? そんな悠長なことしてる場合じやないよ。」

「それはそうだ。よし、ぶち破れ。」

穀潰しはひやつはーとかいいつつ、ガスと医者が話しあいをしてる  
部屋  
を吹き飛ばした。

家は半壊し、部屋にはいやもう部屋とも呼べないが、医者らしき男  
とガスの  
みがいた。

医者らしき男がそこにいてめがねを光らせくつと上に上げていた。

「君たちはおとなしく待つてゐることもできないのかね。」

善い人は激怒し何か言ひつとしたらやたらテンションが高くなつて  
る穀潰  
しに先を越された。

「いきがるなよ。こつちは3人なんだぜ？」

「なにをいつてるのだ‥‥私は別に君たちの手助けをしてあげよう  
といつのにそのような態度だとこつちも考え方改めないとけないよ。  
」

「いや。名医さん彼に悪気はないんです。少し病氣でして。」

ガスがやたら低い姿勢で名医の顔色を伺つてゐようだつた。

「ガスさん忠告しておきますが、付き合つ人間は選んだほうがいい  
ですよ。」

穀潰しが何かいいそうだが今度はガスに先を越されていた。

「我輩の友人をけなすといつことは我輩をけなすといつことだ。そ  
ういふことをいう人間こそ我輩と付き合つに値しない人間である。」

「ふつ‥‥好きにしてください。それで治療費は払つていただけ  
るん

でしおうな。」

「高すぎるが・・・」

「別にあなたに払えといつているわけではない。ただ住民で払えない者が出了場合の保証人になつてほしいということです。」

善い人は穀潰しの頭のわつかを害児から預かつた鍵ではゞして名医の頭にかぶせた。

そしてスイッチオン。

「あべべべ。」

名医はダウンした。

「今のうちだ！こい。ハエ。」

ハエを呼んでガスの家まで特急名医を運ばせた。後は害児がうまくやるだろ？。

もちろん善い人はハエにわつかのスイッチと鍵は持たせた。

「善い人め。せっかく潰そうとしたのにおしいことを。」

「穀潰し。こんなところで大技使われたら我輩まで死ぬ。」

あちこちの空間が歪んで見える。察するにすさまじい威力の技のようだ。

「善い人。一 手に分かれよう。俺はガスと一緒に他の医者を探すからお前もそつちで探してくれ。この町はそこまで被害ないようだが、怪我人がいたらガスの家に運んでくれ。」

「分かった。ちゃんと働くんだよ。」

「いやむしろ俺が一番働いてるだろ。主に車動かすことだ。」

そして救助活動を再開した。

## 第四幕 大震災の真相

一通りの救助活動を終えた後、善い人たちはよろずやに集合した。

地下にいつてみると、ほとんどの町の人人がすでにいなくなっている。

どうやら名医も帰ったようだ。

「ここはまだましなほうです。震源地はひどいありますからしいです  
よ。」

害児が説明を始めた。

「もう人が住める状態ではないようです。後これはうわさんですが、この地震は人為的なものでまたこの地震を起こそうとしてる人たちがいるらしいのです。」

「それは大変だ。早くやつつけないと大変だ。すぐこう。」

善い人は善いことができる絶好のチャンス到来と喜び勇んだ。

すぐさま悪人とぶつ飛ばすため、善い人が駆け出そうとすると、穀潰しは

両手を広げ善い人の前に回り込む。

仕方ないので、一度足を止める善い人。

「おこ。ひよつとまて。」

「急いでるんだけどどなにかな?」

「俺達は“めんだぜ”。お前の道楽に付き合つのもいいままでだ。今後  
は勝手にやらせてもらひや。」

善い人は、それを聞き心底びりでもいに気持ちになつた。

「もうか。じゃあまた後で。」

善い人は通せんぼしている穀潰しの横を通り抜け、地上へと向かつ。

「おー・・。もつりょつと止めてくれよ。」

穀潰しがまだなにかいってたが、無視してさつやとこくことにした。

善い人が外にでてみると害虫が待つていた。

「私も一緒に行きます。私も善い人さんの手伝いをしたいので。」

「いいよ。」

善い人はあつさつと承諾する。

その承諾の裏には足手まいになつたら置こうといつとこいつ田舎見  
があつた。

いつもして善い人々は震源地へと目指した。

ただ害児は車椅子なので善い人は害児に合わせてゆっくりと移動しなければならない。

これは困ったことだ、早くても害児さんが足手まといと善い人が考え込んでいると、

「善い人さん。こんなペースだと手遅れになりますよ。もつとスピードを上げないと。」

害児は、善い人が自分に遠慮しているところに気づき、助言する。

「でも害児さんが付いてこれないと思つよ。」

害児はそれを聞き内心思つところがあつたが、顔には出さず対応した。

「いやこの車椅子はスピードが出るので大丈夫ですよ。」

「なら遠慮なく。」

善い人は、ハ工を呼びその背に乗る。

「ハ工。震源地まで最速でお願い。」

「びえびえ。」

ハエはす「」スピードで進んでいく。

善い人が後ろを見ると害児もちゃんとついてきてるようだつた。

害児は善い人が見て「」ことに気づきふつと笑う。

善い人はそれを見て、顔を緩める。

そういうじてこるうけに震源地についてみると確かに怪しげな集団  
がい  
るようだ。

善い人たちが中に入らうとする、怪しげな集団の一人が善い人たち  
のほうに走り寄り話しかけてきた。

「何者だ。すでに「」の地帯はアキラ様の支配土地である。早々に立ち  
去るがよい。」

「そのアキラって人が地震起「」したの？」

「その通りだ。アキラ様こそはこの世界の神である。この腐った世  
界を  
変えてくれる御方だ。」

そういうじつ男はどこか焦点の合わない目をしている。

「」の土地に住んでる人はみんな無事?」

「奴隸どものことか。。。生き残ったやつらは奴隸として使ってやつ  
ているよ。なんならお前達もその仲間に入れてやろうか?」

「つるさい。」

偉そうな態度が善い人の勘に障った

それに悪人と判明した以上、これ以上話す必要はない。

悪人が身構えた刹那善い人の右アップバーが炸裂。悪人は天に飛んでいた。

その後、念のため善い人は害児に確認をとった。

「奴隸とかいつてるけど。こいつら悪いやつだね。」

「その通りです。町の人たちを解放しなければなりません。」

害児は朗らかに答えた。その時、ふと一人は後ろに気配を感じ、善い人と害児は後ろを振り向く。

「できるかな？」

宙に浮いている怪しげな男。風格がありおそらくこの人物がアキラといふ人物に違いないと一同は思つた。

害児は銃をアキラに向かつて問いかける。

「サイキックカーですか。もしかしてあなたがアキラさん?」

アキラは目を細め、口元をゆがめた。

「よく分かつたな。お前は何者だ？」

「見ての通りのしがない障害者です。」

「答えるつもりはない」とか。しかしどこかで見た顔だな。  
はて・・。」

アキラは一人を見つつ、サイキックカーではないと把握できた。

この障害者と白服が何者であれサイキックカーでなければどうぞ」ともない。

そう考へ、アキラは少し安心した。

「地震を起しちたとこのは本当ですか？」

「起しだしたのは俺じゃないが。本当だよ。」

善い人が口を挟んだ。

「奴隸とかいうのになつてる人たちを解放してよ。」

「それがここにきた理由か。お前達に何の関係がある？」

アキラは今ビキコんな馬鹿もいたかと呆れた。

「悪い事はいけないとだ。あなたも善いことをしないといけない。」

「

「どうやらやつちの白い服のやつは頭が死んでるらしいな・・・」

善い人の意味不明な言葉を聞き、ああなんだ狂人かとアキラは思つた。

善い人はひそひそと害児に聞いた。

「頭が死んでるとかこいつのナビゲーションだろ?」

「つまりあなたを馬鹿にしたいところですょ。」

害児はそれをむしろアキラに聞かせるように言い放つ。

アキラは挑発されるが、一般人風情が何を言つという顔をしていた。

「なにー。」この私を馬鹿にするなんて。思い知らせてやるー。」

思い知らせてやるー!という姿はすでに残像。善い人はアキラが認識する間もなく攻撃のモーションに入っていた。

高速移動の後剣を放つ。

「斬るー!三連斬!ー!」

常人ではまず回避不可能な、超速攻撃、それはサイキッカーでも例外ではない。

さらにアキラは、害児に多少気を取られており、善い人の動きを超能力で思考を読み取るということすらしてなかつた。

「ぐはつ。」

アキラは一瞬でぼろぼろになつた。

サイキッカーは肉体強化もしているので斬撃をくらつて即死はない。だがエネルギーはかなり消耗する。

「な・・化け物めが。サイキッカーなのか・・?」

超人を見ればサイキッカーと思うのはサイキッカーの悲しい性なのだろう。

アキラは距離をとるが善い人はどこからか槍を取り出しさうにとどめのおこうちをかける。

「貫け！トルネードチャージ！！」

回転、一点集中。善い人は体をぐるぐる回す。

「うぐあ。」

アキラは念で防御するがあまりの威力に全く相殺できず瀕死になる。

「待つてくれ・・。頼む。町の人は解放するから。」

アキラはお手上げ、命あつてのものだねだ。アキラとしてもここには仕事で來てるだけ。

命をかけるつもりなど毛頭なかつた。

「待つ必要なんてないよ。悪人を倒すのが善い人だからね。それにしても穀潰しと同じ技を使つようだけど穀潰しよりてんで弱いね。」

「穀潰し?ナンバー6のことか?あいつより俺が劣るだつて笑わせてくれる。ナンバー6ならもうすでに俺の奴隸だ。そうか・・。お前ナンバー6の知り合いだな。いいのか。俺を攻撃するとなナンバー6が死ぬことになる。」

アキラは善い人が善人で馬鹿なことを計算し、口で勝負を挑むことに決めた。

「つるさー。」

しかし善い人には理屈は通じない。

善い人はペチャくちゃしゃべるアキラのあごを蹴り上げる。

「こつておくけど数字の知り合いなんていないよ。わけの分からないうとをいつ。」

「あの・・。善い人さん。ちょっとといいですか。」

害児は善い人の肩をチョンチョンとたたく。

「ん?」

「どうやら穀潰さんは私達より前にここに来ててもう中でつかま

つて  
るよ  
うで  
すよ。」

「そ、うか。捕まるのが趣味なのかな。」

害児はそうではないだろうと思ったがあえて何も言わず、善い人はとにかく町の人を解放しなければと思った。

善い人はハエを呼び、ハエの背中にアキラを乗せて町の中に入つてみる。

「ああ・・。アキラ様が・・。」

中に入ると悪人達がアキラの無残な姿を見ておびえている。

この悪人達、アキラがやられる様を最初から見ていたはずだったが、誰も助けに入らなかつた。

とはいゝ助ける時間などなきに等しかつたが。

「皆さんの信頼してたアキラさんはこの通りです。奴隸になつてゐる人たちを解放して皆さんはまた元通りの生活に戻つてください。」

害児さんがそういうと悪人達は夢から覚めたような表情になり口々に言い始めた。

「最初から胡散臭かつたんだよ。俺達もアキラにはつぶざりしてたところだつた。」

「そつだ。そつだ。俺達は無理やりアキラに命令をさせられていたんだ。俺達が悪いことなんて一つもない。」

「あなた達は英雄です！」これから町の人全てで祝いましょう！

何かがやがや言つてたのでとりあえず善い人はおとなしくなつてもらおうと判断した。

「S・アップバー。」

元悪人達を気合とともに殴り上げる。元悪人達は天へと吹き飛んだ。害児はその間、めざとく怪しい場所に田畠をつけ善い人に報告をした。

「善い人さん。ここから地下にいけるようです。きっとここに奴隸になつてる人たちが閉じ込められてるんですよ。」

「それは大変だ。早く善いことをしないと。」

二人が地下に降りて行つてみるとへいこら働いている穀潰しを見した。

「ああ穀潰し。楽しそうだね。」

意氣消沈してた穀潰しは善い人の顔を見るととたん威張つた。

「よお。遅かつたじゃねえか。あまりのうまなんで待ちくたびれたぜ。」

穀潰しの強がりを一人は聞き流し、害児は疑問に感じたことを穀潰しに尋ねた。

「どうでどうしたのです？あなたほどの実力者がまんまと敵に捕まるなんて。」

「何言つてるんだ。これはわざと捕まつて敵の内部に侵入する華麗な作戦だつたんじゃないのか？」

害児は見苦しい言い訳に呆れ、無言でその場を去りほかに捕まつての人達を助けに行つた。

その場に残つた善い人は、穀潰しに告げる。

「さあ・・・どうなんだろうね。ただもう悪人のボスはやつつけたよ。」

「え？アキラをか。本当に？」

穀潰しは自分が苦戦したアキラをそもそも簡単に倒せるものかと怪しだ。

善い人はハエに乗つけていたアキラを穀潰しの目の前に放り投げる。

「ほひ。」

「」いつの得意技は集団催眠なんだが・・・。根性馬鹿の善い人には  
きかなかつたか。」

「穀潰しの知り合いなの？」

「ああ・・・。そんなど」「うだ。しかし、」いつには不意打ちで散々  
な田に  
合わされた。」のままじやきがすまねえぞ。」

「改めて決着をつけてやる。サイゴンホール。」

アキラのさすが見る見る治る。

善い人はそれを見て驚いた。

「そんな便利なことできるんなら穀潰しが医者になってくれれば  
いいのに。」

「悪いが乱発はできない。念力を」「つたり使つんでな。」

「そらそろそろ起きるべ。」

「む・・・。貴様はナンバー6。」

アキラは善い人のほうを見るととたんおびえだした。

「ひえええ・・・。勘弁してください。白服様。」

「おいおい。情けねえなあ。アキラ。」んなやつに「うだぜ。」

穀潰しは調子に乗つて善い人の頭を殴る。

「痛い。」

本当に痛そうに善い人は頭を抱えた。

「いいじゃねえか。ちょっとくらいいい思いをさせや。それも善いことだろ。」

「おい。アキラ。さつきは不意打ちで催眠かけたくらいで勝つた気になつてんじやねえぞ。  
もう一度勝負だ。」

「ふん・・。ナンバーからでてもいなおまえが俺に勝つことなんて不可能だよ。」

アキラは善い人のほうをうらうらと見ながら答えた。

「思ひ上がりもそこまでにするんだな。催眠さえ氣をつけられればお前なんかに俺が負けるわけねえんだ。」

穀潰しは激昂しそうやら茶番な展開になつてきたようだ。

善い人はいい加減やり取りが面倒になつてきたので、害虫の手伝いをしてこととした。

「じゃあ私達は捕まつてる人たちを解放していくから、穀潰しは外で遊んでてね。」

「おひ。 セツセとこけ。」

アキラは善い人が射程距離から離れほつとし、穀潰しとこじみ合ひ。

「テレポート。」

一人は外に出た。辺りは、壊れた建物などの残骸だらけ、一人は足場悪いためオーラを身にまとい、宙に浮いた。

「ただ力ばかり強力なだけどころくに鍛錬せず技も磨かないお前がエリートの俺に勝てるのか？」

まずはアキラが穀潰しに挑発を仕掛ける。

「催眠みたいな卑怯な技しかろくに使えないやろうがよくいづ。ぜ。」

アキラからしてみれば、催眠は卑怯ではない。この最強無比の攻撃がある

からこそアキラはネーム入りを果たせたのだ。

その技を馬鹿にされアキラは心中穏やかではなつた。勿論顔には出さないが。

「どうやら口で言つても無駄らしいな。」

アキラは瞬時に穀潰しの後ろにテレポートする。

穀潰しは攻撃を避けるためテレポートするがアキラに読まれてしまつている。

穀潰しはアキラに手首をとられ投げられてしまった。

穀潰しは、地面に激突する寸前、地面を念力でえぐりダメージを軽減させる。

「あーあ。穀潰しは接近されるとてんでダメだな。」

善い人たちちは町の人たちを解放した後。町の人たちと一緒に戦いの様子を見ていた。

本当は建物などの建て直さないといけないのだが、町の人があまりの町のひどさに現実逃避していた。

そろいもそろつて雁首を並べ、サイキックカー同士の戦いを見物した。

害児は、高台の上に立ち一人の戦いを解説する。

「サイキックカーとしての技量はアキラのほうが全然上のようですね。体術も上ですし穀潰しさんが勝つてるところはサイキックのパワーだけですが、ためる隙がないとそれも無駄ですね。

穀潰しさんがたらアキラさんのほうも催眠してしまうでしょうしこれは分が悪いですよ。」

町の人はなるほどなと感心した。

そんなことをしていると穀潰しがまた投げられていた。

善い人も高台の上に登り害児と雑談をする。

「これはもう勝てないんじゃないかな。でも不思議だ。私の攻撃

は避けられたのになんてだろ。」

「善い人の質問に大きくなづき、害児は町の人からマイクを受け取るとまた説明を始めた。

「善い人の攻撃を先読みできたからでしょう。

アキラさんとの場合は思考の読み合いで勝てないんでしょう。  
しかもアキラさんのテレビの範囲は広大なのに穀潰さんは見たところ1・2mくらいしか動けないようです。」

実際は穀潰しはテレビをつかえていないが、さすがに洞察力鋭い害児でもそこまであほなことは見抜けなかつた。

町の人は害児の的確な説明に感心し、一人の勝負にみとめた。

勝負は泥沼（穀潰しが小技の打撃をうけるだけ）の持久戦になつた。

町の人は飽きてしまつて家に帰つてしまつてゐる。家と行つてもほとんど

瓦礫だつたが。

そして日も傾きかけていた。

「長いねえ。」

「善い人は砂場で子供達と山を作つて遊んでいた。こんなときでも子供は無邪気だ。

害児はそばで読書をしてゐる。

「日が暮れそうですよ。」

「帰る？」「

「ええ。とりあえずもう町は大丈夫みたいで。これで地震がおさまるといいんですけどね。」

穀潰しさんの戦いは、連日になつとうですからもういいにこでも無駄でしょう。」

「帰る？」「

善い人と害児は茶番を見せつけられてうんざりし、まだ戦っている穀潰し達を後にして家に帰った。

その頃ハイテンションな穀潰したちの戦いはまだ続いていた。

「ここの俺は不死身だ！」

穀潰しは一方的に攻撃を受けるが見る見るうちに傷を再生させてしまう。

「さすが我が好敵手。やるな。」

「お前もな。」

こうして夜がふけ戦いはさらに続く・・・。この戦いは三日三晩続いた伝説の戦いになった・・・と穀潰しは後に語つた。

## 情報ファイル

- ・サイキッカーについて。

超能力者の組織。

この世界の悪役勢力の一つ。

ネーム入りとナンバーズ。

普通のサイキッカーはナンバーで呼ばれている。穀漬しは元6で、これは6番目に組織にはいったわけではなく、昔の6番目がいなくなつたので6という理由。

ネーム入りは、サイキッカーの中で強い人が与えられる名前。与えられた以降はナンバーではなく名前で呼ばれる。

名前の由来は、昔組織に貢献した元祖サイキッカーの名前で、そのため定数のみのネーム持ちとなる。

- ・サイキッカーの能力

元々の素質とそれを扱う技術、さらにそれを補う道具などで決まる。さらに大きく分けて二つに分類される。

## 念力の練りこみと脳波の安定

念力の練りこみは素質に大きく依存するが技術の精度でも差はかなりである。

脳波の安定は長い訓練による技術の習得が不可欠となる。

穀潰しは練りこみのスピード遅いが、許容量が無限に近いので、パワーは大きい。

### 念力の練りこみ

- ・エネルギー系、エネルギーに念力を練りこみ放出させる。

#### 穀潰しの得意技。

- ・肉体強化系、肉体に念力を練りこみ強化する。

穀潰しのみ死んでも復活するほどの効果を發揮する。

- ・操作系、物体に念力を練りこみ操作する。つまりサイコキネシス。動かすだけではなく、爆発させたりすることもできる。

テレポートもこれに当たるが、テレポートは扱いが難しく、脳波の安定も必要となる。

## 脳波の安定

- ・読み込み系、サイコメトリーによる瞬間読み込みと、予知による読み込みがある。

大抵のサイキックカーはメトリーによる読み込みを得意とする。

予知は大抵時間がかかるので実戦には向いていないが、ネーム持ちで予知得意とするものがいるとも聞く。

- ・感覚超越系、透視、遠視など。視覚などの感覚を脳波に転換する能力。

例えば、遠視などは、視覚で見ている物の認識と地球の裏側を見ている認識を同時に行つといつもの。

例をあげれば自分が複数人いて感覚を共有しているような感じ。

アキラの催眠もこれに当たる。アキラは練りこみよりも緻密な技術による技を好む。

アキラの使う集団催眠は、アキラの得意技で、瞬時に広範囲に当たつて相手の思考をコントロールできる。  
サイキックカー以外の相手に対してはほぼ無敵。

普通催眠は、道具を使って行うものでさらに複数人を操るのは至難の業

だが、アキラは長い訓練でそれを可能にした。

ただし、脳波の安定系は、同じサイキックカーでは技術のせめぎあいで効力を発揮するので、自分より上手の相手には瞬間催眠できず時間がかかる。



## 第五幕 歌う善人

薄暗い部屋の中、害児は一人ティーを楽しむ。

その表情はどこか嬉しそうで、ぼそりと独り言のよつなことを言っている。

「今回の件、不幸な出来事ではありましたが、これで随分とやつやすくなります。」

その声に答えて闇から声が流れてくる。

「全く首領のお手並み、感服いたしました。」

その声を聞き害児はますます上機嫌になつていぐ。

「ふふつ。私は何もしていません。しかし・・無能な輩といつもの黙つても期待通りに動いてくれるというものです。」

「それも首領の人徳がなせる技でござましょ。」

害児はそれには答えない。カップをテーブルに置き義足を点検し終わると、車椅子に戻る。

「それにしても善い人さんは、今日も手伝いに行つてているのか。」

噂をされた善い人は、手伝いと称し今日も公園で砂山を作り子供た

ちと遊んでいた。

「いやあ、善いことをするのって楽しいなあ。」

「お姉ちゃんの作った山大きいね！」

「わたしは善い人だからね。」

善い人の作った砂山は大きいというものではなく、公園からあふれて小山のようになっていた。

子供たちはその小山で遊んでいたが、周りの大人们はいい迷惑、善い人には町を助けられた恩義があったが、悪人と言われて善い人にぶつ飛ばされた人達も中に混じっていたので複雑な感情だった。

「善い人さん。手伝ってくれるのは結構なのですが、できれば力仕事を担当していただきたいのです。」

町の人の一人が勇気を振り絞り善い人に抗議をする。

「わたしは力仕事に向いてないんだよ。」

「し、しかし・・・。」

「お、おい。その辺にしておけ。また殴られるぞ。」

「あ、ああ・・・。」

町の人たちは、はた迷惑な悪い人を尻目に町の復旧作業に戻つていった。

やがて日も暮れたので、悪い人はそろそろ帰ることにした。

「悪い人はそろそろ家に帰つて寝る時間だよ。さてタンクさんはどこにいったかな？」

タンクさんというのは、悪い人の家に居候している背の高いすらりとした女性で、実はロボットだったりする。

以前、『ミミコに埋まつている』といふを悪い人に拾われ、その後、彼女を狙う悪のロボット連中を追い返し、今に至る。

「やあいたいた。」

タンクは小型の戦車になつて、のこぎりなどで木を切つていた。

「帰らうか。タンクさん。もう日が暮れるよ。」

「もうそんな時間なの？ああ本当だ。」

タンクは変身して人間に戻り、悪い人と一緒に帰路についた。

善い人は、震災で崩れた家を頑張って建て直している町の人たちを見て、うれしい気持ちになった。

自分がいいことをしたおかげだ。とそう思った。

みんな善い人になつてよかつた。よかつた。

「善い人たちさんが誰か悪人さんをやつつけたんでしょう? すごいなあ!」

「まあね。私は善い人だからそのくらい当然だよ。」

善い人はぐるぐる回る。

「タンクさん。今日も『』あさつにいくの?」

タンクは、『』山や遺跡などで何かを発掘するのが趣味だった。

ロボットなので疲れることはなく夜通し、発掘しても大丈夫なのであつた。

「もちろんー今日は何が出るかなあ?」

「善いものが出来るよ。間違いない。」

「善い人たちさんがそういうならそういうんだろうねえ。」

タンクは、手首をパカパカと動かす。おそらく喜んでいるのだろう。

「そうだ。いいものがあった。」

タンクは手首から何を出す。妙な材質でできた何かの像だった。

「善い人ちゃんにこれあげるよ。かわいいでしょ？」

善い人はせっかくいい気分だったのに変な像を見せつけられて機嫌が悪くなつた。

「いらないな。そんな変な像。」

無愛想に返答する。

「またまた照れちゃつて。はい。持つててね。なくしちゃだめだよ。」

タンクは善い人に無理やり像を持たせる。

善い人の都合などお構いなし。非常にマイペースな人であった。

「まあいいか。よろづやに売ろう。」

「売っちゃだめだからね！」

「こんなゴミいらなくよ。」

「ダメダメ。持つてないとダメ！」

善い人は困り果てた。こんな変な像は明らかに要らなかつた。

「これも善いことなのかな？」

善い人は仕方なく変な像を服にしまいこむ。

「じゃあ私はゴミあたりしてくるね。」

「うん。」

善い人は家に帰ると、漫画を書きながらハエを実験台に技を放つ。

「こんな感じかな？いやなんか違うな。」

「ぴ、ぴざー！…」

善い人はハエと一緒に遊んだ後、食事にすることにした。

その時、扉がノックされる。

「タンクさん？入つて善いよ。」

「善い人ちゃん。手がいっぱいだから開けられない。」

「もう仕方ないな！」

善い人はしぶしぶドアを開くと、大量のごみを抱えた戦車が部屋に入ってきた。

善い人の家は「ゴミだらけになり、そのうえで一人は食事をすること

にした。

「今用意するから待つてね。」

タンクは自分の頭のハツチを開け、コップを一つ出す。

そして善い人には水を自分にはガソリンをつぎ、ヨコの上に並べる。

「じゃあいただきます。」

「いただきます。」

善い人とタンクは、食事をしつつ話に花を咲かせた。

善い人は自分がいかに善い」としたかを語り、タンクを驚かせ、タンクは自分

がどんなにす”いものを発掘したかと語り善い人を驚かせた。

「す”い…す”いよ。タンクさん！」

「善い人ちゃんもだよ！」

さて、タンクはまた裏山に戻り、善い人は寝ることにした。

「おやすみ。善い人ちゃん。またね。」

「ふわあ…。今日も善いことしたなあ。」

善い人は2時間ほど寝入り、うーんと背伸びをした後、外に出かけた。

家の外では害児が待っていた。

「善い人さん。 今日もいい天気ですね。」

「そうだね。」

今田はどうやらかといつと曇っていたが、このいい天気というのは害児の口癖であり、善い人も別に空が曇つてようが雨が降つてようが困るということは

なかつたので、この問答の内容は常に変わることがなかつた。

「それにしても今日も『みだらけですね。』

「タンクさんが持つてくれるんだよ。」

「善い人さんも大変ですね。」

「わたしは善いことができればそれでいいんだよ。」

善い人にとって部屋が『ゴミだらけになろうがたいしたことではなかつたが、

邪魔なことは確かなので、いつも処理はしている。

「さて・・・。昨日も手伝いに行つてたそれで?」

「それはもちろん。善い人だからね。」

「そうですか。そうですよねえ。お陰様で私のほうもずいぶん・・・

げふん

「いやなんでもないです。」

「害児さん。町の手伝いするのも飽きたから何か善いことないかな？」

「それは困ります。善い人さんにはせいぜい町の復旧の妨害をしてもらわないと……。」

「ん？」

「いえいえ、ほら。小鳥のせえずりでしょう。そんなことよりも善い人さん。

見てください。いい天氣です。」

善い人は害児と一緒に空を見上げる。

「それで害児さん。何か善いことはないのかな？」

善い人にとって関心はそこだけで、害児が行う不審行動のあらゆることに興味などわくわけはなかった。  
それは害児にとつては大助かりなことではあったが。

「また何かあつたらお知らせしますよ。そういう、私は用事があつたのだつた。

そろそろ城に戻ります。」

害児は冷や汗をかきつつ、逃げ出した。

向こうからフレオが近づいてくる。どうやらガスが来たようだ。

「ぶおんぶおん、キュイイーン！」

フレオは善い人の家の前にとまる。

「善い人君。おはよう。いや毎度助かるよ。」

「ガスさん。頼んでおいたものは？」

「ああこれか。」

ガスは車からガサガサとボウガンを取り出し善い人に渡す。

そのボウガンは、善い人の体ほどの大きさであり、まさに善い人専用の特注品と言える代物だった。

「常人の筋力じゃまず引くことはできない。吾輩自慢の一品なのだ。」

「善い人はもうそんなことは聞いておらずボウガンで遊んでいる。

「気に入ってくれたようだな・・・さて荷物を運ぶとするか。」

ガスはせつせと善い人の家から荷物を運んでいると、そこに害児が近づいてきた。

「やあガスさん。相変わらずハイエナのような方だ。」

「どちらから害児は暇なのでガスに嫌味を言こなきたらしい。

あるいは先ほどの失態の腹いせかもしれない。

「へへへ。害児さん。これからも『」と顰蹙にしてください。」

ガスは揉み手をしつつ笑顔で対応する。

「全く、善い人さんからただで物品をむしりうなんて自分で虫がいいとは思わないのですか？」

「しかし・・これが吾輩の性分や。」

申し訳なさそうに、しかしさやつきながらガスは答える。

害児はその言葉にそっぽを向く。

「反吐が出るー。」虫以下ですよ。あなたの所業はー。もうこー。帰つてくれー！」

帰れと言われて帰つたら商売にならない。

害児のあまりの理不尽な態度にもガスは笑みを絶やさない。

それはなぜかというと、害児がガスにとつてお得意様だからだった。

「まあまあ害児さん。例の町の復旧で随分荒稼ぎしてゐるらしいですな。

吾輩もあやかりたいものだ。」

「な、なにっ！」

害児はガスをにらみつけた。しかしガスは一ヤ一ヤ笑うばかりで何の手じたえもない。

「これは口が滑りましたかな。」

「まあいい。一度目はありませんからね。」

「いやせや害児さん。今後も吾輩のよひすやの「ひこせ・・・。」

害児は皆まで聞かず、足早に去つて行った。

「やれやれ。あの人は傲慢なのがいかんな。さて、今日は善い人君に手伝つてもらひうとするか。」

ガスは善い人を手招きし、呼びつける。

「なにかな？ガスさん。私は善いことをするので忙しい。」

「善い人君。今日は吾輩の手伝いをしてもらえないだらうか。ちよつと今日の商談の相手は面倒なのだ。」

「めんどうくさいなあ。」

「これも善いことといつものだぞ。善い人君。」

「そうかな？なら善は急げだ！」

善い人はプレオを蹴つ飛ばして、自分もプレオに乗り込む。

プレオはすごいスピードで吹き飛んでいく。

「やあ。快適だよ。善い人君。方向もばっちりだ・・・。待てよ。これは落ちた衝突でプレオが壊れるのでは?いやまず吾輩が死んでしま

うじゃないか。

・・吾輩は死にたくない!」

ガスは車の上で青くなつた。

「善い人君!なんとかしてくれ!」

「なにを?」

「なにをつてそりゃ・・・。」

ドスン!バコーン!

車は森の中に墜落した。

「わ、吾輩のプレオがー!」

ガスは慌てて車から降り損傷を確かめる。

「ほつ。助かつた。それに吾輩も何ともない。これは重装備のおかげだな!」

「ガスさん。『二』に悪人がいるの?早くいいことしに行かなこと。」

「な、何を言つてゐんだ。善い人君。吾輩は危つて死ぬところだつたんだぞ?」

「ふーん。なんかものすゞくどつでもいい。」

「ど、どつでもいいだつてー。」

ガスは顔を赤くしたり青くしたりしながら激昂する。

「そんなことより善いことはまだなの?本当に使えないなあ。」

「はつそつだ。こんなことしてゐる場合ぢやない。善い人君よく聞くんだぞ。」

今回の仕事は素材の採掘だ。ドラゴンが住み着いている洞窟に行って素材を掘つてくるんだ。」

「ドラゴン?」

善い人は怪訝そうな顔で聞いた。

「古代生物の一匹で高い知能と戦闘能力を持つてゐる種族だよ。」

「へえ。面白そうだね。」

「面白くはない。あそこに住んでいるドラゴンは好戦的だから触發してはダメなのだ。」

「戦つてみたら漫画の題材になりそうだ。」

「はあ。少なくとも我輩を巻き込まないでくれよ。  
それに善い人君の馬鹿力がないと採掘できないんだから手伝つても  
らわないと困る。」

「わたしは力仕事は得意じゃないんだけどな。」

「どの口がそれを言つか。善い人君なんて馬鹿力をとつたら何の取  
り柄  
もないじゃないか。」

その一言は善い人が激怒するのに十分すぎる一言だった。

「なんだとー！わたしを馬鹿にするものはゆるさあーん！」

善い人はさつきガスにもらつたボウガンを向ける。

「み、見くびつてもらつちや困るな。善い人君。それには矢が入つ  
てない  
のだよ。」

ガスの横を何かが通り過ぎ、後ろで爆音が聞こえる。

「え？」

ガスが後ろを振りむくと、辺りの木々が粉々に吹き飛んでいた。

「次は右目をもらつよ。」

「み、右目？ 善い人君冗談は・・・ぐわつ！」

ガスの体に巨石が命中し爆発する。

ガスは「ぐるぐる転がり木にぶつかる。

「じゅ、重装備のおかげで何とか助かったが・・・が？」

ガスの前に前に無表情の善い人が立っていた。

「善い人君。吾輩ほどの善い人はいないと思うのだがどう思う？」

ガスの命は風前の灯。しかしガスは善い人の思考パターンを見抜いている。

「いやガスさんは悪人だよ。」

「まあ待て。善い人君。君はドラゴンを見たくはないか？」

「ドラゴン？」

「さつきってた古代生物だよ。もうすぐ先にある。どうだ。ここは一つ

仲直りして一緒にドラゴンの住処に行こうじゃないか。」

善い人はそれを聞きぱっと表情を明るくした。

「ドラゴンか。どんなのだろうな。ガスさん早く行こう。」

ガスはそれを聞いてほっと一安心。

「ふうー。助かった。」

## 第六幕 ドラゴン観察日記

二人がじばりく歩くと、洞窟の前にドラゴンが陣取っているのが見えた。

「ドラゴンは」ひびきを話しかけてくる。

「人間共。 我の住処に一体何のようだ？」

「ドラゴンはガスと顔見知りなのだが、これは一種のあこせつといふものだった。

「ははー。 ドラゴン様の洞窟にある鉱物を採掘せんべださしまし。」

「なに? 我の住処のものを盗つてこいつはビリこうぞ見なのだ?」

「いはお一つこれで。」

ガスは大きな袋を取り出してドラゴンにあげた。 ドラゴンはにんまりと笑い

その袋をガサガサと揺らす。

「ほひ。 なかなかつまつとるな。 ふん。 その心がけを忘れるでないぞ。」

今日は特別に2時間貸してやるわ。よいか。2時間以上いるような  
ら食べて  
しまつからな。」

「ははっ。ありがたき幸せでござりまする。」

「善い人君。許可が下りたよ・・・あれ?」

善い人はドリゴンに興味しんしんだった。ドリゴンのしっぽに捕ま  
り後に  
ついてきている。

「これ。人間。どうして我の後についてくるのか?それに我の尻尾  
は乗  
り物ではない。」

善い人はその言葉をスルーして質問する。勿論しつぱには捕まつた  
ままだ。

「ドリゴンさん。なにしているの?」

「散歩だ。見て分からんのか。」

「あの大きな袋は何?」

「金がつまつとるのだ。なぜそのような当たり前のことを聞く?」

「ドリゴンさんもお金使つの?」

「使わないでどうやって生活するのだ?あほつなのが。お主は。」

「草とか食べるんじゃないの？」

「草も食べるが良質な草がそこらに生えてるところもあるまい。

そのほかにもいろいろと入用なのだ。」

「どうして2時間だけしかこちやだめなの？」

「どうしてもこうしてもなかなかうが。制限をつけなければどんどん採掘されてしまつて裸の洞窟になつてしまつだう。」

「ドリゴンが住む洞窟は、ドリゴンがいる影響で貴重な鉱石がとれる。このドリゴンはそれを売る」と生活していたのであつた。

古代生物といえば、生活するためには仕方ない」ともある。

善い人は重ねて質問した。

「炎とか吐ける？」

「炎も吐けるし他にも人間にとつて害のあるガスとか吐ける。天候を操つて雷撃を発生させる」ともできる。空を飛ぶこともできる。」

「ドリゴンは火薬とかばかり血腫をすく。純粹につねしがうだ。」

「すいにね。」

「お主のよつてこりこり質問するものは初めてだ。大抵は我を見る

とおび

えてしまいつまらん。」

「体大きいからかな。」

「分からんな。」

「そりいえばどうして炎吐けるの?」

「知らん。逆に聞くがどうして人間は炎が吐けないのだ?」

「そりいえばなんでだらう。」

善い人は真剣になつて考え込んだ。あるいは人間にも炎が吐けるかもしれない  
とそういう考えていた。

ドラゴンはいつの間にか歩くのをやめて、善い人と対峙していた。

「あの鎧男はよくここへくる。尋ねてくる人間自体あの鎧男くらい  
なも  
のだ。」

「さびしいみたいだね。」

「さびしいな。暇だしつまらん。」

「ドラゴンの仲間はいないの?」

「知らんな。探す気にもならん。」

「どうして？」

「どうしてって面倒だらうが。」

「わがままだなあ。」

「・・・それは確か。しかしどうするか全く見当もつかん。」

「じゃあ探してあげるよ。」

「なに？なぜ我の仲間をお主が探しねばならんのだ？」

「善い」とするのが私の使命だからだよ。」

「変わったことをこいつ。」のみたいな時代にお主のよつなものがおる  
とはな。」

「じゃあ私はそろそろガスさんの手伝いをしなこと。」

「そうか。これ少し待て。」

「ん？」

「採掘時間を4時間に増やせ。」のあの鎧男に云ふてくれ。

「分かったよ。あつがとう。」

ドゴンは善い人の背中に手を振り見送った。

戻つてみるとフレオに乗つたガスが洞窟の前にやつてきた。

「どうやら仕事がひと段落ついたと」ハラハラ。

「善い人君、遅いよ。これでは連れてきた意味がないではないか。」

「今から手伝つよ。」

「だがそろそろ2時間たつてしまつ。」

「4時間やつていいつてさ。」

「おおさすが。交渉しにいつてくれたのか。そつだと思つたよ我輩は。たゞ  
が我輩の見込みどつりだ。」

「それじゃいこうか。」

二人は再び洞窟の中に入る。

「どうだい。見事なものだわつ。これで吾輩はまた馬鹿儲けできる  
といつもの  
なのだ。」

洞窟の中にはびっしりと鉱石が詰まつていた。

「きれいだね。スケッチしておいつ。」

ガスはそんな善い人に苦言を言つ。

「善い人君。早く仕事にかかるんだ。あまり時間がないのだからね。」

善い人は仕方なくスケッチをあきらめ仕事に取り掛かる事にした。

こうなつたら、生半可では済まない。善い人はすさまじい勢いで大

剣を振る

洞窟を削っていく。

善い人の大剣は大剣というよりは、巨大な鉄の塊。そんなものを何本も持つてている。

ガスは初めは感心して仕事ぶりをみていたが、そのうち心配になってきた。

「善い人君。これはちょっとまずいな。もうほんと鉱石がない。いくらなんでもあのドリゴン怒つてしまふだろ？」

「じゃあ一つおいてこいつか？」

「いや一つくらいじゃまだよ。」

「じゃあ一つ？」

「だめだ。だめだ。」

「うるさいなあ。手伝つてあげないよ。」

「それは困る。まあいいか。なんとかなるだろ？」

その後ドラゴンさんがやつてきて、洞窟の中を見たとき少ししかめ面を

したが、得になにもいわず善い人たちを見送った。

善い人は大量の荷物を上に載せ、蛙のように潰れていたが、その待遇について特にガスに文句など言わない。

「やあ、大量大量。今日ほど痛快な日があつたろうか。これもすべて善い人君の労に他ならない。」

「どうやら善いことができてよかつたよ。」

「善いこと? そうだな。善いことだ。全く、吾輩にとつてはこの上なく善いことなのだ。わっはっは。」

ガスは笑いが止まらなかつた。

善い人は別のことを考えていた。あのドラゴンの仲間のことだ。

そして、ドラゴンを見て怖がる人がいるところだと。

きっと誰か悪人がいて、ドラゴンさんのことを悪くいっているに違いない。

わたしがいる限りそうしまくいかないよ。

善い人は、そのように考へ、ドラゴンの悪い噂を晴らす決意を固め

た。

善い人は次の日、害児の城を訪ねる。

城の応接間で害児と、ドラゴンの話をしきつ相談した。

「お話はわかりました。しかし善いさんは古代生物が怖くないんですか？」

そこへ黒い服を着た人がやつてきてカップを善い人と害児の前に置く。

「ティーでござります。」

「うむ。御苦労。」

しかし、善い人のカップには何も入っていない。これはいじめなわけではなく

、善い人は基本的に水を少量飲めば満足するため好んで何かを食べたり飲んだりはしないためだ。

黒服の人があに引つ込んだ頃、善い人は口を開く。

「別に怖くないよ。」

「みんな怖がつてますよ。」

害児は肩をすくめる。

「やつなんだ。」

「しかし、怠惰なドリゴンですね。案外ドリゴンの生息地は多くの  
に自  
分で探しにいかないなんて。」

「ドリゴンさんの話よると、あの場所は町から近いから街に入つて  
るらしい  
よ。」

書児はその言葉を聞くと派手な身振りでお手上げした。

「なんてことだー。そのドリゴン真面目に探す気ないんじゃないです  
か？」

「やつかな。」

「ええ。残念なことですけど。」

「書児さん。わたし思つただけ。」

「なんですか？」

「これは何か悪人がいてドリゴンさんの悪い噂をしているんじやな  
いかな？」

何の罪もないドリゴンさんを罵に落とやつとしてる悪人がいるに違  
いな  
いよ。」

「ふむ・・・。」

害児はそこで少し考え込む。普通ならキチガイの戯言なのだが、実際古代生物たちは別に人間たちに対して危害を加えているわけでもない。

彼らは適応力が高く、人間社会にもなじもうとしている。

そういうことを考えると善い人のいうこともありうるし、そもそも害児は

こういうときの善い人の直感は大体当たると信じていた。

「そうですね。私のほうで少し調べてみます。善い人さん。明日またここへ来てくられませんか？」

善い人は家に帰り、害児の情報を待つた。

そして明日の朝いの一番に害児の城に出向いた。

害児は城の前で善い人を待っていたようだ。

「善い人さん。犯人が分かりました。おとなしい顔してとんでもない連中でしたよ。

トラックに乗つてください。私が運転します。」

善い人は害児とともにトラックに乗り込み、現場へ急行する。

「悪いやつもいたものだね。こらしめなければならない。」

「全くです。悪は滅して、見せしめにしなければいけません。」

のりのりで物騒なことを言つ害児。しかし善い人もその言葉には全く同感であった。

正直この二人がそろうとろくな事が起こらないのだが、今回はどうなのだろうか。

写真に写っている人物は、どうみても穏やかな村人にはすぎない。

果たして彼が本当に悪人なのだろうか。

善い人たちが町に着いたころ、写真の人物は仲間と一緒に談笑していた。

「善い人さん。見てください。笑つてやがります。」

怒りの表情で写真の人物を指差す害児。善い人も勿論激昂する。

「許さん！善い人の怒り思ひ知れ！突き刺さる蹴り！」

善い人は飛び上がり、穏やかな村人Aに向かつて急降下する。  
地面にめり込む穏やかな村人A。

「ああっ！村人Aさんが！」

「何をするー暴漢め。」

激昂する町の人たちを止めたのは意外なことに、善い人に蹴られた  
穏やかな

村人Aだった。

「待つてください。みんな。」の方の話を聞いてみましょう。」

当の被害者にさう言われては是非もない。町の人たちは、無粋な暴漢をにらみつつ、その言葉を待つた。

「あなたが悪人だということは、善い人にはお見通しだ！」

善い人は村人Aを指差す。

「え？ 私が悪人ですって？ 何を言つているのです。あなたは・・・」

そこへ乗り込んでくる害虫。

「とほけよつとしても無駄ですよ。あなたがドラゴンの悪い噂をばらまいているということは、すでに調べがついています。  
さあ！ 大人しく罪を認めなさい！」

その言葉に我慢ならず町の人たちは口ぐちに口を開く。

「何だお前たちは、いきなりやつてきてー。ドラゴンなんぞ凶暴な奴をどりしてかばうのだ！」

「それに、村人Aさんを問答無用でけり上げるとはどうこいつ料簡なんだ！」

そして善い人たちに糾弾された当の本人は、うつむいている。

町の人たちは心配して村人Aに話しかけた。

「もう行け。村人Aさん。こんなキチガイに構う必要はない。」

その言葉を聞き、震える村人A。

「くつくつく・・・はつはつは！」

「え？」

村人Aの突然の変化に驚き慌てる町の人たち。

「よくぞ見抜いたなあ！ああそつぞ。俺はドラゴンに嫌味をするためにこの町にやつてきた嫌味博士の手下だ！」

「嫌味博士？本当にそんなものが実在したとは。」

害児は嫌味博士の名前を聞き驚く。

「害児さん。嫌味博士ってなに？」

「ほら。穀潰しさんの妄想でよく出でてくるあの人ですよ。私の情報網にも引っかからないから架空上の人物だと思つてましたが・・・」

「くつくつく。俺たちは嫌味さー嫌味をするために生きている。なんのためにドラゴンの悪い噂をばらまいたって？それは嫌味のためさー！」

聞かれてもないのにハイテンションでべらべらとしゃべる元村人A。

村人Aの突然の変貌に顔が引きつる他の町の人たち。

「どうした？ 恐れ入つて声も出ないか。はつはつは媚びろ媚びろ！」

村人Aはまるで気が狂っている。

「どうやら手遅れみたいですね。善い人さん、楽にしてあげてください。」

善い人はこくりとうなづき、巨大な鉄の塊（大剣）を取り出す。

「エレファントクラッシュ！」

破壊音とともに、本気の一撃を繰り出す善い人。

すさまじい効果音とともに村人Aは粉々になるが、それはいつの間にか藁でできた人形とすり変わっていた。

「これは一体・・・ん？」

害児は藁のなかに入っていたカセットテープのようなものを取り出す。

カセットテープはカチャという音を立て、音をだした。

「がーがー。これは爆弾です。繰り返します。これは爆弾です。」

「善い人さん大変だ。これは爆弾みたいですよー。」

「爆弾と聞きパニックになる町の人たち。

カセットテープはさらに言葉を紡ぐ。

「爽快爽快！見ろ！人間どもが慌てふためいて逃げていくぞー。」

「なんていうことだー善い人さんどうしましょーうか？」

「害児さん。一つ聞きたいのだけど。」

「なんですか？」んなとき！」。

「爆弾つて何？」

「爆弾といつのは、爆発するんです。すごいんです。危険なんですよ。

だから毎回にかしてください。」

「どうにかしたら善い人かな？」

「もちろんですともー！」

「今からでは遅いわ！たわけめ！嫌味の力思い知れー。」

カセットテープはカウントダウンを始める。

「あわわわ。」

害児は青くなつて慌てふためいた。冷静に考えてみると害児がここで慌てる要因は何一つないのだが、予想外の展開に我を忘れてしまつているのだ。

善い人が、害児から爆弾をひったくらつとすると、不意に風が吹く。

「させねえよー。」

辺りに青い風が巻き起こり、その風は害児からテープをかっせりつ。

「ん？ 穀漬しじゃないか。」

「穀漬しさんですか。それを奪つてどりするつもりなのです？」

「うぬせえな。お前たちには関係ねえよ。」

穀漬しはまた風となつて去つて行つた。

「大丈夫でしようかね？」

「どうかな。でもこれで悪は去つた。」

その後、二人はドラゴンの住処に行き、町への転居を提案。

町の人には害児が事情を話し、ドラゴンは受けいられる」と。

ドラゴンももちろんそれには異存がなく、転居は速やかに行われた。

## ・情報ファイル

- ・ 善い人の生態
  - ・ 極度の寒がりで、白い帽子に白い服を着ている。汗などは基本一滴も出ない。
  - ・ というより基本老廃物がなく、人というよりはロボットに近いかもしない。
- ・ 水を少量飲むだけで、数週間生きていられるが、趣味で何かを食べることもある。
- ・ 常に病魔に侵されており、通常寝たきりになるはずだが、気合と根性で動いている。
- ・ しかし本人に自覚はなく、昔は寝たきりだったらしいがある事件がきっかけで今のような生態になつたらしい。  
ただし、善い人は過去の記憶が欠格してゐる。
- ・ 漫画を描くのと善いことをするのが趣味。
- ・ 武器はすべてどこかに隠し持つてゐるのだが、果たして自分より大きな武具をどこに隠しているのか全く不明。ただ、善い人は来ている服は、セリルという女性が経営してゐる仕立て屋以外では購入しないためそのあたりに秘密があるのかもしれない。
- ・ 善い人の武器
  - ・ 鉄の塊のような、荒い大剣を好む。この大剣はすぐに折れたり削れたりするので、数本持つてゐる。

基本の武器も安物ですぐに壊れるようなものばかり。

- ・大剣を好むが長剣、刀、槍などもあれば使う。敵から奪うこともあるし地面に落ちてるものを拾つておくこともある。  
またよろずやで購入することもある。

- ・巨大な弓、バリスタを持つている。これはちゃんとした筋で作つた優れ物。近接武器以外にも弓も使える。火器は扱わない。
- ・普段は手加減してるので、素手で戦う。サイキックカード明らかに人間でない相手の場合は武器を使う。

## 第七幕 パレード騒乱

パツパカパーン。今日のヒノキ村は大賑わい、隣の村の領主が来ており

そのためにパレードが行われているからだ。

そんな様子を害児は城から見下ろしていた。

「大仰なことです。全くよほど私に当つけたいらしい。」

この領主、害児の商売敵であつた。領主の目的は村と友好を深めることであつたがその実、害児に対して財力を見せつけて威圧することが目的であろう。

そうに違いないと害児は思つた。

「おのれ・・忌々しい輩だ・・。この怒りをどこにぶつけてやればいいのだ。」

害児は指をパチンと鳴らす。それを合図に彼女の部下が駆けつけるのだ。

「お呼びでしょうか？」

「お呼びかどりみではあります。見てください。このとおり騒ぎを！」

部下はパレードの様子を横眼でちらりと見て若干目を細める。

「お陰さまだわたしも楽しませてもらつております。」

「なに？ よくもそんな口がきけたものですねえ…」これは私に対する挑戦ですよ…」

「そういわれましても… ではこの騒ぎを止めますか？」

「ふつ…。それではまるでわたしの器が小さく小者のようではありますか。王者には王者のやり方とこつものがあります。」

「なるほど。さすが首領です。」

害児は部屋の中をぐるぐる回つている。部下は少しつつもかしこもつて害児が何か思いつくのを待つている。

「ほほほ。これはいい考えだ。」

部下はその声に顔をあげた。

「何か思いつきましたか？」

「ええ。あいつに大恥かかせてやります。一度とこんなでかい顔ができないようにねえ！」

「はい。」

「ふふふ…。もうひとつよし。後は私一人でなんどでもなります。」

「ははつ。」

部下が消え害児が残る。害児の名案とは一体・。

「ふふふ・。本来は善い人さんに頼むところだが、ここは彼にも  
華をもたせてあげるか。」

穀潰しは、パレードで出店しているガスの店で穀を潰していた。

「おい。親父。いい防具じゃねえか。」

「へへつ。田那。恐れ入ります。」

ガスはもみてをして客に媚を売っていた。穀潰しはそんなガスのざ  
まに  
へどが出る思いだつた。

穀潰しはくこへこしているガスを尻田に店を出でいった。

「くつ・。どこもかしこもお祭り騒ぎかよ。気に入らねえな。」

「ええ確かに。」

突然穀潰しの横に害児が出現する。穀潰しに気配を感じさせないあ  
たり本当  
に何者なんだわ?と思えてくる。

「うわつ!なんだお前。どこからでてきた。」

「貴方にもチャンスを『えよ』と思こましてね。」

「チャンスだと?何を言つてやがる。」

「私の計画はこの馬鹿騒ぎを終わらせることです。それは貴方も同感でしょ?」

「はあ? いにからあつちにけよ。知り合いだと思われちまうぜ。」

穀潰しはしつしと手を振るが、害児は車椅子をひととひと巧みに動かし難なくついてくる。

「本来なら善い人さんの役割ですが、貴方もたまにはうだつをあげたいでしょ? この名誉の役割をあなたにやってもらおうというのです。」

「なんだと、てめえ。まるで俺がいつもだつが上がらないみたいのこといいやがつて。」

「これは失言。」

「おせえよ。いちいち面当でしゃがつて。今度は何のよつだ?」

「つまりここに来ている隣町の領主をフルボッコにして追い払おう」と、

「こうこうわけなのですよ。」

「足だけじゃなくて頭まで腐りやがったか？」

「そういう貴方も、頭が腐り氣味のようで・・・。」

「なに？」

「いやいや、失敬失敬。それでどうします?」こんな僥倖貴方には一度と訪れないと思うのですが・・・。」

「失せろ。」

「残念です。いやはや・・・私としては貴方に個人的期待を・・・。」

「失せるといつている。」

「ふう。つれませんね。分かりました。これ以上貴方に嫌われないためにもここは退きましょうか。」

「・・・。」

「ふん。まあいい。駒はまだあるのだからな・・・。」

害児は小声で一人ごとをいいその場から去っていった。

「あの野郎。またとんでもないことを思いつきやがって・・・。これは大変だぜ。善い人に知らせないと。」

その頃善い人は、幼稚園で世話をしている子どもたちと一緒にパレードを

楽しんでいた。

「私はこんな騒ぎ初めてだよ。みんな今日は大いにはしゃ『』べ。」  
そして一番はしゃいでるのは勿論善い人で、子供の世話など全くしていなかつた。

「そうだ。タンクさんにも教えてあげよう。きっとあの入、今日も『みあさりしてんだらうし。』

そのとき遠くから、害児の声が聞こえてきた。

「大変です！ 善い人さん！」

「あ。害児さん。』んにちは。」

「善い入さん。実は今日來てる領主のことなんですがねえ・・。あいつは悪党でして。」

突然害児はとんでもないことを言い出した。

「でもこんな楽しいことをするんだから善い人だよ。」

「いやとにかくがそつでもないんですよ。やつは領主とは言つもの悪名高い商人でしてね。罪もない町の人から金をむしるといつてやがるのです。」

はつきり言つて害児も人のことは言えないが善い人はそれを聞くと、怒り狂つた。

「なんて悪人だ！許しておけない！」

「やうでしょ。やうでしょ。そういう悪人は断固制裁を加えるべきなのです。」

「じゃあ早く…案内…」

「いらっしゃですよ。善い人さん！」

領主はこの村の村長と話しあつて居たが、害児達の乱入によりそれどころではなくなつていた。

「なんですかね？」の子供は。

「は、はあ…。この子供は自分のことを善い人といつてまして…。

害児さんのところにいる子供なのです。で、ですよね？害児さん。

善い人は突然領主に殴りかかるうとしたところを護衛にさえぎられ、憐れな護衛達はみんな吹き飛んでしまい、その下敷きになつていた領主は

やつとの思いで這い出てきて村長に苦情を言つていた。

そしてその矛先は当然害児にも向いた。

「害児さん。貴方のところで面倒見ている子どもならちゃんと管理したら

どうなのです？

まさかわざと私にけしかけたのではありますまいな？」

善い人に大分加減されたのか、はたまた元から体が丈夫なのか、おそらく両方だろうが領主はすぐに立ち上がり、善い人から距離をとり害児をにらみつけた。

ただし、領主は何ともなさそうだが護衛はすべて伸びている。

「いやはやお見苦しいことをお見せしました。この子は少し病気でしてね・・・」

「それを管理するのが貴方の役割でしょうか？」

「ま、まあもつとの辺で・・・」

村長が慌てて仲裁に入る。しかし領主は今回ばかりではなく害児とはたびたび衝突しているので我慢がならなかつた。

「貴方は黙つていていただきたい。これは私と害児さんの問題です。」

「ほほう。この私を挑発する・・・。そういうふうでいいんですね？」

「何を言つか！無礼ではないか！」

善い人にぶちのめされ転がつていた護衛は、その主人の声に田を覚まし警戒態勢をとる。

「無礼・・・？下民がなにをほざく。貴様こそサッサと引き上げたら

「どうなのです？」

「なんたる雑言…」

害児はここで善い人にでかい声で耳打ちした。

「善い人さん。奴の見苦しい顔を見てください。あの顔はどう見ても悪人面です。そうは思いませんか？」

それを聞き善い人は賛同する。

「害児さん。実は私もそう考えていたところなんだよ。」

「悪人はやつつけるべきです。それでこそ善い人・・・そうではないですか？」

「その通りだよ。害児さん。よーし。」

「な、なにがよーしだ。やい！害児！ひそひそ話してゐつもりだろうがこちらには丸きこえだぞ！」

私に何か恨みでもあるのか！」

「うるさい！死ねー！」

害児のその声を合図に善い人は領主をぶちのそつとするが、突然現れた穀瀆しにさえぎられる。

「お人よしもそれまでにするんだな。善い人。」

「穀潰しか。」

「おや？ 穀潰しさん。今頃来られても貴方に用はないですよ。隣にいる方はどなたですか？」

どうやら穀潰しの隣にもう一人害児には見覚えのない人物がいる。いや実際には一度会つているはずなのだが・・・。

「ああどなたか存じませんが助かつた！ 貴方は救世主です！」

村長は大感激し涙を流した。領主は突然の援軍に意氣を取り戻し声を励ました。

「やあ。よくやりました。それ！ 早くその不埒な者どもをこの場からたきだすのです！」

「ああん？ 何言つてんだ。おっさん。てめえの指図はつけねえよ。」

「な、なんだつて。」

領主はあまりの穀潰しの無礼な態度に顔が青くなつた。

穀潰しはその声を無視して書い人に話しかけた。

「おい。善い人。こいつは今やつてるパレードの主催者だぜ。悪徳商人かもしれないがそこは評価してやつてもいいんじゃねえか？」

「な、なんですか？ 穀潰しさん。裏切るつもりですか？」

裏切るも何も最初から味方ではない。

「害児さん。もう穀潰しはダメだよ。」

「善い人は悲しそうに頭を振る。もうダメだよ・・つまりは穀潰しも  
ぶつ飛  
ばそうといつ意味だ。」

「善い人さん。穀潰しさんは仲間です。彼は操られてるだけなんで  
す。」

害児は、穀潰しの実力を買つていたため必要以上に刺激したくなが  
つた。

「相変わらず茶番な好きな連中だな。」

今まで沈黙を守っていた男、アキラがそこで割つて入った。

害児は、その時になつてようやく思い出した。

そういうえば、あの時善い人さんにのされた情けないサイキックカーが  
いた・・と

。

「確か・・アキラさんとかいつ二流サイキックカーでしたか?」

「俺を挑発しようとしているのだろうか。残念だな。無意味だ。」

アキラは眉一つ動かさず間髪いれず対応する。

「アキラさんかーよくきた。まあアキラさんーわざとあいつらを追

い払つてくださいー。」

領主がアキラの援軍に完全に蘇生したよつだ。

「申し訳ありませんが、それは無理です。真に申し訳ないのですが  
・・それよりも貴方は一度退いてください。この場は俺が何とかし  
ますから。」

「な、なに? しかし・・・。」

「おい。おっせん。早くいけよ。それともまだ殴られたいのか?」

「わ、分かりました。者ども一歩き上げるぞー。」

それを見て害児は満足だった。

「所詮は小物でしたね。王者たるこの私にかかればこんなものです。」

「く・・。覚えてるよ・・。害児め。」

領主はほつほつのいで逃げだした。

「で・・害児さんとやう。何だつてこんな愚拳にでたのかお聞かせ  
いた  
だこつか。」

「愚拳?」

「彼は村同士の友好目的でやってきたのだ。それを追い払つた理由は

なんだ？」

「魂胆が見え透いているのだよ。奴はただのいやみだ。」

「それは貴方の妄想にすぎない。」

「だつたらどうするといつのです？ 貴方が私をどうにかするとでも？」

そこに穀潰しが割り込んできた。

「おい。話の途中なんだが・・・。善い人のやつがないぞ。」

害児はその言葉を聞くとだからどうしたという顔をした。

「それがなにか？」

「おいおい・・・。いやいいならいいんだけどよ・・・。何か冷めちまつたな。俺はもう行くぜ。」

後は勝手に一人でやつてくれ。サイコテレポート！」

穀潰しはいざこくと去つていった。

「冷たい奴だな。」

アキラはそれを見て不服そうだった。果たして俺一人で大丈夫なのか？

と心配になつたが、ここで弱みを見せるわけにはいかない。

「それで、私をどうするのです？」

「どうあるとこつより・・真意を聞きたいといつていのだ。」

「それはさつも言つた通りですよ。」

「ふん。益々に心底を見せないか・・。よからひ。俺は義務を果たした。」

アキラは害児に背を向ける。かつてこことを言つてゐるがよつはここから逃げ出したいだけだ。

「逃げるのですか？かかるくればいいでしょひ？」

害児はしきりと挑発する。アキラはうんざりだつたが彼の性格上無視もできない。仕方なく振り返つて害児に対応する。

「挑発は無意味といったはずだが？」

「わざわざやる気がなくても私にはあるとこつたら？」

「・・・。」

アキラはテレビポートをし害児の背後をとる。

「お分かりいただけたか？」

「全く分かりませんね。」

害児の背後をとつたはずのアキラの背後になぜか害児はいた。

どちらやら残像だつたらしい。審児の強さは底がしれない。

(おかしい。。。今やつきまで俺の前にいたのに?)

サイキックカーでもないのに・・とアキラは考え込んだ。

サイキックカーの弱点はやはり自らの超能力に過信して、肉体の元々持つている  
技を軽視するところだらう。

「1Jの程度か・・。穀潰しこんにすら効く。」

「なに?」

アキラは振り向ひつとするが、背中に何かが強く当たる。察するにナ  
イフか何かだらう。

「1Jから見ないでもらえますか。見てもいいがその瞬間貴方は死  
ぬことになる。」

「ぐ・・。」

「しかし・・べべつ。サイキックカーもピンキリといふことですか。」

「俺が奴に劣るだと?」

「それは貴方自身が最もよく分かつてゐることではないですか?」

アキラは胸に手を当てて考えてみたが自分が穀潰しに劣つてゐるとは

全く考えられなかつた。

それはそうだ。害児はただ嫌味が言いたいだけだ。害児こそ嫌味博士なんじやないかとすら思えてくるが、別にそういうわけではない。

「馬鹿を言え。」

「貴方は力といつもの履き違えているようですね。」

「お前と問答したいとは思わないが、力は手段だ。それ自身に目的があるわけじゃない。」

その言葉に害児は激昂し持つてゐるナイフで背中をぐいと押す。

「言葉遣いに気をつけることだな。それとも今の自分の立場すら分からぬほど愚かなのか？」

「付き合いくれん。何がしたい？」

「別に・・ただ貴方が役に立つかどうか知りたかっただけですよ。そして知りました。貴方は無能で役立たずです。」

「そつかい。お前の評価など俺にとつてはどうでもいいがな。」

「威勢だけはいいようだが、それは時に死ぬことに繋がる・・。」

害児はアキラを解放する。

アキラは慌てて審査から距離をとり対面する。

「私が相手でよかったですですね。」

「「こんな」とくらいで殺されてたまるか。」

「「こんな」とだらうがどんなことだらうが、死ぬ時は死にます。」

「チッ。狂人めが。」

捨て台詞を残し去っていくアキラ。

「さて・・・目的は果たせました。全くあの領主はいい様でしたね。  
これで一度と私は権限こつなどと思わないでしょ。」

## 第八幕 狂人どもの宴

その頃善い人は、領主が心配なので付き添いをしていた。

自分でぶちのめしておきながら、意味不明な行動だが、善い人なりに何か思うところがあつたらしい。

そして領主は、善い人の全く敵意のない態度に安心し、この際善い人をこちらの陣営に引き込もうと考えた。

「善い人さん。貴方はあの人騙されています。世の中にあいつほど嫌な奴はないのです。」

ある意味そうだが、この領主もあくびたばくびつこいつだ。

「害児さんは善い人だよ。」

「そう思いたい気持ちも分かりますが・・・」

領主は善い人にボコボコにされたのにもうすでに善い人と和みムードになつていて。

善い人を利用しようという目的も忘れかけ、ほとんど本音で話していた。

領主も根は善い人間なのかもしれない。

「悪いことは言わない。私と一緒に来なさい。あんな人のところにいたら貴方も悪事の片棒を担がされるに違いない。」

「でも害児さんは貴方が悪い人だといってたよ。」

「私が悪い人というのなら商売をする人間はすべて悪い人ということになります。

それは明らかに言いがかりといつものです。」

「じゃあ貴方は悪い人？」

「善い人とまではいかないでしようが。。。普通の人だと思しますよ。」

シュン！変な音がしたので、一人は立ち止る。その一人の前にアキラが現れた。

おそらくテレポートしたのだろう。

「領主様。ただ今戻りました。げつ！白服！」

アキラは、ようやく帰つてこれたのにまた善い人なんかに遭遇して散々な一日だ。

「待ちなさい。アキラ。この方は騙されていただけなのです。」

「お言葉ですが、この白服は騙されなどといつかわいらしきものではありません。

領主さまこそこいつに騙されると後でどうらい世に会います。」

「確かにいる人は前悪いことをしてた人だ。」

「俺は仕事をしてただけだ。それなのにお前が一方的に俺を悪人を決めつけて襲ってきたんだろうが。」

「うるさいな。悪いことをしていたことに変わりないじゃないか。」

「！」の偽善者め。

「やめなさい。アキラ。」

「しかし……。」

「善い人さん。ここまで結構です。後はこのアキラが護衛をしてくれますから。」

「分かったよ。」

「ところで……考えなおしてもらえませんかね？私は奴に面子を潰された。もちろんこのままでは済まされなくなる。そうなると必然的に害児の側にいる貴方にも被害を受けることがあります。」

私は貴方と敵対したくはないのです。  
どうです？私と一緒に来ませんか？

「領主様。もういません。」

「あつやへビ！」に消えた？

「すゞい勢いで走っていました。」

「ふーむ・・・」

「やつには人間の言葉など理解できませんよ。言つだけ無駄です。」

「とはいへ、あの方が害児についている以上は・・・」

「確かに・・・頭が痛い」というではありますか。どうしましょうか?」

「アキラの組織の方を倒せる人はいないのですか?」

「いや・・・いふことはこるのですが・・・」

「お金ならこくらりでも出しますよ。」

「実はやつにはほどどんぞ超能力がきかんのです。どういつ原理かは分かりませんが。となるとテンマ様以外に奴に対抗できるサイキックカーはいかとかと・・・」

「ああ・・・そういえばテンマが変わったそうですね。確か先代と同じトキトでしたか?」

「ええ。先代の娘です。」

「なるほど。確かに組織の長を借り出すとなるとそれなりの代償が必要ところ」とか・・・」

「といつよつ少し変わったお方でした。」

「ぐじごぢ。アキラ。私はどうあっても害児のやつの泣き顔を見なければおさまらないのだ。」

それに「いつも馬鹿にされたままでは商売にも差し支えが出る。」

「とにかく私が『言ふ』ことはただやめておいたほうがいいと以外いえないのです。」

「どうもこつものアキラらしくない。どうしたのか？」

「い、いえ・・・」

領主がアキラの顔を見てみると、アキラの顔から冷や汗がにじみ出していた。

「な、なんだ。どうしたところなのだ？」

領主はアキラの尋常ではない様子に肝を冷やした。

シコウン・・・。空間が裂け一人の少女がとびだしてきた。

「わははは。どうやら私の話をしているようだな！人気者はつらいものだなー！」

やたらとテンションが高かつた。領主は人形みたいな少女を見て今までの陰気な気分が吹き飛んだ。

「アキラ。まさかこのかわいらしきお嬢さんが？」

「は、はい。テントマ・トキト様です。」

「たわけ！」

「ひいー。」

いきなりテンマに怒られるアキラ。

「フーフーちゃん」と呼ばんか!」「

「は、ははっ!ふ、フーフー様・・・。」

「フーフーちゃんだ!フーフーちゃん!」

アキラが困っている様子を見て領主が助け船を出した。

「ほほほほ。いやはや元氣でよろしご。明るくていいリーダーではないか。今度のリーダーは。」

領主はフーフーの頭をポンポンと叩く。その様子を見てアキラは慌てふためいた。

「あわわわ・・。」

「しかし、アキラよ。その様子ではまるでトキトがお前が主のようではないか。」

確かサイキック組織のネーム達の間に上下関係はなくそれはテンマといえど例外ではないのではないか?」

「いやそれは・・その。」

「なんだあ?貴様は。」

「これは失礼。私は隣の村の領主です。」

「ほほう。そうか。そんなことを知つておるわ！たわけが！」

「は？そ、そうですか。それは光榮でありますガ・・。」

「あぐぢこ商売で領民を苦しめておるな。元は山賊上がりであります？」

「な、なぜそれを知つている？誰も知るものはないはずなのに・・。」

「

「よーし。分かつた。」

「な、なにがだ？」

「貴様！山賊に戻れい！そつちのほうが似合つているぞ！わつはつはは。」

「は、はあ？いきなり何を言われるか。」

「そうだな。お前の望みかなえてやう。つまり私はお前の面子を立てやる。その代り金が私が全ていただく。」

テンマそう言い残すと円盤のような機械に乗り、ヒノキ村のほうに向かっていった。

「いい加減にせんか！アキラ！なんなのだ！あの小娘は！」

「後で・・・説明いたします。俺も軽率でした・・・ともあれ今は  
宮殿に・・・」

アキラは精根尽きた顔でがっくりと肩を落とし歩き始めた。

「お、おい。待たんか。」

そして宮殿に赴き領主はアキラから一通りの話を聞いた。

「な、なにー！つまりあの小娘は、世界にいる全ての人間を透視でき  
てしかも何を考えている今まで分かるだと？」

「ひらいたくいえばそうなのです・・。またあらゆるアンチサイキッ  
ク装  
備がきかないくらいけた外れのパワーを持つております。」

「神・・そのものではないか。」

「俺もそう思います。」

「一体どうしてそんなものが・・・」

「それは俺も詳しく知りませんし知っていたとしても言えないの  
ですが・・・」

「なぜだ！・・・そつか。監視されているからか。」

「たまたま俺達の会話に意識が向いていたのでしょうか。の方は  
面白いことが好きなので。」

「面白いとはなんだ？」

「人々に鬭争を促す・・・。の方は戦いこそが娯楽なのです。己に対しても他人に対しても戦いを強要するのです。」

「なんてことだ・・・。ヒノキ村は・・害鬼はどうなる?」

「そのほうはあまり心配ないでしよう。彼らの潜在能力はすさまじいものがある。

今殺すようなもつたいいことはしませんし、ヒノキ村に住む一般人達はそもそも眼中にないでしょう。それより今心配なのは、貴方様です。」

「私が？なぜ私が？」

「いいですか。テンマ様は必ず貴方様から金を取ります。一問残らず。つまり貴方は元の山賊・・・ということになるのです。」

「な、なんだと？俺は山賊じゃねえ！」

「といわれましても、どうあつてもそうなるのです。テンマ様がそうしたいと思われるのならそうなってしまうのです。無理やりにでも・・・。その点貴方にも見所があると思われたのかもしれません。」

「じょ、冗談じゃねえやー元はと言えばめえがいけねえんだ。なんとかしゃがれ！」

領主はすでに言葉遣いが山賊であつたが、そんなことを気にしている余裕がないくらいのショックを受けていた。

「なんとか…できると思いませんか?」の俺が。テンマ様相手にっ。」

「ぐ・・。」

「もう諦めてください。」

「俺は山賊じゃねえ!絶対山賊なんかやうねえぞ!俺の金も地位

もだれにも渡すものか!」

あれは俺のもんだ!」

その時、アキラは空中に漂つていてる紙を発見した。

「なんだこれは…ああっ!」

「どうした?」

「これを見てください!」

「なんだ?」

それはテンマからのメッセージであつた。

前払いだ!頂いていくぞ!…わっほは。よかつたなあ!…これでお前は  
今以上に生を満喫できるだお!…

「なんだこれは?性質が悪いいたずらだ!」

ガチャ。扉が開き警備兵が領主を取り押せん。

「なんだ？お前達！血迷つたか！」

「貴様が山賊だということは調べがついている。命だけは取らん。  
どこの  
にでも好きなところに行けい！」

ドカッ！警備兵に蹴られ村の外に追い出される領主。領主はあっけに取られポカーンを空中を見ている。

アキラはその様子にいたたまれなくなつたが、仕方がないと諦めてその場を去つていった。

「く・・。テンマ・テキト・・。忘れんぞ。俺をこんな目にあわせた奴にいつか必ず復讐してやる・・。」

アキラはその様子を遠めに見て思つた。

（またテンマ様の目論見が的中したか・・。はたして領主にとつていやもう元領主か。元領主にとつて何が一番ベストな人生と言えるのだろうな・・。）

それは誰にも分からぬが、少なくともテンマに関わる人間は一つの在り方を強要される。

○ 善い人はどうなのだろう？仮に善い人とテンマが正面衝突したら・・。

しかしアキラは考えるのをやめた。考えたところでアキラは自分に課せられた仕事をこなすしかアキラには道はなかつたからだ。



## 第九幕外伝 世界の敵（前書き）

投稿されなかつたようなので念のためもう一度。

## 第九幕外伝 世界の敵

「ちつ・・。またかよ。」

ここはあるサイキック施設。才能ある子供を集め訓練させている施設である。

この施設では定期的に、念力の出力検査をすることになつてゐる。

「次。ナンバー6」

「だりい・・。」

出力を検査されたが、機械はゼロを表示している。

「なに? ゼロだと? 何かの間違いではないか?」

試験官は、ナンバー6の顔と機械を交互に見る。

「何度測つてもゼロだな・・。」

「おい。もういいだろ? ぐだらねえな。ゼロだからなんだつていうんだ。」

「ゼロだとしたら、お前をここに置いておく理由がないんでな。」

「冗談よせよ。いたくてここにいるわけじゃないぜ?」

「ふんつ。貴様にサイキックネームを『えてやれ!』。貴様はサイキ

ツカ  
一ゼロだ。

今後ネーム入りを果たすまでそつ名乗るんだな。

まあ・・・貴様のような無能者がネーム入りできるとは思わないが  
な。」

「馬鹿もここまで来るとあきれるぜ。で、カスみてえなくだらない話  
はそれだけか?」

「なんだと?」

「くつすじむなよ。それともお前に俺に手を出す勇気があるのか?」

「貴様!言わせておけば!」

「やめとけよ。勝負にならねえぜ。」

ナンバー6の目がギラリと光る。

「ぐ・・。」

妙な威圧感に当たり、何も言えなくなる試験官。

「・・・懸命だな。まっせいぜい長生きするといいぜ。負け犬人生  
だろうがな。」

この話は一瞬で広まり、この日から彼はゼロと呼ばれるようにな  
った。

通常ネーム入りを果たしていないナンバーズは数字で呼ばれるが、

それ

だけでは判別つきにくいのであだ名をつけることもよくある。

特に彼の場合は、インパクトが強かつた。

みんなが馬鹿にする仲、一人だけそれは違うといっていた人物がいた。

それがナンバー101であった。この施設の中では若いほうであった。

そして、能力は平均より多少下程度だが、間違いなくこの施設で最も努力をしている人物であった。

身長が小さく、小動物のような容姿と、頭に大きなリボンが付いており

本人もかわいいもの好きだが、その本質は狂気の人間であった。

世界が終わった日はどうして起こったのか。

それはこの一人の少女が大きく関係していた。

ナンバー79、彼女は101の友人でセリルという名前であるが彼女は、ネ

ーム入りできるだけの実力が十分あったが、ネーム入りを断つているとい

う珍しい人物であった。

彼女は例外的に、あだ名ではなくセリルというネームを認められて  
いる。

だが、セリルというのはサイキック名ではないことはいうまでもな

い。

通常ネームは、過去の英雄的サイキッカーの名前から取っている。

ゼロは、何度も試験をさせられそのたびにゼロの数字を叩き出して  
おり、  
ゼロといつあだ名は定着しつつあった。

「ゼロはどうしても機械が反応しないんだろうね？  
未知の要素もあるかな？」

「はつはつは。決まっておるわ。」

「え？ フラワーちゃんは分かるの？」

「何を言つか。たわけめ。」

フラワーといつのは、101が本人が勝手に名乗ってるだけの名前  
で認知もさ  
れていまい、セリルだけが呼んでくれるだけのあだ名である。

あだ名といつても勝手に名乗れるものではなく、フラワーもまた施  
設の中

では例外的人物で、唯我独尊の人物である。

「さすが、フラワーちゃんね。頭がいいわ。」

皮肉ではない。

他の人間はフラワーを狂人とか馬鹿者扱いだが、セリルだけはフラ

ワード

ことを天才だと思っている。

そしてその洞察はきっとおおむね正しい。

だが本当の天才はセリルのほうであった。何しろほどんど努力もせず  
ネーム入りできるほどのサイキックの才能があった。

そしてフラワーは、おそらく全サイキックカーの中でいちばん努力し  
血の  
にじむような特訓を繰り返しているが、能力は並であった。

「やつの力が大きすぎて機械が反応しないといふことだけの話よ。」

フラワーはあいつと答える。

「え？ でもそれは変だよ。だってあの機械は、初代トキトの念力のデーターを元に作られてるんだから、それで反応しないってのはどう考  
えてもおかしいよ。  
彼にそれほどの念力があるとも思えないし。」

「はは・・はははは。面白いことを言つなあー。ならゼロがトキト  
の念力を超えているほうが考えるのが道理に合つて居るではないか。  
」

「それはそうだねえ・・。でもなあ。」

「時間だ。」

「あつそうだね。じゃあ再開しようか。」

彼女たちは合同訓練している途中であった。

一人で訓練していると、話しかけてくる人物がいた。

「セリルよ。そんな落ちこぼれなんかと組んでどうする。能力の無駄だ。」

セリルはその言葉を聞いて怒った。

「なによ。私がだれと組もうが・・・。」

だがフラーがその会話に割って入る。

「無粋な輩め。わきまえろ。セリルは今私と楽しく訓練をしているのだ。

たわけ。分かつたら失せる。」

「な、なに？貴様下手にでていればつけあがりやがつて！雑魚の分際で俺様に楯突こうとこうのか！」

だが無視である。

「き、貴様！無視するな！こいつを向け！」

無視して訓練を再開している。セリルは何か言いたそうだったが、フラーはその男にもう何の興味関心もないようだ。

雑音にすら思わないだろ？

「ちひ。肩が。。」

そのうち男は去つて行つた。

「はああ・・・。なんでだらうね。サイキックカーつても・・・。時々  
いふ  
よね。ああいう人。」

「なんだ？」

「ほり。さつき私たちに難癖付けたきた人だよ。」

「まう。」

「忘れちやつたの？のんきだなあ・・・。」

フラーは興味のないことばとことん忘れてしまつのである。

「ねえ。フラーちゃんは今、楽しい？こんな施設について・・・。」

その言葉にフラーは驚いた。

「当り前であらわ。だからいいいるのだ。」

一体何を馬鹿なことを言つたといわんばかりであった。

そしてそれは楽しくなければすぐに出でこくとこつ意思の表示でも  
あつたが、

セリルは実力は十分でも、精神的にはフラワーと比べてまるで大人と子供だった。

とはいって、フラワーのそれは狂氣といっていいので、大人としての良識など無きに等しいが。

「そうだよね・・・。でも私はなんだかな。合わないのかもしないな。もしフラワーちゃんがいなかつたら私はもつこじをでていってたかもしれない。」

勝手にしたらいいとフラワーは思つたが、黙つていた。

「ねえ。一人で一緒にここを出ない?」

とんでもない話だった。フラワーが自分の能力を開発するのにこれ以上の場所は思いつかない。

ただセリルはフラワーの友人だった。それだけはおそらく確かにことだつたのだろう。

「でてどりじょうといつのだ。」

「うーん・・・。それはまだ考えてないけど、もっと自由に好きなことを見つけてさ。」

「それが望みか。」

「そうだね・・・。フラワーちゃんはなんかそういうのないの?」

「私が。私はただ・・駆け抜けるだけのことだ。」

「駆け抜ける?なにを?」

フラワーは澄んだ目でセリルを見つめる。

「生をだ。」

「生・・・。」

そんなことがあった数日後、フラワーは養父のトキトに呼び出されていた。

トキトは同時にテンマでもある。なにがいいたいのかといつと、トキトとは

彼のネームであつ、テンマとはサイキッカーを束ねるものという意味だ。

「何か用でもあるのか?親父殿。」

「きたか101。考えてみたが、お前は型にはまつたことを翻つよ  
りも新

しく創造できる能力のまつがついている。」

「まつ。」

「わしの短剣をお前をやろう。これはサイコウエポンといつサイキック増幅装置だ。

これを扱うには一種特殊な才能が必要で、万人に一人の資質と粘り強い根気が必要とされる。

お前にはそれがある。」

ガチャ。トキトは机の上に短剣を置く。フラワーはそれを手に取り眺めている。

「なかなか面白うな代物だな。」

「資質の薄いお前が、他のサイキッカーと渡り合える唯一の手段といつていいだろう。・・・これ以上わしを失望させるなよ。」

何かついでのような言葉にフラワーは違和感を感じ、意地悪っぽく笑った。

「親父殿は私にこの短剣でさしてほしいと見えるな。」

「な、なに？」

「はははは。では失礼する。」

そういうて、部屋から出ていくフラワー。部屋の外ではフラワーの

不気味な

笑い声が聞こえた。

「恐ろしい子供じゃ・・・。」

あれは人間というよりは、悪魔に近い。

他の者は評価していないがあれをもし野放しにしていたら、この組織は滅んでいただろう。

だから無理を言ってわしが引き取つたのだ。他のものは道楽としかみてくれなかつたが・・・。

「あの子がわしを殺す日か・・・。」

その日から、フラーは自室に閉じこもり短剣の研究ばかりしていった。

サイキック增幅装置にも種類があることが分かり、さらに上位のものがほしくなってきた。

そしてそのチャンスはすぐにやってきた。

「これは偉大なサイキックカーグレンが使っていたアームだ。グレンはサイキックの資質に恵まれていなかつたが様々なサイキックツールを開発し、後世に貢献した。

今様々な機械や施設はすべてグレンの賜物といつてもいい。」

アームは、腕につけるもので小型の大砲のような形状で、その先に何か

者をつかむようなロボットの手みたいなものが付いている。

「……に飾つてあるアームはなぜ使われていない?」

「それは、扱える者がいないからだ。元々サイキック增幅装置は扱うのに特殊な創造的才能が必要とされるからな。」

「はつはつは。たわけ。武器を飾つてどうなる。なら私がもじおつ。

」

フラーの突然の暴挙に沸き立つ、生徒たちと講師。

「な、なにをするー誰か1-0-1を取り押さえろー!」

「カス以下の分際でグレン様の武器に触れると悪いな!」

サイキックカーは念動波を放つ。勿論本気。田頃あまりよく思わないフラーを

この際殺す勢いだ。それを短剣で軽々切り裂くフラー。

「な、なに? サイキック増幅装置?」

講師は驚き、フラーに攻撃を仕掛けたサイキックカーは両腕を斬られる。

「ぐわあ……。」

「ひい！」

フラワーは辺りにいる連中をめちゃくちゃに斬りまくった後アームを強奪して、その後行方不明となつた。

普通なら処分ものがいつものようにおどがめなし。それはなぜか。別に彼女の養父、トキトが圧力をかけているからではない、彼女には底知れぬ  
なにか存在自体を食われるようなそういう威圧感、それをひしひし  
と感じ  
させんからだ。

今はサイキックカーのなかでも中の上といったところだが、彼女が力を手に  
したら果たしてどうなるのだろうか。

そして、その後ある日のある夜、フラワーはトキトの部屋を訪ねる。  
トントン。

「私だ。」

「101か？ 行方不明と聞いたが。」

とはいえてキートはそろそろ現れるだらうなとは感じていた。

ガチャ。扉が開きフラワーが姿を現す。

「親父殿。私はこれが使いたい。」「ゴテッ。

塊が机の上に置かれる。

「派手にやったそりだな。少しは増幅装置を扱えるようになつたか?」

「親父殿。」れを使う方法を教えよ。」

トキトは不可能だと思つた。そしてそのまま率直にフリワーにそれを伝えた。

「・・・無理だ。いくらなんでも、だが・・腕と直接つなげればあ  
るい  
はお前の粘り強さなりばなんとか制御できるかもしけんが、それで  
も万  
が一だな。」

スパン・・。トキトは一瞬何が起つたのかわからなかつた、左腕を  
なく  
したフリワーがそこにいた。

「「」の後は?」

平然と答えるフリワー。フリワーを知つ頃へしてゐるトキトほひの程  
度日常  
茶飯事だった。

「・・・止血しつつアームを制御するのだ。止血のまゝ手伝つて  
やひや。」

そうしてフリワーはなんとかアームを腕にくつつけられた。今までになつた。

グレンが未来を切り開いた有名なサイキックウェポン「アーム」。

フリワーはその武器で何を切り開くのか。

「どうだ？ 魂が引かれるような感覚がするだらうが。そんなものつけてままだと身が持たんぞ。」

「心地よいな。」

「心地よい？」

「親父殿。私はもつと増幅器の研究をしたい。専門の施設に送るがよい。」

トキトは不思議とも思わず、フリワーを他の施設に送った。

薄々感づいていたのかもしれない。彼女に自分を解放するものだと。

そして2ヶ月後。

「親父殿はレンズを持っているそうだな。それを頂戴したい。」

「どうから聞いた？ いやそんなことよつ手に入れてどうする？」

「どうするとはなんぞ。」

「・・・最近はサイキックアーマーにも手を出していくやうだな。お前にももつ立派なウエポンがあるだらうが。

過去」一つ以上の增幅装置を身につけたものはない。」

「親父殿は身につけていたではないか。」

「・・・レンズは他の装置とは勝手が違うのだ。聞くが、お前はすでに十分は強さを得ている。

訓練を重ねれば時期にチーム入りも果たせるだらう。

それ以上何を望むのだ？」

「まつはまつは。面白ことをいつものだな。高みへ行くのに何か理由が必要であるか？」

「・・・わしもサイキックカーだ。力への信望はある。だがな。お前のやつ方は急すぎる。

第一このレンズは適正者以外であると身につけるだけでショック死する代物だぞ。残念だがお前は適正者ではない。

お前は、テンマを受け継げる人間ではない。受け継げるとしたらううだな・・・」

「ゼロか？」

「氣づいていたか。」

「それがどうした？私の行く道は私が決める。老害さんべし。」

カチッ。アームのスイッチを入れる。グワワワワ・・。

「グラビティ・フラワー・」

アームから重力の場を発生させる。

「ぐ・・。」

すさまじい念力の圧縮にさすがのトキトも表情をゆがめる。

「どうしたあー？？やつてみよー。」

鬭争を呼び起しせと伝えるフラワー。しかしトキトに戦う意思はない。

「む、娘とは戦えん！」

「脆弱だなあー！戦えぬ兵士に用はない。」

グサツ・・。トキトの体にアームをさす。トキトはフラワーに笑いかける。

「ブハツ・・。」、これで解放される。ありがとう。」

「ヒート・フラワー！」 ジュウツ！

アームから念力で圧縮された熱が放出し、トキトの体は蒸発する。

「親父殿の力はもういっけん。が、親父殿の精神はいらんよ。」

後にはレンズのみが残り、フラーはそれを拾つた。父親を殺したことに対する感傷などはもちろんない。

「これがレンズか。親父殿は右目につけていたようだな。」カチッ。

「ふふっ・・・。心地よいな。」

右目が溶けていく・・。さらに体中の神経がずたずたにされる。

レンズの許容量にフラーの許容力が耐えきれない。

魂だと蒸発するような感覚だがフラーはそれを心地よいと感じているようだ。

「馴染むな。まるで昔から自分の体の一部のようだ。」

父親を殺したときでさえ何も思わなかつたフラーだがこのときは珍しく感傷的なことをいつ。それだけこの瞬間はつれしかつたのだらう。

「ほう・・。レンズは勝手は違つといつが、親父殿はレンズの力を解放してなかつたようだな。  
無駄なことよ。

使わぬ武器に何の意味があるうか。サイキックカーとて同じ」と。  
この私が世界を乱世に導いてくれようが。  
・・はつはつは。はつはつはつは。」

笑い声がこだます。その彼女はトキトを受け継ぎ、サイキック機関のリーダーテンマとなる。

親殺しという恩知らずな所業だが、ネーム持ちの誰もフラワーの手  
ンマ

就任に異論を唱えなかつた。

彼らはわかつっていたのだ。彼女こそが自分たちを導くものだと。

フラワーは、サイキックカーの歴史が始まつて以来初めて三つの增幅装置を扱うこととなつた。

ウェポン、アーマー、ブースト。そしてそれら全てが最高ランクの  
代物  
であつた。

ブーストであるレンズは適正者でないため形状を維持できず後に改  
造、  
そのときに初代トキトが完成させた終焉に導く一筋の光を体現させ  
るこ  
とに成功する。

その光で彼女は世界を終焉に導き、現在に至る。

知る人ぞ知る、本当の世界崩壊の原因を作つた人物である。

## 第十幕 善い人誘拐事件

ある日の夜。月も雲に隠れ絶好の誘拐日和といえそうな日であった。

今日も悪人どもが善人たる善い人に対し攻撃を加えようとしている。

彼らは30人余りで善い人の家を取り囲み、何やら物騒な相談をしていた。

「よし・・・間違いなくこの家だな。」

「しかし、ここまで警備が薄いとはな。かつては魔人とまで言われた人間にしてはうかつなことだ。」

「なんだ?どうせ魔人など大げさに名が広まってにすぎん。やつは所詮その程度の人間だったということだ。」

「だが・・・」

「どうちにしろ俺達は作戦を実行するまで。そうだろう?」

「確かに。」

「よし。合図で催眠ガスの手榴弾をこの家にぶちこぬ。」

「分かった。」

「作戦開始！」

家を囲んでいた悪人はまず、家をぶち壊しその中に手榴弾を投げつけた。

その後ドアをぶち破り、中にいた人物のみぞおちをなぐる。

そして崩れ落ちる。

「よし！身柄確保！」

それを見て悪人の指揮官は歓喜の声をあげた。

「騒がしいなあ。善い人は寝る時間だよ。また朝遊んであげるから朝来てよ。」

そういうて善い人は再び眠りについた。

「・・・。」

崩れ落ちたのは確保対象ではなく、善い人を確保しようとした戦闘要員だった  
らしい。

指揮官が無言で部下のほうを見ると、部下は銃を取り出し、善い人に向って撃つ。

普段なら難なくかわせる善い人も、寝ていてはそうはいかない。

「てこずつたがようやく終わつたな。」

「ああ。この麻酔銃は象をも眠らせる代物だ。さすがの怪物もこれにはじうじょうもないだろ？さ。」

指揮官の言葉に答える補佐官。

悪人どもが善い人を抑えつけようとした瞬間、何かがはじけ吹き飛んでいく悪人達。

「え？」

「つむさいなあ。善い人は寝る時間なんだよ。」

その尋常でない様子に初めて指揮官はひるんだ。

「おい、どうする？」

補佐官に問われ、悩む指揮官。補佐官は、少しづつ後ずさりをして自分だけは逃げれる準備を始めていた。

「退くか・・・いやしかし。」

「しようがないなあ。」

善い人は、むづくりと立ち上がる。

「私に遊んでほしいみたいだね。」

善い人は指揮官たちににやりと笑いかけた。

「へ・・。」

「あ、おこへ。」

ビリビリかじりとこつ表情で指揮官の顔を見る。

「す、すみませんでした!」

突然土下座し始める指揮官。かくなる上は誠意を示すべしかなないと判断したのだ。

「非礼とは承知の上でしたがやむを得ないことだったのです!」

しかしそれを見た補佐官は指揮官が狂ったのかと思った。

「おー、なにいってるんだ?」

「ひるやご。お前も頭を下げる。」

「何か考えがあるようだな。」

指揮官に怒鳴られ補佐官も同じように頭を下げる。ちなみに他の部下たちはみんなのびていた。

「それで・・何して遊ぶの?」

「まつ。じつはわたくしどもは世界を平和に導くつの会の組員でして、

善い人様の力が是非必要だつたのです。そこでやむを得なくこういう形をとりさせていただくことになつてしまい誠に申し訳思ひます。」

「よく分からぬいけどゞうやら貴方達は悪人みたいだね。」

「え？」

「まあいいぞ。このままだと俺たちもぶつ飛ばされる。」

補佐官はもう土下座をやめて立ち上がり、がなりたてる。

指揮官は補佐官のあまりに軽率な行動に腹を立て、叱咤した。

「うるさいー少しほ前も考えろー！」

「悪人は退治しないといけない。」

善い人は、そんな様子など目に入らない様子で少しづつ近づいてくる。

補佐官は恐怖で動けなくなり、もう終わつたつと感じたが、指揮官は諦めなかつた。

「い、いえ！私どもは悪人ではございません。善い人ーそう善い人です！」

「へえ、善い人なんだね。それはよかつた。」

「やつです。」

「でも何か悪そうな人たちだなあ。」

「いやそんな」とはあつません。私たちは善いことをする団体なのです。

一緒に来ていただければよく分かつてもう少しと思します。」

「よく分からぬいけど善いことをするから手伝つてほしこれこと？」

「その通りです。つまましてもお願いがあるのですが・・・。」

「そんなことより善いことに行くなら早くこいつ。ビルの悪人をやつつけねばいいのかな？」

「はい。その前に私たちの組織にはルールがありまして、移動するときは縄でぐる

ぐる撒きにならないといけないといふものなのです。

それで善い人様にグルグル巻きになつてしまひのですが・・・。

悪人達の居場所には私たちの車で移動しますから。」

「面倒だなあ。歩いていったほうが早いよ。」

「やつにわざにお願いします。」

やつこつてまた深々と下下座をする指揮官。なんだか奇跡的に話が

まとまり

そうで補佐官はまつと胸をなでおろした。

「分かつたよ。善い人同士協力し合わないとね。」

「よし。じゃあ早く善い人様を縄で縛るのだ。」

指揮官は補佐官に命令をするが、補佐官はその扱いに不満ありありだ。

「なんで俺が・・・。」

「仕方ないだろ。部下たちはみんなのびてしまつたのだからな。」

「俺の仕事じゃないぞ。お前がやれ。」

「俺は指揮官だ。」

「俺だつて補佐官だぞ。」

「指揮官の補佐をするのが補佐官だろ?」

「なにこいつて。お前がちゃんと任務するかどうか見張る役田だよ。」

「

「いいからやれー。こんなとこへりい役に立て。」

「横暴なやつだ。」このことは報告せんからな。」

「勝手にしろ。」

補佐官は恐る恐る善い人に近づき善い人をグルグル巻きの芋虫にし

た。

「おこ。持つの手伝えよ。」

そういうて補佐官は善い人を持ち上げようと思つた以上に善い人が軽くてびっくした。

「どうした？そのへりこはあるべつ？」

「いや・・・紙みたいに軽くてな。」

「おこおこ。ちゃんと本人入ってるんだうつな。」

「ああ多分。」

「ちやんといるよ。」

「あつ。おられましたか。」

「なつ。じやあさつとこべん。」

「待て。部下たちほどいるわ。」

「ほんな役立たず共のことなんか知らん。」

「そんなこと言つてお前運ぶのが嫌なだけだろー。」

「どうしてひそひそ魔人に気づかれるだろ？ 今回はターゲットの

身柄を確保できただけでよしおした。」

「へつ・・。やむを得ないか。」

その後指揮官たちはひびきが運転するか30分くらいもめてから結

局補佐

官が運転する」となり彼らのアドバイスに向かってトランクを発進させた。

アドバイス

「馬鹿もの。」

ベシッ！ こわなつ回令官に殴られる指揮官。

「な、なにをするんだ！」

「賓客に対して縄グルグル巻きにするとは非礼ではないか…すべ  
解きしろ！」

「へつ了解。（ちつてめえがやれつてこつたんだろ…。）」

補佐官はその様子を見てニヤニヤ笑っていた。

「なにがおかしい。」

「はつ・・。なにをしてこる。早くその方の縄を解かんか！」

「へつ・・。なにをしてこる。早くその方の縄を解かんか！」

指揮官に命令されて善い人の縄を解く部下たち。

「ときましたー。」

「見たらわかる。馬鹿め。」

「は、はい・・・。（俺たちに当たるなよ・・・。）」

「「」が悪人がいるところかな？」

善い人がむづくら立ち上がる。善い人は周りを見渡してみると、これは西洋風の城の中のようだと感じた。

とはいっても害児の城よりははあるかに小さい。あまり悪の雰囲気はしなかつたが、善い人の直感的に何か怪しいと感じていた。

「いやいや」は。。。

「「」から先は私が話をします。お前達は下がつてよし。」

「おい。大丈夫か。いつ見えてこの方は・・・。」

「いいのだ。「」ちらも誠意を持つて話をせねばなるまい。」

「そりか・・・。何かあつたらすぐ呼べよ。」

指揮官と補佐官そして部下たちはぞろぞろと下がつていった。

「申し遅れた。私が」ここの組織の司令官だ。またの名を世界を平和に導く会の会長といつ。」

「善い人だよ。貴方は善い人?」

「無論。今、世界は崩壊し人々は迷っている。今人々に必要なのは、信用できる強い力なのだ。」

「なんだか善いことをしてるのが善い人かな?」

「貴方も同じ心のはずだ。協力してくれるな?」

「悪人がいるのならやつづけるのが善い人だよ。」

「貴方の村のヒノキ村の近くに廃墟街がある。」ここが悪人のごみ溜めのようになつていて。「」ここは掃除しなければならない。やつてくれるか?」

「掃除したらいいの?」

「いや違う。そこにいる悪人どもを追い払うのだ。それか捕獲してここに連れてきてくれ。貴方はともかく悪人をやつづけてくれればいい。後はこつちでやろべ。」

司令官はぬかりない。善い人は馬鹿だという情報は知っているので、本当にゴミ掃除しかねない善い人には正確に情報を伝える。

「じゃあ行つてくるよ。」

「一人では危険だ。部下を連れて行け。」

「邪魔なだけだけど善人の頼みを断るのはよくないね。」

「私は他に用事があるのでこれで失礼する。」

善い人は例の指揮官と補佐官と部下どもを連れて廃墟街へと向かった。

善い人が廃墟街に入る手前にガスと出会った。

「善い人君。後ろにいる連中はなんだい？」

ガスは不審げな顔で指揮官たちを見ていた。

「この人たちは善い人だよ。私はこれから廃墟街にいる悪人達を退治しに行くんだ。」

「善い人君。廃墟街には穀漬しの友人もいるが。」

「そうか！ 穀漬しは悪人だったのか！ そうだと思った。」

（ダメだこりや・・・）

ガスが頭を抱えていると、指揮官が話しかけてきた。

「なんだ？お前は善い人様の知り合いか？」

「吾輩はガスだ。」

「氣体なのか？お前は？まあいい。ともかく我々の邪魔をしないでいただこうか。」

「そうだよ。ガスさん。ここは危ないからあつちいってね。」

「いや善い人君。それはまずい。」

「邪魔をするなというのが分からないのか。善い人様。こいつも悪人です。」

「なんだって？ガスさんは悪人だつたのか！」

「善い人君。それは違うのだ。吾輩はガスだ。」

「貴様我々を愚弄してゐるのか。お前はどう見ても人間だらうが。」

「そういう意味ではない。名前がガスなのだ。」

「馬鹿に付き合つておれん。善い人様。こんな奴放つといてもう行きましょつ。」

「バイバイ。ガスさん。」

「善い人君・・・」

ガスは、穀潰しにこの事態を知らせるため穀潰しの住処に向かつた。

「なに？善い人のやつがついに本性を表したのか？」

ついにと云ふか、前々からこんな感じで今までこうならなかつたほうがおかしいのだが。

「吾輩の手に負えんのだ。吾輩は精いっぱい頑張つた。」

「害児のやつの話は本当だつたのか・・・俺としたことが。」

「どうする？善い人君は本氣だぞ。」

「はつ？ちょうどいい機会じゃねえか。あいつとはい加減白黒つけたかつた  
からな。」

しかし穀潰しは逆にうきつきした。これで善い人と戦える大義名分  
を手に入  
れたのだ。

「しかし相手は多勢だが。」

「善い人以外は雑魚だぜ。」

「そりだらうか・・・」

「びびつてゐなら帰れ。」

そう言われてガスはほつとした。どう考へても自分が出る幕ではなかつたからだ。

「そ、そつか。それは助かつた。吾輩は帰らせてもらひ。

穀潰しは驚いた。こゝまま帰られては困つた。

別に穀潰しは善い人」ときがやつてきたところで、後れを取るとは思わなかつたが、それにしても薄情ではないかと思つた。

「おい。本当に帰るのか？」

「善い人君は化け物だ。おまけにあの人数。もうびりしようもない。

」

「情けない奴だぜ。」

「吾輩は命が惜しいのだ。」

「大した命じやねえだろう。ガスの命なんか。」

「くわばらくわばらく。そつだ。害虫さんに応援を頼んだらどうだろう？」

「いや・・やつは傍観するみたいだぜ。奴としてもこの街が消えてくれたほうがいいんじゃねえか？」

「そんなことはないはずだが・・・（おかしい。害児さんもこの町の人たちとは取引してるはずだが。何か考えがあるのか。）」

「まあ見てろ。言つておくが逃げるんじゃねえぞ。」

「いやだ。吾輩は帰るー。」

「いいから車出せ。行くぜ。」

「吾輩は見てるだけだからな！」

「分かった。分かった。」

そうして二人は町の前で再び対峙した。

「善い人様。あれは？」

指揮官が善い人に尋ねる。

穀潰しはガスに一言言つて車から降り一向に近づいてくる。

明確な敵意に指揮官以下会員たちも警戒態勢をとった。

「・・・。」

善い人は無言で大剣を取り出す。

「あの？善い人様？」

「なにかな？」

善い人は田線を穀潰しに見据えたまま答える。

「いやその・・・なんといいますかどうなさるおつもりで？」

「善い人は悪人を許さない。」

そうじつて駆ける、指揮官たちがあつと驚く間に穀潰しとの間合いを詰める。

そして交差する。

どちらも無傷、穀潰しが衝撃波を放つがそれらは全て善い人の大剣の風圧でかき消される。

そして超人的な跳躍。穀潰しに降りかかる山をもくだく一撃。

しかし穀潰しは難なくそれをかわす。

地面に突き刺さる大剣の振動で大地が揺れる。

指揮官たちはその様子を唖然として見ていた。

「お、おい。補佐官。これは一体。」

「わ、わからねえ。だが尋常じゃないってことだけは確かだ。」

勿論指揮官たちには、善い人たちが何をしているのかなんて全く見

えてないし

分かつていないので、とんでもないことだといつそれだけは分かつた。

「お、俺たちはもしゃどんでもない勘違いをしていたんじゃないのか？」

「ふざけるな！」

ボコッ！補佐官は指揮官を殴りつけた。

「なにすんだ！」

当然怒る指揮官。

「情けねえ！俺たちの使命を忘れたのか！」

「はつ。」

そうだ。そうだった。俺たちの使命は世界を平和に導くこと。

「すまねえ。補佐官。行くぜ。」

「おう。」

「全軍突撃だ！善い人様を援護をしろー！」

半乱狂の有様で何やら起立っている中心に突っ込む会員たち。

「わ、わー！」

彼らは生物的に直感していた。自分たちのこの行為は死につながるとい。

しかし彼らは逃げなかつた。なるほど確かに彼らの組織はそれほど大きくない。

だが意地がある。彼らにも意地があるので。指揮官が先陣切つて突撃している

以上突撃するしかない。

指揮官は、初めこそ勇ましく突撃しかけたが、攻撃の中心の一歩手前で

泣き崩れてしまった。

「ダメだ・・・もう無理だ。」

その様子を見て、わめき声をあげつゝ崩れていく会員たち。地面上に手をつきうつむいている。

善い人はその様子を見て邪魔だなあと思ったが、穀潰しとの接戦の最中

どうかすこともできない。

やむを得ないので無視をする事に決めた。

穀潰しも何やら田障りな奴らがいると思ったが、善い人の相手をしつつ彼らを

どうにかすることは不可能だった。

「貫け！バリスタ！」

善い人は設置型の弩<sup>ウ</sup>を引き1000本もあるうかといつ集中矢を穀潰しに浴びせる。

その矢はまるで大砲。地面はぼこぼこになっていく。

その攻撃に穀潰しは焦っていた。

（ちい！戦法を変えやがった！）

これでは穀潰しは、練りこみに集中できない。穀潰しの攻撃の手段としては

練りこんで放つこれ以外ない。

接近戦ならまだ練り込む時間があるが、この矢嵐の中では、とてもじゃないが

攻撃などできないばかりか、いずれ捕まるのは時間の問題。

善い人は馬鹿だが戦いのセンスに関しては、天才的だった。

（仕方ねえ。この前開発した技で！）

穀潰しは訓練など大嫌いだが、善い人を潰すために最近は頑張って訓練してたのだ。

「ぐへ！」

巨矢に貫かれる穀潰し。

「ひやつはつは・・・。」

しかしその穀潰しは消えていく。  
穀潰しはその間善い人の背後に移動しそして練り込みは完了していった。

「潰れる！サイコグラビドン！」

黒いオーラをまとい、善い人に殴りかかる穀潰し。しかし善い人に接近戦など無意味。

穀潰しの拳を体験で受け流し、流れた体に裏拳をたたき込む善い人。  
ドグシャー！穀潰しは、地面に深くめり込む。

終わった！勝負あり！善い人様が勝つた！善い人様が勝つたとと口ぐちにわめく会員たち。

しかし善い人は冷めていた。

「勿論復活するんでしょう？」

「当たり前だ！この俺は不死身だ！」

ドカーン。爆発と共に再生しつつ立ち上がる穀潰し。

「いいか。善い人。勝った気になつてんじゃねえぞ。」

その言葉を聞き善い人はにやりと笑う。

「そんなにボコボコにされたいのか！」

「ひやつはー！潰してやるぜ！善い人！」

「ちょっと待て！」

白熱する二人の間に突如現れる人影。

（ちつ！サイキッカーか。もう嗅ぎつけてきやがった！）

穀潰しの想像通り現れたそいつはサイキッカーだった。

「おい。穀潰しよ。苦戦してるようじやないか。ここは俺が協力してやる。感謝するんだな！」

出てきたそいつはアキラだった。

アキラは遠目から二人の戦いを見て、穀潰しの力が善い人に通用しているのが分かり、今こそ復讐の機会と躍り出たのだ。

善い人は唐突なアキラの出現に呆れた。

「誰かと思えば、また君か。」

「「つるわーー白服！俺は確かに一度お前に負けた。だがな、あの時俺は力のほんの一欠片もだしていなかつたんだ。」

「悪いが、アキラ。負け犬は引っ込んでろよ。」

「黙れ。お前にはわかるまい。俺の苦しみが。この白服の卑怯な不意打ちで

ネーム持ちのこの俺が無残な惨敗をしたんだぞ！まるで雑魚のように扱われたんだ！」この俺が！

「はあああ・・・・・。」

穀潰しは思いつきりため息をついた。アキラの「うつうつ性格は昔からだつた。

「勝手にしゃがれ。」

「ああ。俺とお前が組めば白服なんか敵じゃないからな。」

「分かつたよ。それで、どうする善い人？」「うつうつ」とドーンと一いつ喝かつた  
わけだが。」

「善い人は悪に屈しない！」

「そつかよ！さすがだな！善い人さんよお！だが残念だつたな。  
これでタイムオーバーだ。」

「潰れる！サイココメット！」

隕石ほどの大きさの圧縮した念力の塊が善い人を捉える。

しかし突如善い人の目に前に巨大な壁が現れ、その攻撃を防ぐ、その間に

善い人は攻撃を回避した。

「やるじゃねえか。」

今の壁がなんなのか穀潰しには判別つかないが、ともあれこれで穀潰しの最強攻撃も善い人には効かないということが分かった。

穀潰しは、力に限界がないため、不意打ちをしようと思えばいくらでも善い人を倒せる手段がある。

がそれをするのはフェアージャないと思つてゐたため、しなかつたのだ。

ある程度時間で練れる念力の限界が先ほどの攻撃だった。あれが防がれた

以上正攻法では、一日以上念力を練らなければ善い人は倒せない。

お互ひ手づまりだった。善い人が動く様子はまだない。どうしようかと

穀潰しが考えていると、アキラが話しかけてきた。

「穀潰し！」

「なんだ？」

「俺の催眠がきかん！」

「はあ？だからなんだっていうんだ？」

「あいつ人間なのか！俺の催眠が効かないなんて！」

「うるせえな。ちょっと黙つてろ。役立たずが。」

穀潰し達の漫才をわって善い人が再び大剣で斬り込む。

（接近戦か。どういうことだ？何か考えがあるのか。）

考えというより善い人は直感で戦うタイプ。穀潰しのように考えて動いてる  
わけではない。

「穀潰し！俺の超能力が効かない！」

一生懸命喚くアキラ。最早目障りなので、善い人は突如進路を変更しアキラをけり上げる。

「ぐはあ！」

上空に吹き飛んで地面にたたきつけられるアキラ。

「あいつ。なにしにきたんだ？」

穀潰しがよそ見をしている一瞬の隙に、善い人は構える。

「斬る！無連斬！」

ズザザザ。穀潰しの体を滅多切りする善い人。

（再生が間に合わねえ・・・俺はここで死ぬのか。ちきじょうアキラめ  
・・・。）

だが攻撃はここでストップする。

「わたしの勝ちだね。穀潰し。」

「はつ！馬鹿が。喰らえ！キリコロ！」

念力で作つた刃で今度は逆に善い人を滅多切りにする穀潰し。

だが学習能力が足りない。善い人に接近戦など無意味。

簡単に善い人に攻撃をあしらわれ、転ぶ穀潰し。

「今日のところは勘弁してやる！」

ついに穀潰しは降参した。もういろいろと疲れたのだ。

「善い運動になつたよ。善いことをするのは気持ちいい。」

「じゃあわたしは帰るね。」

「え？ おい待てよ。」

「まだ何か用事でも？」

「いやお前にこの悪人を退治しに来たんだろ。」

「悪い人はそれを聞くと背を向け歩き出す。

「お、おーー待ちやがれ！」

「悪は去つた！ 善い人は帰る時間だよ。」

「ちつ。ずいぶんいい加減なんだな！」

その言葉を無視して善い人は去つていいく。

「さてと・・・」

穀潰しは放心している指揮官の肩をとんとんと叩く。

「ん？」

「おい。てめえ。詳しく述べ話を聞かせてもらひおつじやねえか。」

「げ、げえーー！」

最早夕暮れであった。夕暮れの闇に指揮官のげえーとこつ声がこだました。

## 第十一幕 善人組織の崩壊

穀潰しに勝つたことで目標を達成したと思つた善い人はその日は帰つて行つたのだが、よくよく考えてみると、穀潰し以外にも悪人はいた。

それらすべてを改心させなければ善い人とはいえない。

善い人としたことがこんな初歩的なことすら忘れていたのだつた！

「なんていうことだ！このわたしとしたことが！」

善い人一生の不覚。善い人がこのような凡ミスをしてしまったのは何か悪いやつがいるに違ひなかつた。

そのことは善い人を激怒させれるのに十分すぎる事実であつた。

「おのれ、ゆるさーん！」

善い人は咆哮し駆けていった。

それを影からニヤニヤと見つめている人物がいた。

言わざもがな害児である。

「ふふふ・・・善い人さんも詰めが甘い。それでは私の領域にたどり着くことなどまだ不可能ですよ。」

その声にこたえて闇よりうつすらと現れた人影は答えた。

「しかし、首領。よろしいので？」

「ええ。ぬかりはありません。善い人さんも眞の王者が誰であるか思い知るでしょう。

ふふふ・・なんと私の頭のいいことよー！」

「さすが首領。並々ならぬお手並み。我ら一同関心いたしました。」

「あまり調子の乗らぬことです。わたくしの策があなたたち如きに理解できるとでも？」

「これは手厳しい。首領の英知に我ら如きが及ぶわけもありますまいに。」

「ふふ・・。当然です。」

「ところで例の組織はどうしましょ?」

「例の組織? それが私と何か関係があるとでも? まああれは穀潰しに任せれば何の問題もありません。つまり駒は使いようということです。」

「さすが首領です。」

「さて私は紅茶を楽しむとします。もう下がつてよい。」

「ははつー。」

善い人はハエを使い一つ飛びで廃墟街に向かった。

悪人を倒すべく意氣揚々と乗り込んだ善い人であったが、そこには意外な光景が繰り広げられていた。

なんと悪人達が、スマイルで町の掃除をしているのではないか。

善い人にとってこれは誤算であった。

善い人は行き場のない怒りをあらわにし憤怒の表情で、悪人たちに近寄り、ガン見していった。

悪人達は、冷や汗をかきながらぼうつきを地面にふるい、ごくさりげなく善い人から遠ざかつて行つた。

善い人は地団駄を踏んだ。善い人ははめられたのだった。

よくよく考えてみれば、これは善人組織とやらが悪いのでなかつか。

善い人は善いことができるということ、彼らの言うことを聞いたのだ。

それがこの結果はどうだ。

確かに穀潰しを退治することはできた。

それに善い人がその場ですぐ悪人を退治できなかつた落ち度も認め  
る。

しかしこれはどうだ。あまりにもひどい有様。

「ここのーこのわたしが・・・」

善い人は顔を真っ赤にして頭から湯気が出る勢いであった。

ここまで善い人がこけにされたのは初めてではなかつたか。

冷徹に見える善い人の意外な一面であつた。

とにかく善人組織を責めるのは後回しにして、今は状況確認だ。

善い人は氣力を振り絞つて悪人に話しかけた。

「ねえ。悪人さん。悪人さんは悪人だよね？」

「・・・」

悪人は善い人の問いかけを無視したが、やがて善い人のガン見の  
プレッシャーに負け口を開いた。

「私は善人です！その証拠に街を掃除しているではありませんか！」

言われてみればごもつとも。しかし善い人はそれでも納得がい  
かなつた。

「でも悪人顔だよ！あなた悪いやつだね！」

それも確かにごもつとな主張であつた。

その男はどう見たとしても俺は悪人だと自己主張している格好に見える。

悪人の命は風前のともしびになった。

ここで「反論しなければやれると彼の直感がそれを告げていた。

「俺は悪人じゃねえ！俺は悪人じゃねえ！」

男はほつきを放り出し見苦しく喚きだした。

はつきり言つて最悪の選択である。

「うーん……」

善い人は男をじろじろ見ていた。いつの間にかどうなることかと  
善い人たちを悪人達が取り巻いていた。

善い人は悪人の肩にポンと手を置いた。

「え？」

「分かった。君は善い人だね。これからも善いことに励むんだよ。  
このわたしのように。」

「あ、ああ。分かったぜ！ひやつはー。俺は善い人だ！」

「善い人万歳！」と誰かが叫んだ。

それにつられて悪人達は口々に万歳を唱えた。

「善い人ばんざーい！善い人ばんざーい！」

今までの恐怖から解放されたような、魂の咆哮であった。

悲痛な顔がゆがみ、声をからして叫び続けた。

「善い人ばんざーい！善い人ばんざーい！」

善い人は満足げにうなづき、そして考えた。

このような善い人を倒させようとした連中は許しておけん。

このわたしをだましてあまつさえ、同胞たる善人を襲わせようとは  
善い人をも恐れる行為！

決して許しまじ！

善い人は固く決意しふつふつと静かなる闘志を燃やした。

昨日の敵は今日の友という言葉があるが、善い人はまさか自分が善人  
組織を潰すはめになるとは思わなかつた。

善い人は、ゆっくりとアジトに近づいていく。

「あつ！善い人様！おかえりなさいませ！」

見張りをしていた会員が善い人に話しかけた。

「うるさい！」

善い人のアッパー切割で会員は伸びた。自業自得だらつ。

しかし善い人としても心苦しい。一度は仲間と思つた間柄だ。

可能な限り手加減した。

いち早く様子が外の様子がおかしいと感じた田代と指揮官は、部下の報告で善い人の豹変にすぐに気付いた。

「あのやう!裏切りやがった!」

「なんだ?ビックしたのか?」

「どうもこうもないぜ!善い人が裏切りやがった!奴は俺らを潰すつもりだ!」

「おいおい。落ち着け。まあ水でも飲め、なんだって彼女が俺たちを潰さないといけない?」

補佐官は、部下に水を持つてこさせ指揮官に持たせようとしたが、指揮官はそのコップを床に投げつけた。

「こんなことしてるとしたらこんなところで取りみだしていくては全軍の士氣

「落ち着けって。お前らしくないぜ。」

補佐官はあまりの剣幕にびっくりしたが、指揮官の言つとおりの事態が起じつてるとしたらこんなところで取りみだしていくては全軍の士氣

に関わるものだった。

現に部下たちが何があつたのかといひながらの様子を窺いに来てる。

補佐官は田線でそれらを暗示し、指揮官はそれを見てようやく落ちついだ。

「すまん。」

「いや、それよつびあるんだ?」

「司令官に報告しなくては。最早俺の一存で決める段階じゃない。」

「

「司令官には客が来てるな。」

「分かっているが非常事態だ。」

指揮官と補佐官は足早で、指令室へ向かい、ちょつと入れ替わるふうに  
穀潰しが出できた。

「うわつ。あぶねえな。」

指揮官たちは穀潰しを無視して、指令室に入つていった。

どうして穀潰しがこんなといひいるかといつと、善い人たちとの戦い終わった後、指揮官たちにアジトに案内させどつして町を襲うのか抗議しにいつてたのだ。

最も穀潰しは最初はけんか腰であったが、例によつて竜頭蛇尾の勢いなので、司令官の冷静な分析にどんどん元気がなくなり、一方的にまるめこまれ、力なくもういいと泣き寝入りし、指令室から去つていこう

ところであつた。

「なんだ。あいつら。無視しやがつて。ちつ胸糞悪いぜ！  
しかしなんだつてんだろうな。尋常じやない気配だつたが。」

穀潰しが咳いでいる、指令室に入つていつた一人が血相変えて穀潰しに詰め寄つた。

「おい！司令官をどこに隠した！」

「はあ？」

「びつやら何か勘違いしてゐらしい。

「知らねえよ。俺は別にお前のボスの世話係じやねえだぜ？」

「とほけるなーお前が隠してるのは分かつてゐるんだー！」

穀潰しはやれやれと両手を広げた。

「なにをしている？」

「馬鹿なのかお前たちは。俺のどこに人間一人隠すスペースがある  
つて  
いうんだ？」

「馬鹿はお前だ！そんなものいぐりでも方法がある。」

「水かけ論だな。埒が明かねえぜ。なんならこいつでやつても俺は構わないんだが？」

穀潰しからしたら司令官に向ひまされた恨みを晴らすいいチャンスだった。

しかし、指揮官たちはそんなやつあたりされたまらない。

「いや、俺たちが悪かった。確かにお前が隠したわけじゃなさそうだ。それじゃなぜ・・・あつ！」

「どうした？何かわかつたのか？」

指揮官と補佐官は一人で話を始めたが興味を覚えた穀潰しはこのまま立ち聞きをせてもいいことにした。

「ちくしょうつーちくしょうつー！」

指揮官は床をざんざん叩いた。

「な、なんだ？」

補佐官は指揮官が狂ったのかと思つた。

「あの野郎！最初から俺たちを捨て駒にするつもりだったんだ！」

「なに？司令官がか？まさかそんな・・・」

「じゃあこの状況をどう説明する?…あいつが俺たちを見捨てて逃げた  
としか思えないだろ?」

穀漬しは、黙つてもいられず指揮官の胸倉をグイッとつかみ立ち上  
がら  
せた。

「おこ。どうこうとか説明しやがれ。」

「あ、ああ・。」

穀漬しは指揮官を突き飛ばす。

「ここに善い人が攻め込んでくるんだ!俺たちももう終わりだ!」

「なんだと?どうこうだ?」

指揮官は自分の大まかな推理を穀漬しに話した。

つまり善い人は、何らかの理由で気まぐれにここを潰そうとしており  
それを何らかの方法でいち早く知った司令官は、ここから逃げ出した  
のだと。

それを聞いて穀漬しはひやひやひやと笑いだした。

「まああねえなーおい!すかつとしたぜーこんな組織潰れちまえー!」

「そ、そんなー。」

穀潰しからしたら散々煮え湯を飲ませたのだ。

「なんとか早くつぶれてしまえと囁いた。

しかし、指揮官の頭脳は冴えわたる。一瞬で乾坤一擲の大ばくちに出た。

「穀潰しさん！ いや穀潰し様！ 私たちを救つてください！」

指揮官は土下座した。

なんてことはない。前と同じ手である泣き落としだった。

「お、おこ何やつてるんだ？ 指揮官。」

「うわあーお前も早く土下座しおー。」

「あ、ああ。」

補佐官もそれに倣つ。

「お、おこやめておれ！ そんなことされたって俺にだつてどうにもならないよー。」

「いや貴方様なら私どもの窮地を救えるはずです！ あの善い人と対等以上に渡り合える穀潰し様なり。」

「おい。いい加減にしろ。てめえのけつは手前で拭け。なんだつて俺になすりつけよつとしゃがむ。」

「お話しは『』もつともあります、私たちには後がないのです。  
どうかここは一つ。どうか！・どうか！」

補佐官はその指揮官の必死な様子を見てぽかーんをしている。

穀潰しはさまじく迷惑そうだ。

かといつて元々氣があまり強くなく虚勢ばかり張つてゐる穀潰しは、  
ここで彼らを見捨てて帰るという氣にはとてもならず、しようがねえ  
助けてやろうつかといふ氣にすらこの時点でなつっていた。

「分かったよ。仕方ねえ・・・」

「え？ 本当ですか！ ありがと『』ぞいります！」

「けつ。『』ねせえよ。」

割に合わない話だった。内心指揮官が穀潰しをただ利用しようとしてる

だけどころなど、馬鹿でもわかる。

何が何やら分からぬうちに話がまとまつてしまい補佐官はあっけにとられた。

「ちつ。俺のお人よしにも参つたぜ！」

穀潰しはぶつくさ言いながら、その場を後にし善い人の元へ向かつた。

「あああの人は神様だ。」

その場に残された指揮官はつぶやいた。

「なにがどうなったんだ？」

補佐官は尋ねる。

「つまり奇跡が起きたってことだ。」

「さうか・・・俺たちは向をすればいい？」

「速やかに部下たちをここから脱出せよ。」

「分かった。司令官は必ずやる。」

「あこいつのことは全てが終わってから考えよう。」

## 第十一幕 一人の戦い

穀潰しは気ののらぬまま善い人の前に立ちふさがった。

とはいへ、とはいへだ。善い人と戦うとなつた場合の穀潰しは通常のそれとは異なる。

「穀潰し。また君か。」

「言つておくがあれで勝つた気になつてんじゃねえぞ。  
アキラが邪魔しなければ俺が勝つてたんだからな！」

「君も懲りないね。穀潰しがわたしに勝てるわけないじゃないか。」

「本当にそう思うか？おめでてえな。」

穀潰しは善い人に勝とうとすればいくらでも方法はある。

いくらでもといふが、念力を練り込みまくつて町じと潰すなどの方法なのだが。

そういうことができる分、穀潰しは心情的に余裕があつた。

一方善い人は、なぜ今頃また穀潰しが出でてきたのが疑問であつたが、穀潰しをぼこぼこにするのに理由は要らなかつた。

これは常人には理解できないかも知れない。

彼女と彼にとつてこれは信頼なのだ。

つまり全力を出して戦つても一方の存在が消えることがないといつ  
確信。

自分が手を貸さなくともその存在が維持できるであらうとこう確信。

なぜ一人は戦うのか。それは理屈ではないが理屈で言つとしたら  
「信頼」のために戦う。

「君はもうわたしには勝てないよ。」

善い人はバリスタを設置する。

「ちつ。」

穀潰しはそれを見て明らかに焦った。この前の一一の舞だ。

つまり、矢による波状攻撃。それをされたら穀潰しは念力が練り込  
めず

防戦一方の持久戦になってしまつ。

それは避けないと云ひない。

穀潰しのパターンとして、戦闘前の会話は十分すぎる意味がある。

その時間は穀潰しにとって先頭の一部であり溜めの時間であった。

「残念だつたな。善い人。俺はすでに読んでいる。」

「潰れる。サイゴグランド！」

地面の一点を中心に柱上の念力が展開する。

善い人とバリスタはそれにもろに巻き込まれ、上空へ吹き飛ばされる。

(「まだ！」)

善い人の武器は大抵粗悪品だが、弓系の武器だけは違う。

おそらくバリスタは一つしかないだろう。

つまり壊せば今回の戦いではもう使えないということだ。

善い人が直前でサイコグランドの衝撃を抑えたため、バリスタの損傷はさほど激しくない。

穀潰しは善い人の間合いに入る危険性は重々承知のことながら、あえて懐に飛び込む。

「喰らえ！ キリコロ！」

「斬る！ 抜き返し！」

右手で念力の刃を作り、バリスタを破壊、左手で、善い人の斬撃を受ける。

念力で強化した腕だが、数秒も持たずとれてしまう。

善い人の詰めは甘くない。そこに勝機を見出し、たたみかける。

「無駄だ！ひやつはー！」

しかし穀潰しは腕を捨てるのは想定内。慌てず騒がず冷静に対処する。

善い人の攻撃をテレポートで回避して、衝撃波を放ち防御させる。

善い人が間合いを詰めれば穀潰しは引く。

接近戦だとそれの繰り返しになる。

どちらが有利かといえば善い人に圧倒的に有利だ。

穀潰しは、正直こんな正面切つて戦うのに不向きサイキックカーなのだが、闇打ちは彼のプライドが許さない。

善い人と穀潰しが不毛な争いをしている最中に、うまうまと会員たちはアジトから逃げ出していた。

「よし・・全員脱出できた。後はこの自爆スイッチを押すだけだ。」

「おい。指揮官。本当にやるのか？」

「俺だってこんなことはしたくない。だがこれは同志穀潰しの尊い犠牲なんだ！」

「え？あいつ同志だったか？」

「馬鹿野郎！」

ボコッ！指揮官は大きく振りかぶり、補佐官の頬を殴つた。

「なにしゃがる…」

補佐官は当然抗議した。しかし指揮官はさらに血相変えて補佐官を叱責する。

「穀潰しは同志だ！貴様にはなぜそれが分からん！」

「だけどよ…。」「

「俺も心苦しい！だが！これでみんなが救われるんだ！一人はみんなのため！みんなは一人のためだ！分かつたな？」

「あ、ああ…。」「

「部下たちも聞いたな！穀潰しの英雄的行為を忘れるな！」

「お、おおーー！」

部下たちはお互い顔を見合わせた後とつてつけたようにわいた。

指揮官は大きくうなづきスイッチを押す。どつかーんがらがらアジトは音を立てて崩れる。

指揮官はその様子を感慨深く見ていた。

補佐官は指揮官の肩にポンと手を置く。

「だからやり直しだな。」

「ああだが、まだ一つやることがある。けじめはつけないとな・・・。」

「

「司令官か。しかし場所が分からぬ。」

「なに。奴の行きそうなところは見当がつく。俺たちを裏切つた報いを受けさせないとな。」

指揮官たちは、格好いいことをしたという感じで去つて行ったが、こんなことをされでは中にはいる善い人たちはたまらない。

ガラガラと崩れゆく、建物。善い人はその破片を踏み台にしたり、  
野生の勘  
でよけたりする。

穀潰しは拙いメトリーで、破片の落ちる先を読み、善い人の攻撃の  
盾にしたり  
して利用する。

この状況をいかに利用するかが勝負の行く末を決めるだろ？

無論建物が壊れようと戦いをやめる一人ではない。

それどころかこんな状況なのに何の氣にも留めない。

(こいつー前より動きがスムーズになつてやがるー)

穀潰しは慌てた。善い人は悪状況でこそ本領を発揮する。

穀潰しをしては一瞬でも善い人の足を止めたい。

そしてその勝機はきた。つまり善い人と穀潰しの間に割つて入る破片が落ちてきたのだ。

こんなチャンスは滅多にない。

善い人からしたら邪魔な障害物だが距離をとりたい穀潰しにとつては、幸運だった。

善い人の敗因があつたとしたら、それはこのときまでに強引に穀潰しに攻撃を当てる努力をしなかつたことだ。

穀潰しは破片に衝撃波を当て、粉々に砕き、善い人の動きに制限をかける。

そのうちに大きく距離をとり、取れた左手を元に戻し、念力を練り込む。

善い人は、穀潰しのように怪物じみた耐久力があるわけではない。

だから破片を無視して突っ込むなどといふことは難しい。

どうしても動作が遅れる。

穀潰しはそこをついたのだ。

そして、決着をつける。

「潰れろ！ランダムスフィア！」

球状の多量の念力の塊が善い人を包む。

穀潰しはその様を見届けていたが、やがて大きな破片に押しつぶされ意識がなくなつた。

穀潰しが気付いた時には、夜だった。

どうやら眠つていたらしい。

それとなく善い人の気配を探つたが、どうやらいないようだつた。

死んだのか。いや、それはないだろ。

あの状況で助かる術はいくら善い人といえどなさそうではあるが、穀潰しは

その可能性を無視した。

穀潰しはどうやら勝負はまた次回に持ち越しらし」と考えた。

穀潰しは早く決着をつけたいとは思わなかつた。長くゆづくつと樂しみたい。

穀潰しは去つた。しかし善い人はまだそこに埋まつていたのだ。

死んだのかといえば死んでゐる。心臓は動いてない。

生きているといえは生きている。善い人は埋まりながらどうやって善いことをしようか考えていた。

穀潰しとの勝負のことは忘れてゐる。

ただ善いことをすることだけを考えていた。

ずっとずっとと考えていた。

## 第十三幕 善人協会の刺客

この日、善い人は久しぶりにドラゴンを訪ねていった。

ドラゴンは木製の家に住んでおり、それはなかなかに大きく、しかし彼の家の近くに他の民家は見当たらなかつた。

善い人はドラゴンがまだいじめられていると思いこみ、悲しい思いだつた。

とにかく善い人がドラゴンの家に入つてみると、ドラゴンは寝そべつてラジオを聞いてる最中だったが、善い人に気づくと、体を起こし、自然な威厳を作つて対応した。

「何をしに来た。人間よ。」

「遊びに来たよ。」

「そうか。ゆづくりしていけ。」

善い人はドラゴンの尻尾に腰かけ、悲しそうな顔をしている。

「どうした?」

「ドラゴンさんせつかく街中に引っ越してきたのに、お友達ができてないみ

たいだね。」

「つむ。なかなか芳しくない。」

ドラゴンは分かっているのだから面倒だとこいつの顔をした。

「しかし、以前と比べ町のものも我によくしてくれている。」

ドラゴンは、気遣う善い人を逆に元気づけた。

「きつと誰か悪人が・・・。」

善い人が義憤を発しようとするところを遮った。

「いや待て。それではないのだ。私は今の生活に満足している。最近は子供たちもよく遊びに来るのだ。

我もイメージアップのために、町に貢献している。少しづつだが理解されて

きているのだ。」

ドラゴンは、身振り手振りを交えて彼なりに精いっぱいやっていくと善い人にアピールをした。

前回はうまくいったが、今回またうまくいくとは限らない。

善い人がドラゴンのためと称して、町の人をぶちのめしては、ドラゴンの

今までの苦労がぱーになる。

ドラゴンは善い人に重々感謝してるが、これ以上余計なことをされ

ないために  
善い人を体よく追い払つた。

追い払われた善い人は、公園で遊んでいた顔なじみの子供たちを連れてドラゴンの家を再度訪問。

これにはドラゴンも苦笑いするしかなかつたが、まんざらでもなかつた。

善い人はドラゴンに別れを告げ、外に出てみると、不審な二人組が  
善い人  
のほうを見ながら世間話をしていた。

「なあ、知つてるか。また義賊のアツチラ様がやつてくれたんだぜ  
！」

「ああ！あの人こそ最高の善い人だよな！」

「そうだ！あの人おかげで俺たちも希望が持てるつていうもんよ。  
つまりアツチラ様は善い人で英雄つてことだな！」

（ふーん。義賊か。）

善い人が、早々に去るのになると、なおも通せんぼして一人は世間話を  
善い人に聞かせるので、善い人はうんざりした。

「どいてくれるかな？」

「あ、ああ・・・なんだあんた。いたのか。すまねえな。」

案外素直に、二人組はどき善い人のほうを見ながらニヤニヤ笑った。

善い人は不愉快であつたが、我慢することにした。

善い人が、家に帰つてみると見知らぬ男が座つていた。

「よう、今帰つたのか。まあ座れ。」

善い人は言われた通り座る。

「俺か？俺は義賊のアツチラつてんだ。この辺りじやちつとは名の  
知れた  
英雄なんだぜ！」

「ふーん。ものすごくどうでもいい。」

「ふん！内心羨ましいと思つてるんだろう？分かつてるんだぜ。」

「だつて泥棒でしょ？害児さんがそういうつてたよ。」

「害児だつて？馬鹿な奴だ。何も知らないんだな。」

「知ってるよ。」

「いや知らないな。お前は何も知らないんだ。自分自身について  
でさえな。

まあ待て。そうあわてるな。

順を追つて教えてやるよ。」

「なんだか茶番だなあ・・・。」

「まず俺は、世界を平和に導く会、通称善人協会の四天王の一人、義賊の

アツチラっていうんだ。

どうやらお前は司令官ともめたようだが、これは全国各地にいる善人協会を敵に回したつてことになるんだぜ。」

「敵か。」

「ああだが、ちょっと待て。まず座れ。」

善い人が立ち上がり、剣を構えようとするのをアツチラは素早くけん制する。

「敵っていうのはそういうことじゃない。いいか。このままじゃお前はただの偽善者だ。」

そこで俺たちがお前をまつとうな善い人にしてやるうと努力してやるうつてわけだ。」

「！」のわたしが善い人ではないと？」

「ああ少なくとも俺よりはそうだな。この義賊アツチラ様こそが眞の善人だ。」

「ならビアハーハが眞の善人か勝負してもいいよ。」

「勝負だと？おふやけになるんじゃないよ。お前はただ暴力振るひだけだらうが。

いやそれ 자체は悪くないんだがな。

どうせならこの世界をこんな滅茶苦茶にした奴に対して力を振つてくれ。

俺をぶつ飛ばしたといひただの弱い者いじめだぜ。」

「・・・。」

「納得してくれたようだな。まあお前に今の世界の状況を教えてやる。

1年前に、突如世界は崩壊した。

様々な憶測が広まつたが、一般的には核によるものだらうといわれている。

だがこれは変じやねえか？

「うーん・・・。」

「変だろ。核は全部放棄されたはずで、それは衛生からも確認されたはずだ。

人類は全てこれから変わるんだと決意したばっかりだつただろ。そう決意した瞬間このままだ。それに核が爆発にしたにしては、妙なことがありすぎるわ。」

「せつから何を言つてゐのか分からぬから、漫画讀んでいい？」

「ダメだ。いいか。俺たちは調べた。徹底的にな。それで分かつたことは、

世界崩壊には、サイキック組織のリーダーテンマがかなり関わっているつてことだ。

おそらく奴が何かしたに違いない。つまり善い人。お前の敵はテンマ・トキトだつてことだ。」

「ふーん。」

「そしてお前は神託によつて選ばれた人間。世界崩壊の日を境にしてお前は死に、今のお前がいる。つまり分かつてゐるだろ？ 善い人。お前はすでに死んでゐるんだ。」

「そーか。」

「どう肉体的には死んでいる。それでもなおお前が生きているのは、神の意志があるからこそだ。お前の使命は善いことをする事。そうだろ？？」

「そうだよ。」

「今のお前がなんて言われてゐるのか知つてゐるのか？魔人の番犬、通称白服。つまりお前は悪人といわれてゐるんだ。害児の手下になりさがつてゐるおかげでな！」

「へえす」こね。」「

善い人はもう真面目に聞いてない。寝転がって漫画を読みながら  
聞  
いている。

それでも構わずアッチラは話しかける。

「そこでだ。いいか。害児の奴はどうたねえ真似しやがる。あくど  
く稼いで  
やがるんだ。つまり俺の出番ってわけだ。  
お前が奴の気を引いているうちに俺は奴のお金をくすねてやる。  
どうだ？いい考えだろ？  
俺は自分の天才ぶりに惚れ惚れするぜ。」「

「泥棒は悪いことだよ。」

善い人は自分の書いた漫画で、泥棒が殴られているシーンを見せる。  
その泥棒はなぜかアッチラと酷似していた。

「これは正義の泥棒だ。なぜなら奴から奪った金は貧しいやつに配  
るんだ  
からな！」「

この時代別にそう貧しいものはいない。世界は崩壊したが、みんな  
それなり  
の秩序を持つて暮らしていた。

むしろ貧富の差は崩壊前と比べても、全然ない。

確かに環境は破壊されたが、人間の心はすでにこの時代、上の次元にあった。

一部の地域を除いてだが・。

はつきり言ってアッチラの行いは有難迷惑だが、善人というものは大体がこうなのだからやりきれない。

「いいか。これは俺とお前の勝負だ。どっちが善いことをするかってな。しくじつたほうが負けだ。」

「そうだね・。」

善い人はそこで初めて真剣な表情をした。

「君の言つ善いことといつのが、どうにいつもなのなか見てみたいな。私も興味がある。」

「協力してくれるようだな。」

善い人たちとは、害児の家を目指した。

善い人が害児の家に行くと、害児は客室で待っていた。

「やあ、善い人さん。いい天気ですね。」

害児が善い人に手を振っている。

「害児さん。勝負しようつか。」

害児はそれを聞くと、車椅子から転げ落ち、持っていたカップを落としてしまった。

醜態狼狽。自分が転倒したということに気付いた害児は大声で早く助けるおとわめいた。

善い人が、害児を車椅子に戻してあげるとよつやく害児は平静を取り戻した。

「勝負・・?ふふふ、善い人さん。この王者たる私と勝負ですって?」

今頃恰好つけているが、もう余無しだ。

「うん。」

「まあ・・いいでしょ。稽古つけてあげますよ。善い人さん。ついてきてください。」

二人はエレベーターにのり、地下に向かう。

「こんなこともあらうかと地下を用意しておきました。」

「ガスさんと同じだね。」

「はつはつは。あんな『ハ』虫と一緒にしないでいただきたい。」

ガタンと音を立てエレベーターのドアが開く。

「え？」

さすがの善い人も驚いた。ここはまるで外の世界。桃源郷のような乐园。

善い人は害児を振り返る。

害児は眼鏡をくいつと上にあげ解説した。

「不思議でしょ？　ふふふ・・・。」

「す、じいね。」

「これは私が作ったものじゃありません。地下を掘っていたらこの場所にぶつかったのです。

私にもはつきり言つてこの場所のこととはよく分かりません。でもまあさしあたつて不要でしょ？」

「害児さん。」

「いや実をいえば、貴方とは確かに戦つてみたかった。私も昔は戦いを

商売にしてましたからね。

足を失つて以来、随分臆病になつたように思えます。」

善い人は大剣を取り出した。戦いとなるといつも疾風のよつた善い人だが、

今はまるで水のような静けさを漂わせている。

善い人は自分が害児と戦いたいのかよく分からなかった。

「善い人さん。私には善だと悪なんて分かりませんよ。ただね。私は自分がしたいように生きている。だから私はここにいる。」

善い人は体剣を構えた。

「勝負しましようか。善い人さん。」

害児は、車椅子とは思えないスピードで、善い人の上をとり銃を放つ。

遅い・。善い人には止まって見えた。早々に決着をつけるべく害児の車椅子を狙う。

確かに斬つたはずであつたが、害児は善い人の後方に回り込み、車椅子からミサイルを放つていた。

完全に直撃コースだが身をひねつて大剣で、ミサイルを受け流す。

受け流そうとした瞬間ミサイルが爆発する。

善い人が受け流そうとしているミサイルめがけて、高速射撃を行い、爆発

させた。

善い人の技も害児の技もまさに神技。

爆発をもろに受けダメージを受けた善い人であつたが、体を回転させることで衝撃の大部分を逃がしたらしい。

害児は、そのすきに上空に浮かぶ。

(Hアレイド。)

害児は、地上にいる善い人目掛けて、ダイナマイトなどの爆弾を落としはじめる。

勿論善い人が逃げれないように、計算して落としている。

やがて、地上から善い人の姿が消えた。

(善い人さん。地下に潜つたな。)

上にはいない以上地下に潜つてるとしか思えない。

しかし、害児は氣を読めるのだが、善い人の氣は分かりにくい。

害児は、地上を燃やし始めた。

「善い人さん。早く出てこないと蒸し焼きになつてしましますよー。」

善い人は寒がりなので、このくらいの温度はちょうどいい。

豪炎の中、ゆっくりと地下から這い出る善い人。

「あんな燃えてるのに、どうして？」

善い人は服すら燃えないのだ。これは異常だ。

害児は、しかしあつては軍人だった。異常事態にはある程度慣れている。

ただ勝負という経験はあまりなかった。

勝負というよりは彼女にとつて戦いは「狩り」だった。

善い人の周りに集まる炎。

（炎が善い人さんの気に呼応しているのか。）

害児目掛けて、収束した炎の束が炸裂し、それとともに善い人が飛び。

善い人と違い、害児はこんな炎まともに受けたらまらない。

しかも空中では、技が若干落ちる。

「斬る！エレファントクラッシュ！」

善い人の剛剣が害児目掛けて振り落とされる。手加減はない。

害児は万事休す。結局車椅子を身代わりにして、自分は地上へ脱出した。

車椅子は爆発したが、善い人にダメージはないだろう。

「善い人さん。こうなつたらもう長くはありません。」

それはそうだ。害児の武器の車椅子はもうないのだから。

しかし、善い人の表情は厳しさを増す。

「2分持ちます。」この義足は、それで終わりです。」

害児は杖から刀を取り出す。

白く光るその刃が、それが名刀だと告げていた。

「また「朝日」を使うことがあるとは・・・」

おそらく軍人時代の愛刀だらう。2分しかないといっておきながら、感概深く刀を見つめている。

そんなことをしてゐる間に1分がたつた。

その間善い人は何をしていたか。動かなかつた。

もう勝負はついたのだ。

善い人は、害児の準備が完了したと確認し、一撃を放つ。

害児も善い人との間合いを詰め、一撃を放つ。

交差する武器。善い人の強力無比な一撃を害児は受け流す。

勿論善い人は、それを許さない。

受け流させぬように微妙な力のコントロールを加える。

善い人が力の流れを把握し、瞬時の攻防を繰り広げているとき、それとは違う力の波を感じた。

目の前の害児が揺れる。

善い人にはそれが三人いるように見えた。

そして次の瞬間善い人は武器を失い、なぎ倒されていった。

何が起こったのかよくわからない。

「2分です。」

立ち尽くす害児を善い人があぶり、二人は何も言わず、階段を上がっていった。

エレベーターは壊れて使えなかつたらしい。

そして、うまうまと善い人と害児を欺いたアツチラは、大金を奪う

べく

金庫へと向かつて いた。

速さだけとれば 善い人並で、しかも持久性があるアツチラは 隠密に  
優れてる。

さすがは 義賊といったところ。

だが金庫の前にはすでにガスがいた。

「邪魔だ。」

アツチラはナイフを投げるが、ガスの鎧に跳ね返される。

「義賊のアツチラだな？」

「お前に構つてる暇はない。」

アツチラは刃物が仕込んである足でガスを蹴飛ばすが、重装備なので意味がない。

アツチラは慌てて距離をとる。

「吾輩は重装備だから意味がない。吾輩はここで害虫さんに恩を売ることで  
商売を有利にしたいのだ。」

「それが俺と何の関係がある?」

「無駄だよ。吾輩に毒はきかん。」

「ちつ。」

アツチラは風上をとり毒をまいていたが、あつさりガスに看破される。

「義賊君。足元を見たらいい。」

「はつたりにのるか。」

「吾輩は親切で忠告したのだが仕方ないな。」

ガスは、手から炎を取り出す。

「サイキックカーか。それも発火能力とは珍しい。」

「発火能力? 何を言つているんだ。そんなものは迷信である。吾輩のこれはただの火炎放射機。」

「・・・それをどうする?」

アツチラは会話しつつ考えている。自分の攻撃はガスに通らない。

どうしたらしいのか。

アツチラは、素早さこそ善い人なみだが、攻撃能力がほとんどない。毒が効かないとなると致命的なのだ。勿論刃物による攻撃も重装備の前では意味がない。

だがそんなこと考えるのは最早無意味だつた。

「さよならだ。義賊君。」

ガスが地面に炎を落とすと、その炎は、地面を伝わり、アツチラの足元で爆発する。

（火薬か！）

アツチラはうかつであつた。目の前の商人風の男が、まさか自分のような手を使うなんて。

アツチラが炎を伝わりを確認した後、危険を察知しその場をすぐさま離脱した  
が、そこですぐに倒れてしまつた。

（しまつた！風下か！）

「死にはしない。しげれるだけだよ。」

アツチラは自分の無様を呪つた。これでは善い人との善いこと勝負に負けた  
も同然。

敗者は去るのみ、アツチラは、煙球を放ち、その場から脱出した。

アツチラもガス同様毒に対する耐性はつけている。

ガスは、それも計算済み、暗視ゴーグルを素早く装備しており、アツチラには発信機をつけていた。

アツチラはこんな時代に、一商人が発信機のような精巧なものを持っているとは思わなかつたからこゝでも不覚をとつた。

「ぼろい仕事である。」

ガスは、にやけていた。

「貴様……ここでなにをしている!」

騒ぎを聞きつけた黒服たちがやつてくる。

「よく聞いてくれたのだ! 吾輩は害児さんを救つた英雄!」

「つぬせ……貴様、」ひたちにきてもうつづく。

黒服は複数人でガスを抱え込み、ひきずる。

「離せ——離せ——吾輩は英雄! 吾輩は密であるぞ!」

「黙れ!」

黒服はこん棒でガスの頭をたたき、ガスのヘルメットはへこんだ。

「吾輩は密だ! 密なのだ!」

ドカッ。黒服たちに蹴飛ばされ客室に放り込まれると、ガスの田の  
前に害児  
がいた。

「それではあなたは」」」で何をしているのです？」

「よくぞ聞いてくれた。害児さん！これは全て吾輩の善意からだた  
ことで、

吾輩は害児さんの命の恩人なのだ。」

その言葉を聞き、害児は」」めかみをぴくぴくさせた。

「おい！何してる！早く」」の「」虫をたたきだせ！不愉快だ！」

ガスは散々袋叩きにされ、追い出された。

さすがの温厚なガスも、おのれ・・と感じないわけにはいかなかつ  
たが、

そこはぐつと我慢した。

一方害児も善い人から詳しい事情を聴き、ガスの出すぎた真似と恩  
着せがま  
しい行動に殺意を持つた。

「」虫の分際で王者たる私の助けにならうなどと身の程知らずが・  
・。」

どう考へても筋違ひの恨みであるが、害児とガスの衝突はどうやら  
避け

れそもそもなりそうな気配となつた。

そしてアッチラも義賊のプライドにかけてこのままでは済まないだろう。

害児とガスの確執。善い人誕生の真実と世界崩壊の真相。

そしてサイキック組織の謎と善人協会の策動。

善い人にとってものすごくどうでもいいことが、動きだそうとしていた。

## 第十四幕 ナリ虫物語（前書き）

いんじあは。

ゲームのほうが更新できたといつことなので、もしよかつたら遊びに行つてあげてください。

## 第十四幕 ハリ虫物語

さしもガスの、前回の事件での害児の所業には腹が立っていた。  
がそこはガス。一流の商人であるので、ひたすら感情を押し殺し、  
あくる日、早速害児との商談に出かけた。

ガス来る。の報に害児はあきれる思いであつた。

なるほど確かに今日は、ガスから商品を受け取る日だ。  
だからと言つて昨日散々な目にあわせたその足で、次の日すぐに  
また顔を出すのは一体どういう料簡なのだろう。

害児の理屈は滅茶苦茶に思えるかもしれないが、害児からしたら  
ガスの何でもあり、の媚びた商法が気に入らなかつた。

例えば何も知らない善い人から、ただ同然で貴重な発掘品を掠め  
とることなのだ。

プライドの高い害児にはとても真似できぬことであつた。

害児は自分が誇り高いので、他者にもそれを強要し、そういう人物を  
彼女は好んでいた。

しかしそれはお互い様だ。はつきり言つてガスも害児の暴力まがい  
の無法の商法は嫌いであった。

ガスが害児に媚を売つてるのは嫌々だ。

ガスは元々、ある島国の剣士である程度上流階級の人間だ。

誇りがないわけではない。

害児に頭を下げるのは、商人として当然のことなのだ。

だがガスが害児に気にいられようとすればするほど、害児はガスに對し面白くない感情が湧きあがる。

害児からしたら、昨日ガスの面田を潰したのだから、今日の取引は中止  
といつのが常識であった。

ガスからしたら、例え何が起こるつとも一度契約したならばその通り実行するのが常識であった。

ともあれ、こうなった以上仕方ない。

害児はしづしづガスに対応することにした。

客室ではすでにガスが揉み手をして待っていた。

「へへへ。害児さん。今日もいい天気ですな。」

相変わらずの媚びよさに害児は反吐が出る思いであった。

「ふんっ！昨日の今日でよくもおめおめこれたものですねー。  
まあ、なにをしてるんです。みなさんー、  
早くこの『ミミ虫を追い返すのですー！』

その声に負けないくらいの大声でガスが抵抗した。

「しかし害児さん！今日は取引の約束のはずですぞ！」

「取引？何を世迷い事を…。そんなに金もつけが大切ですか？ええ？」

「なにをおっしゃるか！お金はすでにいただいている。吾輩は商品を置いておきますぞ！」

ガスは、積荷を害児の家に運び込もうとする。

「なに？貴様言つていいことと悪いことあるが…！」

その声を無視して、玄関先に荷物を下ろし始めるガス。

「田障りだ！それ！そこ」の「」虫をたたき出せー。」

一回田の号令で、害児の部下はガスとその荷物を外に放り投げた。

またもや追い出されたガスは、苦渋の表情だ。

（うぬ！害児め…。）

ガスはしばらく、考え込んでいたが、考えてみれば今回の自分の対応は実にまずかったと思いなおした。

今後の害児との交渉に支障が出るのではないか？とガスは思った。

確かにもう契約金はもらっている。

しかし、IJの町で暮らす以上害児の機嫌を損ねるのはまずかつた。

ではここからでていくか。ガスとしてはそれも避けたかった。

IJは一種の自治区であり、商売をする者にとつては何の規制もなく天国であった。

IJ以外で商売しようとすれば、それは今なお戦争しているある地域にいくのがベストかもしれないが、ガスは死の商人などIJめんどつた。

ガスは荷物をまとめ、車に積み込み、今日のところは店に帰るIJにした。

「IJの町に来るまで色々あつたことではあるが・・・」

ガスは昔、剣士として修行していたこと、さらにその地を抜けだし、追手を振り払いここまできたこと。

などを思い出していた。

この土地は、流れ者にとって便利だった。この地は害児が立て起こした新しい国みたいなものだ。

追手もやさやすとここで騒動を起こすわけにはいかない。

ガスは店について考えた。考えたが結局陳腐な手しか思いつかな

かつた。

ガスが考えたことは、善い人に仲裁してもらおうといつてだつた。

勿論ただでなどといつ虫のいい話はない。

ガスは自分が今まで上げた利益の9割を害児に献上することでの関係を回復してもらおうと思つた。

とはいへガスは、得た金は全部使ってしまつてゐる。

それは地下の建設や研究費などで消えてしまつてゐる。

なのでガスは、家の権利書と車で手を打つてもらおうと考えた。

別にガスにとつて家など飾りだ。そんなものまた作ればいいだけ。

じじで害児との交渉が途絶えるほうがはるかに怖かつた。

「穀潰し。」

「なんだ？」

じじはすでに車の上ではない。荷物を下ろし終え、ガスは自分の家に帰つてきたのだ。

帰つてくると、そこにはすでに穀潰しがいたので、話し相手にすることにしたのだ。

「吾輩この家を手放すことにした。」

「ああ？ 引っ越すのか？」

「いや・・・」の家は譲るのだ。プレオもだ。

「車も手放すのかよ。頭でも打ったのか？」

穀潰しは何気なく聞いてたが、プレオを譲ると聞いて本気になつて乗り出した。

「それともなんかあつたのか？」

「害児さんのことだ。」

ガスは今までの事件のあらましを穀潰しに語つた。

「なんてやつだ！ 害児のやつ！ 」

「吾輩の対応もまずかつたのだ。」

「とはいえばつきり言つて俺に出来ることはなきやうだ。だから商売のことなんかよくわからねえからな。」

「なに？ 吾輩を見捨てるのか？ いつも穀潰しを助けていたる吾輩を？」

「い、いや。ガスがそこまで決意している以上俺が出る幕なんかあるのか？」

そりゃ確かに害児のやつはむかつくぜ。でも仮にだ。俺が害児の奴をぶつ飛ばすとしてどうする？ 意味がないだろ？ 違うか？」

確かに、そんなことでは解決するわけもない。いや実際にはそれが実現すれば、おそらく害児とガスの関係は修復するだろうが、庶民根性が染みついている一人にはそんなことは考えも及ばないことだった。

「それはそうなのだが・・・。」

「俺だつて助けてやりたいのはやまやまだぜ。でもな。人には得意不得意つてもんがあるんだぜ。悪いが今回は俺は役に立ちそうにねえや。」

今回はとかお前が役に立つたことがあるのかと突っ込みの一つもいれたくなるが、なるほど確かに穀潰しの「いつ」とは「いつになく道理であつた。

ガスはさつきまでは格好よく決心したのではあつたが、こりまで穀潰しつき放されると、その決心もなぜか萎えてきた。

結局ガスは穀潰しに止められたことを口にしていたのだろう。

「そうでもないぞ。」

「あ?」

「考へても見る。お前はサイキックカーじゃないか。」

「そういうやうだったがそれが何か関係あるのか?」

「つまり催眠術であるー。」

「おいおい。アキラじゃねえんだから、俺にそんなことできねえよ。

「

「サイキックカーなのに催眠術ができないのか?」

「悪いーな。まつ諦めー」

「こや吾輩は諦めん!」

ガスは地下から向や「ひじか」と持つてきた。

見れば催眠術師がよく使つ、ほーらこれを見てください。貴方はだんだん眠くなるーとかやるあれであった。

「これはかなり高いサイキック兵器で、これがあれば吾輩でも催眠術が使えるのだ。

つまり吾輩もサイキックカーであるー。」

「はあ?」

「これが使えば吾輩もサイキック組織に入つてナンバーズになれるところ」となのだ。」

「お前が思つよつないいものじやないと思つや。」

「ほーら穀潰し。貴方はだんだん眠くなあーる。」

「よせーよせーそんなものは迷信ー。」

バシッ！

穀潰しはガスから道具を奪つた。

「いひなにするか！」

「いやちよつと待て。お前わざと金払つて謝罪するとか言つてなかつたか？」

「それは最後の手段なのだ。その前にやれることは全てやつておくべきではないか。」

「ああそつかよ。じゃあ頑張つてくれ。俺はもう帰るからな。」

穀潰しはガスに道具を投げつけ、穀を袋に詰め込んだ後帰つて行つた。

「あの穀潰しめ…やつとこなくなりおつた！普段穀を潰させてやつてるのに何の役にも立たんわい！」

何か妙な口調になつたがこつちが素なのかもしれない。

ガスはその後、一生懸命催眠術の練習をし、最寄りのサイキック研究所にも赴き、催眠術のやり方をレクチャーしてもらつた。

そして善い人に仲裁役を頼んだ。

「悪い人など飴玉でも『えとおけばすぐガスの言つ』と聞く。

案の定は、悪い人はガスから飴玉をもらいつとへこへこ害児を連れてきた。

害児は非常に渋い顔であった。

「貴方にもいい加減呆れますよ。今度は何の用ですか?」

害児は悪い人の手前猫を被つてゐるようだ。

勿論ガスはこれも計算済み。逆を言えばこの場を逃したらガスができる手段は相当限られてくる。

「へへつー・害児さん。貴方はだんだんねむくなあーる・・・」

「は、はあ?」

「何してゐるガスさん?」

「これは吾輩の催眠術なのだ。吾輩は先ほどナンバーズいりをしたサイキックカー。

ナンバー7352である。それ!吾輩の超能力を受ける!」

悪い人と害児は顔を見合せた。

「害児さん。これはなに?」

「どうやらガスさんは私に催眠術をかけようとしてるようです。」

「へえ。面白いね。スケッチするよ。」

「あまり私としては面白くもないのですが・・・。」

「それそれ。害児さん。貴方は吾輩の言つことを聞きたくなつてくるぞ！」

「ふーむ。」

害児は腕を組んで考えた。

冷静になつてみると、害児もガスから商品が来なくなるのは困る。  
部下の装備のほとんどがガス製であるし、はつきりいつてこの辺  
一体の商売にかけては、害児よりガスのが上手なのだ。

プライドではなく実利という点から考えれば、ガスと縁切りするのは  
害児にとつても実にデメリットが大きいことであった。

ここまで害児が冷静になれたのも、ガスがともつもない阿呆であった  
からなので、毒気が抜かれたのだ。

ガスの作戦もあながち失敗ではなかつた。

害児は、結局ガスの商法が気に入らないだけだつた。

いやその人物性も氣に入らないのだが、とにかくガスの商人として  
の実力、度量がどれほどのものであるか測つてみたいと思った。

格式にこだわる害児だが、商売は実力主義、害児もこの辺を自治区として認めてもらつために、裏ではだいぶ動いている。

優秀な手駒がほしいのは確実であるし、だからこそ善い人や穀漬しの機嫌取りのような真似もしてる。

例え馬の合わぬ相手であつても優秀ならまあよし。

害児はそう思い直したのであつた。

「うーむ。聞いてきました。聞いてきましたよ。私は催眠術にかかりたようです。」

「ほら見ろ！ 善い人君！ だから吾輩の言つた通りだつたじゃないか！」

「おめでとう。ガスさん。」

「へへっ。害児さん。いや害児。よくも吾輩をいじめてくれたな。今日から、貴方の財団は吾輩のものだ。お前みたいな下民はどうかに去るがいい。」

「な、な、な……。」

「いり何をしているか！ 部下ども！」

ガスはパンパンと手をたたいた。その音は辺りをこだましたが、誰も現れない。

それでもガスは自信満々に害児を指差し命令する。

「早く、ここのゴミ虫を外にたたき出せー。」

「あ、あたまー！殺してやるー！殺してやるぞーー。」

害児は激昂し、車椅子が吹き飛ぶ。

「う、うわ・・！だ、だがこんなこともあるつかと吾輩は保険をかけておいたのだ。」

ガスは善い人の首に、剣を当てるといついた。

「いいか。害児さん。そこから一步でも動いて見る。人質の首が吹き飛ぶぞ。これは脅しではない！」

「ガスさん・・。貴方そんなに死にたいのですか？」

「何を言つてゐるのだ。吾輩は王者であるぞ。媚びろ媚びろ。はつぱつぱ。」

さしも害児も呆れ顔。ガスは一体何を言つてゐるんだと怒りを通り越して考え込んでしまった。

そういうべきいたことがある。ガスは極東の島国出身らしい。

あそこの奥義として死中に活ありといつものがあると聞く。

また捨て身技なるものがあり、特攻なるものがあるらしい。

ガスはその奥義を今使つてゐるに違ひない。

害児はそう判断した。

一方善い人はおとなしく人質になつてゐる。

実はこのことは事前に善い人と打ち合わせ済みだ。

害児は善い人がおとなしくしてることから、そのガスの打ち合わせも見抜いていた。

ガス一人だけならどうといふこともないが、善い人を巻き込まれては害児としてはたまらない。

何しろ害児は善い人におんぶにだつてこの状態なのだ。

いつも善い人を使役する側だつた害児だが、今はガスが善い人を使役している。

ガスは正確に害児の弱点。急所が分かつており、なるほど日頃ガスが善い人に接触してたのはこの時の備えのためだつたのか。

と今更ながら害児は思い立つた。

（見くびりすぎてましたね・・。そういうえば彼は穀潰しさんとも仲がよろしい。

さすが商才にかけては、私より知恵が回る人間だけある。）

相変わらず何でもありの外道な知略であった。

害児も以前、隣町の領主に対し同じような手法を使った。

しかし同じような術を使っても、やはり害児の策略は王者の策略でガスの策略は弱者の兵法であった。

手段が同じでも根本となる思想が違つた。

そして、ガスは害児がここまで見抜くであろうとすべて分かつた上で行動だろつ。

勿論ここで害児がガスをぶつ飛ばしたとしても何の解決にもならない。

なにしろどこまで善い人と事前に打ち合わせをしているか不明なのだ。

ダークホースとして穀漬しの存在もある。

とはいっても、所詮蟻が象にかみついた程度の策だらう。

状況は結局害児に圧倒的に有利であった。

だが攻められたままではやはり害児としても面白くない。

「ここの知略の勝負を受けるべきと害児は判断した。

「ふふ。いいでしょう。ガスさん。私の財団は全て貴方のものだ！」

「ひやつはー！」

「だが、あまり調子に乗るなよ。貴様など私が本気を出せばすぐに潰せる。

所詮私の掌の上で踊つているにすぎないのだ。」

「へつーそうですかい！それ何をしている部下ジモーちつてこの「ミミ虫をたたき出せー！」

「うぬ！ガスめ！もう我慢ならん！』

害児は、義足の電源を入れ作動させた。

(来るか・・。)

ガスは構えた。

害児はゆっくりとガスによつていぐが、いきなりふつと姿が消える。

(これは、特殊な歩法で吾輩の目を幻惑させ、大地と同調する」として距離を錯覚させる、幻の秘技！)

しかし・・・。ガスは害児など見てない。レーダーを見ていた。

つまりこの歩法に対する備えは万全。あるいは最初から戦つつもりだったのか？

この男どこまで計算しているのか底が知れない。

「あつー害児さんが三人になつた！」

と善い人がうれしそうに喚いた。

害児は、ガスの前方上方後方の同時攻撃を仕掛けた。

(しかし実体一人。)

レーダーを素早く確認し、後方からの攻撃に備えるガス。

がしかし・・・。

「へふつ・・・。」

上からも前からも、気による攻撃を受けるガス。その攻撃は鎧を貫通する。

「じゅ、重装備のおかげで助か・・・。」

バタン。ガスは沈んだ。

「思い知つたかー、ゴミ虫め！王者たるこの私に勝てるとでも思つたのか！」

返事はない。

## 第十五幕外伝 穀漬しの冒険 1

穀漬しとアキラは、地震の騒動に相まみえ、決着をつけることになつた。

穀漬し達の戦いは二日三晩続き、互いに精魂尽き果てよひとしていた。

アキラが催眠を使えば勝負はつくのだが、アキラはあえてそれを使わず、勝負につきあつた。

だがそれも限界だった。穀漬しと違つてアキラは暇ではない。

「おい。穀漬し。」

穀漬しの衝撃波を相殺し、話しかけるアキラ。

「なんだ?」

これほど戦つてこの、穀漬しにほとんど疲労の色が見られない。

「悪いが、俺は忙しい。お前と違つて仕事があるんだな。  
そういうことで勝負は持ち越しにさせてもらおうか。」

「どうして催眠を使わない?」

「どうして?笑わせてくれる。いいかよく聞け。俺はネーム持ち。  
お前はナンバーズ。格が違うんだよ。」

穀潰しはいつものことなので受け流し、疑問に思っていたことを聞いた。

「ちつ。おい。なんで村を占領していた。地震を起こしたのはお前の仕業か？」

「いくら俺でも人為的に地震は起しせんよ。村を占領していたのは、そういう仕事の依頼があつたからだ。」

「依頼主は誰だ？」

「や」までは知らないな。」

「知らない？ そんなわけねえだろ。お前はネーム持ち様なんだからな。」

「何人たちともテンマ様に逆らうことは不可能だ。お前だって知ってるだろ？」

「お前の負け犬宣言には興味はねえが、要するに今回の件はテンマの野郎の仕業ってことか。」

穀潰しの憎まれ口にもアキラはさほど没心を示さない。

アキラだって自分の言つてることくらいは分かつているが、分かつても無理なものは無理なのだ。

「俺にも分からぬ。ただ、俺たちの組織以外に、争いを起こさせよ

としているでかい組織があるみたいだな。」

「やうか。」

「俺はもう行くが、他に用はあるか?」

「言つておくれが次は勝つぜ。」

「無駄なことだな。まあせいぜいがんばれ。」

そういうアキラは消えていった。

「俺はお前みたいな負け犬とは違うぜ。」

第三者からすると何のようひなものだが、とにかく穀潰しは、穀を潰すためガスの家に向かった。

三田三晩何も食べてないわけだが、そこまで穀をたくさん潰せるわけではない。

それが穀潰しの悩みの種であった。

穀潰しはガスの家にたどりつくと、だらーとねつ転がり飯持つてこーいとわめいた。

「なんだ穀潰しか。今日も物乞いか?」

「つるせえな。いっぱいあるんだからちよつとへりこいいじやねえか。けちやうづ。」

「おいおこ・・。」

ガスはあまりの罵詈雑言に呆れ顔だった。

「まあいい。とにかくあがれよ。」

「何言つてやがるんだ？ もうあがつてゐだらうが。早く飯持つてこい。」

「勝手に食え。」

ガスは刀を研ぐ作業に戻った。

穀潰しは、穀を潰しじるるるじ、また穀を潰しじるるるしていた。

やがて穀潰しは深い瞑想状態に入り、何らかの波動を捉えた。

穀潰しはその波動をたどつて行くと、大きな施設が見えた。

穀潰しは立ち上がりガスに話しかけた。

「誰かが助けを呼んでるようだな。」

「例のやつか？ 行つておぐが我輩は行かないぞ。」

ガスは、熱心に刀を研ぎつつ対応する。

「これは俺の問題だからな。じゃあいつてくる。」

「生きて帰れよ。」

穀潰しは外にでて受信地を田指す。

通りがかりに善い人の家があつた。

考えてみれば善い人がいればかなりの戦力になる。こないだ協力してやつたんだからこいつちの事情にも協力を要請しても何の問題もないはずだ。

穀潰しはそう思い、家に入つてみたが誰もいない。

「ちひつ。留守じゃねえか。とことん使えねえやつだぜ。無駄なハエが一匹いるだけだ。」

ハエに向かつてべつと唾を吐くと穀潰しは善い人の家を後にした。

後ろから猛烈な勢いでハエに逆襲される。

「あいたたた。なんだこいっは。ハエの分際で生意気なんだよ。」

適当に衝撃波を放つがなぜか当たらぬ。

「おかしいな?」

ハエはある程度穀潰しをぼこつて満足したのか帰つていった。

「ちひつ。今は急いでるから見逃してやるよ。」

負け惜しみを言いつつ、発信地に行くこととした。

穀潰しは本来善い人を連れていく予定であったが予定が変わった。

あまり役に立ちそうもないガスを連れていく決心をした。

「おい。ガス。救出に行くぞ。」

「我輩は行かないといつただろつ。」

ガスはコタツにこもってでこようとしてないので、穀潰しはコタツを爆発させて、その衝撃でガスが吹き飛びフレオに移動させた。

「早く運転しろ。」

「お前が運転すればいいだらう。」

さすがの温厚なガスも多少ムッとしている。

「つべこべいうな。こんなことでもめてる時間ないんだよ。手遅れになつてたらガスのせいだからな。」

「分かりましたよ。全ぐ。」

「ふおおお。ガスとフレオはうなりながら動き始めた。

「よし。とばせよ。」

穀潰しは力を回復させるため、軽い瞑想状態に入る。

半覚半眠というやつだ。穀潰しの技は荒いが基本的なサイキック能力は昔強制的に身につけさせられたので分かっている。

「今日はすいぶんと僻地だな。並みの車ならここまでこれないだろう。

プレオの性能のおかげだな。」

本当は穀潰しがフォローしているだけであつてそれに気づかないガスはどうしようもなかつた。

プレオは飛ぶように走る。瞑想してる状態でここまで念力を使うといふ時点で、穀潰しの実力はネーム持ちに匹敵しつつあるかもしれない。善い人と出会つてからといつもの、穀潰しは能力開発に余念がなかつた。

「お。あそこだな。今回の目的地は。」

プレオは山に入り、駆けのぼり森を抜けると、眼下に軍事施設があつた。規模はなかなか大きく、警備もきつい。

それだけここに施設が重要ということだらう。

「やたらじついたいな。我輩といい勝負だ。」

やたらのんきそうな友人の顔を穀潰しは不思議そうな顔で見た。

いつもチキンな癖に、どうしてこいつはこんなじついのを見て平気そう

なのが穀潰しには理解できなかつたが、さしあたつてどうでもよか

つた。

「正面からはきつそうだな。」

「あらかじめいっておくが我輩は行かないぞ。」

ここにきてガスは、怖氣だす。穀潰しは「いつにもまともな神經があつたかと思いつつ、返答した。

「付き合いで悪いぜ。」

「あほか。あんなとこで乗り込んだら死ぬぞ。」

「死んでも復活するから大丈夫だ。」

「それはお前だけだろ。」

穀潰しは、少し考え、まず施設に大きな打撃を与える敵の注意をそらそうと考へた。

穀潰しは殺しはしたくはない。だから極力被害がでないようになしようと思つた。

「今から念力を大規模に練りこむ。気をつけないと脳をやられるぞ。」

「

「ひい。」

ガスはあわてて対サイキックのヘルメットに付け替える。

穀潰しは念力を時間をかけ大量に練りこんだ。

周りの空間が質量の圧縮のため歪みまくっている。

「よし。さすがに人にぶつけたら死ぬからな。あの外壁だけを狙つて壊すぞ。」

「その後は？」

ガスは恐る恐る尋ねる。

「プレオで特攻だ。」

穀潰しはさも当然のよう答える。

「勘弁してくれ。」

ガスは泣きそうな顔になった。

「サイココメシト。」

穀潰しが生み出した隕石のような念力の塊を施設の外壁にぶつけた。施設は半壊した。

「やりすぎたな。死人でたかもしれん。」

「救出する人間まで巻き込んでたらしゃれにならないんじゃないのか？」

「それは確認済みだから大丈夫だ。よし発進するぞ。」

突然ヘリから撃たれる。

「ちつ。見つかったか。」

「ひえー。お助けー。」

ガスはプレオに乗つて一田散に逃げ出した。ヘリはプレオを追つかけていく。

「あいつ。馬鹿だろ。まあいいか。とにかくヘリ部隊はあいつを追跡するだろうからその隙に。」

穀潰しが施設に進入した途端、マシンガンと衝撃波の嵐をつけ倒れる穀潰し。

「やつたか？」

「びくりとも動かないな。」

「しかし一人だけで乗り込んでくるとはただのあほだな。」

「後続の部隊に備えて気を引き締めろよ。」

「あほはあんたらだ。」

穀潰しは底なしの念力を持つ。この程度なら復活できるのだ。

「うお。なんだこいつ。立ち上がつたぞ。」

「サイキッカーだ！もう一度集中砲火だ！」

そういう彼らもサイキッカーだがその実力は穀潰し以下。だから火器に頼つたほうが超能力を使うよりことが足りる。

ダダダダ。

「こいつの俺は不死身だ！サイゴグランド。」

全く意味がなく、穀潰しは集中し念力を開放する。

地面の一点を中心に広範囲の衝撃を広げる。当たるものは跳ね上がる。

「こいつの先だな。」

## 第十六幕外伝 穀漬しの冒険2

穀漬しがどんどん奥に行つてみるとサイキッカーが一人待ち構えていた。

「好き放題やつてくれたな。」

「まあな。お前達が俺を止められるのか？」

「二人か。手間取るとまずいな。穀漬しが見たところそれなりの実力者。」

「一人相手では分が悪かった。」

「知ってるぞ。お前はナンバー6だな。超能力検査で数値0を出したと  
いう。最弱ナンバーズだ。」

「詳しいな。関係者か？」

穀漬しが聞くまでもなく、彼らはナンバーズなのだろう。

がそれでも穀漬しが確認する理由があった。

「お前の姉妹施設のものだ。お前は有名だよ。一番無能なサイキッカーで必死に練習してようやくそれらしい半端なものを身につけたってな。  
ついたあだながサイキッカーだ。」

「よくしゃべるな。俺の狙いが実験体だと知つていて地下に移す時  
間稼ぎでもしてゐつもりなのか？」

「なに？ こいつのまにメトリーした？」

穀潰しはメトリーなどしていない。したところでそこまで正確な  
メトリーは穀潰しにはできない。

そんなことも分からぬ彼らの頭は馬以下だと穀潰しは思った。

「しなくてお前の馬鹿面に書いてあるんだよ。」

「なんだと？」

「おい。ナンバー65。挑発このるな。これはやつの手だ。」

「すまねえ。」

「聞いての通り俺達もナンバーズだ。だが貴様と違つて俺達はも  
うすぐナンバーを抜け出しネーム入りを許される筆頭候補なんだよ。」

「

「へへへへへ。」

「ん？」

「ひゃつまつまつま。」

「なぜ笑う？」

「お前らナンバーだとネーム入りだとかそんなあほなことを言って恥ずかしくないのか？」

「なんだと？どういう意味だ。」

「要するにタイムオーバーだつてことだ。」

「潰れる。ランダムスファイア。」

ボール状の爆裂性能がある衝撃波を何個も飛ばす。

「馬鹿な。こんな短時間でこの規模の念力だと？」

「うがああ。」

戦闘不能になつた二人の上から穀潰しは言葉を浴びせる。

「お前らが馬鹿で助かつたぜ。小技の応酬してたら時間が無駄だつたからな。」

時間稼ぎが必要だつたのは彼らだけではなく、穀潰しもそつだつた。

だから穀潰しもぐだらないおしゃべりにつきあつていたのだった。  
とはい、飼い犬がいきがる様を見て憐れに感じたこともまた間違いないことではあったが。

パチパチパチ・。

後ろのほうで拍手の音が聞こえた。

穀潰しが振り返ると、不敵な笑みを浮かべた優男風の男が立っていた。

「よつじ。我が館へ。雑魚の割には見事なお手並みでしたよ。  
ナンバー6。」

「お前がここにリーダーだな。ネーム持ちか？」

「いえいえ。」

「。。。。」

「不思議ですね。ですが勘違いしないでいただきたい。  
先ほどの一人と違つて私は、ネーム持ち以上の実力を持つている。」

「おい。お前。こんなおしゃべりしていくいいのか?さっきの  
お前の部下の無様な姿を見ていいなかつたのか?」

「くく。。奇遇ですね。ナンバー6。実は私の得意分野も練り込み  
なんですよ。しかも衝撃波系の念力の練り込みです。  
意味が分かりますかね?」

「ああ分かったぜ。お前がとんでもなく阿呆だといふことがな。」

「組織から追い出された負け犬めが。吠えるなよ。」

「そろそろか?先手は譲るぜ。」

「馬鹿が・・・死ね！はつ――」

「ぶつ潰れろ！サイコスファイア！」

力場が発生し、力が放たれる。しかしあまりにも違いました。

優男は複数の衝撃波、穀潰しでいうランダムスファイアで、穀潰しの衝撃波は一つだけ、これはランダムスファイアの下位の技だ。

優男の衝撃波はさすがによく練り込まれていたが、穀潰しの全てを蹂躪する力の波動にはなすすべなく、自信満々の優男は、驚きの表情で声さえあげれず念力の波に飲み込まれていった。

穀潰しは、その様子を確かめることすらせず、走り出した。

奥に進んでみると人影が見えた。

まるで鏡を見ているような自分とそっくりのそいつは、

「GTR4か。またいやみしにきたのか。」

「まあな。ぶつ潰してやるぜ。」

「ちっ。居候の癖に邪魔ばかりしやがる。」

このロボットは、穀潰しの家に住んでいる嫌味博士が、穀潰しに嫌味をするために作ったロボットだ。

能力面で全て穀潰しを上回つており姿かたち性格すら穀潰しそっくりだった。

普段穀潰しが探している物を隠すのがこのロボットの大半の仕事だが、いつもやって重要なところでも邪魔をしてくる。

善い人に家にいるタンクも同じロボットだが、彼女に比べあまりにもこのロボットは可愛げがなかつた。

「おい。お得意の念力練りこみでもやつてみる。」

これはもちろんいやみ。お互い同じことをしたらGTR4のほうが上に決まつてゐる。

こちらの力を8にも9にも見せて10の力を見せ付ける風車の理論だ。

だが・・。

「よし。やつてやるぜ。」

穀潰しが練りこみを始める。秘策があるのであるのだ。

「馬鹿な野郎だぜ。」

GTR4も練りこみを始めた。両者とも不敵に笑う。いつも場合どっちも負けるとは思っていない。  
しかしこのすぐ後にはどちらかが負けているのである。

「サイコカッター！」

同時に放つ。穀潰しのカッターはやつのカッターにかき潰されその体は真っ一いつに。

その後穀潰しの体は笑いながら消える。

「ひゃっはっはっは。」

「これは一体・・?」

「サイゴグリップドン。」

GTR4の至近距離で何度も衝撃波を打ち込み。その後持ち上げて地面にたたきつける。

「本当はVS善い人の切り札にとつておいた技だったがお前に使つてやつた。名誉に思つんだな。」

GTR4は

「ひゃっはっはっは。」

と笑つて消えていく。穀潰しはまさかそんなことは、と思つた。

後ろを振り返るとGTR4は攻撃の態勢に入つていてる。

「サイゴグリップドン。」

「ぐおおおお。」

穀潰しあはとつさにバリアを張つたが効果はなく、難なく攻撃が貫通してきた。

俺はもう体が動かなかつた。

「なぜ使える・・?」

「俺はお前が分身を開発する前からすでに分身を開発していた。お前が新技だと思っていたものは所詮お前の「ペーーである俺の物まねにすぎなかつたということだ。」

「く・・。」

穀潰しあはぐうの音も出なかつた。学習能力すら口の上とは想像以上だつたのだ。

「ざまあねえな。オリジナルさんよ。」

余裕の笑いでタバコを取り出す。穀潰しあしめたと思つた。こうなれば勝ちは同然だ。

GTR4はタバコをふかしてふーと吐き出す。

GTR4はなぜか様子が変わり、プシュー・プシューと音を立て始めた。

「つぎやーー!」

バタン。ボギヤーン!

GTR4は倒れて、自爆した。

やつぱり壊れた。GTR4はなぜかタバコが好きなのだが、そのた  
びに  
壊れるのだった。

「ボコボコになってしまったが何とかなったな。」

どうやら実験隊は地下にいるようだ。

地下に進むとカプセルの中に実験体がいた。

周り中実験体だらけだった。

「ひでえ。なんてことをしゃがる。」

穀潰しは畠然とした。とはいえる自分も似たような状況になつたことは  
あつた。

穀潰しがそちらのほうに近寄るつとすると電話が鳴りだした。

第十七幕外伝 穀漬しの冒険3（前書き）

ゲームのほう、更新滞っておりますが、そろそろ穀漬しをだしていく  
れるそうです。

## 第十七幕外伝 穀漬しの冒険3

はつかり言つて放つておいてもいいのだが、嫌な予感がした穀漬しは電話をとることにした。

「ふおふおふお、どうかね？わしの嫌味は。」

「てめえは嫌味博士ー！」のあつさまはお前の仕業か！』

「なあに、わしの嫌味はこれからじゅよ。」

「なに？」

『オオオオといづ音を立てて、機械のアームにカプセルが回収されていく。

「あつなんだ！」

「ふおつふおつふお・・・。」

やがてカプセルは全て消え、奥にあつたシャッターが開き、巨大なロボットがやってきた。

その大きさは、50㌢、とてつもなくでかい。

穀漬しもあわあわしてゐる間になんとかすればいいのだが、善い人ではないので彼にそんな対応はできない。

阿呆のようにあわあわしている間に、ロボットは穀漬しに近づいて

く。

その間律儀にも穀潰しは電話を握つたままだ。

「こいつはGTR4なんかの欠陥品とは違ひや。」  
「いやでも主も終わ  
りじや

のう。ふおつふおつふお。」

「黙れ！嫌味！てめえは俺がぶつ飛ばす！」

穀潰しはそう言い放ち、受話器をたたきつける。

穀潰しは、念力を一点に集中しすさまじく鋭利なカッターを作った。

（ようは足を切り落としまえぱいいんだ。）

「サイコカッター！」

具現化したカッターは空気を切り裂き、奇妙な音を立てながらロボットの足にあたるが、なんの効果もなかつた。

「馬鹿な・・・俺のカッターが。」

ロボットは、背中から誘導ミサイルを100発ほど穀潰しに打ち出す。

「うおおおおー！」

穀潰しは、一瞬で空中に100ミサイルを追つてくるミサイルを衝撃波で撃ち落とす。

ミサイルの動きは、複雑だつたがメトリーと勘で、次々撃ち落していく。

そのことに集中しすぎてロボットの接近に気付かなかつたのは穀潰しのつかつといつよりは、ロボットの性能の高さによる。

ロボットの振り回し攻撃に穀潰しはもろに当たるが、ひとつとに痛覚を遮断し、それをむしろ攻撃の起点にした。

懷に入ると、ロボットは田から破壊光線を出してきて穀潰しに直撃したが、穀潰しはオーラに包まれ、その攻撃を遮る。

「潰れろー！サイゴギガス！」

これは非常に密度の高い、圧縮した念力の塊をぶつける技で、直径1m程度の玉である。

放つと1mくらい継続し、爆発力はない。

破壊性を追求し機動性が全くないため、対人戦においては、全く使えないが、洞窟を作つたりと用途は案外多い。

穀潰しのサイゴギガスは、ロボットの装甲を初めてへこませた。

ロボットにはアンチサイキック装甲がもちいられており、穀潰しといえど容易ではない。

さらにカプセルを傷つけないように戦うしかないのだが、アンチ

サイキックが作動してゐるせいで、穀潰しは正確にカプセルの位置が分からぬ。

サイコギガスはロボットの胸部を直撃した。

これには、ロボットの機能を低下させる狙いがあつたが、思ったほど戦果は得れなかつた。

いわばこの奇襲は失敗に終わつたといえる。

「ちい！」

ロボットの攻撃は苛烈さを増した。

穀潰しに對しては一撃より手数、ロボットは学習によりそれを習得し多段攻撃をしかける。

徐々に削れていく穀潰し。

（くそつ！俺もここで終わりか・・・。）

いくら穀潰しでも無限ではない。

しかし「こ」で弱氣なことを考へても状況は進展しない。

だがこの時、奇跡が起つた。

車のエンジン音とともにガスがさつそつと現れ、ロボットのほうへ飛んでいく。

「穀潰し！きたぞ！ひやつはー！」

「遅いぜ！ガス！」

「ひやつはー！フレオフニックス！」

燃えた車がロボットを狙い撃つ、ガスは車から飛び降り自分の体に火をつける。

「続けてガス・フェニックス！Wフェニックス・エクス！」

車とガスは燃えながらロボットに体当たりし、その反動でロボットの攻撃は一瞬弱まる。

(ガスのおかげで何とか練り込む時間は稼げたが、コメットのほどの大技には時間が足りないし、カプセルの位置もまだ分からない。どうする？それにしてもあいつは車あんなにしてしまっていいのか？)

そう考えている間にも、ミサイルやレーザーが飛んでくるので、結局防戦一方になってしまう。

やがてガスが起き出し叫んだ。

「安心しろ、穀潰し！助つ人を頼んだ！」

(助つ人だと？)

そう思った刹那、穀潰しの目の前の攻撃が全て遮断される。

何だが残像のように見えるそれは、車椅子に乗っている害児であった。

害児は、レーザー やミサイルを全て、捌き、逆に車椅子からミサイルを出し応戦している。

「害児のやつ！余計なことを…」

が穀潰しはそういういつつ、思いがけない援軍にうれしくなり意氣を取り戻した。

「穀潰しさん！あなたの狙いは正しい！あのロボットの胸部に透視を妨害している装置がある！」

「そりか！よし！そのまま対応してくれ！俺は練り込みに入る！」

「私では、装置を誤作動起こすまでの威力が出せません！しかし安心してください。まだ私たちには心強い仲間がいます！」

「善い人か！」

ドカンという爆発音とともに、地下の天井が破れ、白い雷が降ってきた

。それはよく見なくとも善い人であった。

「貫け！ストライク・ツイスター！」

善い人の上空からの強襲はまるで巨人の一撃、ガスなんかのお遊びとは格が違った。

初めてロボットはその全体がぐらつく。

その時穀潰しは不思議な感覚に包まれていた。

自分は一人ではない。穀潰しの孤独な心は氷解し、澄んだ気持ちで練り込みをする。

害児は前方で穀潰しを守つゝその気勢を感じていた。

(穀潰さんの力の質が変わった? これは一体…。)

穀潰しの手には、巨大な黒い刃が生じている。

「これが…完全版キリロ。」

「穀潰さん! 装置はまだ!」

「いや見える。」

「え?」

穀潰しは、害児を追い抜き、ロボットの攻撃は全て黒いオーラに吸い込まれていく。

「すうい・・。これほどの力とは。」

害児はその有様に感心する。

「これでタイムオーバーだ!」

穀潰しは掛け声とともに、刃を振い、まるでロボットが紙つべらのように切れしていく。

そして正確に、カプセルの位置を透視し、カプセルには傷一つつけることなく、ロボットを沈黙させた。

ギャラリーがわいた。

「やりましたね！ 穀潰しさん！」

「やったぜー！ 穀潰しー！ ひやつはーー！」

「俺ならこのくらい当然だぜ。取り立てて騒ぐまでの」とではないな！」

途端に威張り散らす穀潰し、はっきり言つて口無しだ。

穀潰しは、カプセルから人を救出してる善い人を見つしたがなにやらもめているようだつた。

皆を救つた英雄として、自分が一言言おうと、穀潰しはその一群に近づいた。

「おう。みんな。これで自由だ！今まで辛かったがこれからは自由で生きれるんだぞ！」

穀潰しがそういうと、10歳くらいの男の子が穀潰しに對しごつごつた。

「いやお強いですね。貴方は確かサイキッカーゼロでは？

悪い噂しか聞いてなかつたので、今回の件で見直しましたよ。」

「は？ 何言つてゐんだお前。」

穀潰しは啞然とした。

・・・『ひせりあのロボットで、自分と戦うアーレーニングだつたらしいな。

穀潰しはようやく氣付き、ああやうか今回せりひこつ嫌味か。

といひまで体よくあしらわれたら怒る氣持ちすらわかなかった。

そんな気持ちで、穀潰しは一軍を眺めていふと、これを機会に組織を抜けようとこゝものと、自分をもつと高めたいとこゝものが争つていた。

穀潰しはそんのは勝手にしたらい。『うして他人に同意を求めるがるのか理解できなかつたが、どうしたらいいか穀潰しにすら聞いてきた。

そんなこと穀潰しがなんていうかなんて分かりきつたことない、

「おひおひ、そりゃあお前。よく考へても見る。俺はお前たちを救うためにこゝまで来たんぜ。」

これからは自由にしてもらいたいにまつてこゝにきまつてこゝにいるじゃないか。」

すさまじく茶番に展開で話にならない。

穀潰しの頑張りは一体何だつたのか、さつきまでの感動はどうこつた

のか。

穀潰しはやるせない思いだつた。

サイキッカーたちは善い人にも、しつこくどつしたらしいかを聞いていた。

初めは関心なさそうに、知らないとか、分からぬとか、善いことをしたらしいとか言ってた善い人であつたが。

具体的にいえとか無責任なことを言つなどいう言葉に、ついに怒氣を発し、

「善い人を馬鹿にするものはゆるせーん！」

という言葉と共にS・アッパーをかまされ、サイキッカーたちはふき飛ばされ、善い人が天井にあけた穴に吸い込まれ、一度と戻つてくることはなかつた。

穀潰しはその様子を見ても心底どうでもいい気分だった。

穀潰し達はその後、施設をくまなく破壊し、ガスは金田になりそつなものがあさつていた。

その有様を害児はすごい形相でにらみつけ、ガスがあさつている横で

「おのれ、火事場泥棒めが！卑怯！卑怯！」

などと大声でののしつてた。

それに対しガスは、

「へへつ。害児さん。あつしら商人でつせ。」

とやり返していた。害児は顔を真っ赤にして、卑怯卑怯と連呼していた。

手を出さないのはおそらく善い人や穀潰しがいるからだろう。

害児は彼らの心証を悪いものにしたくはない。

この二人は役に立たず、破壊活動は穀潰しと善い人で行い、

地下施設を潰した後、地上の施設は穀潰しがサイコエンドという最強技を放ち、壊滅させた。

「じゃあ俺は帰るぜ。今日はありがとうな。」

穀潰しは援軍に感謝した。

しかし、ガスと害児はそんなことを聞いておらず、まだ口論をしていた。

害児のしつこさすがのガスも閉口し、多少迷惑顔だった。

自然と善い人が口を開く。

「穀潰しもまたどんどん頑張って私みたいに善い人になるんだよ。」

「はあ？別にお前みたいになりたくてやつたわけじゃねえよ。早とちりすんな！」

「何だつて私を馬鹿にしているのか！」

なぜか激怒する善い人。頭が悪くなければいいやつなんだがと穀潰しは思ったが、これが善い人なんだからしようがない。

「別に馬鹿にはしてねえぜ。ただ・・。」

「うるさい！そこまでだよ！この悪人め！善人たるこの善い人が天誅を降す！」

「やれやれ。最後の一戦は一番手！」わそうだぜ！』

どこか嬉しそうに穀潰しは言い放つ。

結局一人の戦いは驚いたガスと害児に止められ、ようやくこの穀潰しの長い戦いは終わりを告げた。

## 第十八幕 困つた人

戦いは終わった。いや戦いといえるものであったのかわからないが、ともかくこれで一連のガスと害児の騒動は、とりあえず一つの峠を越えたのだろう。

害児は、携帯していた予備の木の義足をつけ、それでどうかと思案顔になつた。

といつのも、田の前に転がっている芋虫のようなやつに財団を譲つてしまつたので、一文無しになつてしまつたからだ。

とはいへ昔の職業柄野宿にはなれていた。

考えてみればおかしな話であつた。

一文無しになる決心をしたのはガスであつたのに、気がつけばガスは億万長者、

害児は乞食となつてしまつたのだ。

こんな馬鹿な理屈は本来ないが、害児にはちょうどいい休養なようにも思えた。

「やはり、柄に合わないことはするものではない。人間たるもの大地でねつじろがるのが、一番の幸せとこうものです。」

「害児さん。私の家においでよ。」

「ええー?」

害児は驚きのあまり、3回もジャンプした。この人は本当に義足なんだろうかと思いたくなる。

「善い人さん。私の真心がどうあなたにも通じましたか!私は感動しました!」

「害児さんを助けるのはいいことに違いない。」

「いや今日はいい日だ。やはり真心といつのは継続して行けば、どんな鈍感な人間にも通じる。こんなうれしいことはないではないか。」

善い人は上機嫌で、語る害児をつるさうな顔でそっぽを向きつつ、足早に家に急いだ。

害児は遅れずそれについていき、善い人に自分がいかに善い人に今まで恩をかけてきたかを恩着せがましくくどくどと説明していた。

善い人はやつぱりつれてこないほうがよかつただろうか、ここいらでほつぽり出でつかと考えていた。

やがて善い人はうんざつしつつ、ただいまを言い放ちすぐに布団の上にダイブした。

もつ知らん。何を言つても私には関係」」ぞらんといつ態度だ。

害児は善い人の態度に気をよくした。

「おや？あなたは確か、ロボットの。」

ふと気がつくと、害児に向かってコップを差し出している女性がいた。

善い人の家の居候のタンクだ。

一応顔見知りであったが、いつもやつて面と向かいで呟いて話すのは初めてだ。

「えーと、害児さんでしたつけ？大体な名前ですよね。はいどうぞ。」

害児は善い人の教育はなかなか行き届いていると感じ、コップを受け取った。

次の瞬間、害児はタンクに向かってコップの中のものをぶつかけていた。

「い、この王者たるこの私に水をよこすとは何事か！」

「ありやつや、びぢやびぢやだあ・・・。」

そういうが害児も善い人が家に来たときなんぞ、水すり出さない。

まあそれはそれで事情があるから仕方ない話でもあるのだが。

外からぶおんぶおんといつ声を上げ、部屋に突っ込んできた車があつた。

もうひるんそれはプレオで当然のことながらガスが乗つていた。

ガスは善い人の家をだめにしておきながら、そんなことはまったく  
気にも  
かけない様子でこう言い放つた。

「王者の名をかたる」ごみ虫がおつたぞーそれものども、セヒニ<sup>シニ</sup>いる  
ごみ虫  
を叩き潰せ！」

じやーん、じやーん・・。

どこからともかく太鼓の音が響く。

ワーッと<sup>ヒヒ</sup>歓声が響いた。

「ふん！雑魚が何人来よつてどりつてこいつともないところのがまだ  
お分かりに  
ならないのか？」

「減らす口もそこまでこしてもうおひ。害児さん。いや害児。王者  
たる

この我輩に不可能はないのだ。」

タンクはいきなり水をぶつ掛けられ、車に家を潰され、太鼓の音にびびってしまっている。

善い人をしきりにゆすり起こしているが、善い人は寝た振りをしていた。

「わわ・・善い人ちゃん。善いことをするチャンスだよ!」

その言葉を待っていたとばかり、善い人は飛び上がり、ガスの前で仁王立ちして、指をピシッと指差した。

「そこまでだよ!」

「ほほう。これはこれは誰かと思えば善い人君。今となれば我輩と善い人君は身分が違うのだ。

対等に口が聞けると思つては困るのである。」

「善い人さん、下がつてなさい。これは私と彼の問題です。」

「なに! 善い人を馬鹿にしてるのか!」

なぜか善い人は害児にむかつてどなつた。

害児はその剣幕に面食らつたが、それを見てガスは愉快そうに手をたたいた。

「それ見たことか。害児の人徳などそんなものだ。」

「うぬ！ガス！」

「何か文句でも？文句なら善い人君に言つてくれたまえ。ひやつは——！」

ちなみに呼び出されたガスの部下ビモハ、突撃合図がなかなかこないでの

だれてきた様子だった。

「ところでガスさん。今日はなんのよつかな。引き取つてもらひ『  
みはないよ。』

「いや善い人君。これは我輩にとつてまったく不本意なことなのだ。  
何しろ王者の名をかたる不屈き者がいるといつことで、まったく我  
輩として

も迷惑千万なことなのだ。

もちろん我輩としても、善い人君とわざわざ事を構えようといつ気は  
毛頭ないのだ。」

「家を壊しちゃつたくせに……。」

タンクはぼそつとつぶやき、その言葉はガスの耳に入った。

「ああ・・・。わかつたわかつた。おいつ！」

ガスは部下のほうに顔をくいつと向けると、部下は害児の前に金を

ぽんと

放り出した。

害児はそれをみてふるふるしだした。

「これは何の真似だ？」

ガスはニヤニヤ笑うだけで答えない。

「やうかわかった。よくわかった。つまり死にたいといふことか。」

害児が一步踏み出すと、タンクが害児を後ろから抱えて止めた。

「何をするー離せーはなさんがあーー！」

害児は見苦しくとつみだし、手をばたばたさせた。

ガスはそんな害児の様を一瞥した後、善い人に挨拶をした。

「では善い人君。またいつかお会いしよ。」

「ガスさんも元氣でね。」

ガスたちは結局何をしにきたのかなぞであつたが、ガスたちの姿が小さくなつたころ、タンクはようやく害児を解放した。

「おのれーおのれーこの私がこんな惨めなことをー。」

「害児さん。あんな人にかまつちゃダメよ。もう忘れよう。」

「・・・。」

「タンクさん。食事にしよう。害児さんは疲れたんだよ。」

「そうだね。じゃあ用意するよ。」

タンクはオイルを、害児と書い人には水を用意した。

害児は用意された水を一気にぐつと飲みこいつた。

「おいしい水です。」

今度は、タンクに水をぶつ掛けたりしなかつたためにガスがでてくることもなかつた。

それから数日がたち、害児はすっかり穏やかな様子になつた。

「これが人間の暮らしこうものだ。私は久しく忘れていた。」

家は壊れたままなのでそこから日光が差し込んでいた。

それにはたりながら書い人やタンクとたわいないおしゃべりや変な遊びをする毎日だつた。

「思えば私はこひう生活を求めて軍隊を抜けたのであつたな。」

害児は、今まで軍の追つ手を遠ざける工夫をするのに精一杯で、自

分の生活

にまで手が回らなかつた。

その点、ガスには感謝してもいいくらうかもしけなかつた。

しかし世界が崩壊したいまですら、おそらく世界で唯一戦争をしている地域、そこが書児の故郷であつた。

書い人やタンクと違つて、書児は生身の人間なので生活するのに何かと入用だつた。

そういうのはタンクが持つてくる「みを売れば、有り余るほど」の金が手に入ったので問題はなかつた。

不意に書児は、いいことを思いついた。

それは書い人とタンクにとって迷惑な申し出だつた。

「そうだ。これからは私のことをお姉ちゃんを呼んでください。」

「めんどうかいなあ。書児さんは書児さんだよ。」

タンクにいたつてはもつと率直だつた。

「嫌です。」

これには書児も多少ひるんだがそつは問屋があつた。

「なぜですか？私はあなたの方より年上ですし、姉を呼んでも差し支え  
ないと思  
いますが・・・。」

「ううにうとうとこうかどううううときでも、害児はしつこい。

このときもすうじつこく食い下がった。

「でも害児さんは私のお姉さんじゃないし・・・。」

タンクの正論も無視して、最終的には床に転げまわって駄々をこねた。

善い人とタンクはその有様に顔を見合させて呆れたが、仕方ないの  
でじゃあ  
一日だけと氣乗りしない返事をあげた。

「では、お姉ちゃんがあなたたちに服を買つてあげましょう。  
まあー、こまめしょー！」

タンクも善い人しぶしぶついていくことにした。

害児はハエを見かけると虫をかけた。

「やあ、ミルキーちゃん。今日もう機嫌ですね。」

ハエは迷惑そうにうごめきながら飛んでいった。

「変な名前つけないでほしのだけど・・・。」

悪い人は内心、害児の横暴ぶりに対してかなり切れていたが、悪いことをするわけでもないのに切れるわけにはいかなかつた。

悪い人は変なスイッチに触れない限りは、善良な人間といえば善良な人間なのかも知れなかつた。

おお張り切りの害児は、先陣を突つ切り悪い人たちは迷惑顔で仕立て屋へむかつた。

店についた後も害児は独りで大騒ぎをし、仕立て屋の店主セリルは大変ねと善い人に話しかけ、善い人はこれも善いことだからねと肩をすくめた。

善い人の例の意味不明な収納能力がある服はここで作つてもらつている。

セリルは、実力があるサイキッカーであると聞いたことがあるが、  
善い人に  
とつてはどうでもいいことだつた。

セリルにはサイココードティングという技術がある。

服に念力を練りこむことで、攻撃防御どちらにも効果があるという優れものだ。

単に念力の練りこみと云つても、穀潰しのように馬鹿の一つ覚える。

衝撃波の

連射だけでなく、才あるものが工夫して使うといひこいつともできる。

それでこしらえた服なのである収納能力があるのか、善い人が変なだけなの  
か分からぬが、セリルが作った服だから云うのは多少は関係してゐるに違ひない。

阿呆のように服をたくさん買つた後、家に帰つてみると、義賊のアツチラがいた。

善い人とタンクはもうくたくただつた。害児だけが元氣ではしゃいでいる。

アツチラは、ふてぶてしい顔で善い人を待つていたが、害児の姿を見かける

と、背を丸くして、顔を隠した。

ぶるぶると震えている。

善い人たちとは、しばらく氣づかなかつた。善い人にとってはどうでもいいし、害児にしても眼中にない。

タンクは天然で氣づかないで誰も氣づかないのであつた。

しかしゃがてタンクが気づいた。

「あれれー？ なんだらうこれ。 善い人ちゃん、お姉ちゃんちょっときてみてよ。 変なのがある。」

善い人と害児はしげしげと丸くなつたアツチラを眺めた。

「妙なものですね。 はてはてこれはいつたい・・・。」

害児はこれは事件だぞといわんばかりの口調でもつたいぶつた。

そこを善い人はこともなげにいった。

「これは人間だよ。 害児さん。」

「おお・・・。 それはまさに。」

善い人にしては珍しい正論だが、害児は大仰な演技をやめなかつた。

「お姉ちゃん。 もうそれはいいから、この人。 きっと善い人ちゃんに用事があるんだよ。」

害児は善い人からは結局姉扱いしてもらつてないが、タンクからしてもらつてるので満足だ。

「どうしたんですかー？ おなか痛いんですかー？」

アツチラはぶるぶる震えるだけでまったく返事がなかつた。

「ど」かで見た」とある人だな。」

善い人は思い出すのに必死だ。

「それにしても」の人は、なんだか震えてるよつですね。これについて二人はどう思います?」

「寒いのかなあ?」

「寒いのかもね。」

「確かに寒いのかもしれません。外はいい天氣ですが。」

「でも」の家に毛布とかはないし、布団は外に干してるから。」

「タンクさん。」には私たちで何とかしよう。それが善いことだよ。

」

「分かつたよ。善い人ちゃん。」

「タンクさん。火だせる?湯を沸かそうよ。」

「おおさすが善い人さん。天才です。」

「頭いいね。私じゃ思いつきもしなかつたよ。そんな」と。」

タンクは腕をぱかつとあけ、コップを火であぶしてぶくぶくにした。

「これだけぐつぐつなら大丈夫だね。そりやー！」

「あつー！」

善い人は、熱湯をアツチラにかぶせた。

「あつちーー！」

アツチラは飛び上がった。

「何をするか！」

当然怒った。

「寒がつていたから。」

「寒いわけじゃない。そこにいる害児が怖かつたから震えていただけだ。」

「なぜ私を怖がるんです？」

「はんつー！よく聞け。俺は義賊のアツチラさ。善人組織四天王の一人のなあ！」

「なに？ 善人組織の？」

「知ってるの？ 害児さん？」

「善い人たち、あなたとの間での組織の支部潰したばかりじゃないですか。」

もつぶれたのですか。」

「まあそういうだな。これで分かつただろう。俺がびびっていたわけが。」

「アッチラをとせり、安心してください。別に今の私はあなたがたをびり

いつといつもつはあつません。」

「そういうこな。何しろ俺は5時間もこのままひつて置かれたのだからなー。」

アッチラにしては凄い不覚だが、それだけ害児が恐ろしかったということがなのだね。」

アッチラは、安全と知るや否や饅舌になつた。

あぐらを組んで腕を捲し上げたり、膝を手でぽんぽんしながらかつていた。

「俺は確かにあんたに一度敗れた。だがこの話はまた別問題だぜ。」

」

「ふーん。」

「善い人々は、アッチラを無視してみんなで絵を描き始めたが、アッチラも

それに参加しつつ、やうやく話しかけてきた。

「なんにせよ、あのガスって野郎はがめつこぜ。なにじるあこつこ  
独立されて  
商売上がつたりだ。みんなが文句言つてゐるぜ。  
ただ儲ければそれでいいともんじゃねえんだ。みんなのことを考  
えて  
もらわないとな。」

やたらみんなみんなと強調する。義賊感をアピールしているのだろう。

「別に俺はお前たちじどりひこでもらいたいと思つてこにきた  
わけじや  
ねえんだ。  
ただ俺が負け犬のままのよつて思われるのは我慢ならなかつたから  
な。」

こんな風に事前予告するから、前回ガスにも襲撃がばれていて計画  
が失敗  
したところに何の反省もしない男であった。

「とめるなよ。とにかく俺はやつてやるぜ。やつの暴挙には義憤を  
発せざる  
を得ないからな。やうだらひへんえつ？」

誰も返事をしない。絵を書くの熱中してこるのである。

「とにかく俺はやる。誰がなんと云つともな。男になやうなきゃ  
いけない

時つてもんがあるんだ。お前も善人を自称するなら分かるだろ？」「

アツチラはこの後も散々、身振り手振りを加えて語り、時々、動物の絵を

描いたりした後、善い人の家を出て行った。

その様子はガスの部下にしつかり監視されていた。

## 第十九幕 愚鈍な王様

ガスの万全の体制も、所詮アツチラの前では無意味だ。

この前は不覚を取つたが、そもそもアツチラは相当すばしっこいから、ガスなんかに構わず金田のものを盗み出すのは容易だ。

そもそもガスには害児のような威圧感がない。

だからアツチラはうまうまとガスから大金をせしめた。

ガスは、その様子を見て憤慨して部下たちを集めどなつた。

「なんとふがいないのだ！我輩の部下どもは…」

叱責された部下どもは不満げな顔であった。お前の指揮が悪いのだろうと  
いわんばかりだ。

ガスはますます怒つて、不満げな顔をしている部下の一人を呼んだ。

「そこの者、ちょっとこい。」

部下といふかガスが新しく大幅に雇つたじりつきだが、は無言でガスに近づく  
と、いきなりガスに頬を殴られた。

「我輩の力思い知つたか！」

いきなり殴られたごろつきは激昂した。

「俺たちは精一杯やつた！何で俺を殴る！」

「結果が出なければやつてないのと同じなのだ！ひやつはーーこのごみ虫じもめ。」

部下の一人が憤然と前に進み出て抗議した。

「殴ることはない！何で俺たちを殴るんだ！」

ガスは悠然と答えた。

「我輩の力を思い知らせるためだ！」

「横暴だ！」

「だまらつしゃいー！」

ガスと部下じもは見苦しく口論し、やがてガスは複数のごろつきに囲まれていた。

ガスは、そんなことはまったく意にかえさず、部下たちを挑発し罵つた。

我慢ならなくなつた部下の一人が、ガスを殴ったのを基点にごろつきはきたちは

ガスをふるぼっこにした。

「何をするー我輩は王であるぞーひーーやめてくれーー！」

黒服たちは、その有様に驚いたが見て見ぬ振りをした。

やがて気が済んだじゅつときは、「んとじゅつにられるかと言ひ残し去つて  
いった。

意識を取り戻したガスは、害児の元部下要するに黒服たちに向かつて罵つた。

「お前たちー何でとめなかつた！」

「私どもは再三申し上げたはずです。あのよつなもんたちを雇つことはないと。」

「下民が口を挟むなー我輩の王者の知略にけちをつけん氣であるかー！」

ガスは黒服たちにとつて害児よりはるかに使えにくくお人であった。  
いきなり、ガスが害児の地位にとつて変わったことはもちろん黒服たちも驚いた。

「首領はどうこうおつもつなのだわ！」

「お前にはわかるまい、しかしこれは首領の深いお考えなのだ。」

「なるほど。俺は頭が足りなかつたようだ。しかし首領の知略は神の領域に達している。」

「ああまさしく、首領の神算鬼謀は恐ろしい限りだ。  
さつと今回の件も何か空恐ろしい知略があるに違いない。」

黒服たちは口々に言ひ合ひ、害児を慕うこと数倍した。

そして、そういうことならガスに対しても、全力で使えよつと決心したのであつた。

ガスの手腕はすさまじく、数日で財団は大きくなつた。

前の規模の一倍だが、しかしそのせいであチカラの言つよつにみんなが迷惑してゐる節もあつた。

今の時代ただ儲ければそれが正義として通るわけでもない。

またじつときなども好んで雇い、館も以前よりはるかに豪勢にした。

ただ、ガスの弱点としてにらみがききにくいといつて點があり、それを補うためのじつときたちだつたが、あまり足しにはならなかつた。

おかげで、対外交渉において、害児の自治領に対する自治権に他国が干渉し始める事態が起つていていた。

他国とはもちろん害児の故郷だ。害児の故郷の地域以外、紛争を起こしている  
地域はない。

この地域だけが、前時代的であった。

害児としては、ある程度お金があればよかつた。

要するに故郷に対する備えがあればよかつたのだ。

ほかの地域にいたっては、貨幣が流通しない地域がほとんどで、  
による商業が成り立つのは、害児の故郷かここかくらいだ。  
貨幣

ガスと黒服たちがもめたころ、アツチラはお金を町でばら撒いていた。

多くの桜をしこみ、アツチラは英雄であり救世主であるということ  
を町に  
触れ回った。

町の人は感心なさげで、もらつたお金は害児のところまでわざわざ  
来て  
返しにきた。

アツチラは無駄骨だが、大得意だった。

アツチラは善い人に対し、いかに自分が善人か語つた後、機嫌よく  
酒を

飲みどこかへいつてしまった。

害児のところにお金が集まつてることを聞いたガスはさては  
と思い

、大急ぎで善い人の家に向かつた。

「この大盗人めがー我輩の金を返せー。」

善い人の家の前には金がうず高く積みあがつていた。

「これは我輩の金だ。誰にも渡さんぞー。」

ガスは見苦しく金を拾い集めていた。

善い人がそれを見て一緒に手伝つた。

害児はもはや何も言つことはなかつたが、しかし言っておかねばならないこと  
があつた。

「ガスさん。一ついいたいのですが、わが国の自治権が危うくなつ  
ています。

お金を溜め込んでばかりいないで、武器でも買つていただきたいの  
ですが。」

「つむさいー何を抜かすか、この盗人め。なぜ下民の分際で王たる  
この

我輩を対等の口を聞こえといつのだ。」

「・・・。」

「おじけづいたか！」

「ともかくこれ以上危なくなると結果的にあなたの大好きな商売もできなくなりますよ。」

「ふ、ふん！我輩はガ流である。その程度なんどもなるのだ。」

ガスは金を集めてそそくさと去つていった。

「やれやれ、困った人ですね。」

とはいひものの、害児のわがままも田に口に強くなつてきて、害児はすぐ駄々をこねて床に転がるので、それを見た善い人が、「ああまた落ちちゃつた。」

とかいにつつ車椅子に戻す日々であつた。

害児は害児で、ずっと放置されていると、

「早く車椅子に乗せろお。」

と大声でわめき始めるので仕方なく、善い人かタンクが車椅子に戻してやるのだった。

どうあってもこのままではすまないだろう。この生活はいつかきっ

と破綻  
するに違いなかつた。

## 第一十幕 戦いの鼓動（前書き）

ゲームのほう更新したようです。

今穀潰しの絵を描いてもらつてゐるようで、近々出でてくるみたいですね。

それとニコニコ動画で、ゲームの様子が取り上げられていましたので、よければそちらへも足を運んでみてください。

おそらく世纪末善い人伝説で検索すれば出でできます。

## 第一十幕 戦いの鼓動

「私はもう戦いたくはないのです。」

過去害児は、歴戦の戦士だった。

この国は広大だ。世界が終わる前から戦争をしており、それは世界が終わった後にさえ続いた。

なぜ世界が終わったのか。それは核爆発だといわれているが、真相にはテンマ・トキトが関わっているというのが専らの噂だ。

今の世界に核はない、人口も減り、人々が争うことがほとんどなくなつた。

世界崩壊の前は、国際会議が多く開かれ軍縮などをしていたが、崩壊後はほとんど意味がなくなつてしまつた。

テンマは、闘争をもたらすために、世界を崩壊させたが、実際起こつたことは協調であつた。

ともかく害児の地域は変わらなかつた。

害児は世界崩壊後、独立し、戦争地帯の国々を敵に回した。

これらの国は害児の裏切りを許さなかつたが、害児の力の前に沈黙することになった。

その害児であるが、父親が総大将であり、軍を抜けるかわりに足を失うことになったのだ。

「軍を抜けたいといつたのか？」

「そうです。これ以上私は戦いたくはないのです。」

「例の核の汚染の影響か・・・。しかしあ前は我が軍の柱、脱退を許すわけにはいかんな。」

「・・・。」

「分かつた。私とて將軍である前にお前の親だ。願いをかなえるチヤンスをやつてもいい。」

「え？」

害児は信じられないという顔をした。この人から親などという台詞がでてくるとは・・・。

「私に勝てたら、願いを聞いてやる。どうだ？」

将軍は、その体躯2mもある体の背中から背負つた二刀の大剣を引き抜く。

「何を言つておられるのですか？」

害児はわけが分からなかつた。なぜつてまともに戦えば、害児が勝つことは田に見えてるからだ。

害児が二刀の両手どれほど強いかといつと、テンマと戦つて抵抗するくらいといえばかりやすいだらうか。

「何故呆けている？構えよ。」

「本氣でやつていいんですね？」

それを聞き将軍は大声で大笑した。

「わつはつは。お前が本氣を出したらわしなど3秒も持たんよ。」

「え？」

害児は父の真意がつかめずとまどつた。一体どうこうことなのか。

「もちろん手加減してもらおう。当然だらう。お前は勝手に抜けるわけで

その上わしに怪我を負わせるつもりなのか？つまりお前はわし程度に負けるほど、弱くとも軍人は務まるまい。どうだ？ 分かったか？」

「は、はい。」

「では構えよ。」

手を抜けといわれても、どうしたらいいのか、おそらく父は適当に自分に怪我を負わせて、それでうまくやつてくれるのだろう。

この人も人の親なのだと害児は感動した。

「言つておぐがわしは本氣でいくぞ。でなければお前に傷を負わせることなどできぬいであろうからな。」

・・・逃げるなよ。」

そういうなり、殺意のこもった本氣の一撃が害児に降り注ぎ、害児はそのままの殺氣につい、体が反応してしまった。

害児に降り注ぐ左の刀の縦振りを、幻術でそらし、右の刀の攻撃を、手のひらで受け流した後、將軍の懷に入り、攻撃の態勢に入る。

簡単に懷を取られた將軍は、ふっと笑い両手を上に上げた。

その表情を見て害児はすんでのところで攻撃を止める。

次の瞬間すつころんでいた。

何が起きたのか、害児も人である以上いつでも冷徹な判断が下せるとは限らない。

このような混乱した状況の中、肉親の情もあり、体の自然な反応といつものあ。

ともかく害児は技を使つまでもなく、足を切られた。

前に崩れ落ちる害児を、将軍を抱きとめると見えたが、害児の体に向かつて発勁を放った。

害児は、ゴムまつのように後ろに吹き飛び転がっていった。

将軍は鈴を鳴らして兵士を呼んだ。

「はっ。お呼びでしょうか。」

将軍は害児のまうを指差しここにいた。

「あこのじみ虫を外に捨てておけ。」

やつこひനマントを翻す。

「待て。」

害児がそつ呼吸び止めるが、声にならない。のどもせりれてるよつだ。

内臓にもかなりのダメージがある。技が使えない強くて  
も害児は  
人なのだ。

善い人や穀潰しとは違つ。

しかし害児は叫んだ、魂のそこより叫んだ。

「ここで私を逃すと後悔するぞーーここで殺しておけーでないと次あ  
つたとき

死ぬのは貴様だ！」

なにやら口をパクパクしてゐる害児を兵士たちが担ぎ外に捨てていく。  
その様を皆の上から見下ろしながら将軍を笑つてゐた。

「そうでなくては、悪魔の末裔ルシファースは名乗れんな。魔人ルー  
ファよ。

いずれわしを食つか、食われるか。」

害児は、したからギラリと将軍をにらむ。

将軍はまた兵士に言いつけた。

「おい。あそここいのじみ虫を、ひとつと追い出さんか。早く大砲  
の準備  
をせよ。」

「ははっ。」

害児に向かつて砲撃が加えられる。そこで害児は意識を失った。

「後どうなつたかは分からないが、なぜか害児は生きていた。

「ふつ、つまらない昔話ですよ。ただそのことがあつたからこそ今  
の私  
があるわけです。」

「ふーん。確かにものすごいへビでもよくてつまらない話だね。」

「私には凄く悲惨な話に聞こえるのだけビ。」

害児は善い人とタンクと食事を取りつつ、気取ったポーズで昔話を  
していた。

「どうだい、壮絶だろ? とにかくりだ。」

「しかし、そもそも軍も動きかねない現状ではあります、ヒノキの  
村の統治  
状況が芳しくありません。」

ガスさんは儲けるばかりで、あまり村の維持のことを考えてないよ  
うですね。」

害児の心配していたとおり、軍の連中は、害児の引退を知り、なれば  
また軍に戻つた。どうだといつ話しをしていた。

害児の後継者のガスのやり方も彼らには不評であった。

おかげで彼らは揃ばかりしているのだ。

「将軍、どうですか。娘さんを軍に戻しては、彼女がいれば戦力になりますが。」

「それができればベストであらうな。どうやら人形遊びにも飽きたようすであるし、また軍に復帰してくれれば我が軍にとつてこの上ない喜びだ。」

「ははっ。将軍。ルーファさんが復帰したらやつの後継者なんといいましたか。ガス何キャラなど一瞬で蹴散らせますぞ。」

「いやいや、それよりも将軍も人の親だ。娘さんが戻られるといううれしいことに違ひないだらう。」

将軍はそういわれてにせんにやしている。

「まつたく諸君の言つとおり、わしも人の親として娘には手元に戻つてもらいたいところだ。」

とはいえ、ただの愚痴のいいあいだ。害児に戻つてほしこうはそれは確かだろうが、どちらかといつとガスの横暴に腹を立てているだけだ。

害児の国、朝田の国とこつのだが朝田の国は、はじめは小国であったが、今は大国となつてゐる。

現状にそこまで不満があるわけでもなかつた。

ただ害児の軍の復帰を本氣で実行しようとした男がいる。

かつて害児を崇拜していた男、名を騎士竜といつ。

今回の騒動は、彼がヒノキ村に来たことから始まつた。

騎士竜来襲のほうを、昔の部下から受けた害児は、憐れなほど取り乱した。

きっと自分を連れ戻しに来たに違いないと思った。

はつきりいつて、騎士竜は今の害児より強い。

「まずいですねえ・・・」これはまずい。とんでもない事態となつてしまい

ました。」

しきりに善い人のほうを気にしつつ、やや大きめ声で独り言を呟つ  
害児。

もちろん善い人が気にかけるわけないので、仕方なくタンクが対応  
すること  
になる。

「どうしたの？」

「どうしたですってーよくもそんなことがいえたものですねえーえ  
え？」

「この非常時に…」

「そんな非常時だつたんだねえ。」

「そうですよー・まつたくのんきな」とです。このままでは私は終わりです。

破滅なんですよー・」の私が！なんといつことだー。」

害児は善い人のほうに近寄り、善い人が漫畫を描いていたペンを奪いつつ吼えた。

「善い人さん、私が困つてゐるのに少し態度が冷たいんじゃないですか？」

善い人は迷惑そうな顔だ。仕方なく違つペンで漫畫を描いているとそのペンも奪われた。

「もう我慢ならんー！」

善い人はそんなにペンがほしいならくれてやるといわんばかりに、残つていた  
ペンをすべて害児に投げつけた。

「ひいー。」

害児は車椅子をこぎこぎとせつて逃げ出した。

その後害児はそわそわと落ち着きのない様子で、数日がたつた。

「やつは歩きですからね。決して乗り物など使いませんし、走る事  
だって  
ないのです。  
ポリシーがどうとか言つてましたが・・・、それにしても本格的に  
まずい  
ことになつてきました。」

騎士竜はいわば勝手に動いたのだが、それに乘じて軍の連中も、ガ  
スへの  
攻勢を強めた。

ガスとの会談を設け、ガスを集中攻撃した。

ガスは皮肉なジョークでやり返したが、いつの間にか兵士に囲まれ  
ており、  
幽閉されてしまったのだ。

「まつたくなんといつつかつさー・ガスさんほどのチキンがどうして  
むざむざ  
あんな見え透いたわなに・・・

と、ともかく今はそんなことより、騎士竜への対処です。  
いいですか、善い人さん。これは我が村始まって以来の危機であり、  
善いことをする絶好の機会なんですよー。」

「善いこと? でもなんかろくでもないことのよつたな氣がするなあ。」

「とんでもない! 私の言つとおりにすればいいのです。これを見て  
ください。  
お手玉です。」

これで善い人さんに修行をつけてあげます。

今ままの善い人さんでは、騎士竜には勝てません。」

害児はお手玉をたくさん使って、善い人と特訓をした。

時々善い人が切れて、お手玉を害児にぶつけ、害児も激昂し、お手玉を投げ返す、という意味も無残な見苦しい振る舞いをすることになり、せっかくの修行のあまり意味がないような感じであった。

そもそもお手玉でどう修行しようとかといふのか疑問であり、これは単なる現実逃避に過ぎなかつた。

そんなことに付き合わされる善い人はいい面の皮である。

そしてとうとう騎士竜がやつてきた・。

## 第一十一幕 前哨戦

話は少しさかのぼる。

穀潰しは、ガスがいなくなつてから、ガスの店にあがりこみ、そこを我が物としていた。

突然ガスが消えたことに関して何の疑問も抱かなかつたようだ。

これ幸いといわんばかり転居した。

そこで、穀潰しは、穀を潰しつつじるじるしていたが、なぜか大量にあつた穀が全部消えてしまつた。

もちろん穀潰しはこれはいやみ博士の仕業だと考へた。

でなければどうして一夜にしてあれほど大量にあつた穀がつぶれるのか。

穀潰しは怒り心頭に達したが、だからといってどうすることもできない。

「ひやつはー！汚物は消毒だぜ！」

穀潰しは景気づけにガスの家を吹き飛ばした後、地下の入り口を防ぎ、家を後にした。

廃墟街をぶらぶらしてたが、最近はいつも居心地が悪い。

何かあったのかパブのマスターに聞いてみると云った。

「ええ？おまえ知らないのかい。最近首領が変わったのさ。」

「やうなのか？首領は書兒のやつだろ？？」

「ところがそういうじやない。ガスとかいう間抜けに変わったのや。おかげでこっちは商売上がつたりだ。」

マスターはケツコと言い放ち押し黙った。

「そいつはそんなに評判が悪いのか？」

「悪いなんてものじやないのさ。やつが首領になつてからとこつも  
の、  
町のじるつけどもはいなくなるし、税金は跳ね上がるし、いいこと  
がねえ  
さ。」

「やうか。そいつは問題だな。」

「ああだが・・胸糞悪い話だが、中心街にいる連中はかなり発展し  
てるつて  
いう話だぜ。」

でも考えてみるよ。そんなに発展してなんになるつてんだ?  
そりゃ俺たちはある程度の商売を求めてここにやってきたといひね  
あるぜ。」

ここには闘争も自由もあるからな。

だがだからってなんで、今になつてそんなに必死に働くなきゃならない?

ガスつてのはとんだ大泥棒なのさ。」

「泥棒つてのはどういう意味なんだ?」

「だつてそういうの。俺たちの時間を奪いやがる。しかも最近聞いた話だと

軍事国連中を抑えられてないらしい。  
もうここも終わりかもな。穀潰し。悪いことはいわねえ。お前も少し  
考えたほうがいい。」

「なるほどな・。確かにお互に今後のことを考えないといけねえ  
みたいだ  
な。」

穀潰しは席をたつた。

このマスターの言つたことは事実であった。町じりつけがいない  
ため穀潰し  
はその日の食料に困つた。

ある日穀潰しがとぼとぼ歩いていると、車が煙を上げて近づき、穀  
潰しに  
思いつき煙をかけてきた。

「いせつ、いせつ・。なにしやがるー。」

「ん? 何だ? み虫がいたか。これはすまなかつた。それ駄賃をやる。

「

車に乗っていたのはもちろんガスで何かを投げようとしたが、その動作を

途中でやめ、穀潰しの顔をじっと見た。

「ビートかで見た顔であるな・・・。はて誰だつたか。」

「お前ガスじやねえか！ ちょうどよかつた。穀潰せりよ。」

穀潰しは、汚い身なりで車に乗り込もうとした。

ガスはその様子を見て顔をしかめる。

ビートからか妙な男たちが沸いてきて、穀潰しの前に立ちふさがった。

「うひうひ、貴様、ガス様の車に何故乗り込もうとしてるのだ。」

「何だてめえは、ぶつとばされたいのか？」

そこでガスがぱつと思い出した。

「ああー。」

ガスはポンッと手をたたいた。

「誰かを思えば穀潰しではないか。我輩は忙しい、お前みたいな暇人と付き合つてる暇はないのだ。」

「なにいってるんだガス。いいから穀くれよ。」

「ああ分かった分かった。ほら。くれてやる。」

ガスは穀潰しに向かつてパンを投げてやつた。

その後、もう用はないといわんばかりに車をふかし、また穀潰しに向かつて煙をかけた後去つていった。

「もぐもぐ・・うまい。」

穀潰しはパンを食べながら思った。

ガスのやつうだつがあがつてよかつたな。今まで散々だつたものな。こんな目に合わされたが、穀潰しは友情に厚いようだ。今まで散々助けられた経緯もある。

穀潰しは、しかしこじで食料を得るのは難しい以上移転を考えないといけなくなつた。

穀潰しの性格上まじめに生きていくのは難しい。

それでいて悪に徹してゐるわけでもない。

はつきり言つて穀潰しがこの地域以外で生きるのはかなり難しかつた。

かといつてこりこりしても仕方がない。

ガスはガスで穀潰しのことをおぼろけながら思いで出ていた。

「やういえばやうこう男もいた氣がするな。おい、部下。」

「なんだ？」

いかにも柄が悪い男がのそのそをちかづいてきた。

「パンの袋でも定期的にどじけいやれ。廃墟街のなんと言つたか。サイキックカー崩れの・・・」

「穀潰しだらう。ガス様とは昔仲がよかつたみてえだがな。結構有名なやつだぜ。」

「ああそれだ。そいつに屈けてやれ。」

「へへっ・・・」

「何がおかしいか？』

「いや珍しいこともある。ガス様が一銭にもならねえ」とするなんてな。雪でも降るんじゃねえか。』

「愚民が口答えするな。やつをとこくのである。』

「へいへい。」

ガスは次の瞬間そのことは忘れて、忙しげに何か別のことをしている。

その様子を見て部下は独り言を言った。

「本当に珍しいこともあるもんだな。あのガス野郎にもちょっとは人間らしいところが残つていたって事か。」

なにはともあれ、穀潰しはそのパン袋のおかげで、だらだらとした生活を続けることができた。

それから数ヶ月がたち、穀潰しは公園でパンを食べ水を飲んでいたところ、落ちていた新聞が目に入った。

そこには、ガスが捕まつたと書いてあった。

「軍人が相手か。」

さすがの穀潰しでも、正規の軍人相手はつらいものがある。

サイキックカーといつても、殺し合いに関しては素人だ。

穀潰しは穀を潰し終わるとゆっくりと目的地に向かい歩を進めた。

「なにをするか——我輩は王であるぞ——」んなどしてただで済むと思つたよ。」

ガスはいきり立ち怒りをあらわにし、周囲にいる見張りを怒鳴りつけるが、見張りは無視している。

ガスは鉄格子の中に閉じ込められていた。

一週間目。

「おこ、やけの『△△虫』。我輩と取引をしないか？いい話だと思つた。

」

ガスは、必死になつて見張りに話しかけるが、見張りがそれに応じる気配はない。

十日目。

「ぶつぶつ・・ぶつぶつ・・」

ガスは鉄格子の中を徘徊し、独り言をつぶやくようになった。

一週間目。

ガスはぼーっとしており、その表情には何の感情も浮かんでいなかつた。

しかしへ「ガスはふつと意識が戻った。

「な、なんだ。我輩の重装備はどうした?何で我輩がこんなところにいるのだ?」

気づくと、ガスの血漫の重装備がどこにも見当たらなかつた。

しかも、なぜか牢屋の中にいる。

ふと頭が重いのでさわってみると、なぜかガスは王冠をかぶっていた。

「な、なんだ」「いやへ~びりして我輩がこんなものを?」

ガスはとつあえず王冠を床に置き、赤いマントぬいでたたみ、床に置いた。

そこでまた一つ気づいた。びりやから自分は幽閉されたようだ。

その証拠に、兵士が自分を見張っているではないか。

ガスはだんだんと思い出してきた。書児に成り代わつていろいろやつてきた

ことを、まるで夢を見ていたような感覚であった。

「権力といつものは怖いものである。我輩は今回の件でよく分かつた。」

さて、とガスは考えた。状況は芳しくない。

何かあつたかと持ち物を確認したが、危ないものはすべて没収されたようだ。

といつてもガスには奥の手がまだいろいろと残されている。

胃の中にカプセルがまだ残っていたはずである。それさえ出せればこんなところ・・・。

ガスは、自分の手で腹をしたたか殴り、逆流させカプセルを出した。そのカプセルを解放されば、つまり自分以外の兵士はじびれて動けなくなるはずだ。

ガスしかわからない調合で作つてあるので、例え軍人といえども効く自身がガスにはあった。

さてそれで兵士はダウンしたわけだが、この鉄格子が問題だ。

何かないかとガスは探したがなかなか見つからなかった。

ガスはかつての自分を恨んだがどうにもならない。

そういえば・・とガスは自分の頭髪を抜いた。

その頭髪はぐんぐん伸びていく。

「」のワイヤーが残つていよかつた。やはり用心はしておくれものであるな。

鉄格子をワイヤーで切る作業をしつつ、ガスは装備の点検をしたが、ろくなものが残つていなかつた。

とりあえず兵士が持つていた装備を装着したが、こんなものではとてもこの要塞を突破することはできまいと思つた。

「ガストラゲタともあらうものがなんとこひざまであるか。」

ふとガスは穀潰しのことを思い出した。

しかし穀潰しといえども無理だつとも思つた。

自分がここに閉じ込められていることを例え知つていたとしても、軍人はそんなに甘い連中ではない。

ガスは元々武士だったのでその辺はよく知つていた。

「とにかくある部屋にたどり着ければ後は何とかなる。」

薬品などがある部屋にたどり着ければ後は何とかなる。

それまでが勝負の鍵であった・・。

害児は騎士竜の襲来を恐れ、ひたすらわめく日々であつた。

そんな害児を変える出来事があった。にわかに害児の元部下たちが害児をたずねたのであった。

害児はいぶかつた。

「どうしたのですか。あなたたち。今の主人はガスさんでしょ？何故ガスさんを助けに行かないのですか？」

黒服たちはみなうつむいていたが、ぼつぼつと事情を語り始めた。

ガスは新しく雇つたじるつきばかりを重宝し、自分たちをないがしろにする

こと。

功は認めず罪ばかりを責め、自分たちを見かけるたびに罵声を浴びせること。

今回でいえば、黒服たちはガスのお供をしようつと申し出たが、ガスはおまえたちがなんの役に立つといわんばかりにふんと鼻を鳴らし、手であしらつた

◦

それでいて、自分が捕まつてしまえば、どうして自分を助けなかつたとなじるのだ。

たまつたものではない。

害児はその言葉を一言も発せずじつと聞いていた。

「私たちの首領は首領だけです！首領！また首領に戻ってください！」

害児は嘆息しやがてこいつこつた。

「みながそこまで言うのならば、これは天命といふものです。どうして私一個人が天意に逆らえまじょうや。」

「それでは・・・」

「はい。私は首領に復帰しましょう。」

「おお・・。首領万歳！」

首領万歳とみなが狂喜した。その中にはなぜか書い人とタンクも混じっていた。

つまり徳のある人物は結局のところ、いかに地に伏していても、時代がそれを認めないという実例といえよう。

「しかし喜んでばかりもいられません。」

害児は善い人らをつれて、居城に戻った。

ガスの居城は取り壊され、元の歪な形の害児の城を工事していると

ころで  
あつた。

「いつごろ日本が来るであろうと、上事をする準備はいつでもできていたので、  
まさに電光石火の技であった。

書兒はそれを当然の」とへ受け入れ今に至る。

「情報によると穀瀆しさんが連合軍の艦に向かつたようですが、い  
くら  
穀瀆さんでも、連合軍相手に突破できるとは思えません。  
これについて何かよい策はありませんか?」

黒服たちは喧々諤々、さまざまな案を出したが、その中でこれはほと  
思つ案が  
あつた。

「今、騎士竜様と將軍が共に日本の國には不在です。はつきりいつて  
日本の國は

騎士竜様で持つていてもよく、装備や兵器は貧弱です。  
つまり今は日本の國は丸腰同然、そこをほかの國々に説くのです。  
そうすれば、連合軍は日本の國を攻め、騎士竜様は國に帰らざるを得  
ず、

また連合軍は、自然に消滅し砦を落とすことは容易となります。」

その言葉に別の黒服は大いになじつた。

「つまり汝は、首領の故郷が攻め滅んでもいいといわれるか!」

「やつはいつておおりん、しかし現状ではこれが最上の策だ。古の何とかはどうたらどうたら・・・。」

害兎は一通り黒服たちの話を聞き流した後いついた。

「先ほどの黒服の話、まったく私の考えと同じです。」

「では?」

「あなたたちは各國を説く使者になつてもらいます。皆は善い人さんが直々に攻めましょ。」

善い人は、ピクリと動いた。

「善いことをするつてことだね。」

「やつこいつです。もううん私もお供します。」

善い人様と首領なら間違いあるまいとみなは頷きあつた。

頷きあいはしたが、騎士竜のことだけが心配だつた。昔の害兎なら遅れを

とらないだらうが、足がないことを考へると、不安はぬぐえない。

「騎士竜様の動向だけはくれぐれも注意してください。」

「大丈夫です。やつは馬鹿ですから乗り物を使わないのです。ですからその歩みも遅いでしょ。」

「さすが。首領の智謀は神の領域です。」

黒服たちは害児を慕うこと数倍した。

さて、穀潰しだが、すさまじい銃撃の嵐に見舞われ、さすがに攻めあぐねいていた。

「ぐおおお・・。」の俺は不死身だー！」

銃弾を編みながらランダムスフィアを使い、一角を崩すがあまり意味がない。

敵は遠巻きに銃撃をするだけであつた。穀潰しがデーターにない高位のネームもちと警戒したのだ。

サイキックカーの最大の強みは機動性にある。テレポートこそサイキックカーが強いとされるゆえんだ。

連合軍にもサイキックカーはいたはずで穀潰しがテレポートが使えないということを知っている者もいるはずだが、軍の方針に従つているようだ。

彼らの大半はサイキック組織の傭兵で、仕事以上のことをする気はないらしい。

やがて、陣がざわめいた。連合軍を指揮する將軍はつづたえた。

なぜならほかの国の指揮官たちが國に急変が起きたから帰るとい  
だしたから  
だ。

「どうしたことだ。これは害呪めが何らかの策を施したに違いない。

」

このような大規模な策をうてるのは、大陸の軍人以外なら害呪しか  
いない。

さすがに將軍は慧眼であったが、その策の全容はまだつかめていな  
い。

穀潰しは、いきなり連合軍が次々とあらぬ方向へ進むのを見て啞然  
とした。

「どうなつてやがる？」

穀潰しの後ろからその声にこたえるものがいた。

「これが王者の徳というものです。私の徳に恐れ入つて軍を引いた  
のでしよう

。」

穀潰しは背後のいきなりの声に驚いて振り返った。

とたんに苦虫を潰したような顔になつた。

「お前ほど、王者の徳から遠い人間はめつたいねえよ。」

「これは痛烈な。私たちは援軍に来たといいますのに。」

「援軍か。だがな。お前がやったのは、本軍まで崩す」とじやねえだろう。

現にほかの国軍はひいていくのに、田の国の軍だけどじまつっていたぜ。」

穀潰しにそういうことを見る田があるのかと害呪は敬服した。

「そのとおりです。よく見ました。」

「ああほら見てみる。田の国の軍のやつらまるで死人みたいになつてやがる。」

穀潰しのいうとおり、なぜか砦から人が押し寄せるようにしてでてきており、

その大半がよろよろとおぼつかない足つきだ。

「確かに・・・これは不思議ですね。」

「どうこいつとか分かるか?」

「私の徳に参ったのでしょうか。」

後ろにいる黒服たちは、その声に大きく頷いた。

しかし善い人だけはひそかに、自分があまりに善い人だから、悪人

たちは！」

つそり善い人になつたに違ひないと考えていた。

「あほか。あれはガスの仕業だぜ。つまり今が好機つてことだ。」

「なるほど。ガスさんもなかなかやる。」

「ああどうやら俺ががんばる必要もなかつたみたいだな。俺はもう帰るぜ。」

「いや、穀潰しさんに頼みがあります。」

いつになり害児の真剣な様子に穀潰しは、怪訝な顔をした。

「もう問題はないだろ？」「

「いえ、本当の敵はあんな雑魚たちではありません。騎士竜です。騎士竜は私を連れ戻そうとしているのです。何とかしてください。」

「俺に何の関係がある？」

「あなたにはずいぶん恩を『えたつもりですが・・・。」

「そんな覚えはねえな。」

「『』の私が『これほど頼んでいるのに？』

「ならなんだ？また暴力か？暴力で『』ときかせようつてのか？」

害児はためいきをついた。

「あなたは私を誤解しているのです。私は人を殺すのがいやでここまで逃げてきたのです。私はもう軍に戻りたくないのです。」

「おい、ふざけるな。虫が良すぎるぜ。口うる人を散々馬鹿にしておいてよ。

お前がどうなるうが俺は知つたこつちやねえぜ。ざまあみろ。」

穀潰しはその言葉を最後に去つていった。

善い人はその穀潰しの背中に目配せしつつ害児にこづいた。

「穀潰しは油断している。ここは善人の力を思い知らせないといけない。」

「いやいいのです。あの人もかわいそうな人です。それに今は、もつと大きな悪を倒すチャンスです。そうでしょう?」

「それもそうだね。あんなのに構つてられない。」

害児は後ろを振り向き鼓舞した。

「さあ、決戦です。大将を倒したものには褒美がたんまりですよ!」

集められた連中は、サイキッカー、善人組織の組員、悪人、ヒンヒンボットなどさまざまであった。

大半の連中は無理やり連れてこられた連中で、迷惑そうに顔を見合  
わせる  
だけだが、田をぎらつかせているものもなかにはいる。

害児の軍は、いきなり田の国の軍に突撃した。

田の国軍に応戦する力はなく、たちまち逃げ出した。

その際に、空砲を放ち、害児の軍の半分以上はそれに驚き逃げ出し  
た。

それに逃げ出さなかつた主だったものは、ビルで善い人と戦つたり  
一ダーニ各  
の男と、その主人の悪人のボス。

さらにドラゴンは頭を抱えて逃げ出し、山賊になつた隣町の元領主  
は意気揚々と  
部下を従え突撃した。

タンクは、戦車形態になつて突撃したが、穴にはまつて動けなくな  
つた。

アキラは、逃げ出しあしなかつたものの、後ろのほうで戦つている  
振りをして

いた。

アツチラも半乱狂になり、突撃した。

ハエはいつまでもなく無双の働きだった。

善人協会の組員、指揮官、補佐官は途中までは大声を上げて突撃したが、

やがて足が止まり、その場に座り込んでしまった。

無理もない、彼らは善人協会とはいえ民間人なのだ。

廃墟街の悪人たちも、ひやつはーとか言いながらバイクを乗り回していた。

あまり意味はなかつた。

害児は声を励ましみなを鼓舞した。

「それ！赤いマントをつけているのが将軍です！」

将軍はそれを聞き、あわててマントを脱いだ。

誰かがをそれを見て、マントを脱いだのが将軍だと叫んだ。

将軍は目立たぬように顔を布で隠すと、顔を布で隠したのが将軍だとまたどこからともかく声がした。

将軍は、生きた心地もしなかつた。

「将軍の背は高い。一番でかいのが将軍だぞ！」

致命的なことがばれてしまった。確かに将軍は規格外のかさだ。

やがて将軍は追い詰められた。

「善い人さん。ここは私にやらせてください。私は彼に借りがあるのです。」

「害児さん、いいとを独り占めにするのはよくないな。」

他の害児の兵隊たちも不満げな顔だ。これではがんばった意味がない。

「お願いします。」

害児は頭を下げた。どこかで土下座しろーという声が聞こえた。

害児は一瞬で顔を上げ声のしたほうを見た。

アツチラはみんなの背後からその言葉を発したのであるが、害児と目が合い、

うずくまつて震えてしまった。

害児はあやつ・・・！と思ひ小さな声で、

「顔は覚えたぞ。」

とつぶやいた。

善い人は仕方なく害児に功を讓ることにした。

「害児さんにも善い人になるチャンスをあげよう。でも特別だよ。」

善い人は清水寺の舞台から飛び降りるような思いで、そういった。

「（）」温情感謝します。」

害児は將軍と相対した。

「父上。何年振りでしたか。」

將軍は、害児が一人で戦つと見て、にわかに生氣を取り戻した。

「やあ、我が娘。ますます女ぶりをあげたではないか。」

將軍は努めて明るくそうこつた。最早この一時をしのぐには、害児をどうにかするしかない。

「両足がなくてですか？」

害児は皮肉つた。

「その程度でお前の魅力は色あせるどいらか、さらに引き立てているのではない  
か。それになんといつてもわしがはかつたおかげで、お前は軍から抜けれた

ということを忘れてはなるまい。そういうの？」

「それにしても少しやりすぎなのではないですか？」

「それくらいでなければ、みなが納得しなかったのだ。仕方のない措置だ。

わしは心中で涙したがあえて鬼となつたのだ。」

「その結果が、足のなくなつた私に、発勁をつりあまつせん砲弾を浴びせる」とであつたと?」

「わしはお前を信頼してたのだ。」

「私は危うく死ぬところでした。今でもやり直しやつて生き延びたかわかりません。」

「過去の」といがみあつのはよそうではないか。わしはお前が生きていると知ったとき心底ほつとしたのだ。」

「『もつとしたの間違いでは?』

「いや聞くがいい。わしはあれから毎日祈つた。娘を無事を。天に誓つてもよい。」

喜兒はあきれ果ててものが言えなかつた。この父が祈るなどといふことをするわけがない。まして自分のことで祈るなどどう考へてもありえなかつた。

「呆れてものが言えませんね。」

「しかし事実だ。國のものに聞いてもうえば分かる。」

「では今から諜報しましょうか?すぐ分かる」とです。」

害児は將軍の顔色が変わるだらうと思つたが、予想に反して顔色は  
変わらず、

將軍は真剣そのものだ。

害児はそれを見て多少心が揺らいだが、これも父の手だらうと思つ  
とじめた。

「どうぞあなたはもう終わりです。」

「やうか。やむをえなことだ。しかしあ前に孝子としての心が少  
しでも  
残つてゐるのならわしの最後の頼みを聞いてくぬか？」

「こつじょうんなさい。」

「つまりお前との勝負にわしが万が一勝てたら黙つてわしを解放し  
てほしい  
のだ。」

「万が一でも私に勝てるとしても？」

「思つてはいないが、それでも戦争は何が起つるかわかるまい。」

害児はその言葉を聞き内心笑つた。例えここから生き延びた国に歸  
つたといふ  
でその國はもうないかもしれないところだ。

「いじでしょう。なりまつ話を」とはあつませんね。行きますよ。」

害児は銃を構えた。

それを見て将軍はにんまりと笑った。あんなものに頼つた戦いでは自分でも害児に勝てるかもしれないと思つたからだ。

それに足が使えなければ、彼らが使う技はその威力が半減どころか、無効化してしまう。

足が大地とつながっていることが、彼らの術の第一条件なのだ。

逆を言えば、そのことを考えて将軍は過去害児の足を真っ先に奪つたともいえる。

それに彼の嫉妬が絡んでいたのかどうか今となつては知る由もないが。

しかしその見識はすぐ覆された。

害児の放つた銃弾が、軌道をまげて将軍に向かつってきたからだ。

いつの間にか幻術をかけられていたということで、これは紛れもなく彼らの使う技だった。

将軍は冷や汗をかいだが、この程度ならひとつこいつともないと思つた。

彼は足をふるに使い、害児に幻術をかけ、間合いをじまかした。

すなわち、10mも離れていると思った間合いが、いきなり害児の背後をとり大刀を振り落としたのだ。

害児はその攻撃を銃で受け止め、そのまま発砲した。

攻撃が読まれていたことに焦った將軍はそれでも、もう片方の大刀で銃弾を防御した。

害児の車椅子が火を噴き、空中に浮かぶ。

そして、空中から多数の爆弾をばら撒いた。

一気に勝負をつける気だな。

將軍はそう思つた。このような範囲攻撃に彼らの技は弱い。

とはいえる将軍も達人だ。手にした銃で爆弾を次々を空中で爆破させた。

よしまずまず防いだと將軍が思つた後ろに気配を感じた。

「まさか・・・」

害児は空中から幻術をかけた。ありえないことだった。

「天才とはお前のことだな。さあやるがいい。」

将軍は大刀を捨てて手を上げた。

「同じ手に引っかかるとでも？」

「なにを言っているのだ。私はもう降参だ。好きにしたらい。」

とはいえ害児はどうしても、父を撃つことはできなかつた。それに  
害児はもう  
殺しはしないと決めたのだ。

害児の殺意が消えたのを感じた将軍は、懐からナイフを取り出し、  
害児の  
体に突き刺した。

と見えたが、それは残像だつた。

「あなたは一生そうしていきてねばいい。」

害児はすでに、遠いさなかにいた。

そのまま去りうとする害児に、みなは不満げな顔を向けた。

リーダー格の男は我慢ならず害児に文句を言った。

「おい。害児さん。俺たちは儲け話があるって言つのであなたにつ  
いて  
きたのだ。それなのにあなたは俺たちの手柄を取つたばかりではな  
く、

敵の大将を何もせず返すところはいったいどうこうア見なのだ？」

俺たちはあなたを笑わすためにいる道化師ではないのだぞ？」

「わざわざな。」ハリ虫が。

「ぐ・・。」

リーダー格の男は口をつむんでしまった。

害虫軍は勝ったといふに落ち込み氣味に、帰つていった。

それを見て将軍はほくそ笑んだ。

「馬鹿な娘よ。だからお前は弱いのよ。わしに恥をかかせおつて、  
今に見て  
おれ。」

将軍は意氣揚々と國に帰つていった。

## 第一十一幕 一人軍隊

穀潰しは、とりあえずヒノキ村に帰ることにした。

ガスは探さなくともたぶん無事だらうと思つたからだ。

穀潰しが、道を歩いていると話しかけてくる男がいた。

「そこの君、ちょっと待つてくれ。」

「あ？ なんだてめえは。ぶつ潰されたいのか。」

穀潰しに睨みつけられた男は、意に返さず写真を見せてきた。

「僕はこの人を探しているのだが、君に見覚えはないかい？」

害児の顔だった、しかし今より多少若いようだ。

「ああ知ってるぜ。害児のやつだな。知らないやつのほうがおかしいだろ。

で、それがどうかしたのか？」

「どうやらこの辺りの人間は、彼女がいる場所が分からぬようなんだよ。

もし君が彼女を居場所を知つていたら教えてほしいのだが。」

そこまで聞いて穀潰しはぴんときた。

「騎士竜だな？」

そういうわれて男は少し驚いた。

「異国のことまで知つてゐるのか。君はこの辺りの住人だらう?」

「いや、てめえのことなんかしらねえぜ。ただ害児の野郎から聞いただけだ。」

「といつことは彼女の居場所を知つてゐるのかーぜひ教えてくれ。」

「確かに俺は害児の居場所を知つてゐるが、てめえに教えるいわれはねえな。」

穀潰しは別に害児の味方ではないが、目の前の男が妙に氣に入らなかつたので、いじわるをした。

「困つたな・・。ああそつか。すまない。忘れていたよ。」

騎士竜は、ポケットから紙切れを取り出し、それを穀潰しの目の前に差し出した。

それを見て穀潰しは、怒りのあまり震えだした。

「なんのつもりだこれは?」

「君たちのような人種はこいつらの人が好きなんだろ? ほら、遠慮せず受け取りたまえ。」

「その汚いものをしまえー。」

「え?」

「早くしまえとこつてるんだよーてめえ何様のつもつだ!」

騎士竜は心底すまなそつな顔になり、金を引っ込めた。

「すまない。悪気はなかつたんだ。まったく君といつ人物を見損なつていた。」「

「けつ。ともかくてめえに話すことなんぞひつじもねえつてことだ。分かつたらさつさとあつち行きやがれ! ほれ、散つた散つた。」

騎士竜はやれやれという顔をして、去つていつたが振り返つていついた。

「気が変わつたらまた教えてくれ。僕はしばりへりへりを歩こてるだろうから

。」「

「ふんつ。」

穀潰しはその言葉を無視して、去つたが、どうも騎士竜が氣に入らなかつた。

あの態度は無意識だろうが穀潰しからしたら反吐が出るものだった。

( 喬児のやつに肩入れするわけじゃねえが、それにしても、やつの  
話は悲惨だったな。よし、ここは俺が少しあいつを懲らしめて黙らせて  
やるか )

いわば氣まぐれだつた。騎士竜からしたりこいつに迷惑だりつ。

穀潰しは、騎士竜を探し出しこいつにいた。

「 おい、氣が変わつたぜ。俺はお前をぶつ潰すことに決めた。」

「 彼女の居場所を教えてくれるんじゃないのか。」

「 てめえに教えるものなんか何一つねえよ。土下座したつて教えて  
やるものか  
。 わざわざ人が嫌がつているのに、連れて行こいつとするなんてふて  
えやうつ  
だぜ。そんなことは俺がゆるさねえ。」

「 君に許可をもらつ必要を感じないな。」

「 うるせえー！ 人が下手に出ればつけあがりやがつて、ぶつ潰してや  
るー。」

こうして一方的な戦いが始まった。

一方喬児は、もじりん騎士竜のことを恐れていた。

確かに軍隊はもうこない。しかし騎士竜はそもそも軍隊と歩調を合

させていた

わけではなく、独自の判断で、やつてきてるのだからあまり意味はない。

しかし、田の国は騎士竜がいないとほぼ成り立たないので、今頃各國に攻めれて  
とんでもない」となってこる」とは明らかだ。

騎士竜は強制的に召還されるかもしれない。

害児はそこに一縷の望みをかけていた。

そわそわしている害児のところへ、超スピードで走ってきた物体がある。

物体かと思いつきやそれはぼくぼくの顔になつた穀潰しだった。

そしてその背には騎士竜が乗つていた。

害児はそれを見て激怒した。

「足止めするどひるか。つれできてしまつとはーなんといつ役立たずなのです  
かーあなたはー！」

穀潰しはそれを聞いてへなへなと崩れた。

「俺だつてがんばつたんだぜ・・・」

騎士竜は穀潰しから降りて、害児と対峙した。

それを見て害児から話しかけた。

「ずいぶん久しぶりですね。騎士竜。しかしこんなところ一人でのこと

いまさらやつてきてどうしようかのようです？

もうあなたの仲間の兵士たちは国に帰っていましたよ。」

「兵士・・・それは飾りだよ。ただ単に軍用を整えれば優雅に見えるから連れてきただけさ。

あんな連中いなくたって、僕一人いれば十分なんだよ。ルル隊長はよく分かっていると思つけどね。」

「騎士竜。その名前は一度と呼ぶな。」

「今は害児とやらでしたか？まあどうでもいい。ともかく僕と一緒に

国に帰つてもらつよ。」

「そんなことをする理由がない。」

「やれやれ！冷たい人だ！別に帰つてくれたつでいいでしょう。」

「私は今の生活が気に入つていて。軍に帰るつもりはない。」

「別に軍じゃなくていいですよ。ただ、貴方がこんなところに引っ

込んでいる

ところのは少し無責任だと僕は思いますね。」

「貴様がどう思おうがそれは貴様の勝手だらう。私を巻き込むな。」

「どうしても、帰つていただけないのですか？」

「回りくどいのが貴様の欠点だな。どうせ力づくなんだらう？」

「ええ・・・。申し訳ないですが僕にはどうしてもあなたに帰つていただかないといけないのです。」

「いらっしゃも本氣で行く。」

「どうぞ。」

害児は、緊張した面持ちで、抜刀し、車椅子を降りた。

「2分で片をつけてやる。」

「お手並み拝見だな。」

害児は、幻術を駆使して五つ身くらいに別れ、騎士竜に迫つた。

その様子を見て、騎士竜は呆れた。

騎士竜の手がちらりと光ると、害児の足元が爆発し、害児の義足は粉々になり

、害児はからうじて、体制を整えて地面に転がつた。

「かつて魔人とすら呼ばれたものが、こんな有様とはな。無様だな。」

「害児さんとやら。」

その様子を見て黒服たちが、害児に寄つてきた。

「首領！お怪我は！」

その黒服たちを害児は一喝した。

「取り乱すな！見苦しい！」

「は・・ははっ！」

黒服たちは、そつといつつ害児を車椅子に乗せた。

「私は手加減をされたのです。騎士竜、見てのとおり、今私はただの廃人で、魔人ではない。  
これでお分かりいただけましたか？」

「なんということを・・・。最早見ていられないな。国に帰つてもらつて自分に対する認識を改めてもらわないと。」

黒服たちは、近づいてくる騎士竜を警戒し、害児の前に立ちふさがつた。

騎士竜が、地面をぽんと踏むと、黒服たちしたから水がすさまじい勢いで

湧き出てきて黒服たちを、天空へ吹き飛ばしてしまつた。

彼は剛力とパソコンの計算による分析と力の精密さによる拳法を使

う。

先ほどの害児の足元が爆発したのは、彼が小石を飛ばした結果だ。水が突然地面から湧き出たのは、パソコンで水脈等を計算し、剛力と、その精密さで、正確な力を地面に伝導させ、水を地面へと導いたといつことだ。

そんな騎士竜の前に、今まで静観していた善い人が、のつそりと立ちふさがった。

騎士竜は、持っていたパソコンで善い人のデーターを取った。

「何だこの子供は、妙だな。凄い重病だ。死んでも不思議でもないのに、

ところより死んでるはずなんだが、平然とした顔でたつている。」

騎士竜はデーターに当てはまらない善い人の様子を見て啞然とした。

「善い人は悪人を決して許さない。それを悪人に思い知らせるためには、

ぼこつて改心をせる必要があるのは仕方のないことだ。」

「なにを言つてるんだい。早くおうちに帰つて寝たほうがいい。」

騎士竜は、きつと狂つているのだと思つたが、親切にもそつアドバイスをした。

害児はそのやり取りを見てニヤニヤしている。

(それ、善い人さん早くやれ！騎士竜のやつをぶつ飛ばせ。)

と心の中で念じた。害児はこれで勝つたと思った。

「やつやって善い人を演じてだまそつとしても、真の善人には、通用しない」ということはまだ分からぬのか。

もう我慢ならん！ぼこぼこにしてやる…」

善い人は、その体に似合わぬ大剣を取り出した。

騎士竜はいつたいどこからそんなものを取り出したのか。何でそんなものをもてるのか。

計算からすると非常な重量があるのは確かだったのにそれを持つて平然としている。

平然としていると見えた瞬間には、善い人は騎士竜を間合いに捕らえていた。

「斬る！無連斬！」

残像が残るほど早く斬る、善い人は危険な相手には、容赦のない斬撃も繰り出す。

善い人も騎士竜が危険といつゝとは本能的に十分分かつっていたので、本気の対応をしたというわけだ。

騎士竜は、斬られながらも、風圧などを発生させ被害を最小限にとどめながら

、一生の不覚…と心の中で悔やんだ。

やがて、善い人の剣が折れてしまったので、騎士竜は手のひらを善い人のほうに向けて押し出した。

そこからすさまじい突風と電気摩擦が起こり、善い人を吹き飛ばし、

騎士竜は

あわてて距離をとった。

体はもうぼろぼろであった。

（剣が折れなかつたら、死んでいたかもしれない。）

騎士竜は生まれて初めて、恐怖という感情を知つた。

「恐ろしい力だ。世の中不思議なこともある。」

計算で割り出せないものがあるといつのを騎士竜は初めて経験した。

善い人は弓を構え、速射する。その弓の弦はすぐに切れ新しい弓に変える。

それを常人の目に見えない速度でたやすくやってのけている。

騎士竜は、指をぱちんと鳴らすと、それを基点に善い人のほうに向かい、炎を生じた。

炎は矢を巻き込むが、中には炎を突つ切り騎士竜にせまる矢もある。そういう矢は、騎士竜の目の前に現れた岩にささぎられた。

善い人は炎をかき消し、槍を取り出して岩へと突っ込む。

「貫く！トルネードチャージ！」

回転しながら岩を難なく突き破った善い人のやりだが、その穂先を騎士竜に触られ、粉々にされる。

と同時に、騎士竜はかまいたちを発生させたが、善い人はそれを見切る。

後一歩で間合いをつめるとこれを、騎士竜のしたから激流が湧き出で、

騎士竜は中へととんだ。地面ががんがんと盛り上がり、空中へ浮かんだ、騎士竜の足場を作る。

（かつてのルル隊長ほどでないが、彼女もやる。あの動きを捉えるためにはどうしたらいいのか・・・。）

力が拮抗していると見た害兎は、ここで善い人に對し大声を上げた。

「善い人さん！騎士竜のパソコンを狙うのです！あればなればやつはただの人です！」

しかし、善い人はその声を無視して、舌を駆け上り、騎士竜に迫つていく。

「ああ・・・これじゃいつかやられてしまつ。穀潰さんーいつまで寝てるんですかーそろそろおきなさいー。」

穀潰さんは、とうくの昔に復活していたが、不貞寝をしていた。

「ちつ。なんか用か？」

むくりと起き上がり害兎のほうをにらむ。

「善い人さんを助けて、一人で騎士竜を倒すのですーあはやくおゆきなさい

。」「

「勝手なことをいうな。俺を散々役立たず扱いしやがって。」

「事実そうじやないです。そういうわれたくないのなら、少しあはやくおしなさればいいだけのことではないですか。」

「いやだね。お前の言つことはきかねえよ。」

「何でことだ！」

害児は両手を上げてお手上げのポーズをとった。

穀潰しは小気味よさげにそのありさまを、眺めた。

「だがああ・・手を貸してやらなこともねえぜ。何しろ俺はあいつに

「テンパンにされたからな。」

そこへ、害児の部下がやつてきて、害児に新しい義足を装着させた。

「おおさすが穀潰しさん。私の見込んだとおりの義侠心あふれる人物だ。」

「ペッ。」

穀潰しは心底いやそうな顔だ。

「私と二人で善い人さんのサポートです。足場が安定しませんが、なんとか  
しましよう。」

「お前たちと一緒に戦うなんて反吐が出るが、まあこの際いいぜ。  
それにも俺は同情するぜ。俺たち三人を相手にしないといけないあいつ  
にな。」

穀潰しはもう勝った気でいる。それは仕方ないが害児はそれでも、

勝機は

7割と見ていた。

( まずサイコカッターで様子を見る。やつの動きは鈍い。あてれるはずだ。 )

穀潰しは、騎士竜にサイコカッターを放つが、騎士竜が片手を振るうだけで、

すさまじい突風が起こり、穀潰しがいたところの地面を削った。

穀潰しは騎士竜の注意をひきつけた後、連続で衝撃波を撃ちだす。騎士竜は、空気を振動させそれを防御しているが、その間に善い人が間合いをつめた。

「突き刺さるけり！」

斜め上からのけりを、善い人が繰り出そうとするが、騎士竜がいた岩の柱が崩れ、それを合図に他の岩の柱も崩れる、その岩雪崩が、善い人たちに襲いつ。

落ちてきた騎士竜に向かい、害児は刀を繰り出す。

「腕をもらつ。」

騎士竜の後ろからも上からも害児が迫り、刀を振り落とす。

「よくやつた・・といいたいが、害児さん。どうやらあなたは腕が落ちすぎた ようだ。」

崩れ落ちたのは害児のほうだった。どうやら電撃をもろに浴びたらしい。

「どけ！害児！潰れろ！ランダムスフィア！」

穀潰しが無数の爆裂性のある丸い衝撃波を、騎士竜に向かって撃ちだす。

「君の技はまるで子供遊びだよ。」

騎士竜は腕を振るつと、それらの衝撃波はすべて消えてしまった。

それにはさすがの穀潰しも、あぜんとするしかなかった。

「サイキック技術など、歴史の浅い技術に僕の技が破れるわけがないだろう

？」

その言葉が言い終わるいや否や、背後から善い人が蹴りを繰り出してきた。

騎士竜はその蹴りを、指一本で止める。

(これまでしばらくは彼女は動けまい。)

騎士竜のこの行動により、善い人は全身の骨がばらばらに砕けて動

けなく

なるはずだった。

だがここでも騎士竜の予想外のことが起り、善い人がそのまま攻撃してきたのだ。

「なに？ 馬鹿な！」

しかしさすがに一回目なので、騎士竜は善い人を突風で吹き飛ばすことでの攻撃を回避することに成功した。

（今のところ僕が勝つているが、あの白服の女性だけには気をつけなければ。）

「もういいだろ？ 君たちは僕には勝てないよ。そこに転がっている害児とやらを連れて行く。文句はないね？」

穀潰しは虚勢を張った。

「びびってるんじゃないぞ。尻尾を巻いて逃げるのか？」

「なにを言つてるんだ。君は。」

その問答をしている最中にまたまた善い人が背後から騎士竜に襲いかかってきた。

「斬る！エレファントクラッシュ！」

「しつこい！」

騎士竜は地面をあらかじめ地面をつかんでおり、その地面は山ほど  
の大きさになつており、それを善い人に向かつてぶつけた。

善い人は山の下敷きになつた。

「ああ善い人！てめえ・・・。」

「なんだい？君もこうなりたいのかい？」

「穀潰しさん、大丈夫です。善い人さんは無事です。」

穀潰しはどうやら害児が直前で助けたらしい善い人を見て安心した。

「おい、善い人。俺に考えがある。俺がお前の体に念力を送つて練  
りこむ、  
そうするとお前は、今以上に威力のある技を出せる。  
それでやつを攻撃すれば倒せるはずだ。」

「なるほどね。穀潰しにしては頭いいじゃないか。こういつ場合漫  
画だと、  
善人が真の力を發揮して敵を倒すものだからね。」

害児は穀潰しに耳打ちした。

「穀潰さん、それは危険ではないのですか？善い人さんはどうも分かつてないみたいですが。」

「つるせえー！ひなつたらあいつをぶつ潰さないと俺の気がすまねえんだよー！役立たずなてめえは黙つてみてろー！」

「な、なに・・くつ・・。」

プライドの高い害児は、穀潰しに一撃を加え自分の力を思い知らせてやろうと考へたが、思いどじました。

何より今は、騎士竜を撃退してもひづらうがいい。それがたとえどんな形でもだ。

「ふ、ふん。分かりましたよ。やつてごらんなさい。」

やつとの思いでやつこいつ、後ろに下がった。

「じゃあ行くぜー！善い人ー！ひやつはーー！」

善い人の体から黒いオーラが湧き出でくる。

(なるほど。そういう手でくるか。あの状態では確かに、生半可な手段では攻撃を防げなくなるな。)

騎士竜は、地面をつかみ天まで届くかといつよつた山を善い人たちに向かつて放つた。

天は覆われ、ヒノキ村は曇りになつていたことだらう、まるで隕石が落つこちてきてるようなもので、これを何とかしないと村にまで被害が出る。

「ああ！ 部下ども！ 早く私を守らんかあ！」

いわれるまでもなく黒服たちは害児を囲み防御の構えだ。

善い人は、山に向かい、天を突くかよつた蹴りを繰り出した。

「貫け！ 突き抜けるけり！」

まがまがしいオーラをまとつた善い人のけりにより、山の勢いが失速され砂のようになつていく。

その山を貫き、善い人のけりはついに騎士竜を捕らえた。

「ゴン！」

しかし威力が十分出てないらしく、騎士竜はよろめいただけだ。

それでも騎士竜は十分驚いていたが。

（世界は広い。こういう人間もいたのか。）

繰り広げられる死闘のさなか、その場に似つかわしくない間抜けなことがひびいた。

「我輩の名前はガストラゲタ、ガ流であるぞー。ガ流とはガス天下無双流！すなわちガ流である！」

「ん？ 何だあの馬鹿は。」

ガスであった。

息も絶え絶えの善い人を見つめていた騎士竜であったが、思わず馬鹿の出現にそちらのほうを注目した。

もちろん善い人との距離をとる」とはさすがに今回は忘れなかつた。騎士竜はパソコンで調べて大体のガスの人物を割り出した。

「ああ・・。書児の後継者のガストラゲタか。いまさら君が何のようだ？」

「我輩はお前を倒しに来た男だ。」

「君が僕を？ ああ・・。しつているよ。そういうて君は話を長引かせて、僕を毒で倒そうといふのだろう？ まったく唾棄すべき卑怯な戦術だよ。僕はそういう戦い方が大嫌いなんだ。」

君はそんなことをして恥ずかしいと思わないのか？」

「勝てばいいのだ。」

「毒を流しているが、そんな毒の流れなど僕には手をとるより分かるよ。」

ほら、うやつてすれば何の問題もな・・・。」

ヒューン。騎士竜はガスがあらかじめほっておいた穴に落ちたようだ。

ガスはその穴にすかさず如雨露で水を流した。

ただの水ではない。電子機器をだめにしてしまう水だ。

「うわ！パソコンが・・・。」

「どうだ！我輩の実力を思い知ったか！」

「助けてくれー！パソコンがないと僕は無害だー！」

そこへ善い人を抱えた害児がやってきた。

「へへっ。害児さん。我輩のこの戦果はどうかね？よく覚えておいてほしいものである。我輩があなたのためにどれだけ骨を折ったかを。」

害児は、善い人を放り投げ、ガスをバシッとたたいた。

いきなりたたかれたガスは、一瞬放心したが、我に返り、

「なにをするか！我輩がガストラゲタと知つてのことか！」

とほえた。

「『ハ』虫めが、まるですべて自分の手柄のよつた我が物顔、虫唾が走る。

善い人さんと穀潰しさんが死力を尽くして戦ってくれたからこそこの結果が

できたのです。

あなたは最後ちょっとと出てきただけで何もやつてないではないですか。そんなことで大きな顔をしないでいただきたい。」

ガスは、害児の正氣を疑つた。

どう見ても、この功績はガス一人のものであつて、役立たずな穀潰しや善い人のものではない。

えこひいきもここまでいくと我慢ならなかつた。

「この功績はどう考へても我輩一人のものだ。でくの坊の害児は論外として

役立たずの善い人、穀潰しのような輩のものではないではないか！」

と痛罵した。

害児はそれを聞いて顔をゆがませ、

「黙れ！」

とだけ一括した。そのガスの周りをわらわらと黒服が取り囲んだ。

「お前たちからも何とか言ひてやれ。そのでくの坊の石頭に…」

黒服たちは口々にガスに向かつて言葉を放った。

「首領はでくの坊ではないー！でくの坊といつ言葉はお前にこじらさ  
わしい  
だろうー。」「…」

「お前は私たちの功績を一つも認めず罪ばかりを責めた。それがい  
ざ自分  
がそういう立場になるや否や態度を豹変せらるるのは卑怯者がするこ  
とだ！」

「毒ガスや落とし穴は卑怯であろう。首領は言つまでもなく、善い  
人様や  
穀潰し様は立派に戦つたのだ！  
神聖な戦いを汚すなー！」ミ虫ー。」

ガスは顔を真っ赤にして怒った。

「な、なんだとー。貴様らー！我輩の恩を忘れてー！この忘恩の  
徒め！」

「私たちは、嫌味や罰は受け取つたが恩を受け取つた覚えはないー！

そういうと黒服たちは、ガスの腕を取り両脇を固めた。

「なにをする！離せ！離さんか！」

そしてガスは黒服たちによってどこかへ連れて行かれた。

穀漬しは、その騒ぎが終わつたので、害児に話しかけた。

「善い人は大丈夫なのか？騎士竜のやうなのはどうする？」

「善い人さんは・・分かりませんね。私にはなんとも。」

害児は暗い表情になつた。

「・・俺には死んでいるように見えるがな。」

そういうわれ害児ははつとなつた。実は害児も考えたくはなかつたが、同じこと  
を考えていたのだ。

何か穴の中からたすけてくれーという声がしているが、それを気に  
している  
者はいなかつた。

「やはり体内練りこみの無理がたたつたのでしょうか・・。」

「いや別に俺は自分の擁護するわけじゃないが、そういうことはな  
いと思  
うぜ。善い人くらいの強さを持っているなら、あの程度の体の負担は  
なんでもない」とのはずだ。」

「・・とにかくこんなところに放つておくわけにもいかないでしょ

「う。」

「やうだな・・・ん? 空が曇つてきやがつた。」

確かに、二人は空を見上げると、瞬く間に空が黒く覆われている。

「大変だ。ともかく私の家に行きましょう。善い人さんを運ばない  
と。」

「じゃあ俺は行くぜ。」

「一緒に来ませんか? 食事を出しますよ。」

「最近ろくな穀潰してないからな。特別に邪魔してやるぜ。まあ・  
俺も  
善い人のことは気になるしな。」

しかし、凄い勢いで曇つたなど穀潰しはつぶやき、害児が善い人に  
近寄ろうと  
すると、凄い土砂降りの雨が降り、轟音を立てて、雷が善い人へ向  
かって  
無数に降ってきた。

「ぐ・・。何だいったい? 何が起こった?」

害児は、雷が降る瞬間、後ろに大きく距離をとつたのでなんともな  
かった。

穀潰しは雷の余波をかなり避けたが、すぐに復活した。

前を見上げてみると善い人が立っていたので、内心ほつとして穀漬の背中に向かつてはなしかけた。

「おい。無事だったのか。今のは死んだふりか？」

「善い」とをしなきや。」

「熱心なことだな。だが今日はもういいんじゃねえか？雨も降つてるしな。

ひやつははは。」

「善いことを。。。」

突然善い人は走り出しすぐに見えなくなつた。

「おいおい。。。なんだありや？頭のおかしいやつの考えることはよくわからねえな。」

いつの間にかそばにいた害虫が、穀漬しに話しかけた。

「見てください。空が晴れます。まるで善い人さんに雷を降らせるために曇つたような空でしたね。」

「言われてみればそうだな。。。」

「まああの様子なら善い人さんはもう大丈夫でしょう。」

「。。。。」

穀潰しは善い人が向かつたまゝに歩き出した。

「穀潰さん、食事はいいのですか？」

「後でたんまりもらひば。」

「そうですか。ではがんばってください。私は私でのこの後やねいじが  
あるので・・・。」

「ああ。」

穀潰しは、じゃあなといいつつ後ろも見ずに、手を振った。

「さへと・・とりあえず難は去つた・・か。穀潰さんが何か勘付  
いた  
みたいですが・・まあどうでもいいことか。  
とにかく私は今を守れた。それでよしをしましょうか。」

害児がその場を去り立つると、穴から声が聞こえてきた。

「たすけてくれー。」

「「」の男も、いつなつた以上使い道が出てきたか・・・。」

## 第一十三幕 一人の狂人

「おお見ろ。これはすごい。」

ここはサイキック研究所の一つ、今日もテンマは何か面白いことがないかと遠視に余念がなかつた。

彼女がマークしていた人物の一人に、騎士竜というものがいた。

彼はテンマと戦つたこともある。といつても腕試し程度だが。

戦いは互角といったところで、テンマはこの時、満足したよつだつた。

テンマは騎士竜と善い人の戦いを見ていた。

「すごいなーこいつはすごいなー」

テンマの横にいた人物。この女性は白衣を着ていた。何故だか知らないが

おおはしゃぎであった。

テンマに話しかけられたのはこの人で、テンマと一緒にモニターを見ている。

「見ろー! と見ろー! 」

白衣の女性はテンマの頭をつかむと、モニターに突きつけた。

「よく見えてるわ。」

「もっと見るとこいつのだー馬鹿者が！」

白衣の女性は、興奮して、テンマの頭をモニターにがんがん、叩き付けていた。

そのうちにモニターは壊れてしまった。

「畜生ー！」の私を愚弄しやがってー！」

白衣の女性はモニターをたたきつけた。

モニターはつぶともすんともいわなくなってしまった。

白衣の女性はテンマに向かって、進言した。

「分かりますかー！」の私の気持ちが！

「たわけ。呼べばよこのだ。」「

「と申しますとー。」

テンマはその言葉を無視して、アキラにテレパシーを送った。  
すぐ来るから」と。

「あ、お呼びでいらっしゃるのか。テンマ様。」「

アキラは、しばらくして、姿を現した。まだどんな無理難題を言わ  
れるかと  
びぐびくしている。

「善い人を呼べ。なかなか素質がありそうだ。何ならネームもちに  
してもよい  
。」

「はうへおひしゃる意味が・・・。」

テンマはアキラが愚痴を言い訳し始めようとするのを見越して、一  
括した。

「早く行け！」

「ははっ！失礼しました！」

アキラは、冷や汗をかきつつ、風のように去つていつたが、いつた  
い彼は  
何にそんなにおびえているのだろうか。

とにかくどうのこられたテンマと白衣の女性は会話を再会した。

「端的に言えば、彼女・・善い人は私のサイキック理論に当てはま  
らない  
新しいタイプのサイキックカーだと思つ。」

「そうか。」

「ええそうですとも。つまりこれで一気に研究が進む可能性ありう

「こいつ」とです。」

「更なる高みへと上れるところ」とだな?」

「御意。だから返す返すも残念ところとなのです。後一歩といつ  
ところで

貴方様がモニターをためににしてしまわれるから。」

とんだ言いがかりだが、テンマはその言葉を聞いても笑つていろだけだった。

「まつまつま。まあよい。今に分かるわ。」

「といこますと?」

「もう下がれ!」

「まつまつ...」

白衣の女性は腑に落ちない顔だったが、下がれといわれれば下がる  
しかない。

びつやうりトシマとアキラのやり取りはまったく頭に入つてないらし  
かった。

さて、アキラのまづまは、顔が青ざめていた。

とんだ無理難題を押し付けられたものだった。

「ちつ・・。俺ばかりなんでこんな田んこ。」

だがぼやいてばかりもいられない。テンマの横暴は今に始まつたことではない。

黙々と任務を実行するだけだ。

そう気持ちを切り替え、とりあえず善い人と仲がいい穀潰しをあたつてみることにした。

「といふことなんだが、協力してもらえないだらうか?」

「虫がいいんじゃねえか?俺に何のメリットがある?大体俺はテンマに恨みがあるんだぜ。何でやつの得になるよつな」としなきゃならねえんだ。

「

「この俺がこう頭を下げているのだ。聞いてくれてもいいのではないか?」「

「おこ・・。ふざけてるのか。お前のどこが頭を下げているんだ?」

アキラは直立不動で、穀潰しを呼びつけ、立ち話をしているのだった。

「残念だ。穀潰し。俺としてはお前が友情にこたえてくれることを期待してたのだが、こうなつたら催眠で操るしかないな。不本意だが。」

「

そういうアキラは穀潰しをちらりと見た。穀潰しの顔に緊張が走る。

「てめえ・・・そりゃ暴力だぜ。」

「ああだから不本意だといつてるではないか。」

「はんっ！当てが外れたな！そもそも善い人は俺の言つことなんか  
きかねえ  
よ。あいつは俺の最大の敵だからな！」

「本當か？お前程度の実力ならネームもちの俺にとって、お前がな  
にを考えて  
いるかくらい簡単に探れるのだが。」

「ああそつかい。なら何でも勝手にするがいい。」

「ちっ。役たたずめ。じつやら本當なようだな。確かにお前たちは  
敵対  
してるが、信頼関係があるよつて思つてたんだがな。」

「ところでお前は相変わらずテンマの犬かよ。情けねえな。おい。」

「じつした急に？」

「そのまんまの意味だぜ？」

「そんなに思い知らせてほしいのか？」

「どうだかな。だがそうだな。てめえを倒せばテンマの吠えずらが

見れる

かもしけねえな。」

「正氣か？一秒で片がつくぞ。」

「潰れろーさい・・・。」ガクツ。

「馬鹿が。この距離で俺に勝てるわけないだろつ。なに考えてるんだ。

・・・ん？」

アキラは背後に気配を感じたので、振り返つてみると何者かが、自己構築をしていていた。ひだつた。

それは、仕立て屋、セリルだった。

「こんだけは。アキラ。私の店の常連さんを拉致しようとしてるみたいね。」

「何故ばれた？まさか。」

アキラは氣絶している穀潰しのほうをちらつと見た。

「ああそれはない。私がそんな無能に頼るわけないでしょ。」

「・・・。」

「何故黙つてるの？」

「察してくれ。俺も好きでこんなことをしてるわけじゃないんだ。お前だって分かつてくれるだろ？ テンマ様の友達なら。」

「・・・私は本当はフラワーちゃんと一緒に外の世界にでたかったんだけどね。

でも、私の話なんて聞いてくれないから。」

「なら俺のことだって分かつてくれるだろ？ 賴む。俺はやつに追められるんだ。」

「そんなこと言つたらフラワーちゃんに丸聞こえなんじやないの？」

「大丈夫だ。任務にさえ失敗しなかつたら、の方はそれ以外のことはたいてい見逃してくださる。」

「へえ。まあいいよ。善い人ちゃんが同意するならね。」

「そ、それは。」

「ヤ！」を承諾できないというのなら・・・」

セリルから力を感じ、アキラはあわてた。

「い、いや。承諾する。しかし貴方も説得に加わってくれるのでしような？」

「私も、久しぶりにフラワーちゃんに会いたくなってきたな。」

「え？ああ・・・分かった。ついてきてもいい。しかし説得を・・・

」

「じゃあ早速善い人ちゃんのところに行こうか。そこに伸びてる人も連れて行ってね。」

「あ、ああ・・・ちつ・穀潰し・わつとおさひー・げしつ・

アキラは穀潰しを思い切り蹴飛ばした。

穀潰しは正気に戻り、アキラに食つて掛けた。

「てめえ！なにをしやがる！」

穀潰しの右ストレートがアキラに当たり、激昂したアキラと穀潰しの殴りあいになった。

そこへ、セリルのさめた発言がわって入った。

「ねえ、早く行きたいんだけど？」

そのときアキラは、穀潰しにマウントをとつてしまにしてたが、セリルの声を聞き、あわてて穀潰しからのいで、穀潰しが立ちあがるのを助けた。

「あ、ああ。そうだったな。悪かつた。」

「お前はセリル！なんでこんなところ？」

「うるさいーーお前は黙つて俺たちについてくればいいんだ！」

「まあそういうことね。じゃあいきましょうか。」

「いつかぶつ潰してやる・・・。」

一行はぞろぞろと善い人のところへ向かつた。

「つまり、白服様いや善い人様を私の主が招待したいといつてあります・・・。」

「

アキラは汗汗しながら、善い人を必死に説得していた。

タンクが、水を持ってきたので、それを一気飲みするアキラ。

穀潰しは仏頂面で座り込み、水を腹いせにがぶがぶ飲んでいた。

善い人は氣のない様子でアキラの話を聞いてたが、何が氣に入らなかつたのか、鬼のような形相で立ち上がつた。

「外道め！許さん！」

「はつ？私めが何か悪いことでも？」

善い人はアキラに目もくれず、穀潰しにけりを入れる。

「てめえ！なんだつてんだ！」

仰向けになつた穀潰しが状態を起こし善い人をにらむ。

「二の水泥棒目が一善人の目を」まかせるとでも思ったのか！」

「水くらい飲ませろ！そのくらい善人の務めじゃないのか！」

それを聞いて、善い人の顔が緩んだ。

「穀潰しもたまには善いことを言つね。そのとおりかもしない。」

善い人は席に戻つた。

「ちつ。二にはきちがいしかいねえぜ。やつてられん！」

穀潰しが逃げようとするところを、セリルに腕をつかまれる。

「な、なんだよ。」

「・・・。」

セリルはじ一つと穀潰しを見つめると、穀潰しは諦めたようにまた水を  
がつぱのみし始めた。

「ふう・・・。まったく人騒がせな。それでですね。善い人様。招待  
の件  
なのですが・・・。」

「善い人は善いことをするために忙しいんだよ。他をあたつてくれ

ないかな。」

アキラは、善い人がどう見ても忙しそうに見えなかつた。

善い人はただ漫画を描いてるだけだ。しかもへたくそだつた。

「ただへたくそな漫画をかいてるだけではないか！」

ついにアキラは本音を言つてしまつた。その言葉に善い人はびくびくしだした。

「つまりこの善人たる善い人を馬鹿にしたいと？」

「そうさ！だが馬鹿にしたいんじゃない。馬鹿なのさ。お前は。それくらえ！」

「催眠！」

アキラはのりのりで善い人に催眠をかけたが、氣絶したのは善い人ではなく  
善い人にぶちのめされたアキラだつた。

それを見て穀瀆しは心底呆れた。

「おいおい・・・あいつには学習能力がないのか。」

それはそうだ。少し前に穀瀆しと一緒にアキラは善い人と戦つたことが  
ある。

そのときアキラは善い人に催眠を試みたが効かなかつた。確かにあの時

アキラは錯乱していたが、その時のこと学習してないアキラの頭を穀潰しはどうかしてるんじゃないかと疑つた。

ただアキラは、あの時遠隔催眠を行つていたから、近接なら効くかもと思った

のかもしれない。

それにもしても、遠距離であれほど効果ないのでから例え近接でも、効果ができる

のに時間がかかるといつことは分かりそなものだ。

この時善い人を説得する意外な伏兵が現れた。

いや意外でもなんでもないかもしれないが、それはセリルだつた。

## 第一十四幕 四人の善人

「善い人ちゃん、よく考えてみてよ。」

「なにかな？仕立て屋さん。」

「このアキラという人は悪人、その主にということは悪人のボスということになるんじゃない？」

「わたしは今、そう思つてたところだよ。仕立て屋さんは頭がいい。さすが善人だね。」

穀漬しはそれを聞くと仁王立ちして大笑いした。

「ひやつはつはつは！はつはつは！はあつ！何がそう思つてたところだよ。」

だ！どこまで笑わせてくれば気が済むんだ。お前は。」

「さあ、行こうか。仕立て屋さん。この善い人がいる限り、悪人は栄えない

ということを思い知らせてやらないといけない。」

「え？穀漬しは・・・あつ！善い人ちゃん待つて！」

善い人が、外ででてしまったので、セリルはあわてて後を追った。

「あの・・善い人ちゃんいつちやつたけど。いいの？」

跡に残されたタンクが、親切にも放置されて惨めな思いをしている  
穀潰し  
に話しかけた。

「ふ・・。」

「ふ?」

「ふざけんなー。」

「ひいー。」

タンクに八つ当たりをしても意味がない。とりあえずせっせとお返  
しに  
氣絶しているアキラに一撃を加えることにした。

「うのほんくらー・ぶつ潰れりー。」ドカッ。

蹴つ飛ばして宙に浮かした後、衝撃波のラッシュをかけた。

「ひやつはつはーー汚物は消毒だーーサイコエアー！」

「あわわ・・。」

「ひや・・はあーーサイコスフィアー！」

大きな玉のような衝撃波をアキラの体にぶち込み、善い人たちのほ  
うに  
吹き飛ばした。

「すっきりしたぜー！追い待て善い人！俺は何かと役に立つ男だぜー。」

穀潰しはでかい声を出しつつ、善い人たちの向かってまく走り出した。

善い人たちと合流した穀潰しは、疑問に感じていたことを口に出した。

「おい、そういう徒步で行くのか？」

「穀潰しは、テレポート使えないでしょ。善い人たちも。」

「なら、お前たちが送つてやればいいじゃないか。」

その言葉にアキラが答えた。

「おれとしてもそうしたいのはやまやまなんだが、善い人は俺のことを悪人と思つてるようだから無理だな。」

「じゃあセリルがやればいいじゃねえか。」

「あり、歩いていくほうが風情があるわよ。」

「そんなものかね。」

それにしてもそうそつたるメンバーだ。

最もセリルの実力は未知数だが、関係者の話によれば相当な使い手らしい。

穀潰しがほいほいついていつてる理由がいまいち分からないが、も

しかしたら

テンマのいる研究所を潰そうと考えているのかもしれない。

しかし、善い人たちの徒步のスピードは速く、研究所は案外近い場所にあった。

研究所の存在を認めた善い人は一同に立ち止まり、自分の話を聞くように命じた。

何が始まるかやらいと一同は顔を見合せた。

「貴方たちはまったくこの善い人と一緒に善いことができるといつこの上ない幸運に恵まれた。

このことが達成されれば、貴方たちもわたしのような善人に一步近づける  
というものだよ。」

そして、さあわたしに続け！魔王城を攻め落とせを号令した。

それを聞いてアキラは真っ青になり、善い人の腕をつかんで動きを止めた。

「ちょっと待つてくれ。白衣。何か勘違にしてくるようだが。」

「なにかな。君はもう悪人じゃないんだ。善いことに努めないといけない。

それともまさか君はわたしの顔に泥に塗る気なのかな。」

善い人の無表情な顔で見つめられアキラはゾーンとなつた。

「い、いやそんなことはない。俺も善人の一員として精一杯戦う。

「ならいいんだよ。わたしたちは世界を救わなければならないんだ。やこのところをよくわかつてほしいものだね。」

穀潰しはボソッと漫画の見すぎだぜとぼやいたが、彼としては願つてもない

展開なのでちやちやを入れるのはやめにしておいた。

アキラはもうやけくそになつた。

「あなたも大変ね・・・同情するよ。」

セリルにポンッと肩をたたかれ泣きそうな顔になるアキラ。

どうやら、こちらの動きを察知されたらしく、研究所からぞろぞろとサイキックたちがでてきた。

（これは遊んでおられるな・・・。）

（フランちゃんは相変わらずね。でもこれならあなたも安心じゃ

ない？）

（それは答えないな。つかつに考えたら思念を読まれてしまつ。）

セリルとアキラはテレパシーで会話をした。

穀潰しには、ノイズが聞こえるな程度しか感じなかつた。

「まあネームもちでも最高クラスの戦闘力がある俺にとつてはあん  
なやつら  
人形だがな。」

「本氣でやる氣になつたの？」

「ああああ。それに俺も白服になめられつぱなしなのは氣に入ら  
ん。

おいつ！白服よく見とけ！これが俺の能力だ！」

ざああああーっという妙な音が発生したかと思つと、でてきたサイ  
キッカー

たちの大半が倒れていた。

「なんだ。ネームもちも混じつてるのか。よしつー。」

「おお・・見なよ。みんな、善い人の威光に屈している。みんなき  
つと改心  
したんだね。」

「おい・・。」

「こいつは馬鹿だから、超能力とはよくわからねえんだよ。張り切り損だつたな。」

数人のサイキックカーがまだこちらを観察しつつ、立っている。

「アキラ、あいつらやつてこねえぜ。」

「そりゃそうだ。テンマ様が見たいのは、俺の催眠じゃなくて白服の能力なんだからな。」

「じゃあお前なんであんないと?」

「さあな。それより白服。今度こいつお前に行つてもうつる。あいつらを倒して来い。」

「よし、今度はセリルさんの実力を見よつ。いけー善人の部下その1ー。」

「私が。まあいいよ。」

「よくない。セリルちょっと待て。」

「仕方ないでしょ。リーダーの命令なんだから。あなたも善人なんだから

リーダーには従わなきや。」

「遊びじゃないんだぞ・・・。」

「じゃあそういうことだから。大丈夫、すぐに終わる。あそこへいる連中  
あなたに比べればたいしたことないでしょ。」

セリルはそういうて飛んだ。背中から羽が生えてきたのだ。

いや正確には、服がその形状に変化した。

これがセリルが編み出したスタイル、サイコドレス。

服に念力を練りこむことで、様々な形状へ変化をさせることができ  
また服に念力と練りこませることで、対サイキックに対する防御力は  
すさまじいものとなる。

アキラがセリルに対して下手なのは、その防御性能にアキラの得意な  
催眠の相性が悪いからだ。

ちなみにネームもちといつても、別に戦闘力だけで決まるわけじゃない。  
ない。

あくまでも超能力が特化しているものがネームもちになれるのであ  
つて、

戦闘力が特化しているものがなるわけじゃないからだ。

それはネームによって戦闘力が大体決まってしまい、ネームアキラ  
は代々

催眠の使い手なので戦闘に関しては上位のネームなのだ。

しかしそうであつても、基本的な攻撃方法、衝撃波、メトリー、肉体強化、肉体再生、テレポート、体術などの基本的な戦闘能力は、ナンバーズとは比べ物にならないくらい高い。

とりあえず、セリルはぐるぐる回転し、全身がミサイルのようになり、残ったサイキックカーたちをすべて迎撃した後、善い人のところに帰ってきた。

セリルのスタイルは、彼女の独創なので、彼らはよくその性能を知らなかつた。

彼ら自慢のサイキックが効かなくて狼狽しているところを、なんなくやつつけたのであつた。

善い人は部下たちの活躍に気をよくした。

意気揚々と研究所の中に入つていった。

しかし入つた瞬間、善い人の周りの人間が消えてしまつた。

いや周りの人間が消えたのではなく、消えたのは善い人本人だつた。

そして、取り残された三人の目の前に現れたのは、テンマ・トキトその人だつた。

「テンマ・・・」

「ゼロか。それにセリルだな。」

「あの・・俺もいるんですが。」

「おこにテンマ。分かつてゐるな。」

「ああ分かつてこらへ。まつはーーそらびうした? いつどもこーぞ? こちらはなあー! まつはー! まつはー!」

「て、てめえ! 笑うんじやねえ! ランダムスファイア!」

ドカーン。直撃したがもちろんこの程度で倒れる相手ではない。

テンマは、アームにスイッチを入れ戦闘モードだ。どうやらいつも

乗ってる

円盤は使わないらしい。

テンマのしたから、テンマに向かい針状の服が襲い掛かる。

セリルが飛ばした服だ。こんな使い方もできるのだ。

服の容量自体は関係ない。やううと思えば、この施設を覆ふるくらいの  
布になってしまつ。

とこうよつむじゅもひこには、セリルの巣といつてもよかつた。

「テンマ様!」

「楽しいなあー。ゼロー。セリル！ アキラも楽しめー！」

「てめえの遊びのせいで何人犠牲になつたと思つてんだー！」

「フリワーハヤン。たまには私に付き合ひでもいいつよ。」

セリルの考えだと、このままテンマを捕獲して、ビルかへ行ひへ  
いう魂胆らしく。

最早、あらゆるところに服が伸びておつ、四方八方からフリワーハ  
捕らえよう  
と服が襲い掛かつてくれる。

「ヒート・フリワーハー。」

変換された熱が、『おお』おを音を上げ当たりを燃やす。

もつか自分の研究所だとかそういう話ではなくなつてこない。

「アキラー催眠を使え！ あいつの動きを止めるんだー。」

「ふざけるなー。向で俺がそんなことをー。」

「なんだあ？ やつてみよー。」

「へへ。仕方ない。」

テンマのことをそれがどうこう類の命令であつて、絶対服従だ。

テンマはアキラの催眠を受ける、テンマの許容量ならアキラの催眠はさほど

効果がないが、動きは鈍るしやがてはかかるだらう。

「いい仕事したぜ！あいつに攻撃させずに即効で終わらせるぞ！セリルは

攻撃の手を緩めるなよ！」

「これで終わりだ！潰れろサイコロメスター。」

「あ、ああ・。」

テンマは感心したような声を出し、ロメスターに押しつぶされていった。

た。

しかし、同時に、穀潰しら三人は氷付けにされていた。

そして、潰されたかに見えたテンマは、ビックりレポートをして難を逃れた

らしい。

衝撃波系は手軽だが、大技ともなると施設に対してもとかの奇襲用避けられてしまうのが欠点ともいえる。

何度もいうが、こうのほもともと施設に対してだとかの奇襲用の暗殺向けの技なのだ。

一方で善い人は、10名入るであろうネームもひに囲まれていた。

そこへテンマも現れた。

「さて、善い人だな。なるほど強いらしいな。」

10人のネームもちはよくわからなそうな顔をしている。

なぜなら身体的にも、能力的にもとても強そうに思えないからだ。

「あなたが悪人の親玉だね。」

「私が悪人・・ふ・・ふはははは。なるほど悪人。そうかもしだぬな。」

「この善い人を笑うとはもう我慢ならん！ぼこつて改心させてやる！」

善い人は一瞬で、テンマの目の前に移動する。

驚愕する10人のネームもちたち。

「斬る！エレファントクラッシュ！」

すかっ！しかし善い人の剣は何もない空間を斬るだけに終わった。

なぜか善い人は、元いた位置に戻っていたのであった。

善い人が再度アタックを仕掛ける。

「くつ貴様。無礼だぞ！」

サイキッカーの一人は善い人に金縛りをかけるが、効果はない。

「なんだと？俺の超能力が効かない！？」

「貫け！トルネードチャージ！」

またもや、テンマに向かつて、攻撃を仕掛けるが、その攻撃も空を切る。

ここにきて善い人も認識を改めた。

「どうやら君が最後のボス、魔王のようだね。」

「善い人。実は私は貴様に興味があるのだ。お前はネームもちにしたから、

今後私に協力するがいい。」

「誰が悪人なんかに協力するものか！」

善い人は侮るなどばかり義憤を発した。

他のネームもちも不満げであった。

それを見たテンマは一計を考えた。

「データーがあればよいのだ。どうだ。誰か善い人と戦おうと思つものはいないか？」

「いのわたしくめが。」

そうこうて進み出たのは、ハロのよつひな格好をしたやたらマッチョな  
ネームもちだった。

## 第一十五幕 神意の雷（前書き）

そういえば、ゲームのほうはかなり進んだようです。

穀潰しも実装されて、ランダムスフィアもできました。

結構形になってきたので、よければ遊んでみてください。

## 第一一十五幕 神意の雷

「俺は道化師、テテリン・テテラン。あるいはネームの中でも最も強力で

その強さは、テンマ・トキトも凌駕するくらいだ！」

「つまり悪こやつと云ふとかー。」

「この俺の強さを知りたいか？なら教えてやろう。俺の能力はテレポートだ

。ただのテレポートではないぞ。

俺はテレポートの正確さ、距離、速度を極限まで高めている。アキラの催眠など非ではないといつことだ。

今らその力の一端を見せてやう。」

テテリンは、シコンとつ音を立てて、テレポートを開始した。

「どうだ？ 今俺が何回テレポートをしたか分かるか？ ・・・ 分かるまご。

100回だ。つまりお前は今俺に100回殺されていたといつことだ。」

「何だとー。この善い人を100回も殺すとはーなんといつ極悪非道

！」

「ようやく俺の強さが身にしみてきたようだな。だが安心しない。俺は慈悲深い

男で通つてゐる。

10秒時間を作るからその間に、己の罪深さを反省する」のだな。」

「面白い。この善人を倒そうというなら、かかるつてこい！」

「10・9・8・7・6・5おおつともうつ5秒しかないぞ！どうした？泣きべそ

か？お前の命は後5秒だぞ？4・3・2・1ああつ！もう一秒だ。そらぢうした？後1秒だぞ？1秒でお前は終わりだあ！」

「うるさいな・・・。」

「残念。0だ。ゲームオーバーしねい！」

テテリンは、常人よりはるかに速い反射速度を持つている。

加えてほぼりに等しいテレビポートの時間により、まるで分身しているかような錯覚を相手に起される。

しないといった瞬間には、もうあらかじめ善い人の背後にいるような具合だ。

しかしながら、善い人もうるさいなといった瞬間回し蹴りをしていたのだ。

まるでそこにはテテリンが出現するのが分かつていたかのように・・・。

「ほづつ！」

テテリンは蹴飛ばされ、何が起こったかもわからず、地面に激突し、跳ね返

つてきたところを、また善い人に蹴飛ばされ、壁を貫通して、ビリ  
かへと  
飛んでいった。

その一瞬の攻防が終わつた後、ネームもちたちは何が起つたかよ  
うやく把握  
し、睡然とした。

テソマの隣にいる白衣の女性は解説した。

「皆さん驚くほどのことではあります。あれは高位の予知能力者  
に違い  
ありません。」

なるほど・・・確かに予知能力者ならテレポーターにも勝てる。

ところより、テテリンに対しても勝つためには、予知能力を用いるほ  
かない。

ところのは、彼のテレポート発動速度は、メトリー速度を超えるし、  
メトリー

できたとしても、テレポートの発動速度が、視覚から脳への伝達速  
度に匹敵

するかそれ以上に早いため、とても対処できる話ではない。

だから確かに予知・・と考える以外ないのだが。

がそんな気配彼らにはちつとも感じなかつたのだ。

ところのことは、よほど能力の消し方や、遮断能力が高いといつこと

になる。

それにもしてもネームを持っている自分たちがまったく介入できないくらいの

遮断能力？うぬぼれてるわけではないが、それはありえない。

ネームもちは、思い思に考えを張り巡らされていたが、その考えをやめざるを得なかつた。

なぜなら、その思考は強制的にとめられてしまつたからだ。

善い人の攻撃によつて！

「吹き飛べ！突貫脚！」

ネームもちは、善い人の蹴りに張り付き、どんどん団子のように連なつて

いく、どういう原理か知らないが、善い人は空中に浮いたまま、方向転換

し、ネームもたちをすべて重ねて、けりを炸裂させていく。

やがて10人すべて重なつて、善い人の突貫蹴によつて、施設の天井を

ぶち破りネームもちは天へと飛んでいった。

「おおすじー！」

白衣の女性は感嘆した。

「見ましたか？今を？」

もちろんしゃべっているときに善い人が攻撃してくるのは定番のパターンなのだが、善い人の攻撃はことじとく、攻撃した瞬間、遠くの位置に戻される繰り返しだ。

これには理由がある。テンマが自分の周りの空間をゆがめて、別の空間をつなげたため、攻撃がすべて通らないことなのだ。

「見た。しかしあれはどうやら超能力ではないな。」

「え？ そんな馬鹿な！ あれほどどの力、超能力以外ならなんだつていうんだ！」

寝ぼけたことをこいつな！

「私でも、彼女は思考は読めない。しかし何か運命のようなものを感じる。」

運命、そつこずれ自分を倒すものとの対峙、自分がまったく知覚できない力。

テンマはそのビジョンを正確に捉えていた。

(少しほ楽しめやつになつてきたな。)

「トキト一ぐだぐだいわづ、さつわとあいつを捕まへる。」

「楽しみはひとつおくものだ。」

「なんだと？」

そのとき、善い人が開けた天井の穴から、雷が落ちてきて善い人ひとつながつた。

それも一瞬ではないずっとつながつていて。

「テンマ様あればいつたい？」

さすがの白衣の女性も呆然としている。こんな自然現象見たことがない。

「自然現象ではない。神意といつやつだ。」

「神意・・・は・・ははつなにをおっしゃるのやらー。」

「面白くなつてきたなあ！さあこい！」

善い人は目をつぶつていたがやがてカッと見開いた。

「悪人の親玉めー」の善人たる善い人の目を「まかせるとでも思つたか！」

「裁く！神善脚！」

「おおおんと空氣を切り裂く、炸裂音とともに、まさしく光となつて善い人は蹴りは、テンマ・トキトを貫いた。

「お・・お・・。」

そのままテンマは消滅した。

「悪は滅んだ！」

「ひいい・・・。」

「む・・まだ悪人がいたのか！ 善い人は悪を許さない！」

「ひい！ お助け！ 私は操られていただけなんです！」

「そうかそうか。私もそんな気がしたよ。なんていうと思ったか！ そんなことには騙される善い人ではない！」

白衣の女性は、こんな危機的状況でもよほど頭が回った。

「いや善い人様の善行はすばらしい！ よくぞ[曰]悪たるテンマをやつつけてくれました！」

私は善い人になるように改心します！」

「本当かな？」

「本当ですとも…」

「たわけめ。善人の力はこのよつたものか？」

「え？」

白衣の女性の後ろに「テンマ」が立っていた。

「どうして？」

「さすが魔王だね。復活すると思ったよ。」

善い人は改めてテンマと対峙した。善い人としても完全に自分より上の相手に出会ったの初めてだ。

お互いがお互いに興味を持つた。

「善いことをしてどうしようというのだあ？」

「それが善い人の天命だからだよ。私の善行をみんなが待ってる。あなたも善い人にならない？」

「善や悪など私は考えたことがないなあ！ただ強く力の本質に迫ること、それ以外のことなどどうでもよい。」

「なにをこうか！善いことがどうでも善いことこのか！」

「私にひとつは興味がないことだ。私が興味あるのは、善い人の力だよ。」

その一言は善い人を激怒させるのに十分すぎる一言だった。

「善い人を馬鹿にするものはやるやーん！」

「 善い人の回し蹴りは、空間」と消し去り、テンマも巻き込みまたもやテンマは消滅した。

消滅しつつテンマは感じた。

「 善い人の力は、確かにすごいが、自分には到底及ばないと。」

「 善い人の概念は、肉体という器から離れられていない。」

「 器や時間という概念から解放されたテンマの意識では相手にならない。」

「 善い人がテンマを倒そうと思えば、あらゆる次元のレベルの攻撃をしないとならないが、テンマはただ善い人の肉体を破壊すればいいだけだった。」

「 いくら強いといつても、一般人では話にならないか。」

「 こはやはりゼロを・・・。」

「 むーまだいたか！ 突き刺さる蹴り！』

しかし善い人の蹴りは地面を蹴っていた。

「 あれ？ おかしいな。私は確か変なところで善いことをしていたはずだけど。」

「 善い人はいつの間にか自分の家の近くまで移動していた。」

家中の中を見渡みると、穀漬しとアキラとセリルがコタツに入つて雑談していた。

みかんが山のように積んである。

善い人は自分もコタツに入り、みかんを一つ頬張った。

「てめえ！ それは俺が裏の木からとつてきたみかんだ！ 返せ！」

「穀漬し、家を貸してもらつてるんだからいいじゃない。」

「ま、まあそうかもしだねえが。」

「さすがセリルさんは善人だね。」

「今日は散々だった。何で俺がテンマ様に凍らせられる羽目に・・・。」

実は彼らはあの後、穀漬しとセリルは自力で氷から脱出したのだが、アキラが凍つたままだったので弱つっていたのだった。

そしてまじまじしていたらいつの間にか、善い人の家の中にいたといふことだ。

それについて議論したが、テレビポート、催眠、いろいろな話が出たが結局結論はでなかつた。

「まあなんだつていいぜ。テンマのやつはいつか俺がぶつ飛ばして  
やるから  
なー。」

威勢だけはいい穀潰し。

「あまり喧嘩してほしくないのだけど。」

「ナンバーズ以下がテンマ様に勝てるわけないだろ。馬鹿が。」

「何だと潰されてえのか？」

「できるのか？おまえ！」と毛糸。

「ふざけるなよ。」しつちは三人だぜ？」

「いやなんで私まで数に入ってるの？善い人ちゃんも。」

「おい善い人。ひやつはーーこいつは悪人だぜー。」

「よくいった。穀潰し！悪は成敗しないといけないー・吹き飛べS・

アッパー」

ドカーンという爆音とともに、穀潰しは吹き飛んだ。

「お、おれじゃねえーー！」

「これでようやく平和になつた。」

「あーあ・・。ふつ。じゃあ私は帰るね。」

がちゃん。セリルは家からでていった。

「・・・。」

「・・・。」

アキラは一人取り残された。善い人はアキラを無視して漫画をかき始めている。

「なんだこれは・・。俺も帰ろつ。」

アキラはテレビポートをし、家の中には善い人だけになつた。

善い人は今日の戦いを、懸命に漫画にかいていた。

## 第一十六幕 善い人復活

突然駆け出した善い人を追つた穀潰し、その追いかけっこは二日三晩続いた。

善い人が、とまつたのは、寂れた病院の前だった。

「おい、善い人。ここになんかあるのか？」

「……。」

「おい！無視するな！おいつて！」

善い人はどんどん先に行くので穀潰しはあわてて後を追いかけた。

善い人は、階段を上がりやがて病室の一つにたどり着いた。

「しんきくせえところだな。俺には一生縁がなさそうだぜ。」

「……私はこの場所を知っている。」

「へえ、てめえでも怪我をすることがあったのか。」

「いや、崩壊前の話だよ。」

「ん？善い人おまえ……。」

穀潰しはどうもおかしいと思った。善い人と普通に会話が成り立っていない。

善い人の頭は普段もつとぶつとんでいるから、崩壊前なんていう難しい単語でてくるわけがなかつた。

善い人は近くのテーブルの上においてあつた手帳を手に取り、ぱらぱらと眺めている。

「なんだそれは？ちょっと俺にも見せてみる。」

穀潰しがそれを読んでみるとこんな内容だった。

「なになに・・。・・。」

穀潰しがそれを読んでみるとこんな内容だった。

4月14日。

私は不治の病にかかつてしまつた。この体はどうせやつても治りないということは分かつてゐる。

でも死ねない。死ぬ勇氣が出ない。

両親にこれ以上お金を出させるのは忍びない。

ああ誰か私に勇氣を。いつそ世界が崩壊してしまえば善いのに・・。

「こいつはまさか・・。」

「私の日記帳だよ。」

「どうこう」とだ?」

がくん。善い人が突然ベットに倒れこむ。

「おいー。」

「穀漬し。聞いてほしい。」

「てめえ・・・死ぬのか?」

「私は、元々死んでいたんだよ。何でそれが今まで生きていたのか。  
なんとなくそれは分かつてるけど。」

善い人は倒れたが、その目はまだ弱弱しくない。

「てめえが生きてる理由なんかどうでもいい話だぜ。」

「私は、不治の病だつた。医師にも家族にも見放された。」

そしてあの日、世界崩壊の日のことだ。

両親はもちろん私は見捨てて逃げ出した。医師もそうだ。

他の患者?それはみんな連れ出されたよ。私だけが取り残された。

でも世界は崩壊した。その一点だけは私は感謝した。

いや狂喜したんだ。同時に絶望もした。

どうせベットにいても死ぬ。私は狂ったように床をはしつづばって、みんなの後を追つた。

みなは私を見て驚いたが、何かひそひそを相談をし、車に乗つてどこかにいってしまった。

核の光が迫つてくる。私は諦め死ぬことにした。

そこから先の記憶はなかつた。でもたぶんあの時私に雷が降つてきたんだ。

そして・・・。

「善いことをしなきや・・・みんなが私を待つている。」

そして、善い人が誕生した。善い人になつた私は、それ以前の記憶がすべてなくなつていたんだ。

穀潰しはその話をおとなしく聞いた後、善い人にこう尋ねた。

「俺は本当の名前なんか忘れちまつたが、お前はあるんだろう? なんていふんだ?」

穀潰しは名前を忘れたわけではない。うつすらと思いつて出されるのは、施設の世界だけだった。

母もなし、父もなし、ただ定められたレールの上に乗り、名前すらなかつた  
穀潰しだつた。

「私は・・私の名前は・・・。」

ガタン。いい終える前に善い人は息絶えた。

「善い人。どうやら死んだな?」

善い人の返事はない。

「本当に死んじまつたみたいだな。だがお前は死なないだろうよ。  
俺には  
分かる。」

病院に雷が落ち、建物が崩れ、その雷が善い人に直撃する。  
だがそれでも善い人は生き返らなかつた。

「これ以上ここにいても仕方ねえか・・・。じゃあな。善い人。  
次ぎあつたときは、決着をつけてやるぜ。」

そういうて、穀潰しは去つていった。善い人の体に定期的に雷が落ちている。

その気配を背後に感じたが、穀潰しは振り返ることがなかつた。

2週間後。

「今日も我輩の商売は順調なのだ。今回は飛竜の谷にいって、宝石をとつてきて、馬鹿儲けである。

そうと決まつたら早速善い人君を・・・。

それまで上機嫌だつたガスの顔が思案顔になつた。

「ああそいいえば善い人君は・・・。そうだな。堅実な商売をしよう。」

ガスがプレオをふかしていると、害児がガスの家に買い物に來た。

「やあ、ガスさん。」

「よ来到了。害児さん。今日は何か入用で?」

「うーん、車からおり、カウンターに戻つた。

「いえ・・ちょっとした雑談をと思いましてね。」

「雑談であるか。」

「ええ。最近張り合いかない。そう思いませんか?」

「張り合い? 我輩の商売は順調であるが。」

「善い人さんがいないとどうも張り合いかないと、そう思いましてね。」

ガスさんはそうは思いませんか?」

「害児さん。死んだ人のことを言つても仕方ないことなのだ。」

「分かつてはいるのですが・・・。」

「・・・我輩は商売があるのでこれで失礼させていただく。」

「はい。」

ガスが車に乗つてどこかに去つた後、害児はとぼとぼと帰路についた。

害児はあまり活発な活動をせず、自分は自室に閉じこもり、ほとんど部下たちに任せた。

住民は害児の妙な暴走がないので安心しきつており、名君だと害児をたたえあつた。

穀潰しも、今は害児の家にいる。

穀潰しがじるじるしているところに害児がやつてきて話しかけた。

話題はもちろん善い人のことであつた。

「穀潰しさん。どうやら善い人さんに落ちてくる雷が常時になつたみたいです。」

「ずっと落ちてるってことか。それでよく体が消滅しねえな。」

「ええ。しかしそれでもよみがえる気配がありません。あの辺一帯は、最早私の部下でも近づいてはいけなくなつてしまふ。」

「死んでも迷惑な野郎だぜ。」

「そしてあなたは」「ぐうぐうしてゐただけですか?」

「何かでめえに迷惑かけたかよ?」

「いえ別に・・・。」

「なり黙つてゐ。」

「天意とこゝものをどう思いますか?穀潰しさん。」

「ん?ああてめえの故郷。大陸の思想か。こゝの新大陸にも同じような考え方があるが、俺にとひちやどりでもいいことだぜ。」

「私はあなたも善い人さんも天意によつて選ばれたものだと思つています。

だから善い人さんがこのまま終わるわけないのです。」

「あつや。」

「穀潰しさん・・・。」

「もつ放つておいてくれねえか。俺は忙しいんだよ。」

「分かりました。」

害児は「うー」と呟き下がり、自室へ閉じこもった。

穀潰しは考えた。確かにこのまま寝てるだけでは芸がない。

善い人は復活したらやけに強くなつているだろ。なりば自分も強くなるべきだ。

穀潰しは、つぶやいた。

「俺はもつと強くなるぜ。テンマ・トキト。ああでときやがれ！」

その言葉を放つて間もなく、穀潰しの体は消えていった。

「うー」とある施設、穀潰しの要請を受けて彼の実質的な師であるテンマが

用意した場所だ。

穀潰しは妙なカプセルにいらっしゃるところだが、テンマに抗議をしていた。

「てめえ、なめやがって、俺はもつと実践的なことをしてえんだ。たとえば、てめえをぶつ潰すとかよ。なんていつも俺をカプセルにいれよ。とじやがる？」

「何が不満だ？ 手取り早く強くなれるんだぞ？」

「ただいてえだけなんだよ。それに脳をこじられるのは気分がよくねえぜ。」

「強くなるために何でもやる。当然ではないのか？」

「限度がある。俺は鍛えたいのであって、改造手術みたいな真似はしたくねえ！」

なら帰れとはいわなかつた。テンマにしても、穀潰しには大層期待している。

将来自分の好敵手になるだらう相手を鍛えるのは、十分メリットがあることだつた。

なので、最早問答は無用、穀潰しを無理やりカプセルにいれてしまつた。

「どうだあ？ 強くなる感覚がするだらうーはつまつはつはー強くなれ！」

ゼロオーー！

穀潰しはカプセルの中で悶絶しながらテンマをにらみつける。

テンマはその視線をまったく気にせず、編み物をしていた。

そのうちテンマはどこかへ出かけ、三日後帰ってきてカプセルから穀潰しを

出したといひ、穀潰しにいきなり殴られて、頭を抱えた。

「たわけ！」

一喝したが、痛そうに頭を抱えている。

テンマならそれくらい避けれそなものが、わざとあたつたのだろうか。

「ふざけるな！俺はいやだつていつたじえねえか。てめえ…潰れろ！ワイヤー！」

カッター！」

以前より早く正確な練りこみだ。

テンマはそのカッターに、自分の周りを回転するよつた衝撃波を出してかき消した。

「以前より、技の正確さはあがつてゐるな。しかしバリエーション  
が少ない。  
もつと増やせ。」

「な、なに？」

攻撃があつたり防がれ最早萎えたいたといひ、思いがけられず褒められたので  
穀潰しは多少元気になつた。

「例えば今私がやつたようなものだ。小技かもしれないが、お前は

強くなり

「たいのだらう? ゼロ。」

「そ、そ'だ！」

テンマは別にそんな小技使ってほしいと思わなかつたが、穀潰しの

えて、アドバイスをしたところだ。

私を倒すなら、絶対的な力の量を上げるべきだ。

「いや、お前の前に倒す相手がいるんでな。悪いな。」

「そ、うか。」

テンマは、つまらながつて去つてこいひとしたのぢ、穀漬しはとめた。

「モード」

「生を謳歌しろ。ゼロ。闘争に身を委ね、ただ高みのみを目指すの

だ  
「

そういうってテンマは消えていった。

「簡単と言つてくれるぜ・。。」

穀潰しはテンマのように単純な人間ではない。

そう簡単にいけば、こんなに苦労はしないのだ。

それから一週間後、善い人現るの報を受けて害児は舞い上がった。

「やはり、善い人さんが死ぬわけはないと思つていました。」

車椅子からジェットが噴射し、空を飛びながら善い人発見地点に向かう害児

、黒服も後に続く。

害児はガスにも連絡を入れたが、ガスは仕事があるということ。

穀潰しは、わざわざ探すまでもないという話。

現地に着いたとき害児はとんでもないものを見てしまった。

「善い人、善い人、私は善い人。」

「あ・ああ・・あああ！」

害児はうめいた。

黒服たちも、

「な、なんで・・？」

と、驚いていた。

「あいつは・・にせものだあああ！」

偽善い人だった。その正体は、義賊のアッチラ。

害児は激しく舌打ちし、黒服のほうに顔を向けた。

「やれ！」

その怒鳴とともに、アツチラに襲い掛かる黒服たち、不意をつかれたアツチラだが、スピードではぴか一の実力を誇る。

なんなくそれをよけ、嘲笑した。

「善い人にそんなものがきくか！」

「お前は善い人ではない。」

「え？」

振り向くと後ろに害児がいた。害児は掌底をアツチラに叩き込んだ。

アツチラの体はピンポン球がはねたように、地面に跳ね上がり、そのまま動かなくなつた。

その様子を見て黒服は恐る恐る聞いた。

「お殺しになつたのですか？」

「・・・。」

害児はそれに答えず、その場を去つた。

しばらくした後、白服に白帽子、正真正銘の善い人がアツチラの元へやつてき  
た。

アツチラは死んでなかつた。ただ声も出せずつめきまわつていただ  
けだ。

「た、助けてくれ・・・。」

善い人が手をかざすと、その手が光り、電撃が生じた。

アツチラは、しびれて飛び上がつた。

今度こそ死んだと思ったが、体が動くようになつていて。

「へへつ。あんがど。それにしても見たか！この義賊アツチラは、  
恐れず

魔王、暴君、悪逆の主、害児に立ち向かつていた。

アツチラこそまことの勇者だと、みなが褒め称えるであらう！

ひとしきり演説した後、アツチラは改めていつた。

「善人協会は、俺だけではない。第一、第三の善い人を生み出していく。  
いる。

いまや善い人の名前は、一部では救世主という扱い、利用しない手  
はない。

さあどうする？

「みんなが善い人になるなら善いことじやないか。」

「その偽善い人が、善いことと称して、妙なことをしていたら、悪いうわさは

全て善い人が受けることになるぞ。」

「なに？ 善い人の名を汚すことは許さん！」

「善人協会としては、善い人が死んでこれ幸いといったところだ。おつと待てよ。俺はあんたと争う気はないぜ。

俺は親切で情報を教えてやつたんだ。つまり俺は善い人。」

「まだ善い人の名をかたるか！」

「いや待て待て。これは冗談・・・。」

「食らえ！蹴鞠落とし！」

善い人は、アツチラを蹴り上げ空中に上げた後、かかとおとしを繰り出し  
地面に埋めた。

「悪は滅んだ！この善い人がいる限り、悪人は許さない！善い人は  
何度も  
復活する！見ておれ。この善い人の目が黒いうちは好きなことはさせないよ！」

善い人は大演説を、埋まつたアツチラにした後、どこかへ駆けていつた。

「さすがは俺のライバル。こうとなつちやもう善い人なんかやつて

られるか！

俺は義賊に戻るぜ。さあ悪逆の主害児から今日も金を巻き上げるぜ  
！」

アツチラも意気揚々どこかへと駆けていった。

## 第一十七幕 馬鹿騒ぎな復活祭

「やあ、善い人さん！復活おめでとう！」

「おめでとう！おめでとう！」

今日は善い人の家で、みなが善い人の復活を祝っていた。

みなとは、害児、黒服、タンク、穀潰し、ドラゴン、アツチラ、アキラ  
、セリル、騎士竜等善い人にゆかりのあるものばかりだ。

狭い善い人の家は、粉々になつており、広々としていた。

庭にシートを敷き、テーブルといすを用意して、がやがやと騒ぎ立てていた。

「今日は善い日だ、上等なワインをあけよう。」

害児は、ワインをあけ、上機嫌でそれを飲み干す。

中央のテーブルには豪勢な料理がならんでおり、善い人には特上級の水が進呈された。

宴が始まって間もなく、穀潰しは疑問を善い人にぶつけてみた。

「おい、善い人、よく生き返ったな。お前は生き返ると思っていたぜ。」

「当然だよ。善い人は決して死はない。」

「そりゃいえ、お前名前思い出したんだよな。これからも今までどおりの馬鹿をやらかすのか？」

「馬鹿とは何だ。殴られたいのか。」

「だつて馬鹿じゃねえか。頭がおかしいとしか思えないぜ。」

「善い人を馬鹿にする悪党は思い知らせてやらないといけない。」

善い人はいきり立つて席を立つた。

そこをタンクがやってきてまあまとなだめ、穀潰しは害児に呼ばれ、善い人のそばを去った。

「穀潰しさん、どうやらあなたは善い人さんの名前を知ってしまったようですね。」

「あ、ああ・。何か不都合でもあるのか？」

「ええ、そのとおり。非常に不都合です。何しろ善い人さんは自分の名前を知ると絶命しますからね。」

「ああそれが原因での時にやがったのか。」

「だから、善い人さんの名前を教えてはいけません。彼女はきっとまた名前を忘れますよ。

あなただって、また善い人さんを殺して得をするわけではないでしょ？」「うーん。

「まあ・・確かにそうだが。しかしいいのか？」

「いいとは？」

「いや、そんなのでいいのか。お前がなにをたぐらんでるのか知らないが。

これじゃ善い人のやつは道化だぜ。」

「ほう・・・。」

害児は目を細めて、穀漬しを見つめた後、穀漬しにコップを渡し、ワインをついだ。

「穀漬しさん。あなたにもそういう情のわきどりががあったのですね。

「これは意外です。」

「なにこいつてやがる。少なくとも手前よりは非情じやねえよ。」

そうこうして穀漬しひべとワインを飲んで、コップを放り投げた。

「で、どうなんだ？ずっとこのまままでいいのか？」

「それは私が決める」とではありません。天が決めるんですよ。

「てめえの言葉なんか信じれるか。なにたくらんでやがる。」

「別になにも・・・いや本当のことです。」

穀潰しへこりまたので、あわてて害児は態度を変えた。

「じゃあなたを知っている?」

「あなたと同じ程度のことですよ。今の時点では私もあなたもビッグショウもないはず。この話はここで終えましょう。今は宴を楽しむべきです。」

そういうて害児が逃げようとするのを、穀潰しは車椅子をつかんとめる。

「待てよ。話は終わってねえぜ。」

「分からないお人だ。私は話したくないといつているのです。」

「てめえをぼこぼこしてぶつ潰してから聞いてやつたつていいんだぜ。」

「あなたは時々面白っこと言いますね。」

害児の目のおくがきらりと光った。

先ほどからちりちりを様子を伺っていたアキラが、見るに見かねて

とめにか  
かつた。

「やめとけ、穀潰し。そいつは化け物だ。」

「アキラ、てめえのお得意の催眠をこいつにぶちかませ。」

「馬鹿いうな。」

書児はアキラの出現で一気に不機嫌になつた。

「何だ貴様は。私たちの話に割つて入らないでもらおうか。」

「いやしかし・・・。」

アキラがすゞすゞと退散するそぶりを見せると、何か向こひからこ  
ちら  
に向かつてくるものが見えた。

「なんだあれは？」

その物体は、こちらにいきなり突つ込み、テーブルを蹴散らしてい  
つた。

それはガスのプレオであった。

仁王像のような表情のガスがその中からでてきて、ずかずかと奥に  
進み、  
中央にある料理のテーブルから、料理をふんだくつて食べ、酒を瓶  
ごと

痛飲し、空になつた酒瓶をテーブルにたたきつけ、辺りを睥睨した。

あまりの出来事に、みなは呆け、場が一気にさめていった。

なぜこんなことになつてしまつたのか。別にガスはこの復活祭に呼ばれてないわけではない。

話は少し前にさかのぼり、ガスの店での話となる。

ガスは、害児から招待状をうけとつた。善い人が復活したので、祭りに参加するようのことだ。

「また、害児の勘違い馬鹿騒ぎであるか。我輩は忙しいのだ。つきあっておれん。」

そういつて、ガスは招待状をゴミ箱に捨てた。

しかし、案外善い人は本当に復活したと知り、ガスは不快感を覚えた。

「復活したならなぜ善い人がじきじきに我輩のところに挨拶にこないのか。

散々世話をしてやつたのに、あの恩知らずの善い人めが。」

そういうて、ガスは怒り心頭に達しプレオに乗り、今に至つたといふわけだ。

ガスは辺りを睥睨し、善い人を発見すると、すかずかと接近して、  
善い人が  
飲んでいた水がはいつたコップを取り上げると、放り投げてしまつた。

善い人は無言で、他のコップに水を注いだが、それもガスにとりあげられて  
しまつた。

「私は水が飲みたいのだから邪魔をしないでほしいな。」

「善い人君は、我輩に数々の恩があるではないか。それなのにどうして  
復活したなら我輩に真っ先に挨拶に来なかつたのか。  
こういうことでは、善い人君との付き合いを考え直さないといけないな！」

害児が横から口を出した。

「しかし、ガスさん。あなたにも招待状を送つたではありませんか。」

「

「招待状？そんなものまた害児の勘違い馬鹿騒ぎに決まつておると  
誰だつて  
思うではないか。」

我輩は、極悪非道の害児に店を取られて、ここまで必死に稼いできたのだ。

そんな忙しい中、そんな馬鹿に付き合つ暇なんかあるわけないではないか。」

「ずいぶんなことをいいますね。ガスさん。何ならまた店を取り上げてもいいのですよ。」

「あいや恐れ入つたことである。都合が悪くなるとすぐ暴力。まるでゴリラやチンパンジーの類。我輩は人間であるから、こんな獣臭いとんちき馬鹿騒ぎなどこちから！」めんである。人間の我輩はここで失礼させていただく！」

そういうて、ガスは酒樽や酒瓶、そして料理などを車にせつせつとめる作業を始めた。

その様子にアツチラが指を刺し怒つた。

「あの野郎！俺たちの食料を全部奪うつもりだぜ！とんでもねえ泥棒やろ

うだ！」

他の参加者ももちろん怒り、口々にガスを罵つた。

「我輩の商売に使つてやるのだから、ありがたいと思え！」

そういうて、ガスは料理をすべてかっさらいかえつていつてしまつた。

場がすっかりしらけ、みなは興ざめ顔になり、とぼとぼとまづまづと元気だった。

帰つ

ていつた。

みんなは主催者の害児に遠慮して、何もガスに危害を加えなかつたが、

害児も、ガスの所業を見て何もしなかつた。

「首領、なぜあの馬鹿に言いたい放題いわせておいたのですか？」

黒服は害児に真意を聞いた。

害児はそれに答えた。

「あの程度の輩の振る舞いにいちいち田ぐじらを立てても仕方ないでしよう。

私たちは王者なのです。どっしどと構えていればいいのです。」

「なるほど、さすが首領。」

黒服が害児を慕うこと数倍した。

しかしそうはいったものの、内心では害児は腸が煮えくり返つていた。

(おのれ・・ガスめ・・。目に物見させてくれる!)

今は、善い人や穀潰しもいた手前、表立つて行動できなかつたが、必ずガスを思い知らせると固く誓つた。

善い人は特にガスの振る舞いに何も感じず、穀潰しは、あの後すぐガスを

追つて、分け前のおこぼれを頂戴した。

## 第二十八幕 善人激励

そして、数日後、最早害児もガスなどどうでもよくなつていた。

それよりもあることが気になり、そのことを善い人に確かめた。

「善い人さん。どうやら各地に偽善い人が出没しているようです。これを放つておいていいのでしょうか？善い人の沾券にかかるるのでは？」

「害児さん。そのことはよく考えてみたけど、善い人が増えるのは  
善いこと  
だよ。」

「それはそうかもしだせんが。しかし善いことと称して、とんでもない  
悪事を働いているやもしだせん。  
ここは、善い人さんじきじきに視察に行き、彼らをねぎりつてやる  
のは  
どうでしょうか？」

善い人はその意見に満足した。

「さすが害児さんだね。私もちょっと今そう思つてたところなんだ  
よ。」

「ではそつするのですか？」

「他の悪い人たちをねぎらいつのも、悪い人に違いない。早速行こう。善は急げだよ。」

「では私もお供しましょう。」

害児は、裏からトラックを出しそれに善い人を乗せた。

なぜか騎士竜まで車に乗り込んでくる。その後すぐにトラックは出発した。

「害児さん、この悪人もつれていくの?」

害児はトラックを片手で運転しつつ、片手で頬杖をつきながら話した。

「ええ、そうでないと場所が分かりませんから。」

「そんなの勘で何とかなるよ。」

どうやら善い人は、騎士竜がトラックに乗つてこることに反対のようだ。

騎士竜はパソコンをカタカタさせており、善い人のほうを見ずに応対した。

「君が僕を嫌うのも最もだが、俗に言ひ僕は心を入れ替えたというやつなんだ。大目に見てくれ。」

「怪しいな。害児さん、じゅうじて仲間の振りをして後で裏切る典

型的な

悪人だよ。この人は。」

「善い人さん、気持ちはよく分かりますが、こいつはなかなか役に立つ男です。

。ここには善人の寛大な心を見せるところですよ。」

「仕方ないな。そこまでいうなら善人のお供に加えてあげよう。心配してなくとも善いよ。今は悪人の君でもこの善い人のありがたい言葉を聞いていけば立派な善人になれるからね。」

騎士竜はそれを聞いて苦笑いした。

「そう願いたいものだな。」

「何だその態度はー馬鹿にしているのか!」

こちらも見ることもせず、せせら笑う騎士竜の態度は善い人が激怒するのに十分すぎる態度だった。

騎士竜は善い人に殴られ、吹き飛ぶ。ただし軽くなので、車の外までは飛ばなかつたようだ。

善い人にしては常にはない手心だった。害虫の顔を立ててているのだろう。

「まあまあ善い人さん。こいつも反省します。」

騎士竜はふらふらになつて、意識を取り戻した後つぶやいた。

「なんて馬鹿力だ。」

その言葉が善い人の耳に届き、善い人はまた怒つた。

「なんてやつだ！まったく反省していない！」

「反省してるよ。」

騎士竜はもう勘弁してくれといつ表情で害児を見て、害児はそれを見てうなづいた。

害児が考え込む素振りをし始め、善い人がますますエキサイトする。

（だめだ害児は・・・あてにならない。）

騎士竜は、何かこの展開を挽回できる手はないかと探していたが、前方に何か騒ぎがあるのを発見した。

「待て、あれを見てみる。何か騒ぎがあるようだ。」

そういって騎士竜は率先してトラックを降りた。

「善い人さん、どうやら彼女が例の善人の一人ですね。なにやらもめてる  
ようですが。」

そういうて害児はトラックを止め、善い人と害児もトラックを降りる。

善人は、悪人相手に激闘を演じていた。

「どうだー！ 善人の力見たかー！」

善人の拳を受けた悪党はすつころび、悲鳴を上げた。

「ひえー、お助けー！ さすが善人様だーー！」

それを見た害児と騎士竜は顔をしかめた。

「やらせにしか見えないな。」

「確かに・・・。善い人さんはどう思います？あれ？」

「善い人ならすでに善人に加勢してるな。ほれみる。今悪人が吹き飛んだ。」

桜の悪人は天空へと吹き飛び、善人、善い人Aとしておくが、善い人Aは驚

いた表情で善い人を見ていた。

「あ、あなたはなにをしてくれたのですか！」

「ここの私には及ばないけど、君もなかなか善い人だね。ほめてあげるよ。」

「はあ？ 頭おかしいんですか？」

「私は善い人だよ。あなたの仲間だ。」

「は、はあ・・・。」

そこへ害児が騎士竜が歩いてやってきて善い人に事情を説明した。

「善い人さん、あれはさくらです。つまり演技うことですよ。あの悪人はこの善い人Aさんの仲間なんです。たぶん・・善人協会の人間でしょうね。」

「あの悪人も善い人だつたのか・・・。」

ここにきて善い人Aも彼ら一行が何か尋常ではない連中だと気づいた。

「あなた方はいつたい？」

「私たちは善い人さんの名をかたる不屈きものを懲らしめにきた、正義の使者です。」

「な、なんですって？」

「そつぽこぼこ善い人さんが増えてしまうと私としても困るのです。だからまずあなたをぼこぼこにして見せしめにし、他の連中への脅しにしようとおもうのです。」

「ひ、ひい！」

「害児さん、この人は善い人だよ。いじめてはいけない。」

「善い人さん、確かにこの人は善い人かもしれません。しかし彼女の  
善い人指数は善い人さんを10とする1程度に過ぎません。  
だからこのように叱咤激励して、もつと善い人になるようにしてるので  
ですよ。」

「そうだつたのか。さすが害児さんは善い人だ。」

その様子を見て騎士竜は害児に耳打ちした。

（なかなか口が回りますな。）

（ふふ・・あなたは私の手前のゆつくりと見物してるがいい。  
このようなものをあしらうなど私にとつては造作もないこと。）

（無骨なあなたがたいした変化だ。それにしても善い人は頭が悪い  
な。）

露骨に馬鹿にされている善い人だが、同志を得て大得意になり、先  
輩として  
後輩に説教をしていた。

善い人の善い人Aに対する無意味な説教は1時間続き、善い人Aは  
やつとの  
ことで解放された。

善い人Aは、すたこらさつさと逃げていった。

「む・・やつが逃げていくぞ。いいのか？」

騎士竜が心配そうに害兎にたずねた。

「すでに手は打ってある。」

善い人Aがしばらく逃げていると、黒い影がその姿をちらつっていくのが見えた。

騎士竜はなかなかの手際に感心した。害兎はなかなか人を使うのがうまいんだ

など意外な感がした。

「つまくやつたな。」

「当然です。さあ善い人さん。次へいきましょう。善は急げですよ。」

「

「ん？ さつきの善い人が消えたみたいだよ。助けに行かないよ。」

「大丈夫です！ 真の善人ならこの程度の試練乗り越えられるはずです！」

「ずいぶんと都合の善い屁理屈だな。」

「なにを言つてるのですか騎士竜。ほら一人ともさつさと車に乗つてくだ

さい。」

トラックの中で、騎士竜は次の善人の説明をした。パソコンの中にデーターがあつてそれを教えるのだ。

「次の善人は、町中に花を植えているそうだ。」

騎士竜は善い人に花いつぱいの画像を見せた。その画像にしゃがんでいる少女がいる。向こうを向いており顔は見えない。

「なるほどそれは善いことだね。」

「それはどうでしうね。そういう人こそ裏でビキたない悪さをしているものですよ。」

「なにを言つてるんだ。害児さん。それではこの善い人が悪さをしているとでも？」

善い人のわけの分からぬ言いがかりに害児は鼻白んだ。

「無意味に暴れまわつて、罪のない人間をぶつ飛ばすのは悪いことなんじやないのか？」

騎士竜はなにげなしにそついた。

「なに？ 今なんと言つた？」

善い人がぶちぎれる前に、害児が氣勢をそぐために大声で発言した。

「なにを言つてるんだ騎士竜！ 善い人さんの深い考えはお前のように馬鹿には

到底分からぬだ！ 恥を知れ！」

「・・・分かつた分かつた。馬鹿馬鹿しい。とにかく今度の善人は  
ちやんとした善人だと思うぞ。（どつかの馬鹿と違つてね。）」

害児はいい加減にしろという顔で騎士竜に耳打ちした。

（おい！ どういうつもりなんだ！ これ以上善い人さんにてつける  
のはやめろ！）

（なにを言つてるんだ。僕は事実を言つたまでだよ。）

（それが困るんだ。分かつてくれ、頼むから。お前たちみみたいな無能の

尻拭いをする私の身にもなつてくれ。無能らしくわきまえてくれ。）

（ずいぶんな言い様だな。）

しかし騎士竜は、仕方ないといつ感じで善い人に話しかけた。

「善い人さん、悪かつたよ。あなたはすばらしい世界一の善人だ。  
罪のない人を平氣でぶつ飛ばす、とてもなく偉大な善人だよ。」

「分かつてくれればいいんだよ。あなたも努力してわたしのような偉大な善人になることだね。」

「ああせいぜい努力させてもらつよ。僕がどれだけ努力しても、理不尽に暴力を振るう自称善人様にはなれないと思うが、偉大な善い人様を目指して努力させてもらおうか。」

そのとき、きなり車が止まつたので、騎士竜は怪訝な顔になつた。

「きしりゅううう！」

ドガッ！騎士竜は害児にぶん殴られ、車の外でてしまつた。

「害児さん、せつかく善人になりかけている騎士竜を殴つてしまつてはダメだよ。」

騎士竜は再び車に上がりこんできて害児に耳打ちした。

（御覧なさい。僕の計算どおりだよ。あいつはお馬鹿だからほめているようにいえばいくらでも馬鹿にできる。）

（あまり心臓に悪いことをしてくれるな。）

「いや善い人様はまったく寛大、ところであそこにいる花を植えている女性

が今度の善人だ。激励するんだろう?」

「そうだ!騎士竜も善い人たる自覚が出てきて感心感心。

』

「お褒めに預かり光栄・・。」

## 第二十九幕 花と善人

害児は車を女性の前に止める。この女性を仮に善い人Bとしておく。

善い入ら一行は、善い人Bに近づき、激励した。

「やあやつてるね。さすが善い人だ。」

「どなたですか？あなた方は。」

「私？私は善い人だよ。あなたも善い人でしょ？」

「確かに私は善い人です。こんな風に町に花を植えているのですから。」

辺り一面中花だらけだった。花の都とでもいってもいいかもしけない。

「善人協会の人間ですね？」

害児が善い人Bにそう質問した。

「そうです。あなたたちも？」

「残念ながら違います。ここにいる善い人さんは、あなたと違う本物の善い人です。私としてはあなた方が善い人を自称していることに、困っています。」

「何故あなたが困るのですか?よ」しまな考えがありだからでは?  
?」

思わぬ善い人Bの鋭い発言に害児はたじろいたが、形勢を建て直し威圧した。

「利いた風な口を利くなよ。貴様のよつなゴミ虫一匹駆除するのは私に  
とつては簡単なことだ。」

「・・・・・」

「・・・・・」

二人は押し黙ってしまった。善い人は話が終わつたと勘違いし、次の行動に  
移つた。

「さあ、みなで花で植えよう!せつかくだからこの私がじきじきに  
善いこと  
に参加してあげるよ!」

善い人は善い人Bのかごから球根を奪い花を植え始めた。

その様子を見て善い人Bが口を開いた。

「私は花を植えないといけません。あなたに構つてる暇などないの  
です。」

「後悔するなよ。この私にそんな口を聞いたことを。」

「ふん・・・。」

「善い人Bはそそくせとその場を去つていつた。

害児を馬鹿にされて腹が立つたどこかに隠れていた黒服が善い人Bをさらおうとしたが、善い人に蹴飛ばされて、吹き飛んでいた。

騎士竜は害児に言った。

「害児さんとやら、あの善い人は全うに善いことをしているし、報つておいても問題ないのではないか。」

害児は不機嫌そうに騎士竜を一瞥した。

「お前はまつたく何も分かつてない。もうじやべるな。無能め。」

その言葉にやすがの騎士竜もむつとした。

「僕にやつ当たるのはやめてもらおうか。」

「貴様などに八つ当たりする価値すらない。いいですか。あの人があがめる人がどうかなどどうでもいい話なのです。そんなこと最初から分かりきった話でしょ。善い人の名を使つてることが問題なんですよ。」

「そんなことくらい騎士竜だつて分かつてゐる。騎士竜がいいたいことは別のことだった。」

「ならこんなちまちまなことしてないで、善人協会自体を潰してしまった

ほうが早いのではないか？」

「別に・・そう」ことを大きくするつもりはありませんでしたし、少し  
お灸をすればよいと考えてましたが、あっちがああいう態度にで  
るなら

私としても考えなおさないといけませんね。」

「ああそれがいい。こんなことするのは労力の無駄だし、ストレス  
がたまる  
だけだ。

本拠地の場所は、さすがにデーターにないのだが、たださつきの花  
植えは  
善人協会四天王の一人といふことらしいな。」

「ほうそうですか。確かアツチラとかいふゴミ虫がそうでしたね。」

「花植えのマリーといつらしい。」

「つまりあいつを捕まえて、はかせればいいわけですね。」

「それはそうなんだが、民間組織とはいえ善人協会は規模もでかい  
し、幹部  
クラスとなれば、忠誠心も厚いという話だ。それにはつきりいって  
あれば  
本物の善人だし、善い人も近くにいる。どうするんだ？」

「馬鹿で無能あなたは黙つて私にデーターだけよこせばいいので

す。

「後は私が全てうまくやりますからね。」

「相変わらずな」あこせつだな。」

害児はつかつかとマリーに近寄った。

マリーは露骨にいやな顔をした。

「何か御用ですか?」

「善人協会の本拠地に案内してもらひおつか。」

害児はのっけから高圧的にいった。

「入会なさるのですか? あなたに勤まるとは思えませんが。」

マリーも負けていない。伊達に善人協会四天王ではないといふことらしい。

「こいつ・・人が下手にでていれば言いたい放題ば罵罵雑言、私にも限度といつものがある。」

害児は、拳銃を抜いたマリーに突きつけた。

マリーは微動だにせず、軽蔑した薄ら笑いを浮かべて、花植えの作業を再開した。

「あやまあー!」

害児は思わず発砲し、弾丸はマリーの体を貫いた。がしかしマリーの体は花びらとなつて散つてしまつた。

害児の周りに花びらが吹き荒れている。

(安い幻術だ。しかもしびれ薬だな。陳腐な手段を使う。)

突風が起こり、花びらは吹き飛ばされる。晴れた視界には、騎士竜とレイピアについてきたマリーの姿があった。

マリーのレイペニアは騎士龍との競争で敗北してしまった。

マリーはレーピアを引き、ぐるぐると回転させパチッと音を立てて腰に収納させた。

「私こそは、善人四天王が一人、花植えのマリーと申します。いきなり発砲するとは何という非常識無慈悲極まりない行為、あなたのような

「・・威勢よく出てきたのはいいが、貴様の幻術など呪戯に等しい。こんな程度の技でこの害虫にどう対抗するつもりだ？」

「愚かな人です。あなたは善人協会を敵に回しました。そして私も今は引かせてもらいますよ。」

「私が貴様を逃がすとでも？」

「あはは・・愚かな人。こんな答弁は無意味なんです。私はもうここにはいませんから、それではまだござげんよつ。」

そういうて、スカートの端をちょっと挙げる例のお嬢様挨拶をする  
と、花びら  
となり散つていつた。

マリーは害児たちから遠く離れた、花畠にふわふわ浮いていた。  
完全に逃げおおせたと思つてゐるようだ。

「まつたくこの私の花植えを邪魔するなんて無粋な人もいます。  
まあもう一度と顔を見る」ことはないでしうけど。」

「あながちそうでもないな。」

「え？」

マリーが驚いて後ろを振り返ると、そこには誰もいなかつた。

しかし、後頭部に衝撃を感じ、気づいたときには地面に激突してい  
た。

「ふざやん！」

「まあ・・ゴリラにしてはよく頑張ったほうだが。」

害児は車椅子をマリーが倒れてる場所に引き寄せ、拳銃を突きつけた。

「こんな程度だ。しょせんはな。何故だか分かるか?」

「あまり無礼なことをすると許しませんよ!」

マリーはまだまだ元気たっぷりだが、害児はその言葉を無視して言葉を続けた。

「分からぬいか。私が王者だからだ。ゴミ虫がいくら頑張つたところで、王者たる私の私を出し抜けるわけないとこつことだ。」

「王者ですか?あなたはおばかさんなのですか?」

「おーい、がいじさーん。」

遠くから善い人が歩いてきた。騎士竜も一緒だ。

「さあ、いのちこののがきた。」

「どうやらあなたを出し抜ける人が来たようですね。」

「調子に乗るなよ。何度も言つが、貴様など私がその気になればどうとでもできるのだ。」

「はいはい、それはよいわこますね。」

「最後にもう一度だけ聞く、協会の本拠地はどこだ？」

「それをいえば私を逃がしてくれると約束するならば教えましょう。」

「

害児はその言葉を聞いてにやりと笑つた。

「ほうせつですか。いやあなたはなかなか骨があつて見込みのある人物です。

今私は機嫌がいい。本来ならそんな約束は無効ですが、特別に約束してあげましょ。」

もちろん害児が約束などするわけない。そもそも王者とハリ虫の間に約束もなにもあるわけがないではないか。

「」の花の道、実は善人協会の本拠地より続いているのです。」

「え？ そうなのですか。それはす」「。花が途中で枯れたりしないのですか？」

害児は素直に感心した。

「私は花植えだけではなく、その後の管理まで元壁なのですよ。」

「不思議なこともある。じつやあなたはアッチワとは違つとうですね。」

「あの人は、協会員よつピロロにでもなつたほうがこいと思つてます。」

「それは違ひない。さて・・。もうあなたには用はないわけだが。」

「約束はどうしましたか?」

「約束?あまりふざけないことです。約束といつのは対等の立場のものが行うもの、あなたと私は対等ですか?」

「そうですか。案外あなたもつまらない人間なのですね。」

「辞世の句はそれでいいのですか?殺しはしません。私は殺しはやめましたからね。しかしあなたの体術を奪うくらこのことはできます。」

それを聞いてマリーは笑い出した。

「あははは、まあおかしい。」

それを見て害児もにやりとした。

「そうですか。私もおかしいですよ。あなたは恐怖のあまり気が狂つてしまつたようだ。」

「そういうことではありません。貴方ほどの達人がなぜ車椅子生活なのかなと  
思いましてね。」

「・・・なにがいいたい？」

「いえ別に。」

「分かった。望みどおりにしてあげましょ。」

書児が刀を抜こうとしたが、その手を止められた。

どうやら騎士竜が追いついて、書児の手をつかんだらしい。

「おや？ 騎士竜。気配が読めませんでした。」

「そんなことよつ書児をとせり、なにをやつてゐるんだ。」  
とを  
したら貴方の強力なパートナーが愛想を尽かしてしまつた。  
僕に感謝してもらいたいからだ。」

善い人はその間、マリーを起こし、もつと球根がないかせがんだ。

「なるほど・・・確かにそうですね。早計だったかもしません。」

書児はどかっと車椅子に腰掛けた。

「善い人さんに免じては許してあげましょ。ただし一度は  
ありません

からね。今度わたしの前に顔を出したら、わかつてますね。」

「ふんつ。」

「マリーはどうでもいいという風に善い人と一緒に花植えを再開してしまった。

「どうやらあの人は本当にしにたようだ。」

害児は怒りのあまりふるふるしている。

「やめておけ。善い人が一緒に無理だ。」

「騎士竜ならなんとでもなるだろう?..」

「それはなるかもしないが、100%ではない。善い人にばれてしまうかもしない。」

「肝心なときに役立たずめ。」

「僕たちがこれ以上ここにいても仕方ないんじゃないのか。疲れるだけだ。」

もう帰ろう。善い人はおいていけばいい。」

「Jの害児に逃げろといつのか。」

「じゃあ花植えをしたいのか?害児さんとやらは。」

確かに、騎士竜は先ほど善い人からもられた大量の球根が手元にあつた。

「・・確かにこんな馬鹿なことをしてるのは無益なことだ。」

害児は足元にあつた球根を一つ取り上げて、マリーの頭に向かって投げた。

球根はマリーの頭に見事に当たり、マリーは地面に顔をめり込ませた。

「では帰りましょうか。」

害児はその様子を見て満足したようだ。

「まあ・・あの程度ですんでラッキーだったのだろうな。あのお嬢さんは。」

騎士竜も帰ろうとしてトラックに乗ろうとしたが、善い人が回りこんできた。

「善い人も一緒に帰るのか?」

「君は本当に反省が足りないね。せっかく私が善人になれるチャンスをあげた

のに、こうなつたら私がじきじきにぼこらんといけない。」

「分かつたよ。球根を植えればいいんだな? そんなくらいなんともないこと

だ。」

善い人が何をする前に、騎士竜はあわてて、準備をした。

まず、片足で地面を軽く踏む。地面はちょうど球根一個分が入れる  
くらい

の穴が複数できる。

騎士竜が持っている球根をかごと投げると、かごは回転しながら、  
ちよづき

いい具合に一つづつ飛び出し、地面の穴に入していく。

ブーメランのよひに戻ってきたかごをキャッチした後、また軽く地  
面を踏み、

球根が入った穴がに地面がかぶされる、その後別の場所から出で  
きた水  
がそれらの土の上に降り注ぐ。

「どうかな？」

「なかなかやるね。」

「横着ですけどね。」

いつの間にか復活したマリーが善い人の横に並んでいた。

「結果が全てだ。やうだらう?..」

「いいえ違います。花一つ一つに感謝の念を持つて育てていくので  
す。」

「やうかな。ならもう少しサービスをしてあげよつ。」

騎士竜はパソコンで一秒ほど計算した後、しゃじみこみ、地面を複  
数個所  
指でとんとんしていた。

「？」

「マリーは不思議そうにその様子を眺めている。

「終わったよ。後ろを見てみると、  
「植えたばかりの球根から花が咲いていた。」

「善い人とマリーが後ろを見ると、植えたばかりの球根から花が咲いていた。

「一人の後ろは辺り一面中花だらけだった。

「これは・・・」

あっけにとられたマリーが振り返ると、騎士竜はすでにトラックに入った。

後だった。トラックはマリーと善い人が見送る中、去っていった。

「なかなか手ごわい人もいますね。あの騎士竜といつ人。」

「あの人は悪人だよ。いつか私たちを裏切ろうとしている。でも心配しないで

「大丈夫だよ。私が責任を持つて善人にするからね。」

（あの技のきれ、私程度でも分かります。彼が敵に回つたらアッチラや）

（私、いや善人協会など一瞬で崩壊するでしょう。できれば敵に回したくないところですが。）

## 第三十幕 花の道、善人協会本部へ（前書き）

しばらく所用で休んでおりました。ゲームのほうは大分進んだようです。

今までにないシステムなので面白いと思います。気が向いたら是非・。

## 第三十幕 花の道、善人協会本部へ

「ところで善い人さん。」

マリーは、花を植える作業に戻った善い人の背中から声をかけた。  
善い人は振り返りもせず  
それに応じる。

「なにかな？」

「あなたは、まだ組織の本部にいったことがないでしょう。善人協会の先輩としてあなたを  
本部に案内してあげますよ。」

「わたしはいいことをしないといけない。」

そういうて黙々と花を植え続けている。

「そうですね。でも本部に行くことも善いことなんです。いろいろ  
な善人と交流できます  
から。」

そういうて善い人の腕をつかんで立ち上がらせた。

「ああ、いきましょ。」

かなり強引にぐいぐいと引っ張る。マリーはこの際に善い人を完全  
に自分たちの仲間にしよ  
うともくろんでいるのであった。

善い人は嫌がつたが、善人の言つことでは仕方ない。傍若無人の善い人でも、善人の言つことなら従つた。

とはいあくまで彼女の基準の善人だが、マリーはどうやらその基準を満たしたようだ。

(サイキック組織のテンマや、騎士竜さんなどのつわものを相手にしないといけない場合、今いる戦力ではきつい。その点善い人さんが仲間になれば、私たちの組織も少しはましになるはずでしょう。)

このようにマリーは陽気に考えていたが、妙案に見えるその案は実は、体の内部に爆弾を抱えるような危ういものだとはこのときのマリーはまだ想像すらしていなかつた。

善い人たちが歩く道には、より取り見取りの花模様であつた。

「世界を花でいっぱいにしたらきっとみんな善人になると、私は信じてゐるのです。」

「今度悪人をぶつ飛ばして改心させたら、花を植えさせるようになりますよ。」

「そりしまじょう。会員たちも手伝ってくれます。」

マリーはたくみに、善い人を仲間に仕立て上げようと誘導している。

「あの害児とかつていう人に話したことですが、ただ花を追うだけでは本部にはつけないです。花の色合いに法則性があつて、それを追つていかないといけません。」

「本部についたら、私がより善人になる方法を伝授してあげないといけない。」

「それは悪いことです。それに本部は花に覆われていて、一定の法則と薬品の効果により幻術が働いています。会員でなければ破る方法は分かりません。」

善い人はそんな説明はどうでもいいと思つていいようだ。

やがて二人は本部らしき場所に着いたが、マリーのいう花というのはどこにもなく、かわりに地面がえぐれていた。

少し離れた場所に、大量の花が植えられているのを発見した。

どうやら、なにものかの襲撃にあつたようだ。幻術の効果も解かれている。

「どうやら悪人に襲われているようだね。」

「そのようです。早く行きましょう。」

そう入つても別に走るわけでもなく、歩いて建物に向かった。

善人組織の本部は、ぱっと見ると幼稚園を大きくしたような感じの建物だつた。

善い人たちは、穴の開いた大きな白い門をくぐり、虹の橋を渡つて建物の中に入つた。

そこではアツチラが待ち構えていた。

「遅かつたな。あまりにも遅いんで待ちくたびれちまつたぜ。まあなにはともあれあんたが

俺たちの軍門に下つた負け犬ということが今決定したわけだ。」

「義賊のアツチラ・・・戻つていたのですか。」

「戻つっていたか?だと?俺を誰だと思ってる。正義の義賊、アツチラ様だぜ。お前たちの

ような間抜けの情報はすぐにつかめるんだ。

善い人が、俺たちの配下につくと聞いて、飛んで帰つてきたところだ。」

「では、花が荒らされていたのは、貴方の仕業なのですか?」

「いうまでもないことだ。あんなのがあつちゃ迷惑だからな。義賊の俺としてはどうしても避けて通られない行いだつた。」

「貴方という人は・・・」

なにを思つたか善い人は、アツチラの前にずんずんと進んだ。

「な、何だ・・？俺をぼこりつけてのか？また暴力か？そんなんだな？その手はくわねえぜ。  
そらーおいつけるものならおいかけてみる！」

善い人が蹴りを繰り出す反対方向にアツチラは逃げたが、なぜかその先にも善い人があり、結局蹴られてしまった。

（なに？まさか俺より早い？）

アツチラがそんなこと思つのもつかの間、体がぐるぐると回転し、天井に突き刺さる。

「あ・・これはまずい。善い人さん。まさか殺したのですか？」

マリーは仰天して尋ねた。

「悪は滅んだ。さあ先に行こうか。」

善い人はいつものことながら平然としている。ここにきて始めてマリーは善い人が尋常でない狂人だと疑い始めた。

マリーは青ざめて善い人にとりあえずこうこうておいた。

「善い人さん、昔、善い人さんが所属していた支部の人たちもいますから、そちらの方に挨拶に行つてください。私はちょっと用事ができました。」

そういうて、マリーは、そちらにいる会員に早く救急車を呼びなさ

いなどと命令し、つなりながらアッチラを天井から引き抜こうとしていた。

そんなマリーたちを尻目に、善い人は奥へと進んだ。

奥に進んでいると、なにやらもめているらしい、善い人が所属してた支部の指揮官と補佐官がいた。

「だから、あの地方には絶対支部が必要何だと何故分からんのだ！あそこは最前線の拠点だろ？が！」

「ですから、上から予算が下りてこないのです。まことにもうしけないことですが。」

指揮官が、なにやら会員に怒鳴っている。指揮官の後ろで補佐官が腕を組みながらじみつけていた。

「それをなんとかするのが、お前の仕事だろ？が！」

指揮官はテーブルをドンとたたいた。相当頭にきてるようだ。どうやら以前潰れた支部の建て直しをお願いしているようだった。

あまりにも指揮官がヒートしているので、補佐官がそれを止めた。

「まあまで、こんなやつにじめても何の解決にもならないだろ？」

「俺たちの熱意を伝えていいんだ。いじめているわけではない。そんなことよりお前も何かいってやれ。」

「あ、ああ・。そうだな。ん? おい、指揮官、あそこにはいるのは善い人様ではないか?」

補佐官が善い人のほうを指差して、尋ねた。

「なに? 善い人だと? あの裏切り者がのここのなんどころに顔を出せるわけ・・? げつ!」

善い人はつかつかと近づいてきて、指揮官の肩に手をぽんと置いた。

「久しぶりだね。よくもある時は私を裏切ってくれたね。善人を裏切ることの罪は海よりも深く、山よりも大きいよ。」

にっこりと笑っている。やばい殺されると思つた指揮官は、善い人が次の行動に移る前に瞬速の土下座をした。

「申し訳ありませんでした! そんなつもりはなかつたのです!」

指揮官にしてみれば、ひどい言いがかりであったがここは土下座の一 手しかない。

善い人は、蹴つ飛ばそうか珍しく迷つて いる様子だった。

よし後一押しだと思つた指揮官が次のせりふを言つ前に、補佐官がまたもや要らぬフォロー

あるいは補佐ともいう、をした。

「なにを言つているんだ！ 善い人様のせいで俺たちの基地がなくなつてしまつたのだぞ！」

善い人様が上に話を通して支部を復活させてくれるのが、筋といつものではないか！」

「この善い人を馬鹿にしているのか？」

少し気をよくした善い人だが、この補佐官の要らぬ発言に義憤を発しようとしている。

「この馬鹿野郎！」

指揮官の右ストレートで補佐官は吹き飛び、吹っ飛んだほうにかけていった指揮官は補佐官の頭をつかみ無理やり土下座させた。

「お前も謝れ！ すみません！ 善い人様！ この愚図がいらぬことを… こいつは間抜けの愚図野郎 なんです！ 勘弁してください…！」

補佐官はすっくと立ち上がった。

「いてえな！ なにしやがる…！」

「いいから黙つてこいつを聞け！」

その剣幕に押され補佐官はすゞしと土下座をすることにした。

「あ、ああ・。分かつたよ。（まあ何か考えがあるのだろう）」

形だけの土下座を始める補佐官、それにしてもこの二人はよく土下座をする。

「そこまで反省しているのなら、許してあげないでもない。私は善い人だからね。」

「ありがたき幸せ！」

善い人の機嫌はすっかり直った。

補佐官は指揮官に耳打ちした。

（おいつ、今なら善い人のやつに人働きをせられるんじゃないのか？俺たちの支部を再建してもらつよう進言してもらおう。司令官のやつはあれ以来俺たちに会つてくれずに、あのことをなかつたことにしてるからな。）

（そうだな。確かにこれは一種の幸運だ。ここに賭けるしか突破口はない。なあに、善い人様もかつての仲間だ。分かつてくれるだろ？。）

「善い人様、ところでさつき補佐官が言つた件ですが、あの地方の善人組織の支部をまた復活させてほしいのです。善い人様ならそれは可能です。どうか我々に慈悲を・。」

「それは善いことかな？」

一人はしめたと顔を見合わせて、同時に声を発した。

「もちろんでござります！」

「善い人様、そこにいる受付の係りに話を通すのです。上と話をさせてくれと。」

善い人も確かに、裏切ったとはいへかつての同志のこと、情が動いた。

いわれたとおりに、受付の人に上と話をさせてくれと話した。

「そう急にいわれましても・・・そもそも貴方はいったいなにものなんですか？」

「善い人の恐ろしい剣幕に受付は腰砕けになつた。

「いえいえ、滅相もありません。」

善い人の後ろから指揮官たちが口を出した。

「こうことを聞いておいたほうが身のためだぞ。」

「さうだ、ぶつ飛ばされないうちにこうことを聞いておけ。」

「は、はい・・。分かりました。」

受付はしぶしぶ電話をして、話を通した。指揮官たちはできるなら最初からしやがれと受付をにらみつけていた。

そこへマリーがやつていて、善い人に耳打ちした。

「善い人さん、どうやら侵入者がいるようです。気をつけでください。確かに花を荒らしたのは、アツチラでしたが、門を壊したのは別の人物のようです。」

善い人はさもあり何という表情でうなずいた。

「つまり、悪人がまだ他にいるってことだね。私の思ったとおりだ。」

マリーはへえそなのかと感心した。まんざらただの馬鹿でもないらしい。

「こういう場合私なら、こここのボスを狙う。つまりその悪人もボスを狙っているのだとと思う。」

「確かに。そうかもしれないです。」

「そうと決まつたら善は急げだ！」

善い人は駆けて行つた。

「あの人、司令官の居場所知ってるのか?」

指揮官がマリーに尋ねた。

「いやこじは初めてです。」

「私が案内する前に行ってしまった。」

受付係はぼそりと言葉を発した。

「おい、補佐官、これはどうゆうつ?」

「どう思つも何も追いかけるべ。マリーはどうする?」

「私も行きましょう。善い人さんはいろいろと心配です。」

三人が善い人が走つて行ったほうに向かってみると、なにやら穴が開いていた。

「さつきはなかつた穴です。侵入者があけたとは考えにくいですね。つまり善い人さんです。」

「あの野郎・・・。また俺たちのアジとを壊す気だな。そうほいかんぞ。」

「よし、やめとめるべ。俺に続け!」

指揮官を筆頭に、彼ら一行はどんどん奥へと進んでいった。

## 第三十一幕 善人VS悪人

実のところ、侵入者とは穀潰しであった。穀潰しは善人組織にはなめられっぱなしである。

覚えているだろうか。以前ガスがアツチラに発信機をつけたことを。穀潰しはそれをたどつてここまできたのであった。

以前けちんけちんにされた穀潰しは、例の「とく竜頭蛇尾の勢いで、司令官に文句をいつたが、結局やり込められ、けんもほろるな対応をされた。

とぼとぼと帰ろうとするとき、「走つてくる善い人」とあつたというわけだ。

「よう、善い人。お前もここをぶつ潰しにきたのか? 何なら手伝つてやつてもいいぜ。」

「なにを言うか。お前が悪人だな! この私の目は「まかせないぞ!」

「はあ? お! 言葉に気をつけろよ。俺は今機嫌が悪いんだぜ? どうしてもやるつてのか?」

そのとき、役にたたなそうな一行が善い人によつやく追いついてきた。

「善いさん! 助太刀します!」

穀漬しはにやりと笑つた。

「仲間を呼んだか。ではこひらも呼ばせてもらひや。」

指をぱちんを鳴らすと、何もなかつた空間から人影が浮かび上がる。

「強力な助つ人、アキラだ。まあさつきは役に立たなかつたがな。」

アキラもにやりと笑う。役立たずといわれ若干引きつった笑いだつたが、ここで抗議をして

場の雰囲気を壊すこともないと思つたのだ。

アキラは実は穀漬しに頼まれて、というより挑発されて一緒に司令官に戦いを挑みにきたのだった。さつきまで善戦していたが、穀漬しに呼ばれてこひらこやってきたというわけだ。

「そういうことだ。俺が出てきた以上お前たちもせつ終わりだ。」

そういうて、手を振りかざすと、善い人の後ろにいた三人が善い人の体を拘束した。

「裏切つたか！」

善い人が義憤を発する前に、アキラはその行動を制した。

「いやそれは違うな。俺の催眠で操つたのだ。つまり人質だ。俺が命令すればそいつらは死ぬことになる。・・・後は分かるな？」

アキラは得意顔だ。俺は悪党なんだぜ、恐れ入ったかといわんばかりだ。

何しろ善い人の前ではことじとくいい所がなかつたアキラだ。善い人の目の前で催眠がかかつたこともうれしそうだ。

善い人ももう終わりだな。と隣の穀潰しは感慨深げに状況を眺めていた。

が、油断しがちなアキラに一言アドバイスをした。

「おい、アキラ。やつにメトリーは効かないんだからな。ちゃんと動きに目を配つておけよ。

気づいたらぼこられていることになりかねないからな。」

「ふん。こんな雑魚にこの俺が目を配るだと? 馬鹿も休み休み言え。」

「

(まづいな・・・) れはやはり一戦の必要が・・・)

「もう我慢ならん!」

穀潰しが物思いにふけると、すぐに善い人は行動を起こした。その声に驚いてアキラは、

慌てて善い人のほうを振り返つたが、そこにもう善い人はいなかつた。

「打ち碎く! 跛鞠落とし!」

腹部に連発蹴りをあて、蹴り上げて上空に吹き飛ばす。天井に当たつたところを回し蹴りで、床にたたきつけた。場所が場所なので従来のわざを少し改良されてある。

アキラはこうなる前に、催眠で操っている人間にコントакトを取つたのだが、なぜか操れない。

穀潰しも不審に思つて、アキラを蹴つている善い人とすぐさま距離をとつた後、辺りを観察してみると、吹き飛ばされている三人の人間が目に入つた。

(野郎・・・ひでえ。仲間!)と。

「てめえ! やつらは仲間じゃないのか! なんだつて攻撃したんだ!」

「善い人を邪魔をするものは許さない!」

「なんてやつだ。狂つてる。だがまあアキラではお前の相手は役不足とは思つてたぜ。」

「

「それは早計だな。俺はまだやられてないぞ。」

「なに?」

アキラがむくりと立ち上がつた。

「なぜだ? 攻撃はもうに入つたはず。」

「ああ・・・。特殊素材でできた合金だったが、一度でだめになると  
はな。あの狂人め。俺を  
殺す気か。」

アキラは、ぱさっと上着と脱いだ。

「これで動きやすくなつた。おい、白服。今のはわざとあたつたん  
だ。決して実力では・・・」

善い人の蹴りが空をきる。アキラが全部話すまで待つていてる善い人  
ではとうていなかつた。

「くつ・・・！」

「アキラ！衝撃波だ！催眠は絶対使うなよ！」

「いわれなくとも分かっている。」

アキラは、一瞬で数十のカッターを前方に繰り出し、一斉に放つ。  
技の精度ではむしろ  
穀潰しよりはるかに衝撃波は得意なのだ。

だがすぐに避けられ、アキラの目の前まで移動する善い人。慌てる

アキラはテレポ

ートが間に合わない。

（駄目だ・・・。メトリーできなきやといふ雑魚だぜ。だがあんな  
やつでもやられるのは  
目覚めが悪い。）

穀潰しは、テレポート（高速移動）をし、善い人に練りこんだ拳を放つ！

「サイゴグリーブドン！」

穀潰し程度の体術では、何もなきに等しい、あっさりと回避され、なおかつアキラに一撃を加える善い人。

アキラは吹き飛び壁にたたきつけられ動かなくなる。

「う・う・う・う。俺はもつ駄目だ。穀潰し。・・後は頼んだ。」

「野郎！寝たふりしてんじゃねえ！」

まだ余力はあるのだろうが、心が折れてしまったのだろう。

すかさず繰り出される善い人の蹴りを腕で受け止める。右腕が後方に吹き飛びバランスが崩れる。善い人は壁を利用してしながら、サルのように飛び回り穀潰しの背後に回った。

そこに善い人の必殺の槍が繰り出された。

「決める！トルネードチャージ！」

「おおおおおお！サイゴグランド！」

危険を察した善い人は、とっさに回避行動をとる。

穀潰しは自らはなった衝撃波に巻き込まれ、吹き飛んでいく。建物も半壊していく。

「マリーたちはどうやら無事だ。すでにそこにはいない。遠巻きで見ていた会員たちに回収されたようだ。」

穀潰しは、再生しつつ次の行動に移る。善い人はどんどん逃げていく。その動きを拘束したかった。

テンマに習つた技の一つ、念力を電気に変換させる。

「サイコサンドー！」

雷が善い人を襲う、雷は善い人の十八番だが、それを今回は逆に使われた。

善い人に降り注いでいるあの雷には神意がある、惡意を持った物理攻撃だけが善い人に攻撃を通せる攻撃だ。

当然この雷も通る。善い人は恐るべき勘で雷を避ける。メトリーしてるとしか思えない動きだ。

だ。

「だが動きは拘束されたぜ！これでとどめだ！」

穀潰しは、左手の人差し指を上から下へ縦に大きく振る。そつするとカッターが生まれ、

それが空間を裂いて善い人に向かっていく。

それを当然の「」とく避ける善い人、どうやらしひれていなかつたようだ。

しかし建物が崩れており、間合ひをつめるのに時間がかかつた。

善い人たちの周りは、阿鼻狂乱ひつぢやかめつぢやかな騒ぎだつた。

何しろ人口密度が非常に高い場所である。善人組織は世界に認識される大きな組織で、このような騒動になつてしまつては最早一大事件であつた。

善い人が起こしたものとしては最大の事件といえる。この大騒ぎにひきつけられてまるでハイエナが死肉をかぎつけるが「」とくやつてきた勢力があつた。

害児とサイキック組織であつた。サイキック組織と善人組織は敵対しており、ついしがた害児の組織とも善人組織は敵対した。

どちらもトップがやつてきた。どちらのトップも善人組織のトップと違ひ率先して動くタイプであった。

特に害児が率先して動くのはいつものことである。そして招かれざる客の影も見え隠れしていた。第三の刺客である。

**第三十一幕 最大衝突（前書き）**

10月15日 後半部分修正

## 第三十一幕 最大衝突

害児は騎士竜と共に戦車に乗つてやってきており、その砲台で善人組織のアジトを攻撃はじめた。

「今こそ王者の力を思い知らせてやるのです！」

害児の号令に従い、黒服が戦車を操作する。かなり大型の戦車で何人も乗れるタイプだ。

害児は善人組織のアジトが崩れしていく様子を、望遠鏡でのぞきながらぼくそ笑んだ。

黒服はそんな害児に声をかけた。

「中には穀潰し様と善い人様がおられるようですが・・・」

害児はそれに対して侮蔑の目を向けながら答えた。

「それがどうかしたのか？」

「い、いえ・・・別に。」

結局押し黙るしかなかつた。何か考えがあるのだろうと黒服は一人で納得した。

「ふふふ・・・どうです？見なさい。騎士竜これがこの私の力です。」

砲撃により建物が一つまた一つと崩れていき、そこから頭を抱えた人びとが飛び出してこちらに向かってくる。

騎士竜は望遠鏡はなかつたが肉眼でその様子を確認した。

「しかし、凄い人の数だな。あれだけの人数がこの場所にいたとは。ところでなんだってみんな頭を抱えて逃げてくるのだ？」

なるほど確かに騎士竜の言つとおり、会員たちは皆頭を抱えて逃げてきている。

「ふん。大方的外れたな方針で、頭を抱えて逃げれば、致命傷がないともでも教わっているのでしよう。『ミ虫どもの知恵など所詮その程度のもの。』

「なるほどな。ん?見る。」こちらに向かつて両手をつず高く挙げて向かつてくるやつがいるぞ

。」

「なんたることです！それ！なにをやつてるか。黒服。あの馬鹿に向かつて空砲を撃ちまくつて脅すのです！」

黒服は戸惑つたが結局命令に従つことにした。

「はつ・・・・。はつ・・・」

ドンドン…空砲を連発すると、かわいそうなこと両手を挙げて、人物はつづくまつてしまつた。

「恐れ入つたか…これぞ王者の力だ…」私の逆襲つからひにつことになる。」「

そうしてこきなじ砲撃を受けた会員たちは大混乱をして、押し合へてきあいしながら雪崩を打つていた。

その中で指揮官が声をからして、旨を指揮しようとしていた。さすが指揮官である。

「みんな！落ち着くんだ…」いつこいつときのんせりシソーンー三〇を思い出せ…」

そんな指揮官を無視するどころか、邪魔だといわれ突き飛ばされ指揮官はほほほうの体で避難した。

「だからやめておけとこつたのだ。こじりゃお前に何の権限もない。」「

「馬鹿やう…」

「ほーー！補佐官は指揮官に殴られる。もつ毎度のことなので補佐官はその理不尽な暴力にうそせりした。

「お前はまだそんなことをいっているのか！」

「分かったよ。お前の理想が高いのはよく分かった。だけどな。そろそろ俺たちもここからでないとやばいと思うぜ。いくら志が高くても死んだら終わりだ。そういうわけだから俺は先にいくからな。」

「俺の補佐をするのがお前の役目だろ？」「

指揮官が逃げようとする補佐官の襟をつかんで、二人は格闘をしました。

そこへ、穀潰しとアキラがやってきた。

「おいなにやつてるんだ？」この施設にいるやつはみんな逃げたぜ。」

声をかけられ我に返った指揮官たちは穀潰しに応対する。

「やうだ！ 怪我をしていた。アツチラやマリーはどうした？」

「ああ・・アツチラなら真っ先に逃げたし、マリーはアキラがテレビポートさせたぜ。」

そこへアキラが言葉を付け加える。

「しかしあ前たちは大丈夫なのか？ だいぶ善い人にぼこられたはずだが。」

「なにをいつてるんだ！ 俺たち善人組織のリーダーたるもののが組織の危機に怪我をしている

からとこって寝ていらるか!」

穀潰しとアキラは顔を見合わせいやれやれといったポーズをした。

「ああそつかい。だがそろそろ逃げないとやばいんじやないのか? それともお前たちはこの建物と一緒に殉死でもするか? おこ、アキラ、俺たちはずっとここを出ようぜ。ばつめ出をひいてもつよひはねえよ。」

「あ、ああ・・。穀潰し。なにか感じないか?」

穀潰しとアキラはなにやらわめく指揮官たちを残し、崩れる建物の中を駆け出した。

「なにか?」

「じゅぢゅトーンマ様もこゝにきてこるよつだ。そつあるヒシしまずいことになる。」

「なにがまづいんだ?」

「見る。もうテンマ様が遊べるような状況が残っていない。知つてのとおり善人組織とサイキック組織は一応敵対関係で、おぞらべ今回テンマ様がじきじきにこゝにきたんだろうが、この分だとこゝの騒ぎを起にしたやつたハツ当たりをやれるだろう。」

「まあ・・じりじりして俺たちには関係のないことなんじやないの

か。誰がこんなことしたか  
はしらねえが。」

とはいえたなんあほなことする人間は限られている。穀潰しにはその人物に心当たりがあった。

「いや・・ひょっとするとむかつくやつらが一網打尽にできるかも  
しねえな。」

穀潰しはぼそつとつぶやく。

善人組織は、この世界では相当大きな組織だ。軍事力は皆無に等しいが、影響力は非常に高い。

この本部が壊れてもおそらくすぐにまた別の本部ができるだろう。だから壊すほうも安心して壊せるというのだ。

「ふふ・・。『ミ虫どもが見苦しく慌てふためいておるわ・・。』  
れだから王者の威光を示す  
聖戦はやめれません。」

騎士竜は呆れ帰った表情でその様子を見ており、つぶやいた。

「嫌な趣味だな。」

などといつてはいるが、いきなり戦車の下から凄い衝撃が走り、宙に浮く。

「うわ！戦車が宙に浮きましたよ！」

害児はそつわめき自分ひとりだけ外に颯爽と脱出した。

「害児さんが黒幕だつたのか！いくら害児さんといつても容赦しないよ！」

「げえ！善い人！」

どうやら善い人が害児の戦車を蹴飛ばしたようだ。

潰れた戦車から騎士竜以下黒服たちも這い出でくる。

騎士竜が善い人に向かつて言い放つた。

「僕たち二人相手になんとかなるとでも？」

「つるさいー正義はかつー！」

「ここはやむを得ません。どうやっても言い訳のつかぬ状況。  
善い人さんはやつらに騙されてからボコッたと後で言い訳すること  
にしましょう。

では騎士竜、善い人さんを軽くひねることにしましょうか。」「

騎士竜はつなづき、攻撃態勢に入るが、二人の脳に急激な頭痛が走  
り、空間が割れて、  
テンマ・トキトが現れた。

なぜだか、といつよいいつものことだがにやにやしている。

「いいぞおー私も加勢してやるー！」

テンマは右手のアームから冷氣を出す。

騎士竜がそれを手のひらを回すだけで分解し、害児が刀を抜いて善い人に斬りかかる。

それをテンマがかばいアームでとめる。

害児の名刀もテンマのアームは切り裂けないようだ。いつでも無駄だとは思いつつ、隙を誘つ

目的も含めて害児はテンマに話しかけた。

「テンマ・トキト、私との同盟はどうなったのですか？」

「ここはつまらんたわけどもばかりだ！お前は少しばかり私を楽しませてくれそุดよー！」

そこに善い人が横から滑り込み、蹴り上げる。害児は間合いを取つて車椅子に戻つた。

善い人は、戦闘態勢を解きテンマに話しかける。

「生きていたのか。さては私にほこられて改心したんだね。」

「たまには一人で戦うのも味があつて面白い。」

テンマは振り返りもせずそつ答えたが、善い人のほうをちらりと見てにやりと笑つた。

害児は冷や汗を垂れ流した。

「騎士竜、勝算は？」

「ほぼ0%だな。逃げたほうがいい。最も逃げれるかどうか疑問だが。相手が一人ならよかつたな。」

「仕方ありません。幻術を使います。」

「不完全な幻術では・・・それに善い人には幻術は効かないだろうな。僕一人なら逃げるののはたやすいが・・・」

「きましたよ！」

騎士竜はすでに地面を割つて足場を悪くしていた。

さらにも風を操り、テンマのテレビポート時点に向かって竜巻を発生させた。

騎士竜も竜巻に巻き込まれ吹き飛ぶが、地面が盛り上がりていき騎士竜の足場になっていく。

テンマにはどこからともなく小さな円盤のようなものが飛んできて、テンマを乗せていく。

その円盤から害児を狙つたレーザー光線が噴射され、地面を照射させた。

善い人はそれを避けて害児に近づくが、害児はいつの間にかテンマ

の背後にいた。

(よじつー・まはずは一人。)

テンマに向かつて刀を振り落とすが、善い人の大剣が頭上で降つてきたため、とっさに回避をする。

(どうやらテンマには幻術が効いている!)

害児はアイコンタクトで騎士竜にそれを伝え、騎士竜はうなづく。まずテンマから片付けようといつ算段だ。

騎士竜は、風を裂くような軽い攻撃ではテンマを止められないと判断し、空間を裂いて質量のある重力波を繰り出す。

幻術にかかつているテンマには100%あたるはずの攻撃だが、テレポートされ騎士竜の背後に出現した。

前方からは善い人が攻撃してくる。

その攻撃を騎士竜が防ぎ、善い人を吹き飛ばした後、後ろからアームで切りかかるが、逆に斬られていたのはテンマのほうだった。

その気配をかろひじて読み取り、背中を多少裂かれる程度に抑える。

(これが、魔人の幻術か。うまくサイキック能力に対応しているな。  
さすがにこの状況は  
面白いー！)

とても面白そには見えない状況で、なぶられていくテンマだった  
が、善い人がうまくカバーを  
して何とか持っていた。

騎士竜は勝率0%だといつていて、なかなかに善戦している。し  
かし害児の稼働時間がさ  
ほどないので、このまま防ぎきられたら興ざめな状態となるだろう。  
さてどうしたものかとテンマは思索していた。

その様子を穀漬しが遠くから見ていた。

「潰したい馬鹿が都合よく集まつてやがるぜ。終わりにしてやる。  
ひやつはーー潰れろ！  
サイコエンドー！」

穀漬し最強の技だ。

「な、何してるんだ！穀漬しー皆殺しにするつもりか！」

アキラが慌ててテレビポートしてきて怒鳴る。

「何についてやがる。これくらいで死ぬよつたやつらじゃねえよ。」

確かにこれで限界がはかれる。はかつてじつするところ話もあるが、  
普段全力などだして

いない連中だから、試したくなつたのだらう。

穀潰しはやる氣のない人間だが、あのような熱い戦いの熱気に当てられてついつい自分も持つてる力の最大を試したくなつたのだ。

まず、巨大な門がサイコエンドを吸い込もうとして壊れ、善い人とテンマは押しつぶされた。

善い人の門が食い止める間に害児は騎士竜をつれて、遠くに逃げていた。

それがなければ騎士竜も巻き添えを食らつただらう。

「善い人さん・・・。」

害児は、その跡地を見ていた。そこにプレオがやってきた。ガスが窓から顔を出し呆然としている害児に話しかけた。

「やあ、害児さん。どうかしたのかな?」

「どうかしたですかって?」のぞまを見てください――善い人さんが消えてしまつたではありますか!」

ガスは首をかしげた。

「善い人君が消えるとは我輩にはとても思えないことであるが・・・。」

「

ガスのプレオには品物がたくさん乗っていた。善人組織のアジトから掠め取つたものだらう。

「貴方はこんな事態だというのに相変わらずの火事場泥棒ですか。」

「我輩は商人なのだ。」

「どうやら貴方と話すことは時間の無駄のようですね。」

「助かったのはどうやら僕たちだけのようだね。」

「ま、まあ善い人さんのことですからきっとまた復活するでしょうが、しかしあの突然の攻撃はいつたい？もしさまた穀潰しがいらぬことを・・・。」

眉間にしわを寄せている害児の前に、このこと穀潰しとテンマが殺されてしまふ

アキラがやってきた。

「貴様！貴様の仕業かーー！それっ！」

騎士竜は心得たといわんばかりにうなずき、地面をちょっとすると、地面が盛り上がり

無数の岩が雪崩を打つて、穀潰したちに襲い掛ってきた。

穀潰しはいきなりなにじやがるところおつとじたが、どうやらその攻撃は自分を狙つたものではないらしい。

まさかと思い後ろを振り返ると、アキラの姿がなくかわりに、多数の岩がそこにはあった。

「アキラ・・・なぜテレポートをしなかったんだ。」

返事はなかった。穀潰しは善い人やテンマが死んだとはとても思えなかつた。

自分の攻撃にそんなに自信がないからだ。だがしかしあキラにひとつ見れば落ち込むのは当然であり、突然の攻撃にうまく超能力が使えなかつたらしい。

「穀潰さん、よろしくくれました。しかし・・残念なお知らせをしなくてはなりません。」

穀潰しは怒りの形相で害児に詰め寄つた。

その前を騎士竜がさえぎる。

「どけ。」

穀潰しは、高圧的に言い放つた。

騎士竜は無言で攻撃しようとするが、害児の田配せで何かを察知しあとなしく身を引いた。

「運がよかつたなーひやつははー!」

穀潰しは高笑いをし、騎士竜は苦い顔をしている。

「おつとこな馬鹿に構つてゐる場合じやねえ。おい害児。何でアキラを攻撃しやがつた？」

「え、ええそのことです。穀潰しわん。よく聞いてくれました。」

害児はなぜかおどおどしてゐる。何か悪いことをしたかな?といつ感じだ。

「ああ、そうだな。じゃあ早く話せ。」

「はい、実はあの野郎は私たちをはめて一網打漁しじよつといたくらむ悪党だつたのです。」

「ん?・・ビウコツの意味だ?」

「巨大な衝撃波で私たちを倒そつとしていたのです。善い人さんの捨て身のおかげでビウニカ助かりましたが、あのままでは下手すると私たちは死んでいたかもしれないのです。」

「あほか。てめえがあの程度で死ぬようなやつかよ。」

「な、な、なにいへ?」

あほ扱いされて害児は多少頭にきたらしい。

騎士竜は任せるとこつアイコンタクトを害児にし、穀潰しを指差した。

「今分かつたぞ。」いつがやつたんだ。何もしてない顔してなんて

やつなんだ。君は。」

「ひやつはーいまさら当たり前のことを言つて威張るんじゃねえよ！ほかの誰があんな大規模な攻撃ができるつていうんだ？」

「僕たちに謝つてもうおつじやないか。まあ土下座だ。」

「穀漬しさん。正氣ですか？善い人さんが死んでしまったのですよ。」

「

「てめえらも潰されないだけありがたかったと思え。」

「おー、害児さんとやら。もうこいつは殴らないと分からぬいたいだぞ。」

騎士竜は害児に許可を求めた。

しかし、

「いや・・・。」

といつて害児は考え込んだ。穀漬しはその様子を見て害児が参つたと思い得意になつた。

「どうやら分かつたみてえだな。いいか。一つひとつでおくぜ。俺とお前たちでは格が違うんだよ。分かつたか！」

「・・・。」

騎士竜は害児を搔きぶつたが、害児は黙つたままで、穀潰しを無視し、家に帰らうとした。

「お、おー・・。」

騎士竜は仕方がないので、後についでいった。

「なんだありや？張り合ひのないやつだぜ。」

穀潰しは、気分をリフレッシュしたところで、アキラを救出し、ヒーリングをかけてやつた。

ビートルについていたのか、ガスがブレオで戻つてくれる。

「よひよひ話が終わつたのか。長話だな。」

「お？ガス。後ろの荷物はなんだ？ずいぶん景気がいいじゃねえか！」

「ああ・・。これは大きな取引があつてその際に得た儲けである。」

穀潰しはうれしそうだ。

「そつかー。じゃあ今夜は宴会だなー。」

「最近は間抜けな害児といい、あほな善人組織といい、まるで我輩を儲けさせるために存在しているようなものだ。」

「ちがいねえな。まつたくやつらは間抜けでいい面の顔だぜー!」

「そういうえば善い人さんは・・・。」

「やつなら問題ないだろ? ひやつはー・とりあえず帰つてお祝いだな。」

「まったく善い人さんの無責任も困つたものなのだ。善い人さんがいないと我輩が大きな儲けができるのではないか。」

ガスと穀潰しとアキラはフレオに乗り、家に帰つていった。

第一部 完

「おれの設立したのはや（運営）

だ。

## これまでの設定についてのまとめ

これは近未来SFものです。細かい設定についてまとめてみたいと思います。

それによつて作品の風景がより鮮明になると思います。面倒な人はこの章は飛ばしてください。

### 年表

219X年 第三次世界戦争勃発、核の応酬により東と西で戦い、西側が勝つたということになつてゐる。

それにより、地殻変動、放射線による人類の変化などが起ころ。

220X年、地下シェルターに逃げた多くの西側の人たちと生き残つた東側の人たちで、協力体制をとる。これ以降地球人という意識が芽生え戦争をすることがなくなる。

この機を境に人は核の放棄を決意し実行した。

229X年 初代テンマがサイキックに目覚め、アメリカのサイキック組織を公の存在にした後、人類を支配していた存在、「セカイ」の存在を公にする。

また、人類を保護していた存在「銀河連邦」という地球外勢力の存在も明らかにする。

そして、新しくサイキック組織を作り、これ以降人びとはサイキック能力を身につけ、セカイと銀河連邦の陣営に分かれて再び戦乱の時代になる。

233X年 初代テンマの終焉に導く一滴の光により、とりあえず「銀河連邦」側の勝利となる。

これ以降、人びとは、精神的に豊かな暮らしをし始める。

239X年 東側のリーダーであつた中國大陸の人びとは第一次核戦争で大半が死滅し、ほとんど荒野となり空き地になつていたが、そこで人びとは刺激を求めて地球オリンピックが開始される。（これは後に「セカイ」の策謀であつたと判明する）

241X年 競技は瞬く間に加速化し、より洗練なものになつていき、最後には殺し合いにまで発展した。そこで当初オリンピックを始めた7つのグループがかつて地球にあつた概念である国という称号を使い争いを始める。

とはいえ競技の一環であることにには違ひなく、なんでもありの戦いではなかつた。

249X年 魔人ルーファ・ルーファスの出現により大陸の霸権争いは日の国一強となつた。

249X年 ネーム、フラー、テンマ・トキトを中心とした「セ

「セカイ」により、人類闘争  
化計画を実施する。

銀河連邦側はそれを阻止すべく一計を設ける。テンマ・トキトの終焉に導く一滴の光により、

宇宙にいる「セカイ」の上位エネルギー体、そしてそれに準じるものの大半が浄化される。

ようするに悪意が消滅させられたのだ。

銀河連邦側にまんまとはめられた形になる。

これを一般では第二次核戦争と世界崩壊と呼ばれているが、実態は  
だいぶ違うもので、第一にこの時代に核はないことになっている。

「セカイ」は前回の戦いで滅びたかに見えたが、地球外に上位エネルギー体が多く存在しているため地球をめぐつて銀河連邦と策謀を繰り返している。

249X 「セカイ」と「銀河連邦」による共同プロジェクト「世纪末善い人伝説」を始動する。

世纪末善い人伝説とは、一人の人間に宇宙の行く末を占つてもううといふものであった。

当初善い人にその役目を与えるわけではなく、その人物を両陣営で検討していたが、

何らかの第三勢力の意思により、善い人がその任に強制的に選ばれてしまう。

ここにきて「セカイ」と「銀河連邦」は宇宙に自分の知りえぬ第三勢力の存在に気づく。

宇宙の動向を一人の人間に託し、「セカイ」と「銀河連邦」の三度目の大きな戦いが始まった。

### 地殻変動による影響

中国大陸のすぐ下にアメリカ大陸がくつつく形になっている。地球の反面だけに地表があり、縦長に大陸が全てつながっている。中国大陸の右には島があるが一般には認識されていない。

かつての日本であり、今では極東の島といわれ幻の地域と呼ばれている。

反対側は全て海ということになっているが、一つだけ小さな島があり、そこに「セカイ」と「銀河連邦」のメンバーが集まっている。

地球はどちらかというと「セカイ」の影響力がかなり多いので、「銀河連邦」のメンバーはお客様扱いされている。

### 地域の説明

善い人らがいるヒノキ村は、アメリカ大陸のカナダ辺りにある。といつても地殻変動の影響で相当地理は変化している。その上に北アメリカの残骸があり、

その上に中国大陸

が割と多く残っている。ヨーロッパやアフリカ、インドあたりは海の藻屑になつてゐる。

サイキック組織の本部、善人組織の本部はいずれもアメリカ大陸にある。

ちなみに中国のことを大陸、下にあるアメリカのことを新大陸、日本のこと極東島国

という名称で呼ばれている。

### 産業の状況

主に農業が主体であるが、現代人より超能力や武術その他もうもうが発達しているため、

機械にそれほど依存せずものが生産できる。

またその機械そのものを作る作業も効率的になつてゐる。

特に働かなくても誰かが食べ物をくれる。

紙幣はあまり流通していない。貨幣のみとなつてゐる。その貨幣も一部の人間のみのやり取りに限られる。

大多数の人間はお金というものを使つていない。

どうしてほしい技術や物というものがたくさんある刺激がほしい人間、いわば上流層の人間

だけが使っている。

ただしヒノキ村自治区は例外とする。

## 登場人物

善い人 性別女性 推定年齢16

余命いくばくもない不治の病に冒された少女だが、ある日突然雷が降つてくることに  
よつて、善い人と名乗るようになる。

本作品の主人公。白服に白い帽子をかぶつている。

体はほぼ死体であり、汗や老廃物をださない。ほとんど人形と同じ  
といつてもいい。

寒がりで、いつも厚着をしている。コタツが好き。食事はほとんど  
とらないが別に食べれない  
わけではない。水を好む。

体が死体なため、体重が恐ろしく軽い、またサイキックによる脳へ  
の影響を受けない。

催眠、メトリーなど、心がないため思考を読むことができない。善  
い人の心は宇宙を直結  
してゐるため、その動きを予測することは、並みのサイキッカーでは  
不可能。

また、体術による幻術などによる作用もつけない。単純な物理攻撃のみ影響を受ける。

ある事件を境に、過去を知り名前を知ると、元の少女に戻ってしまうことが判明する。

攻撃方法としては、蹴りを主体とする体術、とはいっても彼女のそれは技ではなく、力に任せた攻撃であり、例えるなら獣の俊敏さと力である。

それも筋力ではなく、根性で力を出している。彼女の筋力はいつもずたぼろで、骨も折れてるかもしだれない。

それどこに収納してるのは不明だが、大弓や大剣、大槍などダイナミックで威力のある武器を好んで使う。

弓以外は「じつ」した量産のきく武具ばかりであり、精密な業物はほほない。

なぞの壁、門などが善い人を自動で守ることがある。「セカイ」ではそれを「神器」と呼んでいる。

また雷などが降ってきて、善い人が甦ることがある。再構築も可能であり、ずっと雷と繋がることで、能力の次元が飛躍的に上がる。これにより高次元に干渉できるようになる。

これを「セカイ」では「神化」（しんか）と呼んでいる。

目的は善いことをすることで、趣味は漫画を書くこと、現在は女性型戦車ロボットのタンクと同居しており、害児の保護を受けている。

田課は悪人をぼこぼこにすること、彼女の悪人の定義はかなりあいまいで気分と思い込みによるところが大きい。

他には子供と遊ぶこと、ドラゴンの世話をするなどやることは結構ある。しかし家にいることも多い。

善い人になったあとは、そこらを回って善いことしていたが、やがて害児に保護され、害児の国は悪人が多いのでそこにいついている。

穀漬し 性別 男性 推定年齢17

テンマの正統継承者で、初代テンマの転生者もある。しかし初代テンマ以上の念力を底に秘めている。

世紀末善い人伝説プロジェクトの善い人の筆頭候補でもあった。

本作品のサブ主人公的位置にいる。青っぽい服と帽子をかぶっている。

生まれたときから、サイキック研究所におり、ナンバー6と呼ばれていた。

6番目に加入したという意味ではなく、6という数字にたまたま人がいなかつたため、6になつただけだ。

念力を測るときに、メーターが動かなかつたので、素質なしとされ、その日からナンバー0

というあだ名をつけられ、それが定着する。それは実際は、初代テンマの念力の量で

計算されていた機械のほうに問題があつたのだった。

相当馬鹿にされたが、彼は超能力開発に興味がまつたくなかつた。

世界崩壊の影響はほぼ受けていない。

テンマの代が変わり、フラーの時代になつたとき、サイキック組織は激変する。

その影響はもろに受け、穀潰しも好まないトレーニングをテンマに直接強要され、そのおかげで若干のサイキック能力を得た。

しかし穀潰しはそれを恨みに含み、組織を抜け出し、それ以降嫌がらせのため組織の研究所を潰し歩いている。

穀潰しというのは、何度か変化した名前だ。自分で勝手につけてい

る。この名前は自分が

飯を食べるのが大好きだといつことに気がついて変えた現時点での名前だ。

ただ、あまり食べれない体质なのでそれを気にしている。

サイキックカーとしての実力的には、ナンバーズの上位レベルと同等だが、それは戦闘力としての話で、実際の能力は相当低い。

まず、メトリー、透視、予知、テレポートがほぼできない。テレポートに関してはまったくできぬ。

彼がテレポートだと思つてるのは、単なる瞬ぱつ的な肉体強化による高速移動で、練りこみの一種。

彼はそういうたサイキック能力に頼つていないので、五感が他のサイキッカーに比べ異常に発達している。

ただし、体術は並。

そのため、メトリーできない善い人などとも対等に戦えるが、ナンバーズの上位にいるチーム持ちと呼ばれる連中にはほぼ勝てない。勝つてる要素が一個もない。

ちなみに体術は拳を主体に使う。ナイフを好んで見せびらかすこと

があるが、使えるわけ  
ではない。

得意としているのは専ら練りこみと呼ばれる、念力の具現化で、衝撃波などを飛ばすのが得意。

彼は恋人のセリルと一緒に組織をやめたのだが、ある事件でセリルと別れてしまい、その後世界崩壊で、飯が食えなくなっていた。

やがて、害児が自治区を作り、ガスがそこに店を構えたというので、それを頼りにヒノキ村をめざし、廃墟街に住処を作つて現在はそこにいついている。

害児 性別 女性 推定年齢20

本名はルーファ・ルーファスといつ日の国の名門ルーファス家の長女。

魔人ルーファと他国から恐れられた存在。しかし自軍内ではルルちゃんと呼ばれ親しまれていた。ただ本人はそのように呼ばれることを嫌がった。

害児というのは善い人がつけたあだ名で、その後自分でそのあだ名を正式な名前として世に広めた。

「セカイ」のメンバーでもあり世界崩壊とも関わりがある。「セカ

「イ」のメンバーの中では  
下つ端。

世界崩壊の影響をもろに受けた人物。昔は体術を使つことに生きがいを感じたが、悪意の消滅の影響を受け、軍人を辞めることを決意した。

その際に父親に両足を斬られ、車椅子生活になる。

この車椅子は、ジエットが出て飛行できるようになつてゐる。またバズーカーやダイナマイトなどが仕込んである。なので爆発することがある。

人間の足と同じくらい精密な義足をつけることもある。木の義足でも歩けるが、それをつける時は主に戦闘のときだ。

田の国を去つた後、「セカイ」や軍事国家からの圧力を避けるため、ヒノキ村に自治区を作る。

ヒノキ村からしたらいい迷惑だが、その代わり、商業など盛んな唯一の地域に変貌を遂げる。

世界崩壊前はある程度発達していた商売であったが、崩壊後はまったくそれがなくなつたのでそれを復活させたのであった。

刺激を求めた人々は害児の地域に足を運び、瞬く間に巨大な一大地域となる。

これにより「セカイ」や軍事国家と単独に対抗できる地球で唯一の人物となる。

なので「セカイ」では地位は低くても発言権は高い。また「セカイ」の方針に従わないことも多々ある。

戦闘では、銃火器を使う。本気になると、日本刀「朝日」と高性能の義足をつけて体術で戦う。

魔人とまで恐れられた幻術と氣術を扱う。

しかし、全盛期より威力はがた落ちしているが、それでも地球の中でトップクラスの強さを誇っている。

黒服といつものがありこれはかつての害児の部下で、害児の武力の崇拜者。

彼らになぜか首領と呼ばれており、「満悦だ。

ティーをたしなむのが趣味らしい。

彼女はヒノキ村の町長ではなく、財閥といつ認識を一般ではされている。

西洋風の城に住んでいるのだが、ああいう城には途中ででっぱりがあつてそこに部屋がある

とこうことが多いだらう。お姫様などがよくそこにいるのだが、何

故か害児はそのでっぱりに  
さらに出つ張りを重ねて上へ上へと続け、非常に不安定なつくりに  
しており、その頂上  
の部屋だけを使つてゐる。

害児の仕事はほとんど黒服がやつてくれているが、暇さえあれば黒  
服に城を高くするよつて  
いつてゐる。

崩れる場合もあるがそのときは崩れてない一番高い部屋を使用する  
ようだ。ちなみに  
部屋に入るときはジョットで入り、部屋から出るときもジョットで  
下に降りるようだ。

ガストラゲタ 性別男性 推定年齢18

元々幻の極東の島国いた天才剣士だったが、剣での勝負が早くから  
馬鹿らしくなり、強さの  
本質を求めて國から出る。

國から追つ手が来るがことじとく撃退してきた。しかし最早彼の使  
う技は剣術ではなく  
昔でいう兵法をいうものに変わつていた。

早くから忍術の研究をし、大陸や新大陸の各地をさ迷い歩いて武者  
修行をした。

その際に、サイキック研究所にも立ち寄り、穀潰しとも出会つ。彼

と一悶着あり、それ以降  
お互い認め合ひ仲になる。

ガストラゲタといつのは偽名で、本名は別にある。

やがて彼は、重装備主義になり商人になつた。

装備でがちがちに固め、各地を歩いて大もうけし、その全てを研究に費やした。

世界崩壊後、商売が成り立たなくなり、しばらく家にこもつて研究に没頭した。

やがて、害児が自治区を作つたという情報を手に入れ、意氣揚々とヒノキ村自治区へと向かつた。

当初何もなかつたヒノキ村を商業地域にしたのは、ガスの貢献度によるところが大きい。

ガスは粉骨碎身して事に当たり、害児と連携して村の開発を進めた。

ガスは「セカイ」とも「銀河連邦」とも関わりがあり、一部の間では第三勢力のスパイ

とすら呼ばれている謎が多い人物だ。

力の本質の追求を目的としている。

情報網は、アツチラや害児以上であり、どんな強い相手でも、彼の布石と装備、対策次第で勝てしまつ稀代の戦略家でもある。

害児同様「セカイ」が警戒する数少ない人物。

普段は間抜けで馬鹿を演じているが、それは素も少しあるがほとんどが演技である。

フレオといつ車を愛しており、フレオを馬鹿にされると怒る。

戦闘方法は、ガスや火を使つ。落とし穴や罠、なども好む。あらゆる武器防具に精通している。

薬草や薬品の知識も豊富。

害児以上にこの世界のキーマンである善い人、穀潰しのコントローラに成功している節がある。

果たして彼の本当の目的が何で何者なのかは誰にも分からぬ。

サブキャラたち（勢力ごとに）

ヒノキ村自治区

悪人

世界は農業主体の世界なので、どこにいても働かなくては誰かが食べ物をくれるようになつてゐる。

しかし穀潰しのように、働きたくもなければ、施しもつけたくない  
という人間が世の中には  
いるらしく、それらの人間が闘争と刺激を求めて、廃墟街にやつて  
きた。  
人殺しなどは滅多にしない。よく善い人にぼこぼこにされている人  
たち。

## 巨大なハエ

善い人のペット、古代生物の一種。戦闘能力は非常に高いが余り戦  
闘に使用されない。

専ら善い人の遊び相手などだ。主に背中に乗せて空を飛んだりする。  
羽が取れ  
て地面をもぐつたりもできる。

戦闘能力としては、眼からビーム羽から超音波、真空波などを生み  
出せる。

## タンク

女性型ロボットで、善い人の同居人だが、いないことが多い。い  
ない場合大体どこかに埋ま  
つている。

一応戦闘ロボらしい。趣味は発掘で、変なものをよく発掘してくる。  
それを善い人の家に持ってくるが、善い人は迷惑している。それを  
ガスが回収しガスは大儲け  
している。

害児はそれが気に入らないらしい。

黒服たち

昔の害児の部下で日の国出身の武術家達、非常に有能であるが害児に對して妄信してゐる狂信者たち。

ヒノキ村村長

ヒノキ村の村長。

隣町の領主

今は趣味で山賊をしてゐる。

リーダー格の男たち

悪人達の勢力の一つ。いつも何かたくらんでいる。

ドリフトン

古代生物の一種。本人曰く非常に強いのだらしいが、弱そうに見える。

子供によく好かれている。今は隣町だかなんかに住んでいる。町の住人によく邪魔扱いされて体の大きな自分を恨んでいる。

保育園の子供達

ヒノキ村の保育園、害児が保護してる。善い人が金を上げたり物をあげたりしているところ、よく遊びにいく。

### 医者

名医らしい。ガスの友人で穀潰しをいつも馬鹿にしている。

### セリル

テンマの友人で、穀潰しの元恋人、昔ある事件をきっかけに穀潰しどは別れる。

高位のサイキックカーだが、テンマのフラー同様、セリルも勝手に自分で名乗ってるあだ名。

なのでネームではない。サイキック組織が嫌になつて抜け出した。

その後仕立て屋としてヒノキ村に住み着いてる。

戦闘方法は、サイココートイング、服に念力を練りこむことによつて武器とすることができる。

セリルのオリジナル技。

### 大陸の軍事國家

### 害児の父親

幻術を使う。なんだか嫌味な人。よく負けるので負けるのが趣味だと思われる。

### 騎士竜

昔の害児の部下、その後日の国の武将になつたが、ヒノキ村自治区に所属する。

PCを持って高速計算をし、宇宙のあらゆる事象を計算し分析することができる。

元々強力を得る武術を習っていたが、途中から自分で流派を作った。名前は特にない。

現時点最強の武術家。実はPCがなくても問題ないが本人はそのことに気づいていない。

ポリシーで走ることをしない。乗り物にもあまり乗りたくないらしい。

実はその気になればものすごく早く走れるが、死ぬような羽田になつても走ることはない。

戦闘方法としては、空氣と地面をよく使う。

サイキックカー以上の万能性と攻撃性能があるが、防御性能が低い。

## 果魔斬り

ガスの師匠、果魔斬り流を使つ。一刀流。

## 追っ手たち

ガスに対する追っ手、なかなかしつこいが全て返り討ちにしている。  
何故ガスを狙うかといえば

ガスが果魔斬り流の奥義を知つてゐたため。しかしそんな奥義はガス  
に言わせると「ゴミ同然で  
ありもうすでに忘れてゐる。

## サイキック組織

テンマ・トキト（フラワー）

セカイの幹部、非常に強いエネルギー体。

サイキック組織のリーダー・テンマを後継者。自分の父親を殺害しそ  
の称号を受け継いだ。

世界を闘争に導こうとしている。戦うのがすきらしい。

道具を使うのが得意。レンズというサイキック増幅器と武器アーム  
と円盤の合計三つを所持  
してゐる。

道具がないと弱い。

能力はネーム持ちの中でも飛びぬけてトップだが、代表的な能力としては、

世界を照らす眼 全世界を透視し頭の中に瞬時に処理できる。

全てを聞く耳 全世界全ての物質の思念を瞬時に聞いて処理できる。  
しかしセカイや銀河連合の上位のエネルギー体からするとこれら二つは誰でもできることらしい。

終焉に導く一滴の光 初代テンマが世界を創造した光を受け継いでいる。フラーはこれを破壊の力だと思ったが実際は違うものだった。  
これは銀河連邦の地球に仕込んだ力の実ともいいくべきもの。

時を操る能力 別の時間に干渉できる。

次元を操る能力 別の次元に干渉できる。

テンマを倒すには、銀河連邦の上位エネルギー体くらいの次元にいないと不可能。

器を持つ人間としては、最強に近い力を持っている。

例えその次元その時間で倒したとしても、他の次元他の時間の自分とコントクトを常にとつて  
いるので、無数に近いテンマが存在しありにフォローしている。

ネーム持ち 催眠が得意。サイキッカーのネーム持ちの中にも序列  
が存在するが、アキラは  
三番目程度の実力。得意の能力にも相性があるのだが、それよりも  
脳内の処理時間の早さで  
序列が決まる。

アキラの催眠は、広範囲高速催眠なので、1ナノ（0・00000  
0001秒）秒の間に1万人、1kmの  
範囲の人間あるいは生物を催眠状態にできる。

しかし離れれば離れるほど効力も弱まる。その気になれば世界中全  
て催眠状態にできる。

サイキッカーは超能力に対し防御能力があるので、催眠をかける  
ためには相当時間が  
かかるが、使つていればアキラならば100%かかる。

ただし、善い人や物質には効かない。それを操るのは催眠ではなく、  
テレкиネンス。

## ナンバーズ

非常にたくさんいる。皆ネーム入りを目指してゐる。サイキッカーで  
あることに誇りを  
持つてゐる。

ナンバーの若い方が強いというわけではない。

## テテリン・テテラン

ネーム持ち テレポートが得意。道化師の格好をしている。

アキラより脳の電気信号が早いので、よーいじんで勝負をすると、  
テテリンが勝つ。

トキトに次ぐ超能力者。

攻撃手段としては、1ナノに100回テレポートをすることはできる。

テレポートとは自分以外の何でもできる。例えば相手の心臓なども  
テレポートさせることができ。アキラの能力より非常に残虐性が強い。

ちなみにテテリンもアキラもそれぞれの得意能力だけに関しては、  
トキトより上位の能力  
を保っている。

白衣の女性

昔フラーを捨てた母親という説もある。少し気が狂ってるような  
研究者。

善人組織

前線支部の指揮官

ヒノキ村自治区の中にあるアジトで、ヒノキ村に最も近い場所にある支部の指揮官

補佐官

その指揮官を補佐する人らしい。

司令官

善人組織全体の司令官で、銀河連邦の思念と人格を共同している。心の中にもう一つ人格が存在しているような感じ。

銀河連邦は地球に対する影響力をほとんど行使できないので、銀河連邦側のエネルギー体は実質彼女一人くらいである。

義賊のアッチラ

あほの代名詞ともいう。いつもなぞのよにハイテンション。しかし仕事に対しては冷徹に行つ。

戦闘では、仕込み刃、ナイフ投げ、毒などを扱う。スピードが非常に速い。持続力も高い。

世界のあらゆる情報をその足で集めてるが、ガスにはかなわないらしい。しかも彼はよく酒場で調子に乗つて情報を漏らしている。

## 花植えのマリー

善人組織四天王の紅一点。花を育てるのが趣味だが、その花に幻術作用を持たせ、会員が迷惑していることもある。

レイピアを武器として扱う。

## 会員達

はつきり言って一般市民。とはいって訓練は受けている。サイキック組織のナンバーズ以上に人員が多い。この世界の人間は、暇つぶしでよく善人協会の会員になる。

## その他

### 嫌味博士

穀潰しの妄想を思われている博士。嫌味が好きらしい。セカイの幹部。

### GTR4

穀潰しの家に同居している嫌味なロボット。嫌味をするのが生きがいらしい。

## 第三十四幕 大陸へ

穀潰しの衝撃波によつて吹き飛ばされた善い人は、次元の狭間を彷徨つて

いた。そこは真つ暗で何もない空間だったが、善い人は元々眼などほとんど見えていなかから関係なかつた。

「うーん。なかなか悪人がいないな。」

善い人はなかなか善いことができないので、鬱憤晴らしをしたくて仕方がなかつた。

どうやら遠くで明かりが見える。あああそこが悪のアジトだな。と  
善い人  
は直感した。

善い人の直感に間違いなど起こりえない。

「ここの善い人をよくも騙してくれたな！この悪人め！」

罵声を浴びせられた主はん？という表情で善い人のほうを向くが、  
その瞬間  
後方に大きく吹き飛ぶ。

「へべべ・・・なんだあ？この間の続きをしたいのか？」

蹴飛ばした主はテンマだった。善い人が周りをよく見てみると、明

かりは

天から差し込んできている。この場所だけではないほかのところにもだ。

だがしかし、人はどうやらテンマ一人で後は他にいないようだった。

「どうやらここには君一人みたいだね。つまり善い人に罰しられる名譽ある悪人は君一人だということだよ。」

「私とまた遊びたいのか。」

テンマは気乗りしなそうな顔だった。

「なにを！もう我慢ならん！私の善なる行為が遊びだといつのか！」

善い人が飛び掛るが、例によつて空間を移動される。空間自体に穴を開け

善い人がその穴に飛び込み、遠ざかるという仕組みだ。

遠くにいる善い人に対し、テンマはうつすらと背後から出現し語りかける。

「私はおしゃべりを楽しんでいる。」

善い人は改めて周りを見渡す。

「うそをつくんじゃない！」

しかしその攻撃は、テンマの体を貫通するが、どうやら虚像のよう

だ。

善い人はそれを見て、顔を茹蛸のように真っ赤にした。

「この私を愚弄するのか！」

「そうだな。貴様は、少し離れた場所でやってみるといいだろう。あの場所がいいだろうな。また会うこともあるだろう。私もあそこでは楽しめている。」

テンマがそういう終わると、善い人の周りの空間が眩い白い光に包まれる。  
善い人は待てー！といいながらテンマの気配を追いかけるが、やがて光が消えて、善い人が元にいた世界へと移り変わる。

善い人はその変化に気づかずなおも待てーといいつつ、高速移動をしていたが、途中に人がおり邪魔であつたので吹き飛ばすことになった。

「善い人の邪魔をするものは許さない！S・アッパー！」

驚いた邪魔な人は、葉の国の軍隊の兵士であった。ここは大陸、善い人のいた新大陸ではない。

彼らは武術家だけあつてすばやく反応して、善い人の拳の直撃はまぬがれた

が、よく分からぬ氣合のよろんなものに吹き飛ばされ天へと飛んで

いつた。

どうやら様子が変だと思ったのは、そのよつこいろいろなものを吹き飛ばしてしばらくたつてからだ。それは人だけではなく戦車なども含める。

善い人の善いことセンサーが反応を示した。

善い人が遠くを見ると、地面に線引きがされており、居丈高な兵士と悔しそうな表情の兵士があり、居丈高な兵士がやりで悔しそうな兵士をつづいたりして威圧している。

これは！と善い人は思った。

「なにをしているか！この私が善い人と知つてのことか！」

そういうて善い人は居丈高な兵士の槍をむんずと奪い、槍を振り回して、数十人いた居丈高な兵士たちを吹き飛ばす。彼らは声を発する間もなく驚きの表情で飛んでいった。

その後やりをドンと地面につき、にかつと笑い悔しそうだった兵士達に話しかけた。

「礼には及ばないよ。当然な事をしただけだからね。」

助けられた兵士達は怪訝な表情で、善い人を見てなにやらぶつぶつと相談している。

それを見た善い人は、自分を馬鹿にしているに違いないと思う義憤を発し

ようとした。

そのときパチパチパチという手拍子と共に、大柄な男が、のしのしと善い人のほうにやつてきたので、善い人は話しかけた。

「やあ、貴方は善い人かな？」

善い人は悪人に違いないと思い試しに聞いてみた。大柄な男はいかにも悪人ですという人相であったが、じじぞとばかり強調した。

「いかにも私は善い人です。実は善い人様を迎えてきましたの。」

善い人はおや？と思つた。計算に狂いが生じたのだ。

「実は善い人の振りをして善人を騙そうといふことが漫画ではよくあるね。」

善い人はどうあっても男を悪人に仕立て上げたいようだが、そのようないふろを出すようなものでもなかつた。

「いやはや私は純度100%の善人でござります。善い人様がやつてきたと

いう知らせを受けて急いでやつてきたのでござります。」

どう見ても悪人面だ。それにどこかで見た顔もある。

「どじかで見た顔だね。」

「はい。私はルーファ・・・いや害児様の父親でござります。」

田の国の將軍であつた彼だ。

「確かに悪人だつた人だ！許さん！」

「ひい！」

害児の父親はいきなり土下座をして、降参のポーズをとつた。さすがの善い人も仕方ないので、矛を収めた。

「今回だけ特別だよ。」

「ありがたき幸せ。」

害児の父親はすくつとたつて、襟を正した。周りにいる兵士達はその光景をぽかんとした表情で見守つている。

「さて自己紹介が遅れました。私は、ティア・ルーファスと申します。」

「

「覚えていく名前だね。」

「これは手厳しい。ルーファスとでも呼んでください。」

「善い人は名前などどうでもいいという顔だ。」

「悪い人の無関心をよそに將軍は話を進めた。

「わが日の国の状況は悲惨であり、最早破滅している状態です。それが先ほどの線引きで、我々はその線の外に出ではいけないのです。

我々日の国は他の国の暴挙を止める正義の軍隊なのです。どうか善い人様に尽力をお願いしたい。いや善い人様にこの国を任せたいのです。」

ちなみに彼らは線の外で話をしている。線の中にいた一人の兵士は血相を変えて、線から飛び出し、將軍に向かつて話しかけた。

「しかし將軍それは・・・。」

將軍は一瞥、惡魔のような視線を向けることで兵士を黙らせ、すぐに表情を二コニコ顔に戻し、もみ手をして善い人の返答を待つた。

「私は善いことをするだけだよ。」

「もちろんーでござります。やあ今日は宴会だ。善い人様の記念日です。善い人様は善人でござります。」

「分かつてくれれば善いんだよ。」

「善い人はほめられてまんざらではない気分であった。將軍はちょろい

ものだと思った。

「ではこれからどうぞいます。」

兵士達は納得の行かぬ顔のものもいたが、先ほどの善い人の威力を見て興奮冷めない感覚のものもいた。

魔人や戦神の再来だと感じたのだ。しかし彼らはそういう存在に踊らされる自分達に若干飽いていたのも事実であった。

日の国の城はとても小さなものになっていた。

しかし今夜は特別な日だ。皆で大いに騒いだ。

こんな日でも戦争は待ってくれないものだ。將軍は兵士からなにやら報告を受けるたびにしかめつ面になつた。

食事に手をつけていない善い人を見て怪訝げな顔をしていた將軍であつた、

部下からの報告を聞いて大激怒した。

「やあ！諸君はわしの顔を潰すつもりなのか！善い人さまのために早く上等な水を用意しないか！」

そついつて水を持つてこさせると、善い人はちびちびとやり始めた。

どうも辛氣臭い。將軍は善い人に心底困った表情を作りつつ

話しかけた。

「またもや、やられました。わが軍の部隊は次々と夜襲を受けてい  
るよつ  
です。何しろ向ひうは六国連合なんぞ組みまして、善良たる我々を  
いじめておるのです。」

善い人は憤然として立ち上がつた。

「善人をいじめるとはおのれゆるやん。」

その様子を見て將軍はホクホク顔になり、そばにいた部下に話しか  
ける。

「善い人様がいれば、わが軍はまた霸權を得ることすら不可能では  
ない。」

「ははつー。」

とはいつもの、兵士達は疲れている。確かにこんな馬鹿騒ぎして  
いる場合  
でもない。將軍も前線に立つて指揮をとらねばならない。

「善い人様、私はちょっと失礼します。ゆっくりと楽しんでいつてく  
ださい。といひでお泊りはどひたれますか？もし当たがないのなら  
わが城  
の上等な部屋を用意しますが・・・。」

「善い人に休息はない。早速善いことをしなければならない。」

「え？いやそれは願つたりかなつたりですが、夜はいろいろと危険ですよ。

善い人様には昼間存分に活躍してもらいたいのですが・・・」

「善い人に指図しようというのか？」

「いえいえ・・滅相もない・・。」

將軍は善い人のどでかい態度が腹に据えかねたがここで暴れでは何にもならない。おとなしくして善い人のようにしてもらひことにした。

（まあ今晚は様子を見よつ。）

將軍はそう思い、あえて何も言わずに去つていつた。

善い人はもうここには用がないといわんばかりの態度で、窓から飛び降り  
いすこかを目指した。

あちこちで戦闘が起つてゐる。善い人をそれをそのつど吹き飛ば  
したが、  
いかんせん数が多い。拠点が必要だと感じ始めていた。

遠くで善い人を手招きする人物がいる。またまたテンマだ。

善い人はいい加減うんざりしたが、そちらのほうに歩いていつた。

テンマの後ろに見慣れたものがある。それは善い人の家であつた。

善い人はテンマを手で押しのけて家に入つていった。家の隅に穴があいており、近くにハエが待機している。

「ハエ！生きていたのか！」

横にのけられたテンマも、家中に入つてきた。どうやら何か説明をする

気らしい。

「家を持ってきた。時期に援軍もくるみたいだぞ。よかつたなあ！」

善い人はその話を無視して穴を見つめている。

「その穴はハエが掘つてきたものらしい。その穴をたどつていけばヒノキ村

自治区にも帰れるということだ。

安心しる。向こうにも同じ家がある。私が作つておいた。」

善い人は改めてテンマを見た。

「貴方は善い人だつたんだね。」

「私はいろいろとやることがある。この世には楽しげなことがたくさんだからなあ！善い人とは戦場でまた遊べるかもしれないな。」

そういうて家の外にでようと扉に手をかけたが、思い出したかのようにつけ

加えた。

「貴様のペットの鉄くずもここにきてるようだな。探してみるがいい。」

タンクのことを見ついているのだろう。たぶんどこかに埋まっていると思われる。

善い人は一先ず家で漫画などを書くことにした。しばらく書いてなかつたので書くことが多い。

## 第三十五幕 心強い援軍

テンマのいう援軍だが、善い人がこの大陸にいることをテンマは善い人の仲間達に伝えていた。

今より少し前のことだ。

害児は善い人がいなくなり、やる気がなくなつたがまあどうせそのうち復活するだらうと多少樂観的な氣分であり、それまで休憩だと自分の中で区切りをつけ、紅茶などを飲んで楽しんでいた。

「ふつふつふ・。朝の紅茶は格別です。」

今日も害児は朝一番の紅茶を楽しむべく、カップに紅茶を注ぎ、テラスにでて、蟻のような人間の動くさまをによつきながら眺めつつ、それを飲もうとする。

ぐつと飲んだ。と思ったがどうもカップがない。

「ここの私にしてはとんだ不覚。」

怪我の後遺症で握力が低下していたかも知れない。害児は相当昔無理をしてきたからこういうことも想定している。  
落ちてないか辺りを見渡したが、どこにも落ちていない。

不意に背後から声が聞こえた。

「たわけ。 善い人はここにはいないぞ。」

「なに？」

害児は血相を変えて、部屋に戻ると、優雅に紅茶を飲んでいるテンマの姿があつた。

「それは私の紅茶だ！返せ！」

「善い人は今、大陸にいる。善いことをするのにふさわしいだろうからなあ。」

「こいつ…ちつとよこさんか！」

害児はテンマからカップを取り上げ、憎憎しげにそれを洗つて、紅茶を注ぎ、用心しながらそれをぐつと飲むと、満足げな顔をした。

「どうですか？恐れ入つたでしょ？ 貴方の策略もここまでだ。」

「いいことを教えてやるつ。 善い人の家の中に穴がある。 そこを通ればまっすぐ大陸にいけるだろう。」

「この私をはめるつもりですか？騎士竜さえいれば貴方など何も怖くは

ない。」

害児の取り乱しをみてテンマは悲しげな気分になつた。

（ルーファも昔は私に匹敵するほどの実力者であったが、今は見る影もない

な。一度壊れたおもちゃは元には戻らぬか・・。）

「ルーファよ。人は闘争によつて美しくなるのだ。そうは思わないか？

・・・私も大陸では遊ばせてもらつてゐる。氣があるなら貴様も来るがいい。」

「・・・。」

テンマは去り、害児はテンマにどう思われたかよく分かつた。昔はライバルであつた関係だ。

「私もそう思つたこともありました。しかし・・。」

今は違う。どう違うのかは本人にも分かっていないが。

最早以前とは違う。二人の力関係もそつだ。一方は戦うことやめ一方はますます戦いを求めた。

だが、考へることは害児はあまり好きではない。

「とにかく善い人さんをサポートしなくては・・・しかし大陸か。これは一工夫する必要があります。」

少したって、渋い顔の穀潰しとガスが害児の城にやつってきた。

穀潰しはガスに説得され相当地いやいやながらやつてきたようだ。

いわゆる害児の一工夫とは「れの」とであった。

「やあ、二人とも、よろしくてくれました。実は私の調べによりますと、

善い人さんは生きているらしいです。」

そこで言葉を区切り、害児は一人の反応を見た。

穀潰しとガスは顔を見合させ、なにいつてるんだこいつはという表情で

害児のほうを見た。

害児はしてやつたりと思いつつ次の言葉を放った。

「驚いたでしょ? いや私も驚きました。しかし以前にもこのようなことはあったのです。私は悲観してませんでした。実に入念に善い人さんの搜索を続けていたのです。あなた方は思いもよらぬことだったでしょう

が、そこでついに善い人さんの姿をこの地ではない別の地で発見した

とこう次第です。」

穀潰しがおもむろに口を開いた。害児は気分をよくし聞き耳を立てる。

「おいおい、寝ぼけてるのか？そんなこととつぐに俺達は知ってるぜ。

ガスは独自の情報でとつぐに調べがついていたし、俺も三日前にテ

ンマのあほから聞いたぜ。

ん・・ああっそうか。お前あれじやねえか。もしかしてお前もテ

マに聞いただけなんじやねえか。絶対そだら？ひやつはははー・

害児は怒りのあまり顔が真つ赤になり叫んだ。

「おのれ！テンマのやつー何で私に真つ先に知らせにこなったのだ！」

穀潰しとガスはその様子にあきれ返って、小声で話し始めた。

「なんか図星だつたみてえだな。悪いことしちまつたかな。」

「害児の実力など所詮そんなものでだろ？ 穀潰しが気にするまでもないことであるな。」

ガスがそつこつた瞬間、ボコッといつ音がして、ガスが後方に吹き飛んでいく。

穀漬しが害児のまづを見ると、すつきりした表情で、車椅子に座っていた。

「ひでえな・・・」

「何がですか？私は『ハリ虫を退治しただけのこと』。」

「じゃあ呼ばなきやいいのによ・・・。」

「こもつとも話であった。ガスは引きつった笑みを浮かべながら元の位置に戻ってきた。

「あいや、害児さん。それで我輩らにいつたいなんのようであるのか？」

「いうまでもなく、あなた達二人には善い人さんのサポートをしていただきたく、ここに呼んだわけです。」

二人は怪訝な顔をした。何でわざわざ人を使うのだろう。いつもは真っ先に自分がやってることなのに。

「お前が一人でやれよ。俺達を巻き込むな。」

「それがそうもないのです。私はあまりその地域に近づけないのですよ。」

「知ったことか。」

ガスが穀潰しをさえぎり発言した。害児はどひせゐくな」といわぬとすでに予想がついていた。

「まあ我輩が力になつてもよいのでありますが・・これも害児さんが我輩のお得意さんですからな。それをご配慮願いたいもので。」

害児はそっぽを向いて答えた。

「ひと今回に關しては、ガスさんの力も必要です。何しろ善い人さんの武具

は實質貴方しか作れませんからね。」

「物分りがよくて我輩としても大助かりといったところですね。」

害児はぬぐぐこいつ・・さつきのお返しだなと思わないでもなかつたが、

今回だけは仕方ない。何もしないでおくしかなかつた。

ガスは早速手を害児に向かつて差し出した。

「なんだ? その手は? ふざけてるのか?」

「いやいや、まったく正氣である。何しろ害児といえば約束を破ることで

有名な商人。ちゃんと形を見せていただけなければな。」

「貴様！」とも「ハハ」虫のとつひなりつぶすのは簡単だが？

「みぐびつでもひりゅうやしまつますな。今は」ひらのほづが立場が上である。

「ちつ。おこつ。」

害児は黒服に向かつて合図をする。やれーといつ意味ではない。ガスの手には高級な宝石が渡された。

「ほつ・・」これはまた珍しい。

何か実験に使えそうな宝石であった。ガスは神妙な顔でそれを調べている。

「おい！俺にはなんかねえのかー俺にもよこせー。」

穀潰しがそのガスの様子を見てついやまじがるのは当然であった。

「では善い人さんのサポートをしていただけるので？」

「何で俺がそんないとしなきゃならねえんだ？いいからせつと何かよ」  
かせー。」

相変わらず物事的道理が分かつていなかった。

「仕方ない。おい、黒服。あの物乞いに食べ物でもやつて黙らせる。

「

「ははっー。」

しかし穀潰しは物乞うことのここざまに腹が立つてしまつたようだ。

「ああそつかこ。もうここよ。もうこいつとこづくなひよ。別に俺は好きでここにきたわけじゃねえのによ。そういうことこづくならもういいよ。善い人のサポート?ためえ一人でやれよ。何で俺がやらなきゃいけねんだよ。俺にもなんかくれよ。」

「だからあげるとこいつるじょなこですか・・・。」

「つむせえな。ひゅつはーいいからひよ。全部よこせよ。全部だぞ。俺は物乞こじやねえんだ。一度と俺のことと物乞こと呼ぶなよ。絶対だからな!」

「はこせー・。。」

全部よこせといふのせじつこつ意味なのか分かりかねたが、とりあえず食事はもう用意しておいたので、穀潰しとガスをそこに連れて行き、自分は休もうとしたが、穀潰しに元へもどった。まだ話は終わってねえぞといわれ、書兜はじぶしづ同席することになつた。

「ひやつはー！全部だ！全部もつてここーおー！害児、てめえ逃げるんじゃ

ねえぞ。」この俺を馬鹿にしたことの後悔をせしやる。「

穀潰しへとつて害児を後悔させるといつのが、このあほ騒ぎじい。害児はたまらなくなり、そつと合図をした。

いつの間にか、穀潰しどガスの後ろの壁の穴があけられてい。

「穀潰しへ調子に乗つて氣づいていないが、ガスは何か様子がおかしいと思い  
穀潰しに注意を促した。

「穀潰し、どいつもこぶかしいぞ。黒服たちが我輩たちの後ろの壁に  
穴を開けて  
いる。」

「あ？ ああ・・・。どうでもいいぜー。ひやつはー！」

ガスは無言で席を立とつとした。巻き添えで止められたよつだ。

しかしあはつとこつかなんといつか間に合わなかつたよつだ。

どこから現れたのか目の前に騎士竜があり、ガスは彼にゴーペンを  
れはあるか  
かなたに吹き飛んだ。

「てめえ！ ガス！ にげんじやねえ！」

穀潰しはわめいた。

「心配しなくとも、すぐ君も彼と同じところに行かせてあげるよ。」

「てめえ！ふざけんな！」の穀は全部俺のものだ！」

「黙れ！」

穀潰しも「パンそれはるかかなたに吹き飛んでいく。

「ちくしょう・・・。俺はもう善い人のサポートなんか絶対しないぞ。」

空中で飛びつつ穀潰しは叫んだ。隣にガスもいる。

「それより我輩はこの後のが気になる。穀潰しはいいだろ？がさす  
がに

我輩はこの高さから地面に衝突したらどうなるか分からぬ。」

「なにこいつやがる。重装備だから大丈夫だろ！」

「やうでもないとと思うが・・・。」

もうこれは重装備だとかいう問題ではない。ところよりあのパン

ンで

このくらい吹き飛ぶのも驚異的なり、よく鎧が壊れなかつたものだと  
そこも驚異的であった。体への衝撃もほとんどなく不思議であった。  
ガスはなぜかクロールを始めた。穀潰しはついに狂ったかと思つ  
た。

「ひやつはー穀潰し！我輩は今空を泳いでいるぞ！」

「ガス、それは泳いでるんじゃねえぞ。」

「夢のないやつであるな。」

「ああ・・お前はもつと現実を考えたほうがいい。何しろこの高さ  
じゃ重装備なんか意味ねえぞ。もつと考えろ。」

先ほどとは打って変わつて別の意見だ。結局穀潰しひどいでもいい  
らしい。

彼らはまず、高い木の枝に当たり、木の枝にいたるとこで当たり  
徐々に失速  
していき、ようやく地面に到着した。

「空恐ろしい男だ。騎士竜といつやつは。おれらこれも計算だつ  
たに  
違ひない。」

「ああ・・。わざついたぜ。ここが大陸か。軍事国家があるところ  
だな。」

二人は大陸へ到着した。

## 第三十六幕 善人組織再始動

さてここは、善人組織の本部の跡地。物資をガスに掠め取られた彼らは、組織再建のため物資生産に励んでいた。

しかし、ガスに与えられた損害は予想以上に高く、組織の人員も日に日に減る一方であつた。

司令官は起死回生の一手を打つため、アッチラに情報収集をさせていた。

アッチラは、普段おちゃらけているが、仕事となると真面目になるので、直感をフルに働かせ、情報収集に励んでいた。

そんな事情があり、今司令官はアッチラから耳寄りな情報を聞いているところだ。

「善い人が大陸か。見え透いた手を使ってきたが、ならばこちらも手を打つまで。」

「何かいい考えがあるのか？俺としてはあんな間抜けどうでもいいが…。」

「分からぬいか。じきに分かること。アツチラはマリーを連れて、  
　　善い人  
の手伝いをしや。」

アツチラは頭を抱えたが、じきにわめきました。

「おこおこ冗談じゃねえぜ！あんたがやればいいだろ！俺はあいつ  
に会つ  
たうじつまほこられただけだ！」

「では任せたぞ。詳しこじとま、テーブルの上にある紙に書いてある。

読んだら燃やしておけ。」

そうこうで、司令官は、席を立ち奥に引っ込んでいく。

「野郎・・・。ぜんぜん人の話をきかねー！ペッ！」

アツチラは、テーブルにおいてある手紙を読んだ後、爆発させた。

「ああそういうことが。さすが司令官だな。とはこえやつぱり俺が  
　　行ぐの  
は嫌だ。マリーに任せてしまおう。」

アツチラは、ニヤニヤ笑いながら、司令官の部屋を出てマリーのと  
こり  
に向かつた。

「やつこいつわけだ。頑張れよ。」

「私は花植えしないといけないのですが。それに善い人さんとはちよつと

。。。

「ちよつとなんだよ。ふざけるなよ。俺だつて嫌だぜ。いいからお前いけよ。俺も後からこくからりよ。俺はほつせつと話して遊んでるお前と違つて忙しいんだ。みんなが俺を待つてるわけだからな。」

アツチラはみんなのことを考えないと困ねえからなと小声でぼやいて再確認した後、満面の笑みになりもう一度いった。

「せうせ。みんなのことを考えねえといけねえからな。」

マリーが抗議の声を上げようとするときには最早アツチラの姿はなかつた。

いつものことといえばいつものことだが。

仕方ないのでもマリーは支度をしていくと、なにやら大勢の会員達がマリーの元にたずねてきた。

「話は聞いたぜ。俺達も一緒にいかせる。善い人様の役に立てるなら光榮だ。」

物資がなくてやめていく会員達が多い中、残つていった選りすぐりの善人の善人達であった。

その中には、指揮官と補佐官も混じっていた。

「そうだ。俺達は特に善い人様との関わりは深い。まあ・・ろくな  
めに  
あわされではないが。」

マリーは大勢のやる気十分な会員達を手で制した。

「ちょっと待ってください。何故その話を知ってるのですか？極秘  
プロジェクトのはずですのに。」

「アッチラが自慢げにかたつていたぜ。名譽ある役割を受けた英雄  
だって  
だ。  
な。」

「そうですか・・。」

マリーはいつのも」とがっかりした。マリーも実際逃げようとも考  
えていた  
が、ここまで騒ぎが多くなつたら最早選択の余地はない。

その日、組織再興の英雄として、アッチラとマリーその他会員達は、  
組みに褒め称えられ、なけなしの物資でパーティをした。

そして一行は出発した。

「じゃあそういうわけだ。確かに善い人のことも重要なことだが、

俺には

使命があるんだ。使命がな。義賊としてせりはつうことなんだが。

アツチラはそういうわけしつつ、ドンドン後ずせつしてマコーらから遠ざかって、

「あばよーまた会おうやー」

そうこうで、駆けていった。

「はあ・・・」

仕方ない。そういうマリー気乗りしないが大陸に向かうこととした。会員達はいつも自分らが使っていたトラックがなくなつたので、新しく支給されたトラックに何人かのり、それを先発組みとして、残りは徒歩で移動することになった。

「いいのか?俺達なんかにそんな名誉の先発を譲つてもうつて?」

指揮官と補佐官は意外な顔でマリーに尋ねた。

「いいです。私は後からゆづくつと行きますから。」

「やうか・・・悪いな。」

指揮官がすまなそつな顔をし、補佐官が横から口出しをした。

「俺達が全部手柄を取つてしまつて、あなたの出る幕はなくなつてのかもしないぜ？」

「それはそれは、喜ばしいことです。・・そつなつてくれるどどんなにいいことか。」

「ん? 何かいつたか?」

「おいまついいだろ。補佐官。早く善い人様に会いたい。」

「それもそうだな。まったく善い人様が生きてるとほ。世の中なにがあるか分からぬ。」

「そうこうじとだ。マリー。悪いな。せつかくの任務を・・。」

「本当に気にしないでいいんですよ。」

「やうか。さすが四天王と呼ばれるだけある。じゃあ後からゆつくりきてくれ。なあに、元補佐官の言つよつて、俺達が全て止をつけてしまつた

。」

指揮官は手を振り、トライクは出発する。

マリーはその姿を見送り、そりとつぶやく。

「あの人たちでは何もできないでしょうナビ・・・。」

「何もできないうとマニー、アーニー、いわれた彼らだったが、実に何もできなかつた  
かつた  
のだつた。

「どのくらいこ何もできなかつたかとこうと、大陸についたとたん、捕  
らえら  
れて、牢屋にいれられたのだつた。

「ついもこれは計算が違つたな。まさか俺達がこんなに弱いとは。  
だから俺は言つたんだ。無謀だつてな。」

指揮官と補佐官の無意味な会話が続く。

しかし、時には建設的な会話もあるのだった。

「じつはなつたら仕方ないだり。ここから脱出するが。」

「どうひつひつだ?」

「それを考えるのがお前の仕事だつへ。お前は俺の補佐なんだから  
な。」

「そんなどぐ考え付くわけないだろ。第一俺はお前の補佐であつ  
て、  
考えるのはあくまでお前だろ。責任転嫁するなよ。」

「まあ待て。よく考えてみる。俺達のことを善い人様が見捨てるわけないじゃないか。」

「そうするとなにか？お前は善い人様がいきなり唐突に現れて俺達を助けてくれると？まるで雷が俺達に突然当たるくらいのありえない確立

だぜ。もつと考えろよ。」

補佐官は相当じらうじらしてゐるらしく、もうじつたきり「ひんと寝ころがり

それ以降は指揮官が何を言つても無視をした。

「ちつ。使命を放棄しやがつて。善い人様のことだ。もうじつくてこつけ

の動きは察知してゐに違いないのだが・・・。」

指揮官は善い人をまるで全能の神のように扱つていたが、善い人が彼らを助ける義理もなければそんなこと知るわけもない。

いつまでも、本部跡地でぐずぐずしていたマリーを司令官が、叱責し、マリーは無理やり、ジェット機に乗せられ強制的に大陸へと着陸した。

「私にも重大な使命があるところに、どうして私だけがこんな目に・・・。

しかしあらゆる武術の集つ場所、興味がないといえば嘘になります。

「

ただし、マリーの幻術は、植物と薬品を主に使うもので、体術の使用だけで使えるものではない限定されたものだった。

花があまりないこの環境では、自前のレイピアくらいしか役に立たずさすがにレイピア一本で戦うのは無理がある。

「まず善い人さんを探しませんと。」

マリーは例の花植えスタイルで一步づつ進んでいく。これでは善い人に会つまで何年かかることが分からぬ。

こんなことをしている間に、このもう少し後に穀漬し達がこの大陸にやつてくるのだが、そんなこと善人組織の人たちには知る由もなかつた。

こうなればどちらが先に善い人に接触できるかが、勝負の鍵となる。

しかし奇跡は起きたのであつた。戦いあつ兵士達を尻目に、花を植える

マリーは背景の一種としか認識されてなかつたが、彼女を人間と認識できるものが現れたのだ。

善い人であった。

マリーが相変わらず花植えに夢中になっていると、後ろから善い人とその

軍勢が近づいてきて、一言。

「手伝うよ。マリーさん。」

「ああ誰かと思えば善い人さん。」

そういうて善い人に、種や球根が入ったかごを渡す。いきなり、花を植える作業に入った二人に困惑氣味の日の国<sup>1</sup>の兵士たちであった。

他の国の兵士達もいきなり、敵の恐怖の象徴が妙な行動をし始めたので何事かと手を休めた。

どこかの国の兵士が青い旗を掲げた。

停戦の合図だ。日の国としてもこの状態では戦えないし、他の国にしても暴君、善い人の行動が気になる。

次々に青い旗を掲げ、善い人達を囮み何事かと見守った。

善い人達が、花を植えようとするスペースだけは、善い人たちが移動するたびに兵士達も移動することで確保していた。

日の国<sup>1</sup>の兵士が恐る恐る善い人に尋ねた。

「善い人将軍。なにをされているのですか?」

善い人は憤慨した。

「君達はいったいなにをしてるんだ！まるでぐのぼつのように早く善いことをしないか！」

兵士達ははあ？という表情をしてくる。

とりあえず馬鹿ということだけは分かったようだ。付き合つてられんといふことで、田の國の兵士達は配置に着き、赤い旗を掲げた。開戦の合図だ。

それを見て、他の国の兵士達もぞろぞろと自分の陣地に帰っていく。

その行為は善い人を激怒させるのに十分すぎる行為だった。

「この善い人を侮辱するとは、もう我慢ならん！」

善い人は近くにいた兵士を、捕まえて地面に埋め込んだ。

「な、なんだ？何が起こった？」

兵士達はうろたえた。いきなり善い人が鬼の形相で、兵士たちを手当たりしだい地面に埋め込んだのだ。

田の國の兵士達はそれを見て喜んだ。

「さすが将軍様だ。古今無双の武人だ。」

その喜んでいる日の國の兵士達もドンドン埋められていく。

どの國の兵士も真っ青になつた。

「共闘だ！ 暴君、 善い人を狙え！」

ラッパや太鼓の音、シンバルの音などがいつせいに戦場に響き渡り、砲弾が善い人めがけて集中する。

「いかん！ 善い人將軍を援護しろ！」

日の國の兵士達は善い人の爆弾のような行動に離れている。この程度の善い人の奇行で善い人を見捨てたりしなかつた。

各国の兵士達は攻撃と同時に埋まつた兵士達の救出に乗り出している。

日の國の武術家たちは、砲弾の雨の中善い人についていつとするが、とてもおいけない。

そうしていふうちに善い人はどんどん他の國の兵士達を地面上に埋めていく。

この日の戦いは結局いつもの善い人無双で終わつた。

善い人は戦いが終わつた後、マリーに話しかけた。

「マリーさん、花がぐちゃぐちゃになつてしまつたね。」

半分くらい善い人のせいだが、それについてはマリーは何も言わなかつた。

そのように話している間にも、隣に埋まっている兵士達を救出しようと  
している兵士達がいる。

彼らは恨ましそうな顔で善い人達を見ていたが、善い人が何かの拍子に

こちらのほうを見たりすると慌てて目をそらした。

「善い人さん。この大陸では戦争が当たり前です。これではとても  
善いことはできないでしょう。やりましょう。善い人さん。この大陸を変えるの  
です。私達ならばそれは可能です。」

善い人は感動して答えた。

「さすがマリーさんだね。私もやう思つたとこなんだよ。早速善い  
ことを  
しよう。」

善い人とマリーは野望に燃えた。

この数日後穀潰したちが到着することになるが、こんな事態になつ  
ている  
とは夢にも思わないことだつたろう。



## 第三十七幕 穀潰し 死闘

「おひつ。じけつ。俺達は善い人のやつをサポートしに来た害児の使いだといつてゐるだろうが。」

「我輩たちのこいつことを聞いておいたほうが身のためだぞ。」

穀潰しとガスは、一人で門番を威圧し脅している。しかし門番はそんな一人を馬鹿にしたような顔で見ていた。

「害児とはルーファ様のことだな。の方は裏切り者だ。それが今さら何のよつなんだ。」

ガスは穀潰しに耳打ちした。

(こりゃあ駄目だ。じつやら頭が固いらしい。穀潰し、じこには我輩に任せろ。やつにじくらか恵んでやれば、我輩たちの言つことをすぐに聞いてくれるだろうよ。)

それを聞いて穀潰しは嫌な顔をした。

(ガス、じこちは一人いるんだぜ? こんなやつフルボッコにしちまえばいいんじゃねえか? 見てみる。むかつくなにしてやがるぜ。)

ガスは改めて門番の顔を見てみたが、そこまでむかつくな顔でもなか

つた。

(普通の顔に見えるが。)

今まで黙つて聞いていた門番が口を開いた。

「おい。一人いてもとても俺には勝てないと思つぜ。そっちの馬鹿  
っぽい  
やつはサイキツカーだらう? ネームは何だ?」

それを聞いて穀潰しは馬鹿にしたような口調で言つた。

「ネームだと? ひやつはーそんなもんはねえよー!」

「ネームもないのか? ジヤあなんだ、ナンバーズか。」

「あほか。俺はナンバーズなんかじやねえ。」

「話にならんな。出直して来い。」

ガスは機転を利かし、小さな袋を門番に差し出した。

「ほほう。鎧のほうは、物の道理がよく分かつてるらしいな。」

門番はうれしそうな顔をして、袋を受け取つましたが、その袋は  
穀潰しの超能力によつてはじけてしまつ。

それを見て、門番は穀潰しに向かつてにやりと笑つた。

「そつか・・・まあ俺は構わんがな。自分がどれだけ世間知らずか

わかる

だろうぜ！」

穀潰しはガスに耳打ちした。

(ガス、一 手に分かれるぞ! )

(ああ、穀潰しは右からだ。我輩は左から行く。ぬかるなよ。)

「なんだ? こそひを相談か? 」

「いまだ! 」

穀潰しは、右にテレポートをし、連続衝撃波を叩き込み、ガスは左から相手に回りこみ、火炎放射器で炎を吹きかけた。

「ばればれだ。」

いつの間にか門番はガスの横に回りこみ、回し蹴りをガスに食らわせ、ガスは大きく吹き飛ぶ。

「ガ、ガスー！ てめえよくもガスを！」

「なんだ。その程度か。」

穀潰しが叫んでいる間、門番はすぐ目前まで移動する。穀潰しには一瞬で移動したように見えたが、そういう武術なのだろう。

門番の回し蹴りにより、穀潰しは吹き飛ぶが、その体は笑いながら消えていく。穀潰しの分身だ。本体は別の場所から攻撃してくる。

「はずれか。」

「ヒーヒーチだぜーサイコグリブドンー！」

しかし穀潰しの攻撃は空を切る。

（ちっ。また外れやがった。野郎、実体を消してるらしいな。）

「まあサイキッカーにしてはよく頑張ったほうだな。」

門番は、穀潰しの腹に、連續掌打をくらわせる。

「ぐふつ・・・。」

穀潰しは腹を抱えてつんのめりになり、その顔面を門番は蹴り飛ばす。

穀潰しは顔面が跳ね上り一瞬中に浮き、その体にもつ一度蹴りを食らわせ、

仲良くガスが転がっている場所に吹き飛ばされる。

「おお、穀潰しもきたのか。」

「ガ、ガス・・。てめえ真面目にやりやがれ。」

そんな会話をしている間に、門番はすぐ間合いをつめて、穀潰しを

サッカー

ボールのように蹴飛ばした後、言葉を発した。

「なかなか丈夫みたいだな。鎧のほうは死んだ振りか。分相応な振る舞い

だが、ならば最初から向かつてこないことだな。」

「へへっ。まつたく左様でござりますな。」

ガスは下卑た笑いを浮かべつつ答えたが、それが門番の気に障ったのか  
やはり穀潰し同様サッカーボールとなり、やはり仲良く穀潰しと同じ場所に吹き飛ばされた。

「へふう・・。」

「ガ、ガス！ちつーまともに攻撃できやしねえ！」

その後二人は、サッカーボールのように転がり、日の国之外まで追い出されてしまった。

「これに懲りて二度とこの国にはこないことだな。」

穀潰しとガスはぐうの音も出なかつた。門番は薄ら笑いを浮かべて去つて  
いった。

穀潰しは、その後ろを恐る恐る見送り、ようやくまともにガスと会話がで

れるとほつとした。

「ガス！てめえ前衛やれ！」

穀潰しは開口一番そういった。若干ハツ当たり氣味だ。

「何で我輩がそんな」とを・・。そんな」としないで素直に、いくらか包ませて渡せばいいのではないか？」の国では比較的お金がよくつかわれ るようであるし。」

「お前にまだプライドはあるのがないのか？」

「商人としてのプライドはあるが・・・。」

「ガス・・。てめえよう、ちよつとけちなんじやねえか？親友のこの俺がこれほど頼んでも駄目なのか？なあそくなんだな？」

「う！」こいつぞのたかつた。ガスはしづしづしづ答えた。

「分かつた。しかしこれは貸しであるからな？」

「分かればいいんだ。ひやつはーじゃあ行くぜー。」

穀潰したちは意氣揚々と、門番のところまで戻った。

「ん？ ぴんぴんしてゐるじゃないか。じつやら体だけは丈夫みたいだな。」

「てめえのここの後の末路を思い浮かべると俺は笑いがこみ上げてくるぜ！」

ひやつははつはは。よしこけ！ガス！」

ガスは突進しつつ自分の体に火をつける。

「ガス・フェニックス！」

手足をばたばたさせて、あちちとわめぐガスを、門番は真正面から蹴り飛ばし、その先にいた穀瀆しは向かつてくるガスに慌てたが、どうする

こともできず、一緒に吹き飛ばされる。

門番は吹き飛ぶ彼らと平行移動しつつ、彼らの勢いが失速したときを見計らいまた蹴りを加える。

(ちつ、仕方ねえ。これだけはやりたくなかつたが。)

「行くぞガス！サイコグランドだ！」

「ひ、ひいー！やめてくれー！」

ガスは頭を抱えた。門番は少し不安な表情をしたが、雑魚の攻撃などたいしたことはないだろうと高をくくった。

「潰れるー・サイコグランドー！」

門番は攻撃を見て余裕でかわしたつもりだが、驚くことに、その攻撃は

どこまでも範囲が広がり、やがて追いつかれ、攻撃に巻き込まれる。

しかしこれほど広範囲の攻撃なら、穀潰したちもただではすまない。

門番は意識が飛びそうになりながらも、穀潰したちのほうを見た。

確かにガスは、上空へ浮かび意識を失っているようだが、なんと穀潰しは

衝撃波の中での高々と笑っている。

(「やうか。やつは自分の攻撃は効かないのか? 妙だな。本当にサイキッカーなのか?」)

「よくもやつてくれたな! ひやつは! 潰れろー・ランダムスファイア! -

追い討ちに、爆裂する球状の衝撃波を複数門番に打ち出す。

最早門番は立つていてもやっとだった。

それを見て穀潰しは、笑いながら口づけた。

「ひやつははは。どうやら体だけは丈夫みてえだな! -

「ひつ・ひつ・

そのとき、門が厳かに開き、穀潰しの田に懐かしい白服が写った。

「ん? 誰かと思えば穀潰しじゃないか。」

「おお、善い人じやねえか。俺達は害児にいわれてお前をサポート

しに

きたんだ。それをこの愚図な門番野郎が邪魔しやがつて。」

「い、善い人様・・・。」

そこにはぼろぼろになつた門番がいた。

「害児・・・。ああそんな人もいたね。害児さんか。思い出したよ。ところで穀潰し。君は善良な善人をいたぶつてどうじうつもりなのかな?」

「はあ? 相変わらず馬鹿だぜ!」 いつは善良じやねえ!

善い人はそれを聞いてせつかくの懐かしい再開だったのに、怒りモードになつてしまつた。

「なんだと! そんなにぼくぼくにされたいのか!」

「てめえにそれができるならな。言つておくが俺はかつての俺じゃねえぜ

。」

「そつか・・・よく分かつたよ。悪は滅さなければならぬ。」

「ちょっと待つた。」

「ん?」

ガスがびつこを引きながら、善い人に近づく。

「ああガスさんもきてたのか。」

「なんだ? ガス。後にしてくれ。」

「いや、穀潰し。我輩達はあくまで善い人君をサポートしにきたのであつて、争いに来たわけではない。」

「そんなこと知るか! ひやつは!」

「我輩は穀潰しに一つ貸しがあるはずだ。それに我輩は善い人君に渡すものがある。」

いつの間に用意したのか知らないが、ガスの近くになぜかプレオがあり、ガスはそこから「」と荷物を取り出し、それを善い人に渡した。「善い人君が好きな大型の『』と、鉄で固めた大剣をいくつかいりてある。」

善い人はそれを見て喜んだ。

「さすがガスさん。私が認める善人だよ。これはいいものをもらつた。」

ガスは満面の笑みで両手を差し出していたが、善い人は門の中にひつこんでしまった。

ぼこぼこになつた門番も、善い人に続き中に入り、門を頑丈に閉めた。

後に残つたのは、阿呆なガスと穀潰しだ。温厚なガスもこれには閉口した。

呆気にとられた穀潰しもやがて正氣を取り戻し、門をがんがん叩き開けるーとわめいた。

ガスはすぐに冷静になり、穀潰しに

「穀潰し。もう我輩たちの用はすんだ。さつと帰ろ。」

といった。しかし穀潰しはもちろん收まらない。

「い、なつたらもう俺の知つたこっちゃねえ。この砦を破壊してやるー。」

「よ、よせー穀潰しー。」

穀潰しは、大規模な練りこみをはじめ、それを解き放つ。

「潰れろー・サイココメットーー。」

巨大な隕石の塊のような衝撃波の塊が、穀潰しの頭上から展開し、砦に激突する。

見る見る砦に砦が壊れていく。

「ひやつはつはつは・・・・ぞまあみろー。」

だがこんなことをしてただで済むはずはなく、砦の中からわらわらと人  
と人  
がやってきて、穀潰しを拘束した。

びっこを引きながらフレオに乗つて逃げようとしていたガスもなぜか  
捕まっていた。

「何で我輩まで！我輩は関係ない！我輩は密であるぞー！」

重たいわめくガスを連行した兵士は、舌打ちしつつ、ガスの頭を  
ぽかりと数度殴る。

ガスはそのうちなにもいわなくなつた。

二人は、牢屋にぶち込まれ、反省していると言ひ渡された。

## 第三十八幕 クーデター前夜

さて善い人が、新しい日の国の指導者になつたわけで、元々将軍は今は副將軍だ。

とはいへこれは彼自身が望んだことであつた。

彼の目論見が外れのは、善い人が狂人であつたといつて點だった。

というより、元將軍は、善い人が戦闘狂だと思つたのだが、善い人は別に戦闘狂ではない。

そう見えても不思議ではないが、彼女は彼女なりの戦う理屈があつた。

ニヤニヤするのが癖の將軍だが、善人組織の会員達が乗り込んで以来そうニヤニヤできない状況であつた。

最早、副將軍といつのも名だけのものであつた。

正直、何度も命を企てたか分からぬ。

そのたびに善い人に連れ戻されるのであつた。

「いいか。お前の善人レベルは1だ。大先輩たる俺の言つことに従えよ。」

善人組織の指揮官<sup>じ</sup>とともにこんなことを言われる有様で、副將軍は、あまりの屈辱に、目から血がでそうになつた。

見るに見かねて、補佐官がフォローをする。

「いいすぎだ。指揮官。この男はこの国で、地位の高い人間だったんだぞ。敬意を払つて扱うべきだらうが。」

指揮官はそれを聞いて、鼻で笑い、副将軍を一瞥した。

「こんなやつにか？はつきりいつて、こいつは才能ないな。善人の素質というものがまるでないぜ。」

副将軍は、なにを言われてもひたすら感情を殺して、黙殺を決め込んでいた。

「見ろこのふてくされた態度を。善人の大先輩たるこの俺に失礼だろうが。」

副将軍はそこで始めて口を開いた。

「なにやら『ミ虫がわめいて』いるようだが、鬱陶しくてかなわんな。殺虫剤でもまいてほしいところよ。」

指揮官は、それを聞いてびくびくをこめかみを痙攣させた。

「ほほー。うそ。そうか。よくぞいった。おいつ・補佐官・こいつを教育してやれ！」

補佐官は、おう・と答え、副将軍の腕をむんずをつかんだ。

「さあ立て！立つんだ！言つ事を聞かないなら、善い人様がやつて

くる  
ぞ！」

それを聞いて、副将軍はしづしづと立ち上がる。

また地面に花を植える何の意味もない無味乾燥な作業をさせようといふ魂胆なのだろう。

彼にとつては拷問に等しい。

最早、日の国は日の出の勢いであり、瞬く間にその勢力を拡大した。そして、彼ら軍事国家とは異なる思想の持ち主で、軍事国家は一致団結してこれに対抗している。

さしもの善い人も、これにはなかなか対応しきれず苦戦しているというのが今の状況だ。

そんな折に、かねてからの約束でもあったため、アッチラがやつてきた。

彼はこう見えてなかなか知名度が高い。

彼は高速移動をし、日の国の城の門前までやつてきたが、門番の威圧により、立ち止まつた。

「よお。」

「誰だお前は。 こじが善い人様の居城と知つてのこじか？」

「ああ・。」苦労さんだな。 だがな。 僕は義賊のアッチラだぜ。  
善人組織の四天王のなあ！」

「お前が義賊のアッチラか。 分かつた。 なら通して問題ないな。」

門番が門を開ける前に、アッチラはすでに城の中にいた。

門番はその気配を察しつぶやく。

「 義賊のアッチラか。 あのレベルの体術を習得してるとほな。  
噂に聞いたよりやるようだ。 」

アッチラは、なかなか、勢いがついてきているなど、あちこちを見  
学し  
同胞を励ました。

その後、善い人とマリーのところに赴いた。

意氣揚々とお出ましになつたアッチラであつたが、  
今頃なにをしにきたのかと皆が思つるのは当然過ぎるほど当然であつた。

マリーはアッチラを見かけると早速嫌味を言つた。

「 ずいぶん遅いお出ましですね。 アッチラ。 貴方はよほど忙しい  
のですね。 」

アッチラはそれを嫌味とも気づかず、 もろ手を挙げて主張した。

「おおよー! 何せ俺はみんなが待ってるわけだからな。  
おいー! とこひで善い人! お前は一流善人にしてはよくやつたほうだ  
な!」

後は俺に任せて、お前は本業の殴り屋に戻れ!」

あまりの罵詈雑言にマリーはあきれ果てた。

善い人ももちろん怒っているだろう。

そう思いマリーは善い人のほうを見たが、  
善い人はなにやら考えて込んでいる様子だった。

「マリーさん。一流善人ってなんだろう。」

マリーは啞然としたが、親切に教えてあげた。

「それは、善人としてまだ未熟つて意味ですよ。」

「ここの善い人が未熟であると?」

「わ、わたしではなく、アッチラがそういうのです。」

このままだと危ない。そう感じたマリーは、急遽ここから逃げ出す  
方針  
を立てた。

「善い人さん。私は皆の指導をしにいきます。アッチラのこと任せ  
します。」

そういうてそそくさと、部屋を出て行つた。

アツチラが背後から、恐れ入つたかと声をかけたが、マリーは無視をした。

「見ろ！お前の頼みのマリーも逃げ出したぞ！  
お前は一人ぼっちの孤独だな！ここは俺の王国だ！  
お前は出て行け！」

「善人対決なら以前私が勝つたはずだよ。」

善い人は、何の表情の変化も見せず、冷静にいった。

「あほめ！それは過去の話。義賊たるこのアツチラ様は常に進化をとげている。お前のような馬鹿と一緒にするな！」

アツチラは自殺志願者らしい。一緒にするな…といった瞬間あごがはね

あがり、地面に浮かんだと思つた瞬間、床にめり込んでいた。

その後、わらわらと兵士達がやってきて、アツチラを回収し、アツチラは牢屋に入れられた。

アツチラは、牢屋に入るなり、ガスを発見し、嘲笑した。

「おや？お前は何時ぞやの商人ではないか。  
どうした？こんなところに金塊はないぞ？また金庫番でもしてゐるのか？」

ガスはむすつとした顔で黙りこくれていた。

「どうした？声もでないか。  
その後どうなったか、英雄アツチラ様が知らないとでも思つてゐるのか？」

魔王害児に尻尾を振りすぎて尻尾が千切れてしまったようだな。」

怒りのあまり激昂して立ち上がったのは、ガスではなく穀潰しだつた。

「てめえ！俺達二人に勝てると思つたのか！」

それを聞いて慌てたのはガスだ。

「やめる。穀潰し。こんな馬鹿相手にするな。  
ここで暴れてなんになるのだ。」

「だ、だけどよ。お前のこと馬鹿にしてやがるぜ。」

「やうやく…やめておけよ。帽子君。お前の出る幕じゃないぜ。」

穀潰しは、お気に入りの帽子を馬鹿にされて、怒り狂い、  
帽子をつかんで地面に投げつけた。

その後懐からナイフを出して、威嚇した。

「あまつづること、このナイフの餌食にしかまつぜー。」

アツチラは面白いと思つた。自分もナイフ使ひだ。

実力を見てみたいと思つのは当然の心理だった。

「やつてみるー。」

「ひやつはーへうえーサイゴスフイアー！」

てつきりナイフでくるかと思つたアツチラは、慌ててその攻撃を避ける。

その後無防備な穀潰しの首を狙つてナイフを繰り出したが、空中で静止する。

「また、商人の小細工か。」

空中に見えない糸が張り巡らされていた。  
いつの間にこじんなことをしたのだろう。たいした早業であった。  
その糸にナイフがからめとられたというわけだ。

ナイフは、アツチラの手から離れて空中を舞い、ガスの手に収まる。

「義賊君。このナイフはあまりいいものではないな。  
我輩の作ったナイフをお勧めするよ。」

アツチラは何を言つたか、この小憎びらしい商人めがと思つた。

「しゃりへりへりこやつめー。」

当然穀潰しが両手を挙げて静止した。

「おい！やめようぜ！」

いろいろする気持ちは分かるが仲間同士で争つても仕方ない。それより、面白いことがあるんだ。クーデターを起こすってのはどうだ？

俺も善い人なんかになめられっぱなしでは、立つ瀬がないからな。」

アツチラは、いつまでも小さいことにこだわる人間ではないので、すぐに了承した。

「そりゃおもしれえな！あいつらに吠えずらをかかせてやれ！」

二人はガスのほうを見た。もちろんガスも参加するだろ？と思つた。  
が・・。そんなわけあるわけがなかつた。

「我輩はそんな馬鹿なことは『めんなのだ。』

「な、なにー！」

「俺達が馬鹿だというのか！」

ガスはやれやれという風に首を振りながら答えた。

「我輩はもう仕事を果たしたし・・正直善い人のことなんぞ知つたことではない。

ここりで帰らないと商売に差し支えもある。」

「」の馬鹿やうつー。」

アツチラはガスが隠し持っていた棍棒をかすめとり、

ガスの頭をその棍棒でぶつたたいた。

その後ガスに向かつて棍棒を投げ捨てた後、言い放った。

「ここから出れたら世話はないだろー！」

そのためにクーデターするんじやないか！ そつだろー！ 穀漬し！」

穀漬しは、だからって殴ることないぜと思いつつうなずいた。

「あ、ああ・。まあそうだよな。」

「だからって殴ることはない！」

ガスは大声でわめいた。

「我輩は客であるぞ！」

穀漬しはすぐにフォローに入った。

「いいんだ！ ガス。もういいんだ！ 分かった。分かったから。」

今度はアツチラが唖然とする番であった。

いつたいいきなりなにをわめきだしたのか、  
しかしアツチラはそう物事を深く考えない性格だ。

「そうだ！ 僕達は客として招待されたのに、この扱いはひどい！  
だからクーデターだ。そつだろー！

この英雄たる我々にふさわしい偉業ではないか！」

ただ、ガスはそんなことしなくとも、自分ひとりならいつでも脱出できる自信があった。

善い人など口先三寸でどうにでもなるし、第一に以前もつと绝望的な状況のときこすでに脱出している。

いぐりでもやりようがあった。

こんな馬鹿騒ぎに付き合つ余裕はガスにあるわけもない。

しかしレーレーできたら仕方はない、ガスにも友人付き合つといつものがある。

世の中なかなか自分の思つよつままならぬもの。

ガスも付き合つ覚悟を決めた。

## 第三十九幕 行動開始

「そうなると具体的には、善い人さんにどう対処するかであるが……。  
」

ガスはそう口火を切った。

穀潰しやアツチラに、物事を考える頭があるとは思えない。

「俺なら、20秒は抑えられるが、最終的に勝つことは無理だろうな。  
穀潰しはどうだ？」

「ひやつはー俺は手前らみたいな雑魚とは違つぜ!」

ガスはまたじうせいつもの茶番だろつと思つた。

アツチラは割合真剣に戦力を検討している。

「なら、善い人は穀潰しに任せるとして、

他の雑魚は俺とガスで制圧すればいいだろつ。」

「そうであるな。その後我輩と義賊君が穀潰しに合流して、共闘すればいい

。」

ガスはその前に逃げるつもりだ。善い人と戦うメリットが彼にあるわけはない。アツチラにしてもすぐやられるだろつから、結局穀潰し／＼  
S善い人

といふいつもの構図になるだろつ。

穀潰しは少し考えた後言つた。

「潮時かも知れねえな。」

「？」

二人はその言葉を聞いて首をかしげる。

「ああ・。善い人と戦うつてことだ。  
やつともそろそろ決着をつけないといけねえと思ってな。  
いい機会だろう。あいつも不死身に近いみたいだが・。」

ガスは穀潰しが善い人に勝てるわけないとは思つたが、念のために  
フォロー  
しておいた。

「穀潰し。本氣でいつてるのか？何のメリットもないようと思える  
が。」

「商人風情にはないだろ？ぜー」これは俺の意地の問題だ！

ガスはああそうですかい、勝手にやつておくんなせえと思い、  
ふい  
横を向いた。

アツチラは黙つていられなかつた。こんな阿呆でも彼は善人組織の  
四天王の一人なのだ。

「善い人は、俺達善人組織にとつて、重要な人材だ。  
むざむざ殺させるわけにはいかないぞ。」

「ひやつははは。じゃあお前は善い人の味方をすればいいじゃねえ  
か。」

アツチラは大振りな身振りを交えつつガスに話しかけた。

「やつはクレイジーだ！」

ガスはわずらわしそうにいった。

「どうせうまいくいかないだろ。好きにやらせておけばいいのだ。」

「そうだろうぜ。善い人を倒すなんて大それた野望は、この英雄ア  
ツチラ  
にこそふさわしい。」

そういうってアツチラは穀潰しに向かつて挑戦的な視線を放つた。

「お前が？ひやつははは。笑わせてくれるぜ！」

アツチラがにやりとして、仕込み刃を仕込んだ蹴りを放つと、ガ  
スが

何事か察して退避すると同時に穀潰しも動いた。

「潰れちまえ！ランダムスファイア！」

破裂する性質を持つた球状のいくつもの衝撃波が穀潰しから放たれ  
る。

アツチラはその攻撃を全てかわし、穀漬しに再び対峙したときには、すでに穀漬しの姿はなかつた。

見張りの兵士達もどこかいつてしまつたようだ。

「あの馬鹿やうひー。俺達の計画は見張りの兵士達に丸聞こえだつたぜー！」

アツチラは、わめきたりす。

「義賊君。悪いがここから先は君の馬鹿のりにはつきあえないのだよ。

足手まといになるようなうなら我輩はひとりで行くが？」

その言葉を聞きアツチラは顔を真つ赤にして激昂した。

「このひすのうーせいと歩けー！」

アツチラはガスから奪つた棍棒で、ガスの後ろからがつんをくらわし、転ぶガスを尻目に、英雄アツチラ様のお通りだーと奇声を上げて、地上への階段を上つていつた。

## 第四十幕 本氣の戦い

穀潰しは一足早くクーティー実行に移っている。

彼は善い人の部屋に向かっている最中だ。

何事かを思索している。

(善い人は不死身に近いが、それでも俺の攻撃は効く。)

そこがテンマとの違いで、今の穀潰しではテンマにダメージを与えることはできない。

「善い人のやつには悪いが、俺はいずれテンマを倒す男だ。  
あいつにはその稽古台になつてもうひ。」

とはいえるのままでは倒すことはできない。

そこで穀潰しは一計を思ついた。

完全版のキリコロを使えばいい。以前に一度だけそれを使つたことがある。

ただそのときの感覚を穀潰しは再現することができなかつた。

(困つてこるようだな。ゼロ。)

穀潰しの頭に声が響く。

( テンマか。 )

穀潰しはそれに答えた。いわゆるテレパシーといつものだ。

( なにやら面白ごとをするよつだな。私が手を貸そつ。 )

穀潰しはほくそ笑んだ。この馬鹿野郎は、どうやら穀潰しの標的になつてゐることに気がつかずあまつさえ手を貸すつもりらしい。

( ああいぜ。ただ一つ言つておくが、これは貸しだからな。 )

( 私も近場にいるぞ。そのために善い人を呼んだのだ。闘争を私に与える。 )

穀潰しの頭の中の声はそこで途切れ、その代わり、穀潰しは非常に澄んだ感覚になり、頭の中がクリアーになつていいくを感じた。

「よし。後は善い人を倒すだけだな。」

穀潰しはとにかく、善い人を倒すことだけに専念すればいい。

そのほかのことは、アッチラとガスがフォローするはずだ。

現に、今、善い人のいた部屋に向かう途中一人たりとも兵士とすれ違つていない。

「こゝの部屋だつたな。」

扉を開ける穀潰し。

「穀潰しか。」

善い人は、穀潰しかから見て、部屋の一番奥にいる。

椅子に座つており、善い人の後ろに無数の武器がある。どうやら穀潰しがくるのは分かつていたようだ。

予感していたのだろう。善い人は無言で椅子からおり、大剣を構える。

善い人にしては珍しく、正攻法だ。

普段は穀潰しが扉を開けた瞬間に勝負をつけてているところだ。

穀潰しの尋常ではない雰囲気を感じ取っているのだろう。

「善い人。お前とはなかなか浅からぬ付き合いだった。俺としては残念なことだが、お前は所詮、俺の稽古台だ。」

そういうて、手に集中していた練りこみを形にする。

「これが、キリコロだ。完全版のな。」

穀潰しの手から、黒い刃が出ている。

穀潰しはその黒い刃を数度、空中で振ると、次元が歪む。

それを見て善い人は口を開いた。

「分かった。なら私も本気でやるよ。」

そういうた瞬間、善い人の体に雷が降り注ぐ。

その雷は途絶えることなく善い人に注ぎ、  
しかも天上を貫通しているようだ。

善い人がその言葉を言い終わるころには、穀潰しは間合いでつめて  
いた。

とはいって、まだまだ黒い刃の届く間合いでない。

しかし穀潰しはそんなものお構いなしに、黒い刃を振るつた。

グオオオオオンと妙な音があたりに響き、斬つたところ周辺にほぼ部屋全体の  
空間がゆがむ。

善い人がいた辺りも歪むが、善い人はすでにそこにはいない。

(田で追えない? 勘で避けるしかねえ!)

穀潰しは勘で右に飛んだが、右から何らかの攻撃を受け、左に飛び、  
左に飛んだら今度は左から何らかの攻撃を受け、右に飛び。

それを繰り返され、穀潰しはぼっここのへとへとなり、いっぱい  
いっぱい  
になつて叫んだ。

「ひいいー！やめてくれー！いじめないでくれー！俺が何したってい

うんだ！」

それでも善い人の攻撃はやまず、さらに続けて穀潰しが叫ぶ。

「こんなことになったのもテンマのせいだ！ テンマの馬鹿ヤロー！ 今度あつたらぶつ潰してやる！」

それを聞いて、善い人は動きを止める。実は、善い人がこの大陸に来てから、ほとんどの国を

善い人化できたのだが、善い人のやり方に従わない国があるのだ。

それが花の国で、その王が、テンマ・トキトであり、さすがの善い人も苦戦を強いられている。

そこで今の穀潰しの言葉を聞き、穀潰しと手を組むつと思つた。

「ところで穀潰し。」

「な、なんだ。」

穀潰しはへえへえいいながら、地面にへたり、恐る恐る善い人に尋ねた。

「どうやら私の方針に従わない、悪人の国が一つあるんだよ。」

「そ、それはひでえ国だぜ！ ひやつは…やつつけろー。」

「穀潰しも手伝ってくれないかな。」

「あ、ああ？ なにいつてやがる。当たり前じゃねえか。俺達親友だ

ろ。

だがな善い人、調子に乗るんじゃねえぞ。

俺は、てめえの手伝いをしてやるのであって、てめえの部下になる  
わけじやねえからな。

いいか。これは一つ貸しだぞ。」

そういうた後、穀潰しは何事かを考え、激怒した。

「考えてみたら、おい善い人。クーデターを考えているけしからない  
裏切り者がいやがるぜ。

あいつらに、善人の正義の鉄槌をくらわせないといけないな！」

「なんだって？もう我慢ならん。この善人を馬鹿にする連中が  
まだいるのか。思い知らせないといけない！」

「おうともよ。ひやつははは。・・よし。いくぞ！善い人！」

## 第四十一幕　害児参戦

「ここまで事態を静観していた害児であつたが、さすがにここまでいくと、温厚な害児でも我慢の限度があつた。

「聞いたか。騎士竜。」

害児は、怒りで手をプルプルさせながら、紅茶を飲みつつ傍らの騎士竜に聞いた。

「どうやら、僕達の故郷は完全に善い人になられてしまったようだな。」

「ここまで露骨に無視されると、さすがの私でも限界というものだ。あの善い人め。今まで泳がせてやつたが、ここらで一つ立場というものを

わきまえさせてやらないといかん。」

「僕も協力しよう。」

「当然だ。善い人は、次に花の国を攻めるなどと図に乗つてゐるが、それを逆手に取る。」

私達は、花の国の王、天崎と手を組み、油断している善い人の国に大打ち込みをかける。」

「すぐに出発できる。」

「よし、出発させる。」

騎士竜は、優雅に一礼し、害児の部屋を退室した後、城の周りを徘徊し始めた。

壁などを懇々と叩いて、入念に確かめた後、黒服たちに城に隣町まで行くほどのロープをつけさせ、準備を整えた。

騎士竜は、指でちょっと城を押すと、城は凄い音を立てて、吹き飛んでいき、騎士竜は、ロープをキャッチした後、城の内部へ入り直した。

害児は、下のホールに移動していた。害児は騎士竜に労いの言葉をかける。

「来たか。『苦勞』。」

「相手は、穀潰し、ガスなどもいるが、これらはどうする?」

「やつらなんぞ物の数ではあるまい。最早じとじと及んだ以上、そのような『ミミズク』でもよい。」

「しかし、やつらは『ひら側の人間だぞ。向こう側に寝返っているかもしないが。』

「象の群れの中で、アリがなにをしようが関係あるか?」

やつらがどうじよつが、知つたことではない。」

「見つけたら攻撃していいんだな?」

「勝手にしろ。」

城は、正確に善い人の居城めがけて進んでいる。

こちらの居城を相手の居城にぶつけ、一気に制圧する。

害児・騎士竜コンビの伝統的な奇襲戦法だ。

いらいらしながら、貧乏ゆすりをしつつ、ワインをなめながら、到着を待つ害児。

そこへ黒服が注進をしにきた。

「大変です! 前方に巨大なハエが接近! 城を攻撃しております!」

「追い払え。」

「ははっ! しかし私共だけではどうにも・・・。」

「どいつもこいつも無能ばかり、こゝは私が動くしかないか・・・。」

「さあ、さあい・・・。」

恐縮する黒服。

害児は城がドンドン崩壊する中、物思いにふけり現場に向かつた。

やはりといったか、善い人の飼つてゐるハエだ。

「やはりあなたでしたか。ミルキーちゃん。何故私達を攻撃するのです？」

おやめなさい。」

「ひゃーーー。」

ハエは憤怒の表情で、害児に真空波を飛ばす。穀潰しなんかのサイコカツタ

ーとは比べ物にならないほど、切れ味がすげー、すさまじい速度だ。

害児はひょいと身をかわしたが、真空波は、害児の長髪を少し切り、あまつさえその頬にまで傷をつけた。

真空波はその後、城の一角を両断し、切断された城の瓦礫は、下界へと落ちていく。

害児は、頬の切り傷を指で触り、その血を見て、一気に頭が冷静になつていった。

(本気か・・・今の私では荷が重いが。)

「あれ? おねえちゃんじゃない? あれ? 何で私こんなところにいるの? どう? 」「

「ん？ 確かタンクとかいつた善い人さんの家にいたロボットか。」

どうやら、タンクは気づかぬ間に、ハンの背中に乗つていたようだ。

害鬼は、ハ工の攻撃の猛攻をかわしつつ、タンクを見て何事か考えていた。

「いやなんとかこぐま博士はなにをやつてこねへ。わがわざといひなうかー無能ー。」

「これはとんだ」「挨拶だな。」  
さりきから「」「いるだらう。」

声はすぐ側で聞こえた。騎士龍は、書兎を狙いレーザー、真空波などを脂汗

をにじませながら、相殺していく。

悪しか  
とんた化け物だ  
単純な攻撃能力だけなら僕より上だよ

1

騎士竜は珍しく顔に余裕がない。

騎士竜は何しろ城の被害も抑えないと云はないし、黒服たちも応戦

ドンドン消耗していく様を見て、焦りも生じしている。

「君達は下がれ！こんなところで消耗する必要はない！」

「いや！騎士竜様！そんなわけには！」

そこに害児が命令を下す。

「「」は私達だけでいい。城の修理を頼む。」

「は・・ははっ！」

黒服たちは、一瞬で城の中に入り、遠巻きに害児たちを見守り始めた。

騎士竜は、攻撃を打ち消し、相手と似たような、様々な攻撃を繰り出だが、

それら全てをハエに避けられ、新たな攻撃を加えられる。

害児は、スナイパーライフルを持ちながら、車椅子のブーストと、義足

を駆使し、ハエと空中戦を交えながら、攻撃を加えていた。

騎士竜は、防御と攻撃同時にできないが、ハエは避けると同時に攻撃をして

おり、一動作だ。

場所が空中といつともあって、騎士竜は相当苦戦をしていた。

害児の援護がなければ、とうしく押し負けていただろう。

おまけにハエは、なぜか騎士竜の弱点を分かつているようで、執拗に

パソコンを狙つてくる。

最早後ろの城もぼろぼろだ。

「ちつ！恐ろしく頭のいいやつだ。ルル先輩！このままじゃもう持ちませんよ！」

ここまで苦戦したのは、彼らがまだ昔日の国の兵士であつたころ、一緒に

戦つたとき以来だ。

騎士竜はそのときの癖が出てしまい、とうとう本名で害児の名前を呼んでしまつ。

害児は、しばらく沈黙し目をつぶっていたが、やがていった。

「騎士竜。人を狙え！」

「人？ そうか！」

Hの上にちらほら見えている妙な物体が、人であったのかと騎士竜は気づいた。

そこから、一人は上に乗っているタンクを主に狙い、戦いを均等のレベルまで持っていく。

騎士竜は、害児にアイコンタクトを送る。勝負をかけるつもりだ。

騎士竜に飛んでくる真空波を、害児が巧妙な剣術で切り裂き、一瞬騎士竜の盾になる。

盾となつた騎士竜は、その一瞬で風を操り、竜巻を起こして、ハエの動きを制限する。

その風の流れをうまくつかみ、害児が車椅子から竜巻に乗り移り、刀で、ハエに近接戦を挑む。

ハエはそれを嫌がるが、害児はうまく竜巻を使い、片手にバズーカー、

片手に刀を振り回し、近接戦をこなす。

刀を交わした先に、バズーカーをうち動きを制限し、打った反動で、身をひねりながら、バズーカーを放り投げて、それを足場にし、ハエに向かつて、刃を突き立てて突進する。

ハエは真空波を放ち、害児の動きを制限するが、害児はそれにお構いなく突っ込んでいく。

ずたぼろになるが、致命傷はかわしているようだ。害児は迷うこと

もなく、

驚くタンクに向かつて刀を振る。が、当然のようハエにかわされたので、

隠し持つていた、ダイナマイトを引火させる。

さすがのハエもこれには、ダメージを受ける。タンクも一応ロボットなので

これで即死することはない。

一方害児は、騎士竜の竜巻とつまく同化し、被害を最小限に食い止めている

。

ハエが距離を離さうとした先に、騎士竜が待ち構えていた。

騎士竜もまた、自ら作り出した竜巻にのり、ハエと空中戦をする心積もりだつたのだ。

彼にしては常にはない勇気で、捨て身の一撃であった。

「終わりだ！」

気合と共に、手を前に突き出し、密度のある重い空気の塊を、タンクに向か

つて放つ！

「あーひどい！ いたい！」

わめきながら吹き飛ぶタンク。それを追うハエを今度は害児がさえぎる。

(奥義・・雪景色)

実像と虚像、それと刀に振動を伝えさせ、周りの空気の流れと連動し、まるで、空から降つてくる雪が辺りを包むかのような、幻想的な攻撃を繰り出す害児。

幻術、体術、自然条件全てを合わせた、害児の必殺の一撃だつたが、それを難なくかわすハエ。しかしそれで勝負はついていた。

タンクは、すでに相当後方に飛ばされており、今から追うならば時間は相当稼げる。

なにしろ騎士竜の本氣の、一撃だ。空中で方向転換したり、雲に隠れさせた

り、見えにくい位置取りで飛んでいくように計算されている。

城から取り残され、落ちていく一人だが、騎士竜が指をぱちんと鳴らすと、二人の下から、空気の塊が飛んできて、一人の体を吹き飛ばし、城に叩きつけられた。

「へっ・・・。」

そこで害児が倒れる。どうやら相当怪我をしたようだ。

そんな害児に騎士竜は申し訳なさそうに声をかける。

「とんだ伏兵だつたな。つしまでには治療が完成するが・・しかし。

」

「しかしなんだ?」

「この城は、善い人の居城まで持たないよ。  
もつほとんどの城だからね。」

「それを何とかするのが貴様の役目だらう?」

「ひとつちにしる、この城では善い人の居城に、  
ダメージを与えないな・・。

確かに攻撃力の修正は可能だが、害児さんの体を直すほうが先だろ  
う。

ものと違つて人体は纖細だからね。

例えばいくら僕でも、貴方の足を直すことはできないよ。」

害児は、多少考えたがすぐに決断をした。  
体が痛いのが我慢ならなくなってきたのだ。

「・・・まあいいでしょ?」

どうやら善い人さんはよくよく運があるらしい。

その運もこの王者たる害児に栄光の礎になるのだから、  
まったく光榮なことでしょう。」

負け惜しみを言いつつ、何とか威厳だけは保ち、治療に勤むこと  
にした

害児。

そのころの、善い人の国はクーティー真つ最中であったのだが。

## 第四十一幕 穀潰しの逆襲

「私は、マリーさんからよく学んだんだよ。善い事をするには大勢でやるといつてことをね。

だから、穀潰しみたいな悪人も善人にするように努力しないといけない。

それが私の役目なんだよ。」

「へえ！そいつはすごいな！ひやつは！」

穀潰しは、馬鹿な善い人め。まんまと洗脳されていると思った。

結局こいつはただ利用されるだけの人形みたいなものだ。

穀潰しは、ニヤニヤしながら善い人の「高説を聞いている。

「なんだ、その顔は。この善い人を馬鹿にしているのか？」

さすがの善い人も穀潰しがまじめに聞いていないと分かつたようだ。

「はあ～？おい、善い人。てめえ俺の前歩けよ。善人なんだからよ。率先してくれなきゃ困るぜ！」

ドゴン！

得意顔の穀潰しの画面がへこむ。善い人に蹴られたのであった。

「てめえ！なにしやがる！」

穀潰しは意氣込む。

「この外道め。善人が温情をかけていれば、すぐにつけあがる。そんなにぼこぼこにされたいのか！」

「ちつ、まあいい。今のうちに調子に乗つてろよ。

今に俺の真の偉大さが分かるだろうぜ。

善い人、あっちのほうが騒がしい。きっと連中が大暴れにしてるに違いない。」

「分かつたよ。馬鹿な穀潰しなんかより、そっちのほうだ大事だね。

」

（てめえにいわれたくないねえよ。）

善い人と穀潰しはそれぞれの思いを心に浮かべつつ、騒ぎの中心地に向かうと、悠然と立っているガスと、アツチラがいた。

周囲には、何人もの武道家達が転がっている。

アツチラは善い人を見つけると親しげに声をかけてきた。

「いよう！殴り屋！遅かったな！」

それにつられ、ガスも善い人に気づき嘆ぐ。

「とうとう善い人さんがきてしまったのか。  
やはり穀潰しは口だけなのだ。」

「君達か。悪人というのは。」

善い人は二人の顔など覚えていないかのような口ぶりですらあつた。

「悪人が善人を出し抜けるわけがないと、まだ分からぬのか？」

ガスは意外そうに善い人に声をかけた。

「善い人さん、 いつは問答無用に殴りかかつてくるのに、 今回はずいぶんと増長であるな？」

「なんだと？ この善人が暴力を振るうとも思つていいのか！」

アツチラまでも怪訝そうな顔をしだした。

「おいみんな！ 馬鹿だとは思つていたがこいつは本当に馬鹿だぜ！」

そういうて両手を万歳させた。

これは善い人でなくとも怒るだろ。 当然善い人を激怒させるのに十分すぎる行為であつた。

アツチラは善い人を怒らせる天才である。

「もう我慢ならん！」

案の定善い人は激怒し、 アツチラに向かつて真直線に突進する。

アツチラは、 うまくガスの後に隠れ、 驚くガスが、

逃げようとしているところを、善い人に蹴られ、床に転がる。

アツチラに善い人が襲い掛かる直前、覚醒キリコロを携えた穀潰しが、  
善い人に切りかかる。

「ひやつはー！潰れちまえー！」

だが、うまくいくはずもなく、穀潰しはカウンター気味に顎を跳ね上げられ

るだけの結果になった。

うまくやり過ごしたアツチラはすでに、遠くに行ってしまっている  
が、穀潰しはその背後に向かって大喝した。

「おい！なにしてる！早くこの馬鹿をぶつ潰せー！」

そうわめいたとこに、さらにけりの追撃を受け、またもや吹き飛ぶ。

残るはガスだけだったので、穀潰しは必死にガスに話しかけた。

「てめえ！ガス！いい加減にしろ！死んだ振りするな！」

そういうわれて素直に起き上がるガスではない。

穀潰しのその台詞を聞いてむしろますます死んだ振りを決め込むこ  
とに

したらしい。

穀潰しは続いてくる善い人の攻撃を、かわしつつ、新しい対善い人用の技を浴びせる。

「潰れる！サイコシャワー！」

両手から、小さな粒子のような衝撃波を放つ。

ショットガンといえば分かりやすいだろう。善い人と戦う場合近距離戦が多いので、初めて実用的な技を開発したわけだ。

善い人は、体を回転させながら、受け流すが、多少被弾したらしい。穀潰しが善い人に攻撃を直接当てるのは初めてだろう。

善い人は、衝撃に、よろめいたが、すぐさま反撃に移るが、最早キレがない。

「どうした？ 善い人？ さつさと雷を使つたらどうだ？」

穀潰しには軽口を叩く余裕すらあつた。

善い人は無言で反撃を続ける。

穀潰しはここにきて、非常にどうでもいい気分になり考え直した。

（善い人が言つていた花の国は、テンマがいる国だったな。

天崎とかいつたが、やつの偽名だ。

なぜか他の連中は別人だと思ってるみてえだが、  
妙な催眠術は俺にはきかねえぜ。）

穀潰しは、テンマに力を借りた結果、善い人に負けたのだ。

これはテンマの巧妙な策略だろつ。

（あの野郎にこけにされたままじゃ、俺の面子がたたねえぜ！  
この場合善い人を利用して、テンマをぶつ潰さなきゃならね。）

穀潰しは方針を決め、善い人に話しかけた。

「おい、善い人。善人同士で争っている場合じやねえ。  
花の国に攻め込んでテンマをぶつ潰そうぜ！」

「「」の善人が騙されるとでも思ったのか！」

「なにをいつてやがる！俺は善人だぜ！ひやつは！  
早くしないと間に合わなくなるぞ！」

「穀潰し。私は善い人だからね。

今回は多めに見てあげるけど次はないよ。」

「へいへい。」

馬鹿な善い人だ。俺が善人のわけがねえ。と思つたが口には出さない。

善い人は善い人で、穀潰しが善人だなどと思つてないようだ。

「君は悪人だからね。善い人になるために特訓を受けてもううよ。  
大丈夫。君ならやり遂げれるはずだ。」

にこりと笑う善い人に穀潰しは嫌な思い出が甦つた。

似たようなパターンで、過去穀潰しはテンマに、  
地獄のような目に合わされたのだった。

いつの間にかガスが起きており、穀潰しの腕をつかむ。

「女々しいぞ。穀潰し。さあさつといくのだ。」

「てめえガス！裏切ったな！」

「やっぱりガスさんは善人だつたんだね。そうだと思ったよ。」

穀潰しは、ガスと兵士達に連れられ暗い闇へと消えていった。

## 第四十二話外伝 ガスの商売1

「そろそろ、昼間くらいか。」

ガスは暗い穴倉の中にいた。なにやらべつべつと煮えたぎった試験管などが並んでいる。

「誰かかかったようだな。ここもそろそろ潮時か。」

ガスはそういうて荷物をまとめ始める。

「いや・・夜を待つか。」

考え直し、いつでも穴倉から出れる用意だけをし、洞窟の壁に立つたまま、背を預け、目をつぶる。  
じつやら黙らじい。

彼は追われている。何故追われているのか。

彼は幻といわれている島国出身であり、そこのが族であった。

いわゆる武士といつぱりである。彼は夢の中で過去を追憶していた。  
「なぜ、剣のみで戦わない？薬品や火薬に頼った勝利がなんになる  
といつのだ？」

師にそう問われる。

「勝てばいいのだ。我輩の流派は、ガ流である。ガ流とは、  
ガス天下無双流のことなのだ。」

ガスはそう返答した。ここは道場の中、周りに血相を変えた門下生が  
ガスの周りを囲んでいる。

ガスは以前から不満だった。

強くなると証して単なる剣技を磨いているだけの状況が  
我慢ならなかつたのだ。

そのような形だけのお遊戯では、ガスの強さへの探究心は満たされ  
なかつた。

ガスは騒ぎ立てる門下生をまるで無視をしている。

師はみなを制して、自ら木刀を持った。

「お主は破門だ。しかしながら我が流派は門外不出。  
ここでの腕を折らねばなるまい。」

しかしガスの腕は、一流だ。手放すのは惜しいと師は考えた。

だから、手痛くお灸を据えた上、反省させようといつ心積もりであ  
つた。

「カマキリ流は、無抵抗の相手をぼこぼこにするような、恥知らずな  
流派であったか。

我輩はそのような流派に習つて残念なことであつたー。」

ガスは挑発するよつた声で師の様子を伺う。

「わしに勝てると思うなら、やつてみるがいい。」

その師の声で、ガスにも木刀が渡された。

（剣を持つのはこれで最後かもしけないな。）

ガスはそう考えた。腕には自信がある。門出の記念に一二刀師を負かすのもよいのではないか。とそつかんがえた。

二人は礼をし、激しい攻防が始まる。

彼らの流派一ノ刀流だ。

やがてガスが押され始め、門下生達はホッとした空気をかもし出す。

（何か仕掛けてくるな。）

ガスの師はそう考えた。

唐突であった。ガスの師は突然床にばたりと倒れ、ガスはその頭を面倒くさそうに、軽く小突く。

「一本であつたか？」

たちまち辺りに怒号が満ちた。

「貴様！」

「ふざけるな！」

「生きて返すな！あの卑怯者を！」

ガスは彼らの技が児戯に見えた。

ガスはライターを燃やし、ほおり投げる。

それだけの動作で道場は爆発を起こし、爆発に紛れガスは道場から逃れる。

「我輩の野望をかなえるためにはあの島は小さすぎた。」

ガスは胸は野望がいっぱいであった。

所詮、小鳥に鳳の気持ちは分からぬであろう。

ガスは高笑いをし、慌てふためく道場の連中を眺めながら、船で出国した。

薄ら笑い、目が覚める。

自分が夢で大笑いしていたのを思い出し、そこでもまたくすりと笑つた。

「まったく、我輩以外の人間はまるで我輩のために存在してゐるようなものだ。」

非常に不遜な考へであつた。彼は門外不出の剣術を習つたため、

今でも刺客に襲われているのだ。

ガスが、洞窟の壁を押すと、はしごが下りてくる、荷物を全て運び、上にあるプレオに積み込む、プレオにはステルスの布がかぶさっている。

ステルスの布を取り払い、プレオに乗つて次の町を目指す。  
ここは日の国、つい最近まで、ルーファといつ魔人が、のさばつていた国だ。

最近はまるで、噂を聞かないが、戦死でもしたのだろうか。

さしものガスも、ルーファの情報を得るのは骨が折れた。

そんなおり、ガスが酒を飲んでいると、ガスの横にどかりと座る人物がいた。

「おいっ！マスター！俺にも酒をくれー！支払いは隣にいるうだつのあがらねえ鎧男に支払わせろー！」

穀潰しだった。

「珍しいことなのだ。セリルはどうした？」

「ああ・・・まあなんでもねえよ。」

「喧嘩でもしたか。」

「まあそんなどころだ。」

「そうか。しかしセリルを一人で残しておいたら狙われやしないか？」

穀漬しあるが似たような事情があり、組織から追われている。

穀漬しがというよりは、穀漬しと一緒にいるセリルが問題なのだが。

「狙われるかもしだねえが・・・。」

「ふむ。」

それから少し沈黙が続き、思い出したかのように穀漬しがガスに話しかけた。

「ところで、頼まれていた新大陸のことだが。」

「ああ・・・。そうであるな。どうせたいしたことはないだろう?」

「いや、行方不明だつた、ルーファと似たような人物、おそらく本人だろうが、そいつが何か大きなことをしようとしているみたいだぜ。」

ルーファという単語で、周りの客が何人か反応を示す。

二人はそれらを無視し話を続ける。

「一風吹きそうであるな・・・。」

そういうで、しばりくもくと酒を飲むガスと穀漬し。

「ああそうだ。俺は名前を変えることにした。今後穀漬しと読んでくれ。」

「ああ・・・。穀漬し。一風きそつであるが、ルーファー」ときのやつばらでは、高が知れているであろうな。  
我輩が一風吹かせる。これはチャンスだ。」

ガスはこの国での活動に限界を感じていた。

確かに彼はそれなりの地位を簡単に手に入れたが、これ以上の地位を手に入れるためには、新しい国の王の右腕くらいにならなければならぬ。

ルーファなどガスからすれば赤子のようなものであったが、何とかお膳立てして、ほじほどのものにしようとした。

「おい、あんたら。今の話は本当か?」

周りにいた客が、ガスたちに話しかける。

「本當かどうか知りたいなら、現場に行つてみるといい。  
どうだ。新しい国と優秀な王の下で一花咲かせるというのは?」

「うーむ・・・。ともかくルーファ様のこととは氣になる。」

密たちは、何事か相談しあい、真偽を確かめるべく、店を出て行く。

「リリには、鬭争しかない。我輩の国と基本的にはおんなじなのだ。」

かといって新大陸には平穏しかない。

それは我輩にとつて退屈なことなのだ。

秩序しかないのだ。この世界は。

自由も闘争もある。新しい創造性を持つた無秩序な国。

我輩はそういう国を作る。

その旗印としてルーファはまあ合格点である。

「

穀潰しはそれを聞いてにやりと笑った。

「面白そうだな。俺も一口乗るぜ。実際俺も今の世界にはうんざりしてた  
ところだ。」

「穀潰しは宣伝を頼む。

秩序に従えないアウトローたちには伝があるだらう。

我輩は、早速現地に出向く。

そうであるな・・・商売、それを発展させる国にじよへ。

今の時代忘れ去れていふことであるが、そこに刺激とロマンがある。

「

そういうて、ガスは立ち上がつた。

「我輩はガ流である!」

ガスと穀潰しが外に出てみると、店の周りに日本の國の兵士達が囲んでいた。

「こいつらか。妄言を吐いて、わが国の士氣を落とそつとしている

聞者

とこうのは。」

将軍がニヤニヤ笑いながら、ガスと穀潰しを眺める。

「いつたい、貴殿らはどつこう料簡で、わが国の妨害をしようとしたのだ？」

将軍はガスたちにそつ尋ねた。

ガスはこじかとばかり、大演説を始める。

「ただ戦うだけとはなんともつまらないことである。  
戦うなら、より強さ、より力にあこがれるのは当然ではないか。  
その力とは技術だけではあるまい。  
そこにこの大陸の閉鎖性があるのだ。 . . . . 」

将軍は、ガスのでかい声に顔をしかめつつ、後ろにいる兵士達に号令した。

「それ！あいつらを思い知らせてやれ！」

おう！とばかりに兵士は、ガスたちに襲い掛かる。

「なにをするか！我輩が話している途中であるぞ！つわづやめてくれー！

」

ガスがたこ殴りにされるのを見て、穀潰しは非難の声を上げる。

「ああガス！てめえらなにしゃがるー！」

そういう穀潰しにも、火の粉がかかり、ぼこぼこされていぐ。

「オ、オレは関係ねえー！ひいー！たすけてくれー！」

そこでガスはせっかくためた、財産を没収され、ほつほつの態で国を追い出された。

後に害児に財産を没収されたこともあったが、そのときは強かに、財産の大部分を隠していたのだ。  
いわゆる隠し財産だが、このときはそんな知恵もなく、本当に全財産を没収されてしまったのだった。

「お、おのれ・・・！」

ガスは苦痛に満ちた顔で、去っていく兵士達をにらんだ。

「見てろ、ガス。あいつら思い知らせてやるぜー！」

その後口の国に、サイキックカーのテロリストが現れたらしが、騎士竜の遠隔攻撃により、撃退されたという。

ガスは、一人取り残されて、とぼとぼとした足取りで、ルーファの国を目指した。

まるで乞食のような格好であった。

ルーファはここでは害児とな乗っているらしい。  
ガスにとつて名前などどうでもよかつた。

## 第四十四幕 英雄会談

「善い人と、ガスは、善い人の部屋まで戻った。

ガスは、善い人の机にあつた漫画をどかすと、地図を持ってきて広げた。

持っていた扇子を開け閉めしながら、頭をぽんぽんと叩いた後、善い人に話しかけた。

「さて、善い人君。ここで一つ問題がある。」

「なにかな？ガスさん。」

「害児が裏切つた。裏切り者は始末しなければいけない。」

善い人は、考えた。害児とはいつたい誰だつたらうと。

いぶかしげな顔をしている善い人の様子を見て、ガスはフォローを入れた。

「ああ・・害児といふやつは、昔善い人君を世話をしていたやつであつたのだが、とうとう本性を見せ、善い人君を裏切つた逆賊だ。」

「そうか・・確かに善い人の振りをしている人が実は悪人だつたというのは漫画ではよくあることだね。」

「逆賊を征伐しなければならない。」

そういうて、ガスは地図の一点を扇で指し示す。

「逆賊は空中より我がほうに、奇襲をかける予定であったが、我が軍の防衛機能により、空中要塞は墜落し、今は徒歩で前進しているらしい。

逆賊の親王、害児が、負傷したらしくその動きはゆっくりしたものだ。

ふざけたものである。

ここは我輩らの国であるのに、まるで自分の国であるか様な振る舞い、

言語道断なのだ。」

善い人は、ほとんど言葉を聞いておらず、ガスから音がしなくなつた。

と思い自分の意見を言った。

「私は、花の国を改心させないといけない。」

それを聞いてガスは苦虫を潰したような顔になる。

「事の重大さが分かつていいようだな。善い人君は、害児とその腰ぎんちやくの騎士竜は、頭は悪いがなかなかの手練。甘く見るとえらい目にあつ・・・。」

そのとき、善い人の机の上にあつた花瓶に刺さっていた花の花びらが散り、

部屋一面に花びらが散らばった後、人型に収縮しマリーが現れる。

「なら私が行つて確かめましょ。なに大丈夫ですよ。あの害児さんという方は相當なお馬鹿さんなようです。」

ガスは、ちらりとマリーのほうを見た後、善い人の顔色を伺つた。

「その人が悪人なら改心させないといけない。」

「ふふ・。では行つてきます。」

マリーの体は再び、花びらとなつて散る。

すっかりマリーがいなくなつた後、ガスは善い人に向かつて再び口を開く。

「実際のところ、花植えのマリーが行つたところで、逆賊にはかなわないだろう。

泣きつ面で帰つてくるのが落ちである。」

「善人は悪人には屈しないよ。」

「善い人君もいつてあげたらどうか?」

「私は善いことに忙しい。」

何もしていなじように見える。

「そうであるか・。そついえば我輩も何かとやることがあった。」

そういうて、善い人の部屋から退出した後、ガスは城の物資を、プレオに積み込み、兵士達からいぶかしげな目で見られつつも、自分の店まで運び込む作業に精を出した。

「いい汗を書く」とあるな。」

しかし何か不思議なことがおきた。プレオに積んだ積荷がどんどんへつていつているのだ。

「妙だ。」

ガスは嫌な予感がした。

ガスでなくとも誰でも妙と思つし嫌な予感がするだらば。  
「相変わらず泥棒ですか。貴方は商売と泥棒と一緒にしているのでは  
ないですか?」

唐突に話しかけてきたのは、まだ遠くにいるはずの害児であった。

ガスはゆっくりを周りを見渡した、ここは城外であったので、視界  
はきく。

「うやら害児の他、誰もいないよつだ。

念のためレーダーも見たが、やはり害児以外誰もいないらしい。

（といひことは例の男もいないといふことか・・。）

ガスはとつたに心でそう計算した。

「心外であるな。害児さん。これは我輩の正統な請求であつて、  
泥棒行為などと一緒にしてもらつては困る。」

害児にとつては、どうでもいいことであった。本題は一つだ。

「・・・善い人さんのところに案内してください。」

「何故我輩が？勝手に行けばよからぬ。」

あまりのこゝよつて、いつものように怒ることを忘れ、  
害児は質問した。

「ずいぶんと気が大きいよつで。ガスさんにしては珍しい勇氣ですね。」

「それはそうであろう。我輩は善い人君の信頼を得て、軍師となつたし、  
いまさら逆賊害児などになにを恐れることがあるだろうか。  
害児さん周りを見てみる。貴方に味方など一人もいないのであるぞ  
？」

害児はそういわれ、周りを見た。確かに味方はいない。

「ではどうあつても案内していただけないと、  
何か勘違いしてませんか。ガスさん。

貴方は私に依頼されて善い人さんのサポートをしていくのですよ。」

「なるほど・・。確かにそれもそうであつたな。」

ガスは遠い昔を思い出すような顔をした。

ガスは姿勢を正し一礼した。

「失礼した。害児さん。善い人さんはこちらにいる。ついてきてく  
れ。」

ガスは、害児を連れ、善い人の部屋まで先導した。

害児はガスと世間話をする。

「そういえば、穀漬しさんはどうしました？」

「穀漬しはダメだ。」

「ダメといいますと？」

「物の役に立たないということであるよ。  
やつはどうも世渡りが下手であるからな。」

「当然でしょう。穀漬しさんはすぐへこへこする  
貴方と違つて誇り高く選ばれた人物なのです。」

ガスは害児の頭の具合を疑つたが、今に始まつたことではない。

「へえ、左様でござつたか。ああ、ここだな。善い人君。客を連れ  
てきた。  
入らせていただくぞ。」

そういうて部屋に入つていく。

「善い人君。こちらがさつき話題に上がつた逆賊の害児だ。」

「ガスさん。逆賊とはなんのことです？」

「ああ貴方が悪人の親玉の害児とかいう人か。  
確かに悪そう顔をしているね。」

「いい人は威圧しつつ近づくが、害児は負けじと応戦する。

「なんということか！私が今まで貴方にした数々の恩義を全て忘れた  
ということですか？」

「貴方のために私がどれほど尽くしたことか！」

その必死な有様を見て、いい人は最初の考えを変えた。

「どうやら貴方はいい人のようだ。」

「当たり前でしょう。」

確かに私も最初は今回の貴方の行いには腹が立ちました。

その思い上がりを正そうとも思いましたが、貴方と私と仲だ。  
そう邪険にすることもないと思い、単独でここまで来たのです。」

「そうだったんだね。」

「さつそくですが、私の國を返していただきたい。  
いいですか。今まで私は貴方の無理難題をいくつもかなえてきました。  
貴方も私のことを、

たつた一つくらいは聞いてくれてもいいのではないですか？」

「いい人は眉毛をぴくんと跳ね上げ、不機嫌そうな顔で一人に近づき  
つつ  
話す。

「ああ貴方が悪人の親玉の害児とかいう人か。  
確かに悪そう顔をしているね。」

「私は善いことができればそれでいいよ。」

「では」の国を私に譲るということですか？」

「いや、私は花の国を改心させないといけない。  
それが善人の使命だからね。」

そこで害児はしばらく考える。

ガスは一人の会話を特に気にする風でもなく、  
何事かつぶやきながら、算盤をはじいている。

「では、花の国が改心すればいいのですね？」

「それは私が直接、善人魂を叩き込まないといけない。」

「なるほど。それは確かに。いいでしょ。私に策があります。」

## 第四十五幕 日の国復活

善い人は、まるで害児の話を聞いてないかのよう、「机の上にある、何か手のひらに収まるくらいのサイズの、丸い鉄のボールのようなものを無心に転がしている。

「害児さん。何か善い考えがあるの?」

「そうです。策といつのは、善い人さんが花の国に乗り込み、私が留守を守る。」うることで、善い人は後顧の憂いをなくして、決戦に挑めるといふことです。

安心してください。この城は私が絶対守りぬきます

「それは善いことだね。じゃあすぐやろう。」

「待つてください。さすがに善い人さん一人ではまずい。穀潰しさんを護衛としてつけてあげましょう。

それにしてもあの人はこの大事なときについたいなにをしてるのでしょう。

肝心なときにつかないのです。」

「ああ穀潰しか。」

善い人が、手をぽんぽんと叩くと、二口二口顔の秘書がやつてくる。

「最下級の善人をここにつれてきてくれないかな。」

「分かった。」

「二コニコ顔の秘書は何がおかしいのか、始終二コニコしながら対応し、去っていく。

害児はその二コニコ顔に内心むかつ腹が立つており、善い人に詰め寄つた。

「なんですか？あの馬鹿は。私はああいう幸せそうな馬鹿を見てると、見せしめに思い知らせたくなつてくるのですよ。」

同感だらうといふ表情を善い人に向ける。

善い人は、相変わらず感心なさげに鉄のボールを手で転がしていた。

「なかなかの善人だよ。私には及ばないけどね。」

害児は驚いた顔をした。

「ええーーー！ そうでしょうともーーーしかしどうです？ 二の私は？」

「どうこりう」と？

「この私は大善人でしょう？ の人と比べてどちらが善人なのです？」

挑むように善い人をにらみつけながら言い放つ害児。

「この善い人から比べたら、みんな似たようなものだよ。私より善い人なんていないんだからね。」

害児が、またもや反論しようとしたとき、扉が開き、入ってきた、人間の顔を見て、害児は部屋の隅まで逃げ出した。

善い人は、もちろんそういう害児の異様な行動もスルーしている。

「ほりつれてきたよ。」

陽気な秘書と共に陰気な顔の二人の男が姿を現す。

「さてはて、善い人様。私にいったい何の用があるのでしょうか。ところで、あのすみに縮こまっているのは我が娘では？」

「この人はつれてこなくていいよ。」

「分かったよ。」

「いやあの・・・善い人様少しお待ちを。」

将軍は、部屋の隅を凝視しつつ退出していく。

穀潰しが面倒くさそうに口を開く。

「それで？この俺に何か用でもあるのか？王様気取りの善い人様よお？」

「穀潰しか。君は相変わらず悪人だね。」

「けつ！俺はこの程度じゃ屈しねえぜ！誰が善人なんてなるかよ！」

害児がホフク前進しながら、善い人達に捕まり、善い人の後ろに姿を隠しながら、穀潰しに命令する。

「いいですか。穀潰しさん。貴方にもチャンスをあげます。善い人さんと一緒に花の国を攻めるのです。」

「何花の国?」

穀潰しはしばらく何事考え、やがて口を開く。

「ああいいぜ。いつてやうづじやねえか。」

「さすが穀潰しさんです。貴方は者の通りがよくわかつてらつしやる。」

「せつせといくぞ。善い人。」

善い人はつなずき、壁をけりでぶち壊して、外へ出た後ダッシュをし、たちまち消えていった。

穀潰しもその後に続き、しばらく進んだ後、ランダムスフィアを城に放ち鬱憤晴らしをした。

城には害児だけが残った。

「さて・・・と。これで邪魔なやつはいなくなつたか。」

害児はにんまりと笑つた。

あのにやけた顔を秘書をどうしてくれようかと考えてこるよつだ。

「どうするつもりなのだ？害児さん。」

「ああガスさん。貴方いたんですか。」

「まあ害児さんのことだ。なんとなく分からなくもないが。」

「何が分からなくもないのです？」

下民無勢が、大層な口を聞かないでいただきたい。」

「……害児さん。ところあの男は一緒にではないのか？」

「あの男？騎士竜のことですか？」

・・・へえ。貴方のような恥知らずな人間でも怖いものがあるとはね。

」

恥知らずとはいよいもいつたりだ。さすがのガスも我慢の限度があつた。

「害児さん。我輩にも限度といつものがありますぞ。」

「ふつ。〔冗談です。仲良くしましょ。」

なあに私だつてこの国を一人占めにしようなんて思つてませんよ。元々私はこの国を出た身。

ただ・・やはり故郷がなくなるといつのはさびしいものがありましてね。

ただそれだけの話なのですよ。」

「やう・・。」

ガスはいいよどみ、改めて台詞を言いなおす。

「やう願いたいものであるな。」

「おや？通り雨ですかね？」

害児は、立ち上がり、善い人が開けていった穴から外の様子を見る。いつの間にか曇り空になつていて、たちまち雨が降り、雷鳴が降り注ぐ。

「妙な天氣ですね。まるで・・・。」

「・・・。」

「やうそ、う騎士竜ならもつ到着して、るでしょ。やつひ、久々に故郷に帰つてきましたからね。いろいろあるつてことですよ。それで急遽私だけが先にこの城にやつてきたといつことです。」

そういうて、

部屋の外に出て行こうとする害児の背中に向かつてガスは声をかけ る。

「害児さん。善い人君たちを放つておいでよいのであるか？」

その声に立ち止まり、振り向くともなく害児はこたえる。

「はて？そういう貴方はどうするのです？」

まあ今後のことについて話し合いましょう。貴方もきてください。」

とりあえずは、ガスは黙つて害児についていくことにした。

下に降りてみると、見慣れた顔の黒服たちと騎士竜が整列して、害児を待っていた。

「さすが首領です！ まんまと善い人様から国を奪い返しましたな！」  
「どうやら妙な情報が出回っているらしい。とはいえた事実ではあったが。

「ええ。あなた達はこの狂った現状を収集してください。  
ただし「あの男」については、慎重に事を進めておくよ！」

「ははっ！」

「騎士竜！ お前は私と一緒に来い！」

騎士竜は、明らかに不満げな顔で害児についていった。

害児とガスと騎士竜は、小さな部屋に入り密談をする。

開口一番に騎士竜は怒りの言葉を発した。

ガスはその言葉を聴いてニヤニヤしている。

「そういうな。私だつて我慢しているのだ。

なあに用が済めば放り投げてしまえばいいだけのこと。」

「まつたくそのとおりであるな。」

ガスがすかさず相槌を打ち、その言葉に騎士竜はそっぽを向く。

「第一、聞けば汚い裏切りで国を奪い返したそりじゃないか。  
見苦しい。」

こんなやつと付き合つていては、貴方の品位まで下がつてしまつ。  
もちろん僕もだ。そうだろう?」

「まあまあ。今しばらくは」の「」虫の助けも必要とこり」とです。

「どうも騎士竜なる人間は、子供で困ることである。  
我々は商人であるのだから、もつと大人になつてもらわなくてはな。」

ふふんと鼻先で笑いながら、ガスは答える。

その言葉に我慢ならぬといった風情で騎士竜は椅子を蹴りつつ席を立つ。

そして、ガスを指差しながら、怒声を発する。

「ふざけるな! いつこの僕が商人になつた? 言つてみろ!」

ガスはやれやれといった感じで相手にしない。

「何だその態度は!」

「おい、騎士竜。いい加減にしろ。」

害児が騎士竜をたしなめ、騎士竜は少し冷静になつたが、考えは変わらなかつた。

「分かつたよ。確かに僕は貴方に國に帰つてきてほしいと思つていた。

だが、こんな品位の下がるやり方はごめんだね。  
僕はここで失礼させていただくよ。」

騎士竜は部屋から出て行く。

「まあいな・・。」

残された害児は思案顔だ。ガスは仕方ないのでフォローの言葉をかける。

「追いかけないのであるか?」

「はつきりいつて、純粹な戦闘能力ではやつのが私より上だ。」

追いかけないのか聞いたのに、どうして戦うことが前提なのだろうか。

害児のトンチンカンな思考は、王者の貫禄であり、常人の理解できるところではない。

## 第四十六幕 無能な王者

はつきりいつて取り残された善人たちは哀れだ。

これからどうなるのだろうと、しきりに顔を見合わせているが、どうにかなるものでもない。善い人がいなくなつてしまえば、彼らなど塵芥に等しいのだから。

これぞまさに、盛者必衰の理といつもの。

利口なマリー・アッチラはこの現状を見て、早々にとんずらしたが、間の抜けている多くの一般善人たちは、とんずらするという考えすら、

思いつかないらしい。

おうおうしていふといふに、騎士竜がやつてきた。

「みんなー安心しろー」この国はまだ善い人様のものだ！

しかし善人たちの反応は冷めたものだった。

「誰だ？ あいつは？ どの階級の人間だ？」

誰なのだろうとさっぱりわからないが、そんな反応とは対極に、元日の國の兵士達はどよめいた。

「騎士竜だ！ やつはやる気だぞ！」

「騎士竜こそ我等が王だ！ 最強の武術者だ！」

ついに騎士竜がやる気になつたといつことで、  
日の国の兵士達は、いつになく興奮した。

「そりいえば、ルーファ様も戻ってきたと聞くが・・・？」

「まさか前面衝突か？どちらにつけばいいんだ？」

「かつてのルーファ様なら間違いはなかつたが、今となつては騎士竜  
だろう。大体ルーファ様は裏切り者でもある・・・」

「しかし、善い人がどうにかとかいつてるが。」

「問題ない。そんな馬鹿のことなどすぐ忘れる。」

どうやら、元日の国の兵士達は、大半が騎士竜につく」とこしたよ  
うだ。

善人たちもその様子を見て、騎士竜についていくことになつた。

騎士竜の氣炎が上がる一方で、無為無策の無能な王者、害児様は、  
その忠実な部下、黒服にまで裏切り物が出る始末であり、  
日に日に、勢力が小さくなつていった。

「なかなか、芳しくないことであるな。」

ガスは、刀を打ちながら害児に話しかける。

「ええ。どうやら万策尽きたようです。  
ところで貴方は裏切らないのですか？」

「ああ・・。我輩としては、もつ十分儲けさせてもらひたし、  
「の國のijとなぞ、興味ないからな。」

「その刀は、ijの國の鉄で作つてゐるのですか?」

「こや、鑄の國からとつてきたものなのだ。」

「なる程だ・・。」

「せんじよつれからいわがあるのか?」

「ぢりすむじは・・。」

あまりの馬鹿つぱりに、ガスは顔そむけた。

「いや・・なんでもない。」

「なんですか?殴られる前にしゃべつたほうが身の為ですよ。」

ガスは害児の理不尽な言葉にためこをつめ、再び口を開く。

「・・正直ijのままでせ、ijの國を廻に出されてしまつのが落ちではないのか?」

何故害児さんは、何もせずにとしこるのか我輩には疑問である  
が。」

「確かに貴方の言つことに一理あります。」

何故もつと早く言わなかつたのです?ijのことはいられない。」

害児が突然慌しく外出しようとしているので、ガスはたずねた。

「何か策でも？」

「「」の國の王者は私です。騎士竜に國を返してもいいのです。」

「へえ・・・。さようだいざつたか。なら好きにしたらよいことである。」

「待てよ。考へてみれば先方から出向くのが道理ですね。この私が自ら出向くということでは、王者の權威が軽くなってしまいます。

分かりました。使いを出しましょ。」

使いを出して、三回たつたが、何も反応がない。

騎士竜はそんなどこりではなかつたが、害児など最早じつでもいい存在でもあつた。

なぜか分からぬが、騎士竜派の人間達が、善い人のことをしきりに、馬鹿にし、馬鹿人などといい始めたからだ。

騎士竜はその状況を収集するのに必死だった。

とはいへ、内心では騎士竜も善い人は馬鹿だと思つてはいたのだが。

そして、騎士竜は、しきりに、元つまり將軍への就任を側近に進められるようになつていた。

阿呆なことに、善人たちも、善い人のことを馬鹿人と呼び、騎士竜に媚を売るしまつで、面の皮が厚いとはこのことだった。

騎士竜は、それについて善人たちをどがめたことがあった。

「善い人様は君達の仲間じやないのか。僕はそうやつてすぐに裏切る人間は信用できないが、どうだ？」

「いや、俺たちは散々馬鹿人にぼこられていたから、あんなやつは仲間ではない。

やつの力が強かつたから仕方なく今まで従つていただけだ。」

「なら君達は善い人様がここに帰つてきても僕の味方をするのか？」

「当然だ。俺たちの運命はすでに貴方にたくしてあるのだ。」

「ならもう何もいわないよ。でも僕が将軍職につくとしたら、それは正式に善い人から受け継いだときだけだ。」

最初騎士竜にはそもそもそんな野心はなかつたはずだが、周りの連中が

あまりに騒ぐので、引っ込みがつかなくなってきたのだ。

ちなみに、害児の父親、元將軍は、牢屋に幽閉されている。

善人たちは、兵士達に訓練を受けており、元々努力家ぞろいの善人たちは、めきめきと強くなっているのであった。

勢力も日に日に大きくなつていつてている。

害児はますます孤立無援だ。周りの部下も2・3人になってしまった。

最早、害児？ああそんな人もいたかという状態で、誰からも相手にされなかつた。

使いを出しても、一向に返事が返つてこないが、害児はもうそんなこと忘れたよつた顔をしている。

ガスは、その様子にあきれ返つたが、ある意味大物だと思った。

しかし、いつまでもこんなところにいても仕方がない。

ガスは、害児に文句を言った。

「害児さん！いつまでもこんなところでがんばつても無駄である！貴方にはまだそんなことが分からぬのか！」

「なにをいきなりいきり立つているのです？」

「いきりたりたくもなるものだ。何しろこちらの勢力は、我輩らを入れても

、もう5人ではないか。それに比べて騎士竜の勢力はもう磐石なのだから、まったく意味がないではないか。」

「ほほほ。なるほど。確かに貴方は何も分かっていないようだ。」

「どうやら何か手があるようではあるが、さてお手並み拝見したいもので  
あるな。」

「まあ見てなさい。こきますよ。みなさん。これから演説に向かい  
ます！」

「ははっ・・・。」

「演説？今頃演説？何か手があるのだと思いたいが、いかんせん害児  
の頭では・・・。」

「なにをしてるのです？ガスさん。早くきなさい。」

害児とガス、そして三人の黒服たちは、町へ繰り出した。

もう害児たちを見て誰もなんとも思わない。  
ただ通り過ぎていぐのみであった。

ガスはのっけから不安を感じた。それは黒服たちも同じだったろう。

「さあー！」私のすばらしい演説を聞きなさい！  
この国はこの私害児こそが収めるにふさわしいのです！  
これぞ王者の力！この私に勝てるものなどおりません！

何だあの馬鹿は？といわんばかりの表情で人びとは通り過ぎていぐ。

指を指されたり、ひそひそ話をされたりしている。

ガスはその様子を見ていたたまれなくなつた。

「 もういい！ もういいんだ！ 審児さん！」

「 何がもうこいのです？」 れからよくなるといひだといふの。」

「 ！」の状況を見て何も感じないのか？」

「 じついつ意味です？ ガスさんあまり調子に乗らないでいただきたい。」

「 はあ？」 つや もうだめだ。」

「 ダメとは何事です。」

すわ喧嘩となるといふで、黒服たちもそれを眺めているばかりであったが、

そんな彼らに話しかける一人の男がいた。

「 審児さんとガスさんですね？」

「 なんですか？ あなたは？」

「 主が呼んでおつます。」

「 ！」の私を呼び出しつゝ、なかなかの人物と見ました。  
あガスさん。ぼやぼやせずしつかりついてくるのですよ。」

「は、はあ・・。」

害児たちが、男に連れられて町外れまで歩いていくと、曲がりくねつた妙な塔に出くわす。

「はて? どいかでみたよ'つな・・。」

害児はしきりに首をかしげている。

「ひねりです。」

塔は、高く天まで届くと思われた。

「はたしていつになつたらつぐのやら・・。」

車椅子で、階段を上るのも大変だが、それよりも大変なのは、重装備のガスだ。

ふつふつこにながら、くじくじと足を運んでいく。

害児は、ガスを励ました。

「ああ、あと少しですよよ。頑張りましょ'づ。」

「そんな根拠はどいにもないではないか!」

ガスは切れ氣味であった。どうして自分がこんなことしなければならない

のだとこいつやるせない感情があつたのだ。

「ならここで休みましょう。もうすぐ夜になります。」

男は、とりなし顔で害児の判断を仰いだ。

その言葉を聞き、ガスがわめきだし、その場で座り込んでしまった。

「ああーまたくそひじりもんのものであるな！我輩はもう疲れた  
ー。」

「一九・。」これは一氣にいき畢しよべ。これぞ王者の行進。

「いい加減にしてくれ！害虫さん！」

たゞたゞ5人で玉簪も何もあつたものではない！

量方に手を繰り一いわの力いしが酒等一いわ

「王都に終わりなどありません。わあこれかよ。」

わめきちらし、あくまで休憩しようとするガスを、黒服たちが蹴飛ばし、

## 第四十七幕　害児逃亡

しばらくたつて、またガスがぶーぶーいいはじめる。

「しかし害児さん。

何故我輩が落ちぶれた

貴方に付き合わなくてはならないのか。

はつきりした返事を聞きたいものであるが・・?」

「それは明確でしょ。つまり貴方は私と契約をして、さらに、宝石までもらつた以上、商人として当然のことではありますか。ぐずぐずいわす黙つてついてくればいいのです。」

「いや、一つ言わせてもらえば、それは善い人さんのフォローをする、

という契約であつて、こんな馬鹿げた階段を上ることではない。確かに、あなた達はよからう。

しかし我輩を見よ。

このような重装備で階段を上るのは拷問に等しいではないか。」

一同まじまじとガスを見る。

小手に脛当て、鎧にヘルメット、確かにガスは重そうだが、あまり疲れているように見えない。

というよりは、ガスが鉄製のフルフェイスつけており、表情がよく分からぬといふ点があつた。

害児は、くすつと笑つて肩をくすめただけで何も言わなかつた。

ガスは怒って抗議しようとするところ、黒服が横から口を出した。

「ぐわぐわうるさいやつだー首領ー！」こいつやつらがこのせんか？」

「まあ、こりでしょ」。『三月は三月なつの』の無い分があるのです

卷之三

二。離婚の基礎知識

北山集卷之三

害児は黒服に話しかけた。

「寒いですね。」

「御意。」

御意ですまないのがガスである。

「ヒツヒツ屋上まで来た！どう責任をとるつもりなのか！」

ガスはあまりのことに激怒し、男に詰め寄つた。

「ね〜る、ひなた〜。まだ階段があるじゃん。」

なるほどよく見えると、つづすらとだが、透明の階段のあとが見える。

「ここの上まだ登るのであるか？しかも見る！

このままだと、踏み外したら真っ逆さまに落ちてしまうではないか

！」

「ガスさん、いい加減になさい。

そんなことは口に出わずとも明白なことではありますか。  
あまりぐだぐだしつここと、また財産を没収しますよ。」

「ふん！今の貴様にそんな権力があるものか！」

「なに？」

すわ喧嘩…と思ひきや、男が仲裁に入る。

「もうすぐです。上のほうに扉が見えるはずです。」

「見えん！」

ガスは激昂して、男の胸倉をつかむ。

害児は目線を流し、黒服に合図をすると、黒服はガスは男から引き離す。

「なにをするか！我輩をガストラゲタと知つてのことか！  
離せ！はなさんかあ！」

害児は、男に頭を下げた。

「見苦しいところをお見せしました。」

「いえいえ、まあここから先は貴方一人で結構です。」

結構とはご挨拶な話であつて、

それならガスはなんのためにつれてこられたのか、分からぬ。

彼が激昂するのも無理からぬ話で、結局いやみなだけなのだ。

ともかく男を害児は、天空に張り付いてる扉を開け中に入つていいく。

中では優雅な貴婦人が、ティーを飲んでいた。

つまりこの人が、害児の母親である、ルシア・ルーファスであった。

ちなみにこの人、目が見えない。

害児の足が將軍によつてきられたときに、夫への当つけのために、自分の目を潰したのであつた。

それ以降姿をくらましている。

「おや？」などとおられたのですか。今まで探していたのですよ。」

害児はそついつて、車椅子をおり、用意されたいた洋椅子に腰掛け  
る。

害児は、机を指でとんとん叩きながら尋ねる。

「セレ、それで、この私に何かよつでもあるのですか？母上。」

「じゅりゅり、つこてきた黒服は一名ばかりなよつで。」

「ああ・・そんなことわけはない」とです。

つまり、忠臣精銳が残つた。ただそれだけのことではあつませんか。

」

「忠臣？精銳？おほほほ、面白いことをおっしゃいますのね。」

害児は、とたんいらいらしだす。

「何が言いたいのです？」

「貴方の元々望んだ」とは何であつたのでしょうか？

権力の座につくことですか？違つでしょ。う。

貴方は、平穏な暮らしを求めた。そうではないですか？

「そつどもあるといえなくもないですが、それがどうかしたのですか？」

「もう貴方は、この大陸から手を引くべきですわね。新大陸にお帰りなさい。

そして、今度こそ全うな生活をされるといよいですわ。」

「話はそれだけですか？なら私はもう帰らせていただきます。」

害児は席を立ち、車椅子に乗り移ると、もう用はないとばかりに、

足早に部屋をでていった。

「ふん。」この私、害児の器も測れないとは、母上も老いた。」

害児は、一人で塔から飛び降りていつたが、

それを曰ざとくガスが発見し、黒服たちにわめき散らした。

「それ見る！あいつは裏切りやがつた！お前達がとんまなせいだ！まんまと出し抜かれたワイ！今に見てオレ！」

「なんだと！ふざけるな！この商人め！」

「俺たちを愚弄するか！」

黒服たちが例によつてガスをぼうそくとした瞬間崩れ落ちる。

「馬鹿めが、この阿呆め、ひやつは！

我輩が今までわざとやられていたことすらに気づかないとは、器の小さな小物でなのだな。

それにしても害児めが。この我輩とて限度といつものがある。」

ガスはあまりにもないがしひこされ、怒り心頭に達した模様だ。

ガスは逃げていく害児を徹底的に追い詰めることを決意したのであつた。

## 第四十八幕外伝 ガスの商売2

空間がゆがみ、黒い影が現れる。

「こゝは害児の部屋だ。

「首領。面会したいといつてものがありますか・・・。」

「わうですか。どういった用件で?」

「なにやらこの町で商売がしたいのだと。」

「まづ一商売!..」

害児は鋭くそろい、部屋の中をしばし歩いた後、控えていた黒服に向かっていった。

「いいでしょ。応接間につれてきなさい。」

面会したい人間とはもちろんガスだつた。

害児の城は、入つてすぐが、すでに応接間になつてゐる。

とはいへ、距離は遠い、城のちょうど真ん中に応接間があり、前後左右にたつぱりと空間が開いている。

広々とした空間の中にまつたと、テーブルとソファーがあつてあるのだ。

今回はテーブルとソファーだけで、この家具も毎日違うものが置かれている。

通称、謁見の間ともいう。

ガスは、武装と解くのが礼儀だらうと思い、鎧などを脱ぎかけたが、黒服に止められ、遠慮がちにソファーに腰を下ろした。

ガスは、ヒノキ村自治区について、すぐに鎧などを必要なものを調達した。

その辺の才能は、さすがといえる。

最も、この自治区 자체がそいつたものが、そこいらへんに転がっているからともいえなくもないが。

この町、ヒノキ村自治区は、世界中から悪党が集まっている。

そういうた關係で、そういう物品が転がっていることは決して珍しくないのだつた。

30分くらいたち、書児はやってきた。

別に害児としてはすぐにきてもよかつたのだが、それだとまるで自分が小物のようだと感じたので、わざとそれだけ待たせたのであつた。

ガスは害児を見ると、すぐに立ち上がり挨拶をした。

「あなたが、害児さんですか。

我輩はこの町で商売をしたくやつてきました。」

「ふふ、これは妙なことをおっしゃいますね。

何故この町の村長ではなく私のところへ来たのです？」

ガスは思つた。遠くからは見たことはあつたが、存外若く美しいと。  
噂に聞く魔人というイメージから、  
もつとおぞましいイメージがあつたが、物腰も柔らかい。

ついついガスは、そういう害児の雰囲気に気を許した。

「それは、この自治区で一旗あげようと思う人間にとつては、  
害児さんこそが一番の実力者であるということは、周知の事実です。  
ですから我輩は、貴方様に許可を取りにきたということです。」

「へええ？ふーむ・・・」

害児はピクリと頬を動かした後、押し黙つた。

ガスは困つた。

「あの・・・。どうかされたので？」

「いや・・・。まあいいでしょ。」

害児はそいつてパンパンと手を叩くと、黒服が、いろいろな書類と  
アタッシュケースを持ってくる。

黒服はテーブルの上に書類を置いてく。

「さて、貴方にはこの場所で店を開いていただきたい。すでに店のほうは用意してあります。

それとこれが店の権利書で…。

こちらが運用資金です。」

「ここでは、紙幣が流通しているのですか？」

「え？ええ…まあ…ね。」

「？」

「申し訳ありませんが、私はこれでも忙しいのです。ここで失礼させていただきます。」

そういうて、害児は車椅子をきこせつゝ、姿を消していった。

ガスは、その後黒服に差し出された書類にサインし、城を出た。

「やけに親切であったが…？」噂に聞くルーファと同一人物ではない？

これは少し情報を集める必要がありそうだな。」

それが車椅子生活になつてから、性格が変わったのかかもしれない。

今となつては魔人も、武力などなきに等しいのだろう。

どういつた経緯でそうなつたのかガスも詳しいことは知らなかつたが。

ガスが指定された場所に向かつてみると、店は今までできている

最中  
だつた。

「用意してあるといつてていたが、まだ作業中か。  
存外害児さんも、仕事が大雑把である。」

とはいえ、すぐに完成した。ガスとしても文句のない部類だ。

「場所は少し問題があるが、物はよしとしよう。」

ガスからすると、いつも町中で商売をするのは、  
あまり好ましくなかつた。

ガスがいう商売とは、強さの探求であり、日常の小道具を提供  
することではないのだ。

それから数日後、商売は順調に進み、ガスは穀潰しと宴会をしてい  
た。

「ふん。なるほどな。害児さんめおとなしい顔をして、  
えげつない真似をするものだ。」

「ああ？ 何だガス。害児さんがどうかしたのか？」

「いや・・・なに。見てみろ。穀潰し。この紙幣を。  
こんな紙幣みたことあるか？」

「ねえが、それがどうした？」

そんなことより、お前の命令で悪党共と酒を飲んでいるんだが、  
もう金がないんだ。くれよ。」

「いやそれはやるが、

そもそも我輩は酒を飲めといったわけではないので  
はあるが・・・。」

「おじおじ、冗談よしてくれよーひやつはーお前は商人だろ？

約束は守れよな。」

「あ、ああ・。とにかくあの話の続きなんだが、  
これはどうも害児さんの城で刷ったお金のようだ。  
なるほどおとなしそうな顔をして、あこぎな方だ。  
これでは、我輩がいくら儲けよつが、害児さんの匙しだいで、  
こんな紙、ゴミになるではないか。

なにがGマネーだ。馬鹿にしている。」

「ガス。それはちょっと違つんじやねえか？

お前は一回の商人で、向こうは、王様だぜ？

「王様・。王様か。」

「やうだらうよ。俺にとつちや害児様といつたらうじだせー。」

「穀漬しづーの生活が氣に入ったようだな。」

「俺は元々この出身だしな。お前はどうなんだ？」

「我輩も氣に入つてゐるよ。なに、害児さんが我輩のイメージと違  
つて、

まるで箱入り娘のような方だったからな。  
ちよつと意外であつただけである。」

そういうてガスは酒をぐつと飲んだ。

「ひやつはー。宴会だぜ！」

しかしがスは、何か釈然としない部分が残つた。

それから数ヶ月たち、ガスの名声は高まつた。

正直で誠実な商売が実を結び、その卓越した頭脳で、町はドンドン  
発展  
していくのだ。

その噂を聞きつけ、刺激ある生活を求めた優秀な人間が、ビシビシと  
自治区にやってきた。

害児にとつても喜ばしい事態のはずだが、この害児という人物、  
実はとんでもなく、厄介な人物であつたのだ。

災いは突然やつてきた。

ガスがあれよこれよとあたふたしている間に、  
店の物品からもちろんお金も全てが根こそぎ奪われしまつたのだ。

「おのれ！なにをするか！この店は我輩の店であるぞ！」

ガスは当然反抗したが、一蹴される。

「ここのゴリ虫が。我々は害児様じきじきの申し付けで動いてるのだ。

」

「え？ 審兜さんが我輩を？ そんな馬鹿な！ 何かの間違いだ！」

「そう思つなら、城に来い。申し開きはそこで聞いて。」

「おのれ・・・。」

ガスは憤懣やるせなかつたが、ここで怒つていっても仕方がない。

フレオに乗つて城に向かうこととした。

「ぶおんぶおん！」

しかししゃべり口で、ぶおんぶおん言つても、車は動かない。

どうしたことだろ？と思つて、ガスが調べてみると、  
イヤはパンクしており、エンジンはなくなつていた。

「お、おのれ！ おのれ！ おのれ！」

ガスは、刀を抜き、側にあつた剣を、その刀で叩きまくつてハツ当  
たり  
した。

哀れなことに、ガスが氣に入つていた一番の名刀はそれでだめにな  
つた。

刀を地面に叩きつけ、ガスは咆哮した。

「我輩をガストラゲタと知つてのことくあ！」

とはいへ、身包みはがされなかつただけましといふものであつたらう。

ガスは、重装備をがしゃがしゃなりせつて、害児の城の門をぶち破つて、中に進入した。

「害児さんはおるか！ガストラゲタ！参上仕つた！」

ほえたが、害児はおらず、小憎らしい黒服が、害児様は今お昼寝中です。などとたわけたことをはいた。

「貴様では話にならん！害児さんを出せー。」

「ダメだダメだ！出直して来い！」

黒服は突進するガスを制止していた。

「ぐわあー！」

黒服はガスの勢いを止められず、吹き飛ばされる。

すわー！とばかりに、どこからかでてきた、複数の影に取り押さえられ、床に叩きつけられるガス。

「おのれー！」

とガスは吠えたがどうにもできない。

いつの間に現れたのか、

微笑を浮かべた害児が応接間のソファーに座っていた。

「害児さん！ これはいつたいどうしたことであるのか！  
害児さんは我輩を裏切ったのか！」

「ガスさん。私がどうのこうの言つてもよいのですが、  
その前に頭を冷やされてはいかが？  
そうでないと私がなにをいつたところで、  
貴方の耳には入らないでしょう。」

ガスはそれを聞いて、それもそつだと思つた。

「分かつた。もう我輩は大丈夫だ。」

「いいでしょ。問題はありません。ふふっ・・・。  
どうやらガスさんは私に話があるようです。  
他の方は下がつてよろしい。」

「ははっー。」

黒服が引いていく。

ガスは、害児を見直した。黒服たちは主を心配する「ともなく、  
存外素直に引いていく。  
客観的に見て自分のような乱暴な侵入者  
を前に堂々とした態度で座つている。

ガスはもしかしたら自分はとんでもない間違いをしているのではないか?  
と思えてきた。

ガスは照れ笑いをしつつ害児を伺つた。

「いや、実にお恥ずかしいこととして、害児さん。  
これは何かの間違いであつたのだ。」

「ふふ。何が間違いなのでしょうか?」

「いやいや、実はそひらの手違いで、我輩の店が取り潰されてしまつた。  
あつ・・。もしかしたらあいつらは害児さんの名をかたつて不届き  
者の強盗かもしれません。」

これは、貴方様の名前に傷がつく由々しき事態ですぞ!」

害児は無言で、ソファにおいてあつた鞄から書類と虫眼鏡を取り出し、  
テーブルに置いた。

「ガスさん。どうだ。これを使って、  
ここ箇所を読んでみて御覧なさい。」

「は、はあ?」

ガスは呆気に取られたが、気を取り直し、害児から受け取った虫眼鏡  
で書類の箇所を読む。

「ひつやうひの書類は、前に害児と交わした契約書だと気づく。

虫眼鏡を通して読んでもみると、今まで見えなかつた文字が浮き出でた。

俗に言つて隠し文字といつやつである。

「なになに・・・

ガストラゲタの店の財産の所有権は全て、害児カンパニーが所有する。

その物品の移動は、いかなる場合において適用される・・・」

ガスは、顔を真っ青にした後、真っ赤になりどなつた。

「ふざけておられるのかー！」

「ガスさん。あなたはどうも勘違になさつてるようですね。」

「なにをいうか！勘違いしてるのはそつちのほうであるー！」

ガスは激昂して立ち上がつた。

害児は意外そうな顔をする。

「おや？もしや暴力を振るわれるのですか？」

「あ・・いや・・・。」

ガスは害児の悲しそうな顔を見て、自分のしようとしたことを恥じ、

急に意氣消沈し、がっくりと肩を落として、ソファーに腰を下ろした。

しかし、はじめに暴力を振るつたのは害児のほうであったのだが、ガスの頭にそのことはすっかり吹き飛んでしまった。

それを見た害児はまたニヤニヤと微笑を浮かべる。

「あのですね。私としても心苦しい対応でしたのですけど。」

「はい。」

「よいですか。商売といつものは、ただ物を売つて儲ければよいというのではありません。あなたはそれでよいかもしませんね。でもね。私達は、軍事国家に狙われているのです。わずかな乱れが付け込まれる元になります。」

「な、なるほど・・・。しかしこれはだまし討ちではないか。」

「貴方は商人でしよう?それにだまし討ちではあります。」

「あ、あんなものひどくではないか!無効である!」

「貴方がそういつたところで、なにができます?もう一度私に暴力でも振るわれますか?」

「ぐ・・しかしそれはあんまりである。害児さんには情というものがないのか!」

「情があるですか・・・?ふふふ・・。」

「なにがおかしい!」

「本当に貴方商人なのでですか?くくく・・なんとまあおかしなことです。」

ふう・・まあ貴方は所詮そんなものでしょ。頭の悪い貴方に一つ、物を教えましょ。うか。騙されるほうが悪いのです。どうです?よい勉強になつたでしょ。う。

」

「一。」

「そりーお帰りだー」の田障りな「ハハ虫を」の城から追いで出せ。」

黒服にむんずを、両脇を固められるガス。

「貴方に会うことも最早ないでしょ。う。

貴方は実によくやつてくれました。その点だけはほめておきます。」

「害児さん、その言葉忘れるな。」

「?」

「騙されるほうが悪いといひ言葉であるー。」

害児はくすりと笑い、指を鳴らした。

その後、害児が消えたのを見て、ガスは、黒服を腹いせにしたたか殴り

逃亡した。

その後、ヒノキ村でガスの姿を見たものはいない。

## 第四十九幕 新たな善人

花の国は、善い人が想像していたものと違い、人影一つなかつた。

その有様を見て、穀潰しは善い人を馬鹿にする。

「どういうことだ？お前があれだけびびついて、あまつさえ、この俺に助けを請うほどにしては、拍子抜けの静かさだな。」

「しつ！黙つて！今この瞬間にも、悪人が私達を狙つてているという事実を忘れてはならないよ。」

「あつそう。で、その悪人とやうはどこにいるんだ？」

善い人はしかしその言葉を無視して、ずんずん先に進む。

「ちつ、都合悪いことは全部無視かよ。」

そういうながらも、仕方なしに穀潰しは善い人の後に続く。

なぜか、豪雨と雷に見舞われたが、二人はあまり気にする様子はない。

二人が、花の国の領内をどんどん進んでいくと、地面の上に、絨毯をしいてその上に、座っている何者かが見える。

穀潰しはテンションあげて善い人に話しかけた。

「ひやつはー！善い人さんよお！ようやく悪人のお出ましだぜ！」

俺たちや悪人だ！氣に入らないやつをぶん殴つてぶつ潰すぜ！

善い人はすでに、絨毯の上の人物に蹴りをくらわせていた。

「S・ショット！」

要するに蹴り上げだ。絨毯の上の人物ははるか上空に吹き飛ぶ。  
と思いきや、元の位置に戻る。

穀潰しは、例の幻術だなと思った。

善い人は、驚きもせず、再び蹴り上げ、その人物は元の位置に戻る  
を繰り返している。

穀潰しは、ため息をつきながら、善い人らに近づく。

「おい、テンマ。穀はねえのか。」

そういうながら、穀潰しは絨毯の上に座り込む。

絨毯の上で今もなお蹴られている人物は、テンマ・トキトだった。

天崎というのは偽名だったというわけだ。

「ゼロもきたのか。まあ楽しめ。」「

「相変わらずの馬鹿野郎だな。てめえはよ。

俺たちやお前をぶつ潰しにきたんだぜ？

いくらお前でも、俺たち一人相手にはかなわないだろ？

違つか？」

テンマは善い人に蹴られながら答える。

「知っているか、たわけ。どうやら害児は悪人どもを集めて、ヒノキ村自治区で暴れてるらしいだ。」

「害児？ そんな小者が今この状況と関係があるのか？」

それを聞いて聞き捨てならなかつたのが善い人だ。

いきり立つて、テンマに反論した。

「害児さんは善い人だ！ そんなことをするわけはない！」

「だが事実だよ。」

テンマはそういう、周りの情景が変わつていく。

周りの情景が変わつたのではなく、彼らがテンマのテレビポートで移動させられたのだ。

一瞬のうちにヒノキ村自治区に移動する。

「いけすかねえ。サイキックか！」

穀潰しが吠えた。

「おのれ！ 害児！ 許さん！ 」

。 善い人は、悪人達を談笑してゐる害児を見つけると、問答無用で蹴りかかる

慌てた害児は、たくさんの悪人に守られつつ、みんな逃げるーといいつつにげていく。

あまりにも情けない変わり果てた害児の姿に、善い人はがっくりと肩を落としたが、しかし善人の使命は何よりも重いものだと思い返し、再度害児に追撃をしかけようとしたところ、テンマに服を引っ張られ、思いどぎました。

「なにかな？」

善い人はテンマに尋ねる。

「今後は私が善人になつてやる！」

「なに？」

ふざけたことを！と善い人は激昂した。

そのせりふは善い人を激怒させるのに十分すぎるせりふだったのだ。

「もう我慢ならん！」

傍観していた穀瀆しだつたが、善い人とテンマの間に割つて入つた。田の馬鹿にされている害児を追い込む絶好の機会と判断したから

だ。

「待てよ。善い人さん。あの様子だともつ害兎はダメだろ？  
気持ちはよく分かるがよ。

だが害兎が抜けた穴は正直でかいだろ？

ここは、なくなつた戦力を補うためにも、新たな善人は必要だ。」

「穀潰し程度が、善人を語る資格があると思ったのか？」

「いつてくれるぜ。だがな。俺だつてめえの國の下つ端だつたんだぜ。

いわば俺も善人というわけだ。」

「なるほど・・確かに。」

「分かつてくれればいいんだ。ということだ。テンマ。  
よく俺に感謝しておくんだな。」

「たわけ！」

とテンマに一喝される穀潰し、毎度の事ながら穀潰しは嫌になつたが、

仕方ないと諦めた。

「おい、善い人。今度から害兎を見かけても放つておけよ。  
それがやつのためだぜ・・。」

「穀潰しは、どうこう経緯で害兎がああなつたのか知らないが、  
驕れるものは久しからずというが、盛者必衰の理というものだ。

多少は同情した。

とはいえ所詮他人事だ。基本的にはどうでもいい事。

穀潰しとしては、

そんなことより今まで害児に潰されてきた自分の面子のほうが気になるのだった。

テンマとしては、闘争普及が何よりも使命であり、害児を闘争に呼び戻すことは必須項目といえた。

お互いの利害は一致したので、それから先はスムーズだった。

しかし、善い人はテンマに気を許さず、緊張した日々が続く。

それはともかく、害児があれからどうなったのであつたか・・。

## 第五十幕　害児の帰還

害児のことも気になるが、害児からも善い人からも取り残される結果になつた騎士竜ら一行はどうなつたのだろう。

大陸の9割を所持し、善人組織をも巻き込んで、膨らんでいつた日の国であつたが、その日の國の中でも、善い人派と害児派に分かれたのだった。

しかし善い人派とは、要するに騎士竜派であつたので、人気はあつた。

逆に、故郷を見捨てて、長い間姿を隠し、あまつさえ、

大陸と敵対した、ヒノキ村自治区などを作った害児は、あまり歓迎されなかつた。

黒服たちも、最初は害児についてきたが、久々の故郷に帰ると、居心地もよく、さらに騎士竜の強さに感化され、あつさりと害児を見捨てた。害児が氣に入らなくなつたというよりは、騎士竜の強さに魅せられたのだろう。

彼らが、害児に従つていたのも、害児が強いからだ。

その害児より騎士竜のほうが強いなら、彼らが騎士竜につくのは、当然の成り行きといった。

黒服としても、害児としても、お互にあまりそのことに關して、気にすることはなかつた。

さて、何日たつても善い人も害児も帰つてこなくなつて、ことここに及んで、

ようやく騎士竜はいっぱい食わされたと氣づき始めた。

実際はいっぱい食わされたわけではないのだが、

彼の立場からすると、

いっぱい食わされた以外なものでもなかつたらう。

騎士竜は、さっそく害児を連れ戻す算段を企てた。

「これというのも、

けしからん悪人アカヒテが害児をたぶらかしたからだ。

君達に与えれる使命は、悪人を排除し、害児をここに連れ戻すことだ。」

「ははつ！」

と氣合を入れて挨拶した後、隊を組んで行進しつつ、悪人討伐、害児捕縛に向かつた。

「まったく僕としたことが飛んだ誤算だつた！  
考えてみればあの商人のふざけた笑いが怪しかつた。  
裏で絵を描いていたのはどうせあの商人だろ？  
今頃僕のことを侮辱し高笑いしてゐに違ひない。」

「ははつ！」

そこへ、にやけ面の元副将軍がやつてくる。

「まあよいではないか。

善い人様のおかげで、我が国は大陸の9割方を手中に収めたのだからな。

これは大陸の歴史に残る偉業だ。」

「とはいって、ずっとこのままでもまずいでしょう。また花の国と日の国を除いた五国を復活させないとパワーバランスが崩れてしまします。」

「どうも貴様は勝利に酔いしれるという感覚を知らんらしいな。もう害児など放つておけ。力はもっと有意義に使うべきと思わんのか？」

「そうはないかない。

それはそうと、害児が戻つたら、貴方様はまた牢屋にもどつていただきますよ。」

「分かつてあるぞ。戻つたらな。」

そつこつて元副将軍はニヤニヤ笑う。

騎士竜は気分が悪くなり、言い放つた。

「何だその態度は！ふざけてるのか！」

「おつと怖いな。さすが戦神といわれた男だよ。」

「もういい！おい誰か！」こいつを牢屋に『ぶち』んでおけ！」

そう言い放つて、いろいろしながら騎士竜は、政務に戻った。

田の国はざつとこんなふうで、害児はどうかといつと、母親の助言に従つたのかはよく分からないが、自分の領地たるヒノキ村自治区に帰つていた。

害児が自分の城の跡地に戻つてみると、なぜか悪人達が群れを成してだべつていた。

なぜかといつより、城の跡地には様々な物資があつたので、それを悪人達が利用して遊んでいたのだろう。

害児は苦虫を潰したような顔で彼らのほうに近づいていった。

「よう、害児。 どうした? しけた面してゐな。」

「おつおつーいつもの取り巻き共がいないなー。」

「憎憎しい善い人のやつもいないぜーひやつはー、といつりで俺たちに何か用か?」

声を発した三人は、少しの間を置いて三人仲良く虚空へと飛んでいった。

それを見て、青ざめたのが他の悪人達だ。

「うわー逃げろー!」

大声を上げて、蜘蛛の子を散らすようにして逃げていった。

害児が、跡地の真ん中のぼつんと一人で立ち、辺りを眺めてみると、「口!!」だらけだ。

そこへようやく追いついたガスがやってきた。

「重装備のおかげで、大変だった。こりゃひどい散らかりようなんだ。」

害児も啞然としている。

「まあなんというか。害児さん。これからである。氣を落とすのはよくない。

我輩とてこんな目に合わされたのは、何度もあるのだ。」

「ふむ・・・。」

「どうかしたのであるか?害児さん。」

害児は何事か考えていたが、いきなり立ち上がり、手を振った。

ガスは害児が手を振った方向を眺めたが、何もない。

「どうやら、害児さんはもう頭がだめになつたようであるな・・・。」

ぼそつとつぶやいたガスだが、

害児がなにをしたのかやがて分かつた。

さつき逃げていった悪人達が必死の形相でこちらに近づいてくる。

「ああ・・幻術か。」

ガスはぼやいた。彼らは幻術にかかり、再び害児の前に姿を表した。

「うわ！何でまた害児がいるんだ！逃げろ！」

「まて。」

害児はすぐに呼び止めた。悪人達の動きはみな止まった。

「ゴミを拾つていけ。後、城を用意しろ。」

「なんだって！城なんか作れるかよ！バカヤロー！」

口答えした悪人はもちろんかなたへと飛んでいった。

それを見た悪人はしぶしぶゴミを拾い、

害児のために城を作ることにした。

害児は、その様子を満足げに眺めガスに話しかけた。

「どうですか？見てみなさい。まるでアリが働く様を見ているようだ。まさに壯觀。これぞ王者の威光。」

「左様であるか・・。」

悪人達はのろのろと悪態をつきつつ、作業を進めていく。

「この分だと相当時間がかかりそうだな。」  
といひで彼らに報酬は要してあるんでしょうな？」

「そんなものあるはずがないでしょう？  
一商人無勢が場をわきまえず、知った風な口を利かないでもらいた  
い。」

「あつやつ・。」

ガスは、得意顔の害児を尻目に、退いていった。

「この分では、この自治区もそつ長くない。」  
害児一人でなにができるよつ。  
我輩も見の振りどこのを考えたほうがよせやつであるな。」

ガスは、家に帰り計画を練ることにした。

## 第五十一幕 晴れた日 善人

善い人は、タンクが加工した岩の家に引越ししていた。

今回のこととは、彼女なりに思うところがあつたらしい。

「やあ、タンクさん。今日はさすがの私もいい勉強になつたよ。」

「よかつたね。私なんて、空から落つこちて、ちょっと壊れちゃつたよ。」

タンクは「コーコーしながらいつてるが、体が半壊している。

「タンクさんもまだまだこの善人には及ばないようだね。でも大丈夫だよ。いつかきっと私のようになれるから。」

善い人は偉そうに、タンクの肩をぽんぽんと叩くと、家の外にでるべく扉に手をかけた。

ドアを開けてみると、前方に、切り株に腰をかけているアキラの姿があつた。

善い人を見かけるとやあと声をかけよつてきた。

善い人は油断なく、構えて言い放つた。

「悪人が考えることは、この善い人にはお見通しだといふことが、何故分からぬ?」

「なにを言つてゐるんだ。俺はお前に善い情報を持つてきただといひのに、

そんな態度では、考え方直さないといけなくなるぞ。」

「おのれーこの善人を小馬鹿にする態度ーもつがまんならん！」

ドカッ！

慌てふためき、驚いて逃げようとするアキラの背中を、善い人のけりがめり込み、アキラはかなたへ飛んでいった。

「悪は去つた！こんなことしてゐる場合じやない。  
私は善い事をしないといけないんだ。」

善い人がかけていくと、善い人の後を追つて並行して来る物体がある。

それはテンマの円盤で、円盤といつのは、サイキック兵器であり、人一人分くらいがのれる、円盤のような物体だ。だから円盤と呼んでいる。

「善い人がいなかつたおかげで、悪人達がのさばつてゐるぞ。楽しいなあー。」

そういうて、テンマは遠くを指差して、善い人を追い越していった。

善い人は直感した。

「どうやら私を出し抜こうとしているようだけれど、そつはいかないよ。」

善い人は、指を鳴らしてハエを呼び、飛び乗って、テンマに追いついた。

「あそこだーあそこに悪はいるぞおー。」

「まだ悪人がいたのか。」

善人ここにありということを思い知らせてやらないといけないなー！」

善い人はハエから飛び降り、現場へと到着した。

その現場には、害児と悪人達がいた・・・。

害児は、悪人達に家を作らせた後、暇なので、悪人達を訓練することにしたのだった。

悪人達は、たるを持って上下に振る運動をしており、その周りを害児は歩きながら、満足そうな顔つきで、眺めつつ、紅茶を楽しんだ。

ちなみにもう車椅子はダメになってしまったので、木製の義足をつけている。

「ああもうダメだ・・・。俺はもうこれ以上振れねえ。」

樽を放り投げペたんと座り込んでしまった悪人がいた。

それを害児は凝視した後、後ろにいた悪人に話しかける。

「おい！」

それを察した悪人は「おう！」と答えると、座り込んだ悪人を無理やり立たせ、樽を持たせる。

「さあやれ！やるんだ！」

「ひい～！もう無理だあー。」

その様子を見て、他の悪人達は、あまりの所業、地獄絵図に、おびえ逃げ出した。

「う、う、うわー！」

パニックになり、次々を悪人は逃げていくが、気がつくとなぜかまた樽を持つて振つている。

「もうやめてくれー！」

怨嗟の声、悪人達の悲痛な叫びを聞きながら、害児は一人悦に入っていた。

ドサツ！

「そこまでだよー！」

そこへ善い人が登場するが、害児は内心動搖しつつもみんなの手前、あえて騒がず冷静に対処した。

「む？ 善い人か。ちょうどいい。修行の成果を見せてやれ！」

悪人がそらきたとばかりに善い人に襲い掛かるが、それら全てが吹き飛ばされる。

これは大変だと初めて害児は気づき、自分ひとりのみが逃げに入った。

しかし、それを見逃すほど善い人は大甘ではない。

すぐさま害児においつき、その頭をしたたか殴つた。

「うわー！ やめてくれー！」

害児は、頭を抱えつつ、逃げ回つていく。その様子を残つた悪人達が大笑いしていた。

「ひやつはははーざまーみるー！」

害児の味方はいないのか。そんな時一人の勇者が現れた。

「おいおい。善い人さんよ。ちょっと調子に乗りすぎなんじやねえのかい？」

穀潰しだった。穀潰しも悪人達に混ざり、つい先ほどまで、へいこらと樽を振つていたのだった。

「よくいいました！穀潰しさん！それいけ！善い人を追い出すのです！」

害児はとたん元気になるが、黙れといわんばかりに善い人に頭を叩かれる。

と同時に、穀潰しは善い人に向かつて衝撃波を放つが、善い人はそれを避けた。

害児は、それを機にほほうの体で逃げていった。

「穀潰し。悪に加担するといふことは、君も悪人といつわけだね。」

「悪だと？相変わらずの馬鹿さ加減に反吐が出るぜーええつ？善い人さんよお！悪つてのはな。てめえ自身を指すんだぜー！」

そこへ、テレポートですつとアキラがやつてきた。

「俺にも我慢の限度がある。こちらが下手にでていれば、調子に乗りやがる。穀潰し。こいつは一度思い知らせんとどこまでも冗長するか分かったものではない。」

「ああそうだな。潰れろ！ランダムスフィア！」

善い人は、もちろんその攻撃を読んでいた。最早慣れっここの攻撃であつたので、

スフィアの軌道を読み、その攻撃を全てかわして、穀潰しに接近す

る！

「潰れるー・サイコシャワーー！」

穀潰しの対迎撃衝撃波で、ショットガンのよつなものだ。

それは確かに善い人に当たつたと思ったが、善い人は直前で方向転換し、

アキラのほうへと突っ込んでいった。

アキラはなにをしていたかというと、いきなり穀潰しが攻撃をぶつ放すとはまったく考えてなかつたらしく、ランダムスフィアの攻撃を受けて、体を震わせながら、自分の体を回復させていた。

もちろんテレポートで、穀潰し達とは距離をとつていたが、いきなり善い人がやってきたので、パニックになり、テレポートも使わず、後ろを向けて逃げ出そうとした。

善い人がそんなうかつさを見逃すはずもないでの、後ろから蹴られ、アキラは彼方へと飛んでいった。

「ア、アキラ！ 善い人でめえ！」

取つて返す刀で、善い人は穀潰しめがけて、剣を抜き、突っ込んでいく。

「斬る！抜きかえし！」

「ぐつ！」

穀潰しは、片手を犠牲にしてそれを防御し、残った手で、後ろに逃げつつ、サイコスフィアを放つ。善い人はそれを難なく避けて、さらに追いかけてくる。

（ちきしょう！もうだめだ！）

穀潰しは破れかぶれになつて、突き刺さる拳を放つ。善い人は突き刺さる蹴りを放ち、それが相殺され、間が空いた。

（前より強くなつてやがる・・・それに比べて俺は・・・）

善い人の成長に比べ、自分の成長の遅さを嘆いたが、そんなことしてても始まらない。

とりあえず、今戦つても不利だと穀潰しは思った。

第一こいつ広い場所は善い人に有利なばかりで、自分にはなんら有利にならない。

「潰れる！サイコグランド！」

地面から、筒状の衝撃波が放たれる。さしもの善い人もこの膨大な範囲の攻撃には攻められず、後退の一方となつた。

周りでニヤニヤ観戦していた悪人達は、驚きの声を上げつつそれに巻き込まれていった。

「お、おー・・・。」

「うわー！」

悪人達がドンドン空から振つてくれる。

善い人が、攻撃の態勢をとつたときには、すでに穀潰しの姿はなかつた。

善い人は、落ちていた穀潰しの腕を拾つて、穀潰しが逃げたほうに向かつて、投げると、家に帰つていった。

「今日も善い事をした。善い事をするといつのはなんて素晴らしいんだ！」

空にはお田様が明々と輝いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1194k/>

---

世紀末善い人伝説

2011年8月31日09時29分発行